

---

# 蘇芳

茜 新衛門

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蘇芳

### 【Zコード】

Z0997X

### 【作者名】

茜 新衛門

### 【あらすじ】

地方で開かれたロックイーゼン選抜大会で優勝したラティーフは、レイステン都市の闘技場で選手として出場することになる。

ルーサーは敷かれたレールの上をひたすら走つてきている。  
勉学に勤しみ身体を鍛え自分の見た目と添つよつに完璧に振る舞い  
演じていたが

国ではルーサーを帰国させる評議会は開かれず先送りにされ苛立つ  
ている。

レイステン市長に招かれたロックイーゼン競技会でラティーフを見て大ファンになった。  
一途なルーサーはラティーフが選手生活を辞めたと知り、後を追いかける。

## 峡谷の町バッファロー

良く晴れわたつた空の下。

いつもは村の子供の遊び場になつてゐる広場には、巨石に板を渡してだけの簡単な台ができる

迷路を作るようになにわか露天が立ち並んでいる。

都會から遠く離れた山間の集落では月に一度の市場が村民の社交場でもある。

国北側に聳えるカヤンデル山脈は氷河が溶けていく筋もの水の流れが岩と土を削り下へ下へと流れ深い深い峡谷をあちらこちらと作り、谷の僅かな傾斜地に点々と分散して人々は住み着いている。

比較的住人の多いバッファローの村では一ヶ月も前からこれまで村民が見たこともない珍しいポスターが市場の軒先の柱に巻きつけられて話題になつた。

ポスターには都會で有名なロックイーゼンの競技者が美しい肢体を跳躍させて見せ付け村人の目を引く。

バッファローではレースと言えば牛や馬が時には鶏や豚アヒルがするものだと思っていた。

村人は人が走り飛ぶスポーツに驚きスカウトされる参加者を募ったポスターの噂はとんでもない速さで村から村に伝わり自他共に認めるすばしこい若者達が集まり市場を一層賑わしていた。

ポスターを貼つた興行主オーケシユストはレイステンの大都市で有名な男。

土地の有力者をおだて上げロックイーゼンの宣伝と選手獲得を約束し

ロッククイーゼンに出られるだけの運動能力の有る人間を発掘するのを目的に来ている。

だが広い荒地と山並みを越えすぎて  
人間のいない秘境にまで足を伸ばしたのではと後悔し始めてもいる。  
確かに村長は絶景の美しい村だと電話で言つたが  
絶壁の崖の道は緑色の苔に覆われて美しく、人が歩く場所ではない  
というのがオーケシユストの感想だ。

「顔は望んじやいねえ。必要なのは体力だ。跳躍力だ。瞬発力だ。  
パワーだ。こんな田舎まで来たんだ一人ぐらいましながらいるだろ  
う?はん?顔が良くて運動能力の優れた奴なんて都會にはごろごろ  
いるさ、だがな奴らはすぐに故障しちまう。それによう顔だけがい  
い奴つてのはすぐに飽きられちまう。色々と普通ながら不細工な  
のまでいなきや顔の良い奴が目立たないだろ?まったくもつてこ  
こには文明の利器つてのは無いのかね。サウナにでも浸かってる気  
分だぜ」

段々畠の真ん中に大きなキャンピングカーを止めて  
ターフの影で折りたたみ椅子にふんぞり返つて市場に来た人々をオ  
ーケシユスト等は見下ろしている

手持ち無沙汰を説明するようにじつとりと汗ばんだあご拭い縁深  
い山並みをあきれ返つて眺める。

都會に無い奇想天外の顔を期待していたのに集まつたのは素朴で汎  
えない容姿を持つた若者ばかりである。  
オーケシユストの問いかけに取り巻きのひとり、ディレクターであ  
るビルは愛想笑いを浮かべてうなずいて見せる。

選考会が終わるまでは自分の意見は控えているつもりだ。

左右の山が押し寄せている峡谷の中腹には珍しく平たい土地があり、その一番上の見晴らしの良い場所に陣取つて募集要項を満たした若者達の予選会を観賞する。

いまどき秘境に行つても猿人のような村人など望めるわけがないとビルは思つていても

万が一面白い素材がいれば競技にメリハリが出来ると淡い期待もある。

しかし並んでいる候補者は誠実そうな普通の若者が緊張した顔つきで待つっている。

ざわざわとしている人の固まりは道からみ出るほど膨れ上がり、列の中を村長の手下が駆け回り必要な書類を提出させたり書き足らぬ箇所を呼び戻しては尋ねて書類の穴を埋める・・を繰り返している。

人の固まりは歯並びと首の太さ、身長で選り分けられて半分以下に減り、案内人の号令で百人足らずの人間が市場を突き切り段々畠の間をぬつて登つて行き

一塊にまとまると鋭い笛の音に合わせて駆け下る。

市場を一周して沢への道をひたすら全速力で駆けおりていった。

「おおお。着物の裾を翻して走つていったな。磨けば光る原石が何人居るだろ？　これが楽しみでキャラバンについてきているんだが」

オーケシユストの言葉にかるくつなづいて手元の書類からテントの中を吹きぬける風と峡谷の向こう側にビルは目を向ける。

村長の手下が泥だらけになりながら集めた書類を持ってきていた。

谷は春を迎えて木々の緑が迫つてくるように美しい。

市場では沢に下りていった参加者に注意を払う者はわずかで皆久し  
ぶりの市に集まつてきて品物の値踏みに余念がない。

「なあこれもうちょっとないか?あとな五本あればちゃんとまとま  
つて一つの瓶に一杯になるんだがな」

「すまねえな。今年の春はこれで精一杯だ。なんと書つてものう  
山族が下りてこねえからの話にならねえわ」

「そいいやあー最近姿見ないなあ」

「わしん所も欲しいものがあるだが。もう手にはいらねかなあ  
「うんだなあ」

二人の村人の視線の先は峡谷の奥。険しい山肌が連なりその奥に又  
ケラスの峰々が続いている。

恐らく山族の村はその向こうにあると思われた。

市場の喧騒に負けない騒がしい声が下の沢から大きくなつてきて  
る。

耳ざとく村長が、

「ほつーもう帰つてきたがや。早いがな」と叫び、

腕時計を見て満面の笑顔になる。

市場にいる人々は沢から上がつてくる人影の登場を待つた。

「何!もう戻つてきたか。おい又『コーディネーター』が走路を短くし  
てるんじゃないのか?」とはオーケシユスト。

テントの中で椅子から立ち上がつたオーケシユストに合わせてビル  
やその取り巻きもぶつつりと絶ち切れた市場の端を見つめる。

参加者の身内の叱咤激励の大声がはつきりきこえる。

その声にひきつけられて市場の人々も手を止めて道路の縁を見つめ

ている。

人々の見守る中に先頭を走る農作業着の一人の女性が現われた。その後からつばを飛ばしながら声援している人が現われ一步一歩と大地を踏みしめる足元の怪しい男達が駆け上つてきていた。

広場の中央の壇上に村長の手下に誘導され優勝した女性が汗まみれの顔を手で拭いている。

「あんた！いいね！一番だよ！」と村長の明るい声。

街から来たキャラバン隊に優秀な人材を提供できると村長は鼻が高い。

村長は参加者全員に順位をつけて戻ってきた手下に指示を出して小さな板舞台の周りに集めると

仰々しく一番に戻ってきた女性を横に村長は彼女の功績を讃えてこれからへの可能性を繰り返し大声で力説した。

参加者が戻ってきたと同時にテントから出てオーケシユストが急場造りの壇上にあがると

上気した顔の村長が田舎臭い女性の手を取つて万歳の音頭をとる。それに合わせてオーケシユストも満面の笑顔で村長にお礼を言い市場に居る全員を、村民の全てを、そして女性を育んだ交通機関の乏しい峡谷を褒め称えるスピーチをした。

壇上では儀式として一枚の紙が女性の前に差し出されそれに女性がサインをすると村長はその書類を広場全員に見せるように高く上げて胸を張つた。

オオーッという声と羨望のまなざしがその書類に送られ満足そうに村長と優勝者が壇上から降りると

広場に居る人間の関心事は又来年のコンテストの候補者に向けられ

ていた。

オーケシユストが村長との挨拶を終えてキャンピングカーに戻る頃には山の間にお日様が傾き始める。

「何とかまともな奴が居たじやないか。田舎の雰囲気も存分に味わつたし。次は何処だ? 後何箇所回ればいいんだ」

キャンピングカーのステップを踏みながら後ろの秘書に尋ねる。車にエンジンをかけさせて革張りのソファーに腰を落ち着ける。ベタベタしていた肌が乾燥していく。

秘書が日程を告げるとオーケシユストの愛想の良い笑はどこかに消えて、一番に戻ってきた女性の書類と契約書を見て新しく編成しなおすメンバーの選考を始めた。

基本一チーム二十四人で（途中で八人に分けられる）最初は個人戦このときに個々の資質を吟味する。

次が総当たりのリーグ戦。そこから上位八組をトーナメント方式で競わせる。それを賭けの対象とし優勝チームのタイムを予想させるのだ。

オーケシユストは親の代から興行師で地方では古くからの家畜を対象にしたレースと賭博がありその一つを受け継いだオーケシユストは大都市で家畜を走らせるより人間を競わせたほうが金になると考えた。

それは個人技も見られればチームとしての団結力が必要になる新しい競技。

人数が多くればスターを作るのさえ難しくない。

幸い様ざまな競技で些細な故障で第一線を退く選手の多さが問題に

もなっている。

その受け皿にもなりえる競技ロックイーゼン、闘技場のフィールドで繰り広げられる選手達の悲喜こもごもの葛藤を絶対に客は喜ぶに違いない。

選手も一年を通しての成績で高い年棒が決まる。

オーケシユストにとってフィールドの選手たちをスターにのし上げることは簡単ことで人気が出なければすぐに裏方に回すか新しい活路を（他のスポーツに戻す）提示してやんわりと退場を願う。

オーケシユストの手法は競技の解説者にスターにすると決めた選手を美麗美句で持ち上げて観衆のイメージを膨らませるにつきる。

一ヶ月を通して、半年を通して、そして一年を通してのスターを作り上げるそのシナリオが大切なのだ。

スター性を生まれ持つたスポーツ選手や努力と経験を積みファンを磁石のように吸い付けて行く様ぞまな競技の選手と違い、確実にシナリを通り短期間でスターを育て上げができる醍醐味を味わうとこの商売はやめられない。

どんな大衆の好みにでもブームを作るのにオーケシユストは労をいとわない。

大衆は選手の汗とあわよくば懐に大金が舞い込むのを望み、さなぎから美しい蝶に変身する様を見たいのだ。

観衆の気持ちを煽るために小さな仕掛けを作る。その作業には細心の注意が必要なのである。

## 興行主オーケシユスト

豪華なキャンピングカーのテープルに広げた紙の資料を反対側の椅子に放り投げ、脇のパソコンを真ん中に据えてこれまで獲得した選手のプロフィールを画面に呼び出す。

小さな画像に眉根を寄せて気になる選手を何度も違う角度で撮った画像を大きくし見比べては次の選手のプロフィールに移る。

ピックアップした選手をチェックし並べ替えて表示させると満足な笑みがオーケシユストに浮かぶ。

「今年は大きく変動する。スターは決まった。夏から秋にかけての盛り上がりは半端ないぞ」と、自分の言葉に酔いしれる。

「新人にいいのが居るんですか？それとも誰か又故障したんでしょうか」

オーケシユストとは逆の壁側に一人用の椅子で細かい箇所をパソコンでチェックしていたビルが聞く。

パソコンを閉じて顔を上げればにやけたオーケシユストの顔が目にに入る。

よほど自分の立てた計画が気に入っているらしい。

「あいつ等の身体には強靭なバネと筋肉しか入つてないんだ。小さな故障ぐらいでびびるな。ありやお涙ちょうどいのパフォーマンスなんだ」

けらけらと笑つてみせるオーケシユスト。

車内にはオーケシユストとビル以外居ない。皆移動準備にかかりきりで物資調達に奔走している。

パフォーマンスで故障する選手などいないと咽元まで出掛かるがビルは分別をわきまえてオーケシユストの機嫌を害つ言葉は使わない。ビルはオーケシユストの指先でスクロールされる画面の具合で考えを読む。

早い、疲労がたまっている証拠だ。

これまでオーケシユストのシナリオにそぐわない選手は故障を理由に競技から遠ざける傾向が頻繁にあった。

気に入らない選手は何かと理由をつけてたとえば足の曲がり形が変だとか腕の筋肉のふくらみに異常があるとか他愛ないことで医療室に追いやる精密検査を受けさせるのだ。

その間に自分の思つよにレースを変えるのがオーケシユストの姑息な手である。

ロツクイーゼンの運営で何役も仕事をこなした中の、たぶん今のは観客側の気分で言ったものだろうとビルには思われた。

仕事柄選手を大事にしているイメージが強いのに今のオーケシユストの言葉はいただけないと心の中だけで反論した。

確かに商品として的一面はあるが運営者がそう言つてしまつと巨的なフィールドがクッキーの紙箱と同じレベルに思えてしまつ。

ビルの冷めた目つきに気がつきオーケシユストは自分の言葉に人間味の無さに気がついた。

「サポート体制は万全なんだ君が心配する必要は無いって事。しつかりしたシナリオさえあれば誰も怪我などしないさ。そういうの？」あまりに自分の作ったシナリオが素晴らしかったので人形のように動かしていたことがばれたのではないとビルの様子を伺うがビルはいつもと同じ人の良い笑顔に戻っている。

人間は態度が大事だとオーケシユストは思う。

言葉は正直に舌から滑り落ちてしまうがその後のフォロー次第でどうでも受け取つてもらえる。

失言も身内のようなビルの前だと完璧に挽回できるのだ。

現にビルの顔はにこやかな仕事モードに変わっている。

「そうですね。良いシナリオが思いつたのなら箇条書きで結構ですから書いといてください」

このビルの言い回しがオーケシユストは好きだつた。  
オーケシユストが馴れ馴れしくしてもビルは節度ある態度を崩さないのだ。この関係は非常に仕事をする上でやりやすい。

「ライターに任せるのは七ゲーム分でどうだろう？後の三ゲームは通常の実況中継だけでガチでやらせるとかってのは迫力満点だろう。ふつふつこうなると解説者の力量が問われる」  
素晴らしい思いつきのように一人悦にいる。

オーケシユストは一人掛けの椅子に足まで乗せ腕組をした。  
ピックアップした選手が走り回る姿を熱狂したファンが硬質ガラスを叩いている様子が目に浮かぶ。

「良いですね。ライターの候補は良いのが居ます。がずつとこれまでにはシナリオ通りやつてきたので本物をそのまま言わせるとなると意外とアドリブが利かない実況中継になる恐れも覚悟しなければなりませんね」

オーケシユストににこりと微笑んでみせ会場の仕上がり具合に目を通す。

又砂のことでメールが来ている。

役所からは選手が万が一落ちた場合の砂の深さで折り合いがつかない。厚さ六センチのマットレスを引けと最後にはある。

いつものことだが前回も前々回の答申にも同じことで回答したのに新しくファイルを作るのも時間の無駄で事務所に保存してあるファ

イルを転送するよつに指示のメールを出す。

ビルの目の端ではオーケシユストがニユーフェイスを前ににたにた笑が消えない。

「う～～ん。やはり選手一人ひとりに面白いシナリオが必要」と突然思いついたようにオーケシユストが言つロックイーゼンが始まった頃一人ひとりの選手にモチベーションを上げるためにもライターをつけたがシナリオの使用頻度が低く金ばかり使つたと言われた事を忘れているようだ。

「時間のあるときにも作つてくださればよろしいですよ」笑顔を絶やさずにビルは言つた。

シナリオを書くのが大好きなオーナーに頼むのが一番だとビルは心得ている。

実際はライターが全部手直しするがオーケシユストが手出ししていればその試合の結果はなんと言われよつとも編集に時間をかければ最高に盛り上がり視聴率も取れる。

TV用に編集しすぎるのは良くないが、試合途中で怪我をした選手は競技場まで足を運んだ観客だけが知り、次の掛け金をかけるときの情報提供不足として何度もこの不平等を槍玉に上げられて居るがTVはショーとして観るものと主張するオーケシユストの意見が勝ち番組の最後で本日の故障者としてテロップで名前を出すことでお茶を濁している。

日頃レイステンで都市の役人や国の役人からの苦情、に対処しロックイーゼンを広めるため幅広くいろんなパーティにも顔を出して多忙なオーケシユストが息抜きのためにこのキャラバンに参加しているのだがどうもその態度からだと息抜きというより、より以上にめりこみロックイーゼンをショー化して高値をつけて別会社にでも

売り飛ばす気ではないかと思えるくらい最近はメディアへの露出度が激しい。

しかし故障した選手の賠償金額は大きいし、都市の条約、規約に触れていないか地域の住民に対しての苦情も全てオーケシュストは矢面に立ち裁判所から役所地元民の説明会にまで顔を出している姿は横についているビルが見てもロックイーゼンへの熱意で溢れている。この娯楽競技ロックイーゼンも何人も政治家を抱き込んで始めた事業である。

興行主としての支出もかなりの額を出してもいりし政治家への献金も半端なく大きいこともビルは知っている。

目の前のオーケシュストを見る限り会社を売る心配よりもロックイーゼンの全てに君臨し牛耳るのが彼の最終目的ではとチラリとビルの頭をよぎる。

## ビル

バツファロー地区優勝者ラティーフの名前が  
プレロックイーゼン出走メンバーの中にアネルとして書き込まれ  
中央の電光掲示板に華々しくお目見えしたのはそれから二ヶ月後。  
ロックイーゼンの競技場はレイステン市に本拠地を持つ巨大なレジ  
ヤーランドの隣にアスレチック部門を担当する円形闘技場として増  
設された。

冬場には一般人に解放されて安全器具をつけたロックイーゼン体験  
希望者が競技アトラクションを利用し  
春から夏にかけては総勢二百人のアスリート達が難解なアトラクシ  
ョンを個人のためチームのためにクリアしていく姿が見られる。

広い闘技場の観客席を埋め尽くすのは純粋に選手の躍動する肉体を  
観賞する目的と  
賭けた金が自分の予想通りにそれ以上に膨らむことを望んでいる人  
間である。

ロックイーゼンが映像で放映されると地方にまで場外券売り場が設  
けられ  
闘技場の許可を出したレイステン都市、地方の市町村とオーナーの  
オーケシユストとでこの競技のうまみを吸い上げた。  
金のなる木だと解ると他にも様ざまな参入者、雑誌や新聞、関連グ  
ッズ商品、主に公認されたブロマイドと際どいアングルから写され  
た写真集も収入源となりTV画像の切り売りも多く出回って経済の  
流通に一役買っている。

観客が最初に巨大な競技場を見上げた時に必ず目に入るよう作りら

れた

電光掲示板の映像モニターを見て機嫌が良いのは一ヶシユスト。

足元から部屋の天井まで届く硬質ガラスの向こうに闘技場の全容が肉眼でも見える場所。

設置した全部のカメラの映像をも見られる特等室・・主調整ルームの椅子に座りそつくり返っている。

見てているのはスカイカメラのリハーサルで映像が変わるたびに選手のいない壁を見ている。

「いいだろう、今年の新人は育てがいの有る選手が多い。このネーミングいい。やたら長いのもいけない短すぎるのもダメなんだ。ンフッ、ファンが勝手に短くして呼ぶのはOK」

外の電光掲示板と連動して動くホールの映像に選手の名前が順に映し出されるとファンふんと鼻息が荒くなる。掲示板の調子は最高にいい。

隣に居るビルはチラリとモニターを見て、からかって気になる短い名前を言つてみた。

「アネル？を短くしたら？？」

ビルは塗り替えた壁に変な影はないか切り替わる画像を見てチェックしている。

「そんなのはファンが考えるさ。Aから始まっているからつてそいつから聞くな。素敵な名前の選手は何人も居るんだぜ」

アネルは適当につけらしいとビルは予想した。

オーケシユストの中ではニックネームで呼ばれる選手は全て決まっている。

本人だけがお気に入りの選手だけだが。

しかたなくオーケシユストの機嫌をとるために長い名前を選んで言う。

「レフティハルメス」

これは綺麗に言えるとビルは思つ短くする」とは無い。

嬉しそうにつぼにはまつたオーケシユストが答える。

オーケシ

マルティンカウツビト

これはビルにも解る。解らないのはな世後ろに変なカウツヒをつけ  
ニギギ。

たたたた

金切り声で叫んでみせる。

名前だけで想像するのは悪いがかなりオーケシユストとしては力を入れてつけたようだ。

顔がいいだけでは人気者にはなれないのはどうアーケシストは見えない顔半分で苦笑してしまう。

三一卷

と、  
どすの利いた男の声。

可愛子ちゃんを呼ぶ男性の野太い声を実演しているようだ。ということはかなり魅力的な女性に違いない。

さあ、これはどうかな?と帰つてくる返答を予想して聞く。

ナルバントケルト

これはナルと呼んでもグルと呼んでもぱつとしない。

「バントウ~~~~~！」「んこれはちょっと無理があるな」とオ

一ヶシユストの返事にこの選手は十人並みの顔の持ち主だと想像出来た。

オーケシユストは自分でつけた名前なのにそのときの気持ちが思い出せない。

ビルは疑問が浮かんだ。

「新人は皆この名前を気に入つたのか？」

と笑いながら聞いた。特に最後のナルバントグルは名前というには無理がある。

「さあ。ロッククイーゼンのショーで使う名前だからどうでもいいんじゃないか」

涼しい顔で答えるオーケシユスト。まったく悪気がないだけ始末に終えない。

「そうか・・・」

無駄な質問をした。

今回はかなり新人に力を入れてシーズンを盛り上げようと考へていることだけはビルには解った。

掲示板には新人戦とタイトルが光り始めその下に並んだ名前の列はレインステンでは聞いたことのない名前ばかりだ。

そういえばオーケシユストの新しい彼女はトリンゼイ国の中民だと思い出す。

それで馴染みのない名前ばかりが浮かんだと思うと適当な名前をつけられた選手たちに同情する。

## ミルレンフラント

こちらは選手の控え室。

ブレロックイーゼンのために集められた中堅の選手と新人達がお互いの名前を覚える場所である。

緊張した顔で近づいてきた男に立ち上がり挨拶をする。

差し出された手と衣装の下の筋肉のつき方で中堅の選手たちは新人が何処でへタれるかを予測出来る。

「ラティーフですよろしくお願ひします」

近づいてきた男は美しい逆三角形の身体に緑のフルボディースーツ。「やあ僕はジリアスク。ラティーフ? すまないがフィールド名じゃないね。君はアネルだ今日からアネルと呼ばれるから覚えておくように。オナーの趣味なんだロックイーゼンだけで使う名前だと割り切ってくれ」とジリアスクは片目をつぶつてみせると

周囲の緑色のフルボディースーツ姿の数を手元のパネルにチェックを入れる。

これで同じチームの新人が揃つた。ジリアスクがチーム全員と顔合わせを済ませてミーティングルームへと去つていった。

ジリアスクがアネルのそばを離れるとその後姿をじつと見つめて視線を下にやりほくそ笑む女性が居た。

女性は時々苛々した目で周囲を見ては壁一面の鏡に写つた自分の顔に気がつき

口角を何度も上げては可愛らしさを誰にとも無く振りまく。確かに控え室にもカメラがあり緊張した様子の新人達の顔色が放送されたこともあつたと鏡から外した視線を床に向ける。

「うすれば顔に影が出来て不安げに映る・・かもしねない。

アネルは何人かの顔見知りを探してみたが広い部屋に散らばっていて近寄ることが出来ない。

黙つて足元の椅子の足だけを見つめるのにも飽きて顔を上げるときらきらした目がアネルとぶつかる。

アネルの運動能力を量り自分が上だと確信して隣の女性が声をかける。

一応同じ色のスース同じチームになる確率も高い。

「あたしさロックイーゼンの選手になりたくてさ、憧れていたんだけど。この服とこの化粧は無いよね薄くない？身体のライン丸見えよショックー」

TVで見ていたときはウェットスーツのような丈夫な素材に見えた。

カウンター座席のように一本のポールで支えられた腰高い椅子にお尻の端だけを乗せて見事な脚線美をみせて居る金髪の女性がリラックスした表情で答える。

「あら会場に来ている観客になら私たちは動いている小さな色にしか見えなくてよ。期待していいのはTV中継だけど、よっぽど良い動きをしないと私たち新人は映して貰えないわ」と美しすぎる笑顔。今日のレースは新人戦でいわば新人のお披露目会だ。

誰に対してもお披露目かというと周辺の地域の住民とコアなロックイーゼンのファンに対するサービスである。

「本当？新人つてTVに写らないの？困ったわ私家族や友達に思いつきり見てつて言って来たわ」

美脚の女性と自分とを見比べながらプロポーションで勝てないとわかると勝てる相手をアネルを見つめる。

大体アネルに声をかけたのになぜこの女が返事をしたのだと不服に思う。

他の新人に目を向ける。アネル同様緊張して固く口を結んでいるものが大半だ。色分けしたスーツを着ている選手たちはざつと見ただけでは男女の区別もつかない。

大きく息を吐きながら背の高い男が会話に参加してきた。  
話をしている二人は飛びつきり魅力的だ。

「一時間の放映だからな、俺達は集団シーンでなら『写るかもな』と過去の放送シーンを思い出して見る。

新人はスタートから飛び出した色の集団だ。

「編集されるからね」と美脚の持ち主。

「えーーー！ライブじゃないの。ずっと私はライブだと思っていたわ」  
尖がった口元が可愛い。

「ちゃんと書類を読んだかしら。木金は予選。土曜日が準決勝、日曜日が決勝戦よそれらを編集して日曜に放映されるのよ」  
いらっしゃとした気持ちを隠して微笑んでみせる。誰もが皆スタート前で緊張しているのだ。

「今日は木曜日でもフレオープンだからTV収録もないわよきっと」  
にっこり笑つて隣の飄々とした顔を見るとなぜか安心する。まったくアネルは緊張した風情に見えない。

控え室の片隅でラティーフことアネルは近くに居た新人達との会話の中に居る。

長い髪の毛を頭頂部でまとめた美しい女性、本名ビーレル。  
フィールド名をダンジェルマイア通称マイアーになる予定の選手が  
チャーミングな笑顔をアネルに向ける。

幅五センチのチームカラーが鼻でばつてんになつたペインティング  
がなければ花がほころぶように彼女の笑顔は美しいに違ひない。

笑顔に吊られて小声でラティーフは聞いた。

「こいつてそんなにすごいところなの？オーケシユストさんは楽しいゲームをしてみせて人間の運動機能の素晴らしさを世の人々に再確認させるのがこここの趣旨だつて言つていたわ。ロックイーゼンつて新しいスポーツだつて。違うの？」

ダンジエルマイアが答える前にミルレンブラントとオーケシユストに名付けられたミリーが含み笑いをかみ締めながら言つ。

今は誰かと話しているほうが心が落ち着くのである。

「ロックイーゼンは人間のレースよ。ちょっと仕組みは複雑であたし達は賭けることが出来ないけれど今は16各国で開催される世界中で一番人気のレースよ。カヤンデル山脈から向こう側では別ね。あちらでは家畜なんかのレースが主よ。最初はねいろいろなスポーツ業界の受け皿だつたんだけど今じゃね・・単純な運動よりロックイーゼンのほうが認知度が高いのよ。うふん」

あたしはその中のスター選手になるの、とミリーは会話に入つてゐる全員の顔を見回す。

ライバルになるのは色は違うがアンエルの隣の女性だと思っている。他の男女は異常に胸郭を鍛えていたりとかなり無駄の多いバランスの悪い身体付きばかり。

同じカラーのアンエルはスタイルはまあまあだがほつそりした印象で頼りない。

「おれホイジンガー。ホイつて呼んでくれそれじゃそろそろスター

トラインに行こうか」

アンエルとミリーとの間に同じカラーのスーツの男性が割つて入つて

きた。

ビルがこの呼び名を聞いたらオーケシユーストに再考求めただろ？  
残念なことにビルが目にするのは選手の本名であっても通称名は関係ない。ロックイーゼン競技が始まりこのシーズンを無事に問題なく終わらせる事が彼の仕事である。

係員がスタートラインの手前で誘導燈をふりて耳につけたヘッドフォンの声を真剣に聞き右往左往して選手らに指示を出す。

「八番、七番、四番、違う！アマリジヨの周りばかりうるつな！アスル・マリノ六番を前に、終わつたらさつさと引っ込めー選手の最初の顔だぞ。ここをとつておかないと特番が組めない。足元の自動力メラ寄つてよつて！目の動きを追つて！そう！いいぞ！手足を動かしている奴も。そうだ！時間一杯撮るんだ。空中カメラスタンバイOK？頼むぜいいアングル狙つてくれよ」

矢継ぎ早に係員の耳にはディレクターの声が飛ぶ。

ミリーがアネルの横に立つとアネルの胸を見て顔をしかめる。

「あんたそれ本物？やだーかつこわるいいー」

「どうして？」

「ロックイーゼンに胸は必要ないのよ。うふふ邪魔なのよ。ほら後で胸が無かつたらって思うことが多いわよウフン」

隣でフックスベルガーが女同士の鞘當に口を挟むべきか考え閉じるほうを選んだ。まだ軽口を叩き合えるほど知り合つていない。

「気にすることないわ。でも気をつけてねその胸が本物ならね」何か含みの有る言葉を残してダンジェルマイアは笑つた。

おひとりとしたアネルに同じカラーでもないのについつい声をかけてしまつ。

ミニーが口元を引き締めるがすぐに左端に口が歪む。胸は身体を鍛えれば鍛えるほど脂肪分は落ちてしまつ。すなわちアーネルの運動量はその程度と言つことだ。同じカラーでもここに居る全員が一応ライバルである。弱点は早く掘るに限るのである。

## アルヴァー・ルーサー・フォルスストロム

セデル国レイステン市は千五百万人の市民を抱える大都市である。都市を挟んで北と南には大きな工業地帯が広がりその賑わいを支えている。

もう一つの賑わいの源はレイステン都市が抱えるクスト湾。クスト湾には多くの交易船が行き交いここから各国に向けての工業製品が送り出され入荷されるのである。

都市は空からも人を集めて内陸部に二つの飛行場を持ち航空機も人の流れを都市に集中させる要因になっている。

その集まる人間の数に目をつけたのがオーケシュストグループである。

オーケシュストグループはクスト湾の一部を埋め立て大きな遊技施設を造った。

それだけでは飽き足らず公的に認可された賭博とスポーツを掛け合わせたロックイーゼン競技場をその隣に増設した。

人が集まれば金が落ちる・・遊技施設と競技場を取り巻くその周囲にはたくさんのホテルがひしめき立ち並び交通の便も無数に伸びて地下鉄の駅まで引っ張つてきている。

グループは市と協定を結び広大な遊戯施設クストーランドと全天候型の競技場の間に緑豊かな広い公園も設けている。

公園の緑はロックイーゼンで熱くなつた観客の熱気を冷まして家に帰宅させるには丁度良い静けさを保ち公園を取り囲むように立ち並ぶ高層のホテルからは

昼間は公園の緑と湾の海の色の美しいロケーションを提供し夜は港の奥に行きかえう船明かりと遠くに見える眠らない街の明かりが売り物になっている。

その絵葉書のような景色を独り占めにした、遠くから見れば尖がり屋根がシンボルのホテル・シユストーの最上階から豆粒にしか見えない人の動きを楽しんでいる人間が居る。

高所恐怖症の人間なら絶対に近寄らない

ガラス張りの窓辺に腰かけ地上を眺めているのはアルヴァー・ルーサー・フォルスストロム。

地上の喧騒から離れて広い部屋の入り口ドアのそばで立っているのが従者のフォーケステット・・テットと呼ばれている。

テットは年齢に似合わず地味な色のスーツで勤めである警備の仕事に徹し無表情を貫き通す。

「ストロム様・・」

テットはこれまで同様に言い慣れた言葉を使い窓辺の青年の父親の名前の一語を口にした。

この言葉でテットは一日に何度も自分を戒めている。

声をかけられた青年は地上を行きかう人々から目を離さない。

ドアが閉じた音は聞こえているのにルーサーは完全にテットを無視していた。

忍耐強くテットは言づ。

「フランスマン教授から伝言でござります。明日の授業を短くしていただけないかと。学会に行く準備をしたいのだそうです」

抑制の効いた声音にとげのある声が答える。

「学会?他人の事等何も興味もないくせに。大きな研究会にだけは顔を出しておかないと忘れ去られると思ってるのだろう。自分なりの証明もしてないくせに権威ばかりにしがみついている輩だ」

ルーサーのフランスマン教授への個人的分析である。

感情を表さない顔がテットを見つめる。

「あんな男の授業なんぞこっちからお断りだ。口先だけではフェルマーの最終定理を解くといつているがもう歳だ。頭の中にはカビが生えている。代数も全部知っているのが怪しいからな」と頭から数学会では有名な教授をじき下ろす。

ルーサーが誰をどのように酷評しようともテットは動じない。

「では社会学の後に三十分入れておきましょつか」

顔色も変えずに素早くルーサーは声を荒くする。

「断れと言つている。もう僕は大学の博士課程カリキュラムは終えている。これ以上詰め込ませてどの道に進めばよいのだ。生物学か医者になつて欲しいが、細菌学者か、毎日菌の培養を調べて論文を出せばいいのか？もう充分だらうそれとも学士の資格しか僕は持つていなか

テットを嘲笑しているのか教授を嘲笑しているのか両方をあざ笑つて口の片端を上げて見せる。

「それとも・・まだこれからずつとあの男の卑猥な視線に耐えなければならないのか。あいつの頭の中は夜の伽をする男娼の事だけ、僕を見るたびに妙な笑で僕からなにかを言わそうとするあの卑劣な男との時間などもいらないだらう？テット・・お前を見るあの男のこびた視線に気がつかないのか。いかにも僕とお前等が夜な夜な如何しいことをしているのを知つているのを知つているぞと笑つた卑しい目だ」

フランスマン教授が男色家なのは学会の人間ならずとも有名な話である。

そもそもルーサーが他国の人間であるのに面接だけで個人教授を引き受けたのはこれが理由だとルーサーもテットも周辺の人間ならずぐに理解できることだ。

運良くルーサーが母親に似て絵画のよう美しい青年だったばかりにその知性ではなく美貌にばかり誰もが関心を持つ。

フランスマン教授も例に漏れず

出会った頃は少年だったが教授はルーサーを一目見るなり小声でスバルス・・とつぶやいた。

言わずと知れた美少年で有名な名前である。

教授の驚いた顔と赤らんだ顔は見なかつたことにし、そしてつぶやいた言葉も聞こえなかつた振りをしたがその場にいる全員が聞き逃さなかつた。

美少年から美青年へと育つたルーサーに躊躇係としてテットは客を待たせることは教えていない。

「そろそろ階下におりませんんとトーマスベルグ市長が待つておられます」

忍耐と節度有る態度・・これがテットの信条である。

「僕は市長の胸を飾る花か？僕は人の目を集めただけの飾り物の役目をするだけ為にわざわざここから目と鼻の先に行く程度で正装してあの卑しい言葉を聞きながら歩くのか？その後は市長の家族と食事。事。

次は？何処の王侯貴族がクストーランドに人目を忍んで遊びに来てるんだ。僕はそのたびあいつ等の飾り立てる花でなければならない

んだ」

苛立つた目が冷たくテットに注がれる。

ルーサーの苛立ちはテットの苛立ちでもあるが一人でケンカをして  
もこの場は始まらない。

ここは年長者のテットが一分・・我慢すれば良い。

「参りましょう」

辛抱強くルーサーを促す。

長身のルーサーが窓辺から離れて動き始めると冷たい冷気が人間の  
身体をもって移動する。

「くソッたれ！市長も議員も死んじまえ！偉そうに裏では汚いこと  
ばかりして正義面して何が家族愛だ。スローガンに嘘ばかり掲げる  
な。刺客も僕なんか狙わずあいつ等を殺せば世の中が明るくなる」

美少年スバルスと表現されたルーサーは口汚い言葉を吐きながら  
棚から目の色と同じグリーンのスカーフを取ると器用にカラーの下  
に巻きつけ横に結び目を置いた。

渋い灰色のスーツにスカーフは首元に良く映えている。

二十年ルーサーを見てきたテットはルーサーに同情しつつも気持ち  
は顔には出さない。

ずっと彼には言い聞かせてきている。

ガイナース王国の準備が出来次第道は開けると。

エレベーターから降りるとルーサーは何事も無かつたかのように  
ホテルのエントランスで待つ市長に微笑んだ。

市長はあらゆるコネを駆使してパーティーにティナーにトルーサー

を招待したが

何かと理由をつけて断られている。

ルーサー達は逃げ口上も尽きてしまい特権意識の強い市長の招待を受けて開催式に同席することになった。

開催式典はVIPルームのバルコニーで参加し競技観戦の後市長の家族と共にホテルでのディナーが待っている。

ホテルの客が引きつけられる様にルーサーの歩みを見ている。

ルーサーが立ち止まり市長と話し始めると夢を見るよつた客もボイも見つめている。

「トーマスベルグ市長、今日は忙しいお体を私のために空けてくださいって嬉しく思います。樂しみにしていたんですよ。いつも競技の有る週にレイステンに居たことがなくて」

握手を交わした手をエントランスのドアに向けて市長をそれとなくエスコートする。

ここに立ち話をしても何の実りもない。

満面笑みの市長は軽く背中を押されるまま雲の上を歩く。

「そうでしょう！ そうでしょう！ プリンスも若い青年の一人こんな面白い競技は滅多にない。老若男女全てが楽しめる我が都市が誇る娯楽です。今日はプリンスと同席して観賞できるなんて夢のようですね。ああなんと美しいその微笑お写真や絵画では表現できない！あなたのご尊顔を・・」

ドアボーイに軽く会釈をしてテット等警備の人間が先の歩道で目線でOKを出す。

なかなか進まない市長の歩みをもう一度速めるために言葉をかける。  
「そこまでですよ。スタート時間が迫っています」  
わずかに頭を傾けて市長の言葉を遮る。

ルーサーの容姿を褒め讃える言葉は物心ついた頃から数限りなく聞いている。

誰でも人は例外なくルーサーに見惚れる。

絵画の中の人物のようだ神話の世界から光臨してきた神の一人だと言つた人物も居た。

外見の見てくれなどたぶんルーサーの母親が隣に居れば賞賛の声の半分は母親に囁かれたと思う。

残念なのはルーサーを生んだ母親はルーサーを産むため力んだのが元で脳の中の血管が破裂してルーサーを一旦見ることもなく亡くなつてしまつた事。

当時王の愛人だった母は死んでから妻という位は付いたが後の冠は貰えず逝つた。

王の正式な后となればその嫡男はそのまま王の跡継ぎとみなされるが正式な后に子供が居ない場合公平な詮議が評議会によつて行なわれる。

ガイネス王国は似非民衆主義と王権国家とを併用し王を選出す際、慣習によつて后の嫡男を選ぶ場合と嫡男が居ない場合王の血筋を引く者、

系譜に載つている者の中から様ざまな試験を行い秀でた王を選ぶ。

この方法は王族間の血縁関係を強固にすると同時に固執した一つの勢力を退け新しい風を吹き込む事で流れを活性化させる効果がある。

ガイナス王国を受け継いだ時王は将来自分の子供がこの椅子に座ることに疑いを持たなかつた。

誰よりも賢く強靭な肉体の持ち主だつたからだ。

美しい女性と恋をして子供を授かり後にはその女性を評議会で后に引き上げ順風満風の人生を思い描いていたのである。

## VIPルーム

ロックイーゼンとは、

あらゆる競技・・・陸上競技、格闘技、武道、などの戦いのための技術、術に秀でた者、

並びに平和な時代に自己防衛や自己修練を積んだ人間なら誰もがこのフィールドで走る権利がある。

誰もが自分の得意分野で力を発揮すること勝利に貢献することが出来、

多種多様な競技の第一線で活躍し小さな故障で第一線を退いた者、将来を有望視されていて才能があると認められていても大会に調子を合わせられず不調のまま沈んだ者などを救済するためにこの競技はある。と、役所や国に出した申請書には有る。

厳格な規律とスポーツをする醍醐味と感動を与えるという意義を振りかざして認可された。

実際には少ない掛け金で誰もが楽しんで出来る公共事業にして広く大勢の人間から金を集めるシステムがここに誕生した。

フレオープンはTV放送は無いがこれからロックイーゼンを占つ前哨戦だ。

ファンならば是非とも見ておきたい最初の個人戦である。

全身タイツに包まれたスース姿の身体を消毒薬のにおいの残る選手控え室から三十メートル離れた、

車庫の出入口のような傾斜のついた坂を上るとスタートライン。

選手が一同に並ぶとさらに天井やサイドの照明が明るくなる。

ラティーフは目を細めて辺りを眺めた。

始め入り口近くのライトの向こう側にたくさんの色の波が見え  
そのうねりの一つ一つが人の顔でそれらが全て高台の出走口を見て  
いると分かったのは一人ひとり選手の名前が読み上げられている中  
盤。

そつとラティーフは選手の陰に隠れて前進し

左横の覗き窓からこれから駆けるアトラクションを見下ろした。

まばゆいライトの隙間に浮かび上るのは波一つ立たない水面がギ  
ラリと光って見える。

右に目を移すと手前の出走口から飛び出た後十五メートル真下の砂  
地に落ちる。こっちが最初のルートだ。

砂地を五十メートル駆けると反り返った壁が見える。

一般人ならばその手前に反り返った壁を見たら啞然と立ち尽くす  
に違いない。

しかも背丈の三倍は軽くある。

その壁越しに空中に浮いたような円盤に飛びついて立てた丸太に太  
いポリウレタンを巻きつけた振動棒がゆっくりと動いている。

その後は・・・と見えているものとコースを頭の中で組みあわせて  
いるとスタートのサイレンが鳴り響いた。

市長を道路に残していきそうな勢いでルーサーは歩き闘技場に着く  
と待ち構えていた係員と

コンコースからエレベーターで直接VIP専用のラウンジを通過し  
VIPルームにアルヴァー・ルーサーとトマスベルグ市長は案内  
された。

一般市民の目から隔離された一角には先客が居て飲み物を片手に談

笑をしている。

一人は市議会の議員であとの一人は大手企業の専務と親の金で会社を興して肩書きだけは社長の三人である。

「今入ってきたの・・見たか」好奇心旺盛の目が笑う。

褐色の髪の男が飲み物を口にして新しい入室者を観察している。

「ああ、市長が珍しく笑顔で入ってきた。それがどうした家族サー ビスだらう?」

この男は市長の顔は確認したが連れまで見なかつた。

「今日はちょっと違うらしい。あれは・・プリンスを連れている」親に会社運営の資金援助を頼みその資金も完済するぐらいの勢いの儲けがある男は事情通を気取つた。

「プリンス? 何処の?」

聞きなれない言葉に幾つかの有名な王権国家を思い出している。

「ガイネス王国だ。まあ王位継承権はかなり下だらう。こんな所にいるくらいだから」

実はそのガイネスに工場を建てさせて品物を輸入し儲けている。

「ガイネス? あの頑固者ばかりが集まっている国だな。この時世にあいつ等とは肌が合わないな」

市議会の議員は国交を結ぼうとしないガイネス国として知つてゐる。

「フン、美人だ」

男の目は市長の連れから離れない。

「美人?」

プリンスには興味は無いが美人には一言挨拶を交わしたい。

プレオープンをわざわざ觀に来るご婦人方は少ない。

「男でも女でも美しいければ全て美人というのだ。絶世の美人だ。

市長でなくとも口が開いたままになる」

オペラグラスを持ったままの市長は口を開けて隣のルーサーを見つめている。

「今度の国の予算案ではガイネスの武器を買つことに可決されそうだ。ガイネスのほら何とかつて将軍と」

企業の専務になつた男は国家の買い物にアンテナを立てている。

「ああ有名な女の將軍か。確か・・プラテアド。北の海にプラテアド軍あり手を抜かないからな、少しほうも文句が言えないと事前に申請した船、航空機以外は領海侵犯として追い払われるらしい」

「最近じやすぐにその映像を公開するからこいつのほうも文句が言えない。扱いにくい国だぜ」

と議員の男。

「失敗したのか？」

社長は思い当たることがあるらしい。

「何が？」

質問をした男がどんな情報を欲しがつていてるか考えて返事をする。

「カット財団が着手したプロジェクトだよ」と社長の男。

審議の中心人物ではなかつたがうまみのある話だと興味があつた。幾つもプロジェクトを立ち上げては横滑りに計画が売られていくのを何件も見ているが

横取りしたカット財団が自分の建設会社を総動員させて望んだだけにその結果に男は多少の溜飲がさがつてている。

「カヤンデル山脈の地下資源開発か。荒地を五百メートル直下に掘つて南に向かつたが出てきたのは温泉だけ、暫らくその湧き出た水の勢いが収まるのを待つたがセイラー地区の湖の水量が減つて湖の

底が陥没して坑道は埋まるし湖の水が無くなつて地域住民がカット財団を相手取つて訴訟を起こしている」

市議は終わった事だと簡単に情報を洩らした。

「地核は我々の方角に口を開けていたのか」

地質学者の意見を聞くまでも無いかと遠い目をする。足元には宝は埋まっていないと確認しただけである。

「そうこうこと。今朝のニュースにちょっとだけ扱われていたな。湖の底を元通りにすることとそれまでの住民の水を確保することを条件に和解したらしい」

「骨折り損か。本当にまだガイナスには希少金属があるのか?」市場にガイナスが参入してくると厄介なことになると男は思う。でもなぜ向こう側にあってこっちの麓には鉱脈がないのかとまだ疑問に思つている。

「宝石の国ガイナスだ、カヤンデル山脈のどこかを掘れば少しは出でくるかもしがれん。広大な未開拓地持つて居る。うわさじや掘りつくして何もないうて話になつてると笑つてみせる。

その広大な土地にただ同然で工場を建てさせて安い賃金で働かせて儲けている。

掘るもののがなければ地上を活用する。ガイナスの賃金はこちら側の市場の十分の一。

父親が買い付ける高額な武器の取引に乗じてガイナスで工場の新設を果たし

勤勉実直なガイナスの人間を使えば金儲けは容易い。

「おーーお、市長の鼻の下。伸びてる伸びてる」

「まま話しつ込めば自分の金儲けのマジックを話したくなる。」

咽元まででかかつた言葉を飲み込み話の矛先を変える。

「！」いや市長が一番偉いからな」

チラリと赤ら顔の市長を盗み見て嘲笑する。

市長の手元の飲み物だけで酔っているのでは無せそつだ。

隣の美青年は脂ぎった市長の顔で見えない、残念だ。

「お、始まつた」

美しい色とりどりの人形が横長の口からあふれ出てふわりふわりと落ちていく。

「今年は・・・お、好み！あの娘残つてくれないかな」砂を撒き散らして駆け始める真剣な表情の選手たち。

「だめだめ！今年のスターは口ホの彼女だ！絶対だ！」もう美しい女性選手を見つけて口元が緩む。

「お前の予想は外れっぱなしだからな。うーー、確かに良いプロポーションだな。どの競技から来てる？」

双眼鏡から目を外してVIP専用に配られたパンフレットを見る。カラーで刷られた印刷物には配当の予想と大きなマルが幾つも書き込まれている。

「あれ？今日は個人名で賭けるのか？やめとけやめとけって色で選んだほうが手堅いぞ」

この友人の予想は良く当たる。

隠れて個人予想で賭けることにしたこれは彼女へのご祝儀だ。

「そりなんだが・・男はどうする？」

女性の場合は好みで決めるが男は印象が薄くいつも髪形で決める。

「ううんと・・筋肉のつき方からだとアスルマリノの奴が一番良さそうだ」

躍動する素晴らしい肉体美の中から引き締まつた無駄の無い柔軟な筋肉をみつけている。

「どれどれ・・まあまかなかな」

言われて探し出してみたが他の選手との違いは男にはわからない。

フィールドに走り出した選手に勝手な妄想と夢を抱き何かに追われて高い壁や複雑な骨組みの中をカラフルな色が通り抜けていく。

「今年は選手の当たり年ですな。なかなかいい動きの新人が多い」 目の前を走りぬける選手よりも隣のルーサーから市長は一瞬も目が離れない。

「そのようですね」

市長から渡された無骨な黒い双眼鏡をルーサーは顔から離せずに答える。

空調で室内の温度は調整されているはずなのに  
市長のシャツカラーは顔から流れ出た汗で濡れ  
握りしめたパンフレットも滴り落ちた汗を吸収し

市長の席からは汗と香料が混じりあい嫌な臭いが漂い始めている。

## プレオープン

色彩豊かな色の集団が触手を伸ばすように  
灰色の壁の突起（ホールド）を掴み昇っている。

選手の足や腕がスライムの様に伸びては縮みぶつかり合い（実際に  
はぶつからないが観客にはそう見える）  
一時も同じ模様にはならないが華やかで不思議な壁絵を作っている。

突き出た部分が五センチに満たないの握りを奪い合いたどり着いた  
頂上で  
次に飛ぶ前のアネルにマイラーは声をかけた。  
かけずには居られなかつた。

「ありがとう、アネル、でもあなたベルデよ。いいの？」  
と小声で。

マイラーは手を伸ばし掴もうとしたホールドを水色の選手に取られ  
左手右足だけ引っ掛けで宙に浮いた。  
あと少しで壁の頂上というところだつたから  
ここで落とされても砂地からのやり直しがかなりきつい。  
マイラーはホールドを取られ悔しくて惨めな気分になつた。

右足の小さなエッジから離れて落ちる・・と思つた瞬間  
マイラーのお腹付近にあるエッジにアネルが足を伸ばしマイラーの  
落下を防いだ。マイラーはアネルの足に右足を乗せ狙つていた上の  
ホールドを掴み危機を脱した。

アネルは笑顔を見せて奇怪な人工的障害物までの距離を測りちらつ  
とだけマイラーを見て

次のアトラクションへ急ぐ。

色の流れが坂道をボールの様に跳ね転がる。

ドンガと命名されたの壁をよじ登りまた急な下り・・今度はそのくだりを利用して小川を飛び越えて直立にたつた岩肌に手足の指先だけ引っ掛けて昇る。

アネルとマイラー、二人は同時にそのアトラクションに取り掛かる。良いポジションをとる。他の選手が次の岩に張り付き右へ左へと腕を伸ばしている。

「くつそーじけ！邪魔だ」紺色の巨体が器用に昇っていく。  
負けじとアネルマとマイラーが後を追う。

マイラーの上気した顔がアネルに微笑む。

見晴らしの良い天辺では選手らが自分自身の息を整えながら作戦を立て、思い思いの場所でゆっくりと空中で動き回るアトラクションを見ている。

礼を言われたアネルは恥ずかしそうに笑いアマリジヨ（黄）のマイラーを見る。

「だって平和は友情、助け合いは人間の基本・・でしょ？」「やつとマイラーに答える時間が出来た。

マイラーのありがとうの意味を込めた美しい微笑みを見ることなくアネルはポジション取りに動いた。

アネルが言つた言葉はロックイーゼンの掲げるスローガンである。

岩肌を登り詰めるといくるくると回るローマが三個、地上十メートルの

位置で旋回している。

「あれに飛び移るのね」隣に来たマイラーの言葉につなづくアネル。付かず離れず一人はアトラクションをこなしてきた。コマはモメンセ河の浮石を模している。

「助走をつけなきゃ飛び移れないぜ。邪魔だ！」

水色の男は次々と昇つてくる選手たちを睨む。威嚇もありだ。数人の選手が目標を定めて飛び、コマの端に手をかけそこなつて落下した。

落ちた先には土色の水が待っている。茶色の水しぶきが高く上がる。あの中に浸かると美しい色のフルボディースーツはその役目を果たさなくなる。

アネルも狭いコマの上に自分の場所を確保できるか一瞬考えたが旋廻してくるコマが田の前に来た途端跳躍してすぐでコマに飛び移っていた。

コマに足をつけると素早く反対側に回るとアネルと同じに潔く飛び移ってきた選手たちにぶつかるのを回避した。

コマはくるくると回り向こう岸近くまで来た。

次は半径一メートルの高いポール。さながら空中に浮かぶきのこだ。

数箇所取っ手のついた場所目掛けて飛び張り付くと取つての数だけ人数を感知するとポールはその場で回りだし選手を振り回し始める。回り始めたきのこに振り落とされる選手が続出する。

「フオーリ、今度はあの網の中かよ。おらよつと」

と、黄色のウロアの男は軽々と空中に浮かび四本の支柱に張られた大きなネットの中に落ちていった。

「フンツー！」とアネルも真似して飛んだ。

網の上を器用にアネルは歩いて木で作られたピラミッド型のジャングルジムに入り込む。

ピラミッドの天辺に設置されたパネルにタッチして入り組んだ木をかいぐぐり、

ハンマー海峡と名前をつけられたアトラクションに足を踏み入れる。空中に十五センチ幅の橋が一本四十五メートルの長さで対岸に架かっている。

自分の体重と後からやつてきた選手の揺らす振動を起用に利用して一步一歩進み橋を渡り終えるとここからスピード勝負だ。ジグザグに置かれたランプにタッチして落ちてくるハンマーの下を潜り抜ける。

ハンマーにたたき出されるとスタート地点の砂地に戻されるから大変だ。

ハンマー海峡の向こう側は当然海という設定で深いプールが待っている。

ここは高さがあり水に届くまで長いので耐空時間があり落下している間に回転やひねりを入れて個人技を競う。

プールの先には水中から気泡と一緒に大きな岩を模した突起が浮かび上がる。

岩と泡の水の障害物を乗り越えて海峡の高い岩壁を登り詰めるところストランである。

見通しの良い平たい場所に高さ一メートル弱の障害物が五メートルおきに設置されて選手の行く手を阻む

地上を走るには全速力は出せないし障害物の上を飛ぶには目測を誤れば突起物の上に乗ってスピードがダウンする。

しかもここはただつ広く他の選手の行動が全部視野に入るように作られている。

「まうほー今年の新人はいいのが揃ってる。そう思つだらうビル。よし明日の会議はランチと一緒にやる。いいシーズンになるぜー。」軽くウインクをするオーケシユストにビルは笑顔で答える。

確かにスターを作るのはオーケシユストは長けているとビルは思うがあまりにシナリオを作りすぎて彼の押す選手はそこそこの人気しか得られない場合が過去には数多くある。

集中してこれ見よがしで画像を配信し名前を連呼してもファンの頭の中のストーリーは作れないし、

オーケシユストの推す選手の名前を覚えるのは年寄りと子供だけだろ？ビルは思つ。

会場の嬌声の中、ゴールラインに一番で飛び込んできたのはミルレンブラントことミリー。

じつにTV映りの良い汗に濡れた顔で清清しい魅力溢れる笑顔が会場に設置された大画面で大きくクローズアップされる。

ミリーがゴールラインを踏むと赤外線で感知し天井から金色の紙ふぶきが舞い降りてくる。

隣に居るオーケシユストに気を使って、

「決勝戦じゃないんだぜ」と小声で言つ。

オーケシユストの今年の新人戦への意気込みはわかるが又アルバイトを雇つてあの紙ふぶきを回収しなければならないと思うと気が滅入る。

レイステン市の新しい名所になりつつあるのが競技場から五キロ離れた場所に総合スポーツ施設である。

大きなスポーツ大会競技に向けて集中して練習を行なうために埋め立ての際オーケシユストが進言してトーマスベルグ市長を作らせたものだ。

陸上、水中、水上、空まで想定した巨大な設備を整えたスポーツ施設である。

各競技の選手たちは快適な宿舎が提供され

身体を整えるためと鍛えるための設備と事故を想定した医療設備を兼ね備えた場所で

心いくまで大会に向けて身体を最終調節できる施設である。

スポーツ選手の育成に力を注いでいるという健全な施設と、一般スポーツと違い特別な要素を持つた、国公認の・・賭け事の対象になつてゐるロックイーゼンの競技者は一般施設利用者からは隔離されて生活している。

公共賭博であるロックイーゼン競技者に接触する

全ての人間、郵便物やファンレター、ファンからの贈り物差し入れなどなど全てに厳重にチェックされ出入りする人間にも制約がかけられ

当然競技者からの一般人への連絡は監視対象のトップに位置づかれ、

建物は厳重なセキュリティに守られて、徹底した管理がロックイー

ゼンの競技を神格化させ人気を集める要因の一つになつてゐる。

施設は道路沿いの高い塀に金網にまきついた薦が

二重にも三重にも膨れ上がり長い縁が取り巻いている緑の壁が突然切れ入り込んだ場所には

大きな巨木が左右に一本この施設の来訪者を迎える。  
コンセプトは自然界との繋がり、を示し建物の正面には  
神々しい威厳を表現して作られた金ぴかのエントランス。  
自動ドアが開き一步中に入ると真っ赤なカーペットが  
樹木の幹と枝を表して各部屋へ赤く伸びているが二階から上が選手達に与えられた居住空間である。

カメラ片手に門だけを撮影して帰るファンが後を絶たたず  
ファンが門の前で長居すると大木の陰に有る守衛室から大きな身体の警備員が

親切に選手の予定表を持ってファンの身上調査を始める。  
他愛ない話から名前を聞き出し何度も通うようであれば  
ピックアップされ要注意人物として名前が書き加えられる。  
又宿舎から出てくるロックイーゼンの選手のペイントの無い顔を  
カメラに收めたいファンや記者は駐車禁止の表示を気にしながら  
周辺をぐるぐる回りシャッターチャンスを常に狙つていた。

三階から上は選手の個人用の部屋がある。

帰ってきたばかりのミリーは二階のラウンジは無視して部屋に入る  
と同時に携帯電話を取り出した。

ソファに座り込むと同時に最初の呼び出し音が終わらず出た相手に向かつて微笑んだ。

「ハイー愛しいハイー私の成績聞きたくない? そうよ私は一番  
で入ったのよ。最高に運が良かつたわ。来月の本戦では今日の映像

が使われると思うから楽しみにしてね。映るわよなんたつて一番よ！これで映さなきや私文句を言ってやるわよ。うつふつふつ愛しているわ、ハニー

「言葉尻に甘ったるい含みをたっぷり乗せて言うと相手も嬉しそうに愛してるよと返答する。

手術の途中だと電話の相手にもつと褒めてもらいたい気持ちを押し込めてミリーは携帯を切る。

出だしはまあまあだわ及第点よ自信に満ちた笑顔を壁に張り付いた鏡で確かめる。

何処から見ても完璧な顔、元々田鼻口と変則の三角形の位置にある、それが彼の手で何倍も魅力的になつた。

コンコンとミリーの部屋のドアをノックする者が居る。

「フロステルだ。ラウンジに行かないか」

大勢居た選手の中で最初にミリーにちょっとかいをかけてきた男だ。

「いいわよ

男友達は何人居てもかまわないと携帯電話を閉じて可愛く肩をすくめる。

情報はあればあるほど良いと彼に言われている。最初の個人情報収集は彼から始めたことにした。

「うふん。おまたせ」

選手が住んでいるビルから離れて樹木に遮られた場所にロックイーゼンに関連する従業員並びにスポーツトレーナーが住む建物がある。

一階部分は会議室、地下にはセキュリティシステム全ての情報が集められているシークレットルームがある。

地下の区割りされた部屋にはこの大きな施設の全容が映し出された

モニタールームが次の部屋には選手の使う携帯電話通信で使われる電波は

ここを経由して本来のラインに乗る。

集積回路に集められた音声はスーパーコンピューターで分析されたとえば言葉の中に暗号を隠して伝えると選手と会話をした相手は五年間ロック一ゼンの掛札を買うことが出来ない。

ナチュラルな物を好むオーケシユストが室内をデザインした豪華な応接間はもとい会議室は

たっぷりあるカーテンの生地を湿氣を含んだ生暖かい風が吹き込み重たいカーテンを揺らしている。

さつきメイク係に決めてもらつたヘアースタイルが風に負けてオーケシユストの頭の地肌を見せている。

一人掛けの椅子に座り足を組み替えて揃つた顔ぶれを一巡する。

「で、昨日の保安部の報告は。皆ちゃんと規則を守っているかな? ここは重要だから市への要望は健全な遊技場だ。些細なことで市には報告しとかなきやな」

部門別に二十人がテーブルに付き古いメンバーはスマミスビールとオーケシユストだけである。

実直な元警官だという保安部の部長は碎けた感じのオーケシユストの態度を完全に無視している。

背もたれに背中に預けることもなく前のめりで

役所に出す予定の書類と同じものに目を通しながら報告をする。

古顔のスマスである。

「ええ、ではまず建物内で聞き取つたものを。選手同士の会話は他

愛もないものでした。通話は五十二件、今回の新人は通話回数は少ないようですね。相手のナンバーから割り出した職業と名前です。今のところマフィアがらみの人間は居ないようですね。気になる・・といふか整形外科医が一人。患者が縁で付き合つた可能性もなくはないから、調べてみる必要がありそうです」

書類をオーケシユストのほうへ滑らせる。

保安部のスミスがコピーした資料にオーケシユストはぎりと田を通すとオーケシユストの口元に下品な笑いが浮かぶ。

他人の秘密を覗き見る喜びを満面に出すオーナーに保安部長は沈んだ気持ちになる。

好き好んで他人の電話を盗聴しているわけではない。

オーケシユストの隣でちらりと笑い顔を見て不快な感情がわきあがつてくるのをビルは押さえる。

「さつきのは注意事項に入れてもいいのかな」とスミスに尋ねる。

ビルの落ち着いた態度にスミスは気が弛む。大事な個人情報を面白半分で見られたくない。

「んー、私としては入れたいのですが、如何でしょうか?」

とスミスはオーケシユストの隣にいるビルに安堵の笑顔を向けたが

その笑顔はオーケシユストがしつかり受け取つて偉そうにさっくり返つて答える。

「いいだろう!俺達が些細なことにも気を配つていると市長も思うだろう。まあ清廉潔白な奴なんか居やしないって、誰だつて一つや二つ叩けば埃が出るつてもさ。なあ」と軽くスミスにウインク。

便宜上の報告だと高をくくつておるオーケシユストに  
保安部のスミスは自分の仕事がものすごく軽く見られないと感じ  
る。

ロツクイーゼンが始まつて以来十年、毎年恒例の行事として市民には受け入れられている。  
他の競技熟練者からも羨望のまなざしで見られているのは  
徹底した不正の管理と支払われる多額の契約金などが保障されている  
からだ。

専門誌も多数出回り雑誌には必ず数ページは特集を組まれシーズン  
が始まれば紙面を賑わすのがロツクイーゼンの選手たちである。  
闘技場で行なわれるドラマチックな戦略と選手のひたむきな汗と涙  
が幾度も観客の感動を呼び起こしシーズンチケットは必ず完売して  
いる。

スミスは誇りを持つて不正と戦つてゐるつもりだが  
オーナーであるオーケシユストは体裁さえ整えばOKという雰囲気で  
本当に役所との規約を念頭に仕事をしているのだろうかと疑問に思  
うことかしばしば有る。

ロツクイーゼンの知名度が上がるたび土地の所有者である市と  
認可した国、もちろん発案者でもあり主催者でもあるオーケシユス  
ト等の懐は潤うが、  
洗練された個人技とチームの団結力を前面に押し出し清廉潔白なイメ  
ージが売り物なのに  
現実はゲームをコントロールして大金を手に入れようともがいてい  
る人間が後を立たない。

いつもは体操競技で使われるフロアがロックイーゼンの選手で埋め尽くされている。

初日、競技を終えた選手には中堅の選手やトレーナーがついて各アトラクションの攻略方法である身体の使い方をレクチャーしている最中。

「まず最初、スタート直後の砂地の走り方だが無駄に力を使いすぎる。新人は皆そうだがあの曲面を登るために加速したい気持ちは良くわかるが。砂地を大またで走れば腰に負担がかかりすぎるスピードも思ったより出ない。ならどうした良いか。カスタイル」とジリアスク。

マットレスに座っているのは三人、後の六人は専用の折りたたみ椅子に腰をかけている。

「足腰を鍛える」

屈託ない笑顔がジリアスクに向けられる。

苦笑しながらジリアスクは田のきらきら光る可愛いいミラーに移した。

「そうだ。それも正解だ。君はどう思つ?」

可愛さ全開のミラーは自分の存在が充分にジリアスクに伝わったのを確認して答える。

「あたし?あたしならいつもの歩幅より小さくするわ。ピッチを上げて駆け抜けるわ」

今年の新人は俺等の時と違うなと自信に満ちた田で見上げるミラーの魅力的な笑顔に見とれる。

「よし。いいぞ!いいか背骨の軸を意識して太ももを上げるように

して走れ。蹴幅を変えると左右にぶれたりスピードが弛んだりと良いことは無い」

「それから次が意外と時間を食つた場所だつたな。ここでのロスターは個人戦では後の巻き返しも可能だろうが団体戦ともなるとちよつと辛い、一度も三度も駆け上ると団体戦では全員が揃わないといけないプログラムがある。君たちは優秀だから身体の使い方を見れば自分で方法を会得できるだろう。出来ないやつは個人的に俺かポールに言つてきてくれ。完璧に教えるから。じゃポール見本を頼む」

選手たちよりはるかに体重の軽そうな背の低いトレーナーが短い助走で壁を登り張り出した窓枠にぶら下がりマットレスの上に着地した。

その場全員の目がその程度の動きは子供にでもできると自信に満ち溢れた表情で見つめている。

新人レースが終り最初の段階で色分けされていた選手達が更にタイムで順位をつけられてチームの中でも三つに分けられた。

運動能力は拮抗していく分けた三チームに大きな違いはないと総監督は言つが歴然と三チームの差はあり優勝するチームは少し分析すれば予想が出来る。

長く活躍しているの選手ほどシーズンのシナリオを読み苦笑いしシーズン終りにある契約更新に上乗せが出来るようアピールできる自分の活躍場面多くすることを思い描き行動に移させた。

これは観客を喜ばせるショーアである。

「悪いな呼び出して」

全力を出し切つて疲れた頭で硬質ガラス越しの木々を見ていると身奇麗にしたジリアスクがラティーフの前のいすに腰を落とした。

「チームとしてはいい結果を出したな。まずはの成果だ」

「その・・単刀直入に言おう!ミリーの事はどう思つ?あ、答えなくとも解つてる君の日頃の態度を見れば

仲間として申し分ないと俺は思う。だがなもつとそのミリーを盛り立ててくれないか。彼女はベルデのスターだし見せ場を作つて欲しいんだが。たとえばだが彼女の得意な場面では補助としてそばに寄らないで見守るとか。カメラの角度を考えてミリーが崖から落ちる時は他のチームの選手をさりげなく移動させるとか。君にならできるだろ?」

ジリアスクの言わんとしていることは解るが競技中にはかなり無理がある。

「補助が必要ないなら・・そうですね離れた所から移動します。崖の上では他の選手を押しのけることは不可能に近いと思いますが」  
補助をしてくれと言つたのはミリーからであつてラティーフが進んでやうと言つたわけではない。

「そうだよな。これは例えだよ。君は目が良いからカメラの赤い作動ランプが見えるだろ?。そのときは出来るだけ彼女をカメラの前にやって君は映らないように心がけてくれればいいんだ。チーム一丸となつてミリーを押して行こうと思つてる」

晴れやかに言つジリアスクに無理に作った笑顔で答えると  
「うだけの事は言つたとばかりに颯爽と立ち上がつた。

「明日又体育館で動きをやつてみよ?」  
と去つていつた。

いつも全員集まる時には細かいことは気にするな全力で行こうとした  
けしか言わないのに

終わった後はちくちくとメンバーを呼び出しては個人的な動きを注意する

それがリーダーの役目だと思っている。

競技が始まるとロッククイーゼンを理解していない新人とそろそろなんとなく胡散臭さを感じてきているがまだ勝負にこだわっている中堅の選手達とが

熾烈なトップ争いをフィールドで行ない、アネルはオーケシユストの思惑通り人の良い性格のままリーダーの指示通りに動いている。

ある日希望する者だけが集まつた体育館では見本演技をするラティーフの周りに人だかりがある。

「アネルもう少し解るように教えて」

そういうて食い下がるのはダンジェルマイア。

プレオープンからアネルの動きが気になつてしまふがマイアーハ試合が終わるたびアネルを通路で呼び止めてはアネルの解説に耳を傾けた。

最初何を聞かれているかわからなかつたアネルも

素直なマイアーハ問い合わせに答えられるようになり言葉で解らないものは実際に動いてみせ、向上心の強いマイアーハ貪欲にアネルの動きを少しずつ会得し

ロッククイーゼンの見せ場を作るため自分の運動能力の限界に挑戦していた。

美の女神のようなマイナーが食いついて見つめる。  
その真摯な姿に皆見惚れている。

「落ちる時には砂地に向かつて足を踏み出すの」

もちろん身体は引力に負けて何もせすとも砂地に引き寄せられるが。

「イメージは壁を歩く・・かしら」

通常の一般的な運動能力の持ち主は想像はできても  
無理があると解るがアネルはそれを瞬時にやっているから誰も異論  
は唱えない。

「真ん中ぐらいでひねりを入れて、壁を蹴つて着地・・逆だわ壁を  
蹴つてすぐにひねりを入れるの」

自分の動きを言葉にして解説するのは難しい。

「地上では無理かもしれないけど。見ててくれるやつて見るわ」  
マイナーが集まっていた選手達の間をすり抜けて広い床の端に立ち  
ダつと十メートル走りタンブリングをして空中高く舞い上がり着地  
した。

「うーーん今のはサルトパスだな（ひねりを入れない）マイナーが  
望んでいるのはツイストパスだろ？」

「俺は床の上ではやれると思うけど、落下している途中ではそれも  
真ん中まで来てやるのはちょっと無謀過ぎやしないか？」  
リドイは誰よりも田立ちたいのでアネルと違う回転を入れた降り方  
をする。

アネルに見えるよつにマイナーは左の端から又走りタンブリングに  
ひねりを入れる。

マイナーは大技よりも小気味良い切れ味のシャープなひねりを入れ  
た着地を好んでいる。

これはマイナーだけが気がついたことでは無いが壁を走り中間で蹴りを入れることによって着地が早くなりしかもひねった勢いで両足着地ではなく片足が下りた時点でもつすでに走り出しているといつマイナーに言わせると完璧な形なのである。

「今のでいいけど、出来ればせつかくのひねりを入れた勢いをそのまま使うために、回転軸を足に持ってきて身体が倒れこむようにしてみて。自然とどちらかの足が前に出るはずだから」

五十人近い選手達が見守る中晴れやかな笑顔がアンエルに向けられるが

笑顔はすぐに遮断されてマイナーに魅せられた男女がピンク色の言葉を口にする。

「綺麗に決まったね。でもそもそも少し体の力を抜かないといけないね。これって結構身体に負担がかかる。後で疲れるの嫌だろ。だからさこの場合・・・」  
熱心な目がマイナーだけを見つめる。

「いいねいい動きだよ。天から降りてきた女神みたいだよ」と賛辞の声。

「最高だね。出来ればもう少し腰を落とせばパーフェクトだ」  
満面の笑顔でマイナーを見つめる。

「次にあたしが見てもらおうと思つていいけど、先に完璧な演技みせられるとやりづらいわ」とミコーマキ。

「そんなことないわ。私ちゃんと出来たなんて思つてないわ。アネ

ルにまだ聞きたいことがあるの退いてくださる?「

三重になつた円の中心がラティーフに向かつてが動く。

忍耐強くマイア―の崇拜者に邪険に扱われても  
この場は怒り出すことも逃げ出すことも出来ない、  
マイア―の顔が見える位置または声が聞えるまで彼女が近づいてく  
るのを辛抱強くアネルは待つ。

## 鉄女 バラディール将軍

モラド半島の気候は暑さ寒さの気温の差はあるが一年間の雨量は少なくカヤンデルの麓以外は広い半島全土が乾燥した荒地と化したままだ。

バラディールは窓の外に広がる薄茶色の砂漠を見ている。モラド半島にプラテアド軍が本拠地を構えて百年を過ぎるとこの目に前の大地は緑に潤つたことが無い。カヤンデル山脈の恩恵は視界の範囲にはないけれど乾燥した土地が宝を吐き出し希少金属の鉱脈にもなっているのは皮肉だ。

山側の傾斜地から引いた水路に添つて土地の色と同じ屋根を持つた工場が砂漠と同化して地平線の向こうまで並んでいる。

ガイネスの歴史は西のプラテアド半島から始まった。山脈に露出していた宝石の原石を研磨して北の港で売買したのが始まりだ。

船は他国の珍しい品々を積みこねつてガイネスの美しい腕輪や首飾りなどの宝飾品を求めてきた。

宝石の国ガイネスとして諸国に知られるとその宝石を独り占めしようと幾たびか他の軍隊が送られてきた。

モラドが武器を生産するようになつたのはプラテアド半島から上陸した侵略者に虐殺された事から始まった。

貧弱な武器しか持たないプラテアドの一族は港を離れ

カヤンデルの山脈の奥地から隣のドラドへ逃げ

ドラドの一族やプランコの一族に助けを求めるドラドを何度も奪還した歴史にある。

惨殺された記憶はガイナスを内に閉じこもらせ他国との国交を禁じ、近代化する諸国を尻目にガイナス独自の政治や文化を今日まで推し進めてきている。

一切外部の情報は国民には入れず一部の者だけが諸国に目を光らせて監視し

近代化の流れを読んでは対処してきたがそれも限界が来ている。時の流れはガイナス一の都だったプラテアドを以前の住民の三分の一にし

半島に残つたのは港を守る僅かな兵士と漁民が住む街に変わつていつた。

近代になると産業はモラドへ移行して誰もプラテアドに見向きもしなかつたが、

外貨を稼ぐためにもプラテアド一族の一人サガモアが審議にかけ朽ち果てた都に手を入れてホテルとして整備し観光事業を始め、当初は諸国の王侯貴族だけに限つて上陸を許していたが儲かると解ると外洋船や大型クルーズ船の寄港を許可するとサガモアの懐は多いに潤つっている。

新しい情報はプラテアド港に航海して来る観光船からも齎される。情報は口から口へ瞬く間に広がり違つた方向性を持つ。

それを修正するために何度も会議は行なわれ近代化した情報機器をガイナスにも取り入れもした。

国民の要求に役職の決め方も公開されたが国民がその役職につくことは難しく

富のある者だけが出題される問題を解くことができ、たゞえ民が試験を高得点で通過しても適正試験で一般民は落とされる仕組みがきちんと用意されてもいる。

それが国民の不満もある。要職は古くから支配してきた七つの部族間だけで回っているに過ぎない。

インターネット情報の中では海の向こうの国々の人々は王制に反対するデモや軍国主義に対する怒りが爆発してクーデターなどが勃発している事をガイナスの民も同時期に知る事が出来る。

これまでガイナス国民はは統制の取れた発信源を信じストライキ一つ反旗一つ翻つたことが無い。

選別された電気機器はガイナス中に設置されたが国民には不評だ。

外貨獲得のために始めた観光船事業はひなびた港を二三百年前と同じ活気ある風景に戻したが

そこで働くガイナス国民は世界情勢を知るたびに複雑な思いに駆られる。

水力発電で出来た電気は一番端のモラド半島に届けられプラテアド軍の兵器の為に使われる。

一般家庭に電力は使われず天然ガスだけがかるうじてきている。

ネット画面で見る他国の街並みは明るく美しく一方ガイナスは街灯はガス燈のみ

夜仕事もガス燈の明かりの下で行なうから

部屋の一角だけが明るく町全体が明るくなることは無い。

それがよいと観光客はこぞって寄港許可を申請しているのは皮肉といふ他ない。

百年の間に工廠は産業になり精密機械となつた兵器を敵国に売りつ

けるまでに成長し、

国を挙げて兵器を作り上げ衛星を打ち上げて

世界中を監視下においていることなどガイネス国民は知らない。

国家間では内密に兵器の売買が横行して各国のバイヤー達は増え続け百カ国を越えた。

若干十八歳のバラディールを軍隊に引き入れたのはシャルボ二エ将军で

将军が引退したのがきっかけでバラディールはバラテアド軍の将军としてトップの位置に就いた。

齡五十四歳の今日まで鉄女将军と影口を叩かれながらその采配にどの一族の長も一日を置く。

鉄女将軍が一番信頼しているのはサガモア王で若いバラディールの突飛な行動を

他の一族が非難する中、必ず言葉を尽くしてバラディールを援護した。

そのサガモア王も指針を何処に置けばよいか混迷している。

農地も放牧する家畜も無いモラド半島の人間には軍人になる以外出世の道は開かれては居なかつたが

僅かな期間でガイネス一の金持ちになりその構図を作つたのはバラディール自身である。

膨れ上がつたバイヤー達を前に緻密な情報を腹に仕込み  
恐れおののかせて交渉の場に立ち会つてもいる。

成金となり七部族を牛耳つてはいるものの国民からの信頼度は無い。

国民は世界にも例を見ない馴れ合いの試験制度の王族を軽視し国民が決める民主主義を望み始めその声がバラディールにも届いている。

国を守るという正義感の塊であるバラディールは突っ走ってきた人生を振り返り憂いて居る。

## ポスター

近代的な開閉式の屋根を持つ円形闘技場は厳めしい外見に似合わず一步中に入れば豪華な広いエントランスが来訪者を迎える。

競技場へは中央の一戸に分かれて上に伸びる大階段を上れば人工的に作られた岩肌を模した壁と配置された植物によって鬱蒼と草木の茂ったジャングルを連想させる通路に出る。

空調で足元から風を起こし木の葉がゆれると気分は

一万年も昔に闊歩した原人の気分をここで訪れた者に味わせる。

しかし競技は先週に終り競技場は屋根裏バルコニーの見学通路を行き来するのみである。

したがつて観光で立ち寄ったファンは豪華なエントランスに設けられたグッズ売り場と各チームに色分けされた選手のパネルを見学し設置された椅子に座り

週末に行なわれた競技の点数表が電光掲示板で流れる

横の大画面の中で跳躍する選手の必死の形相を羨望のまなざしで見ている。

ベルデのミラーのアップの次にはアマリジヨのマイア、ロサのレフティーと人気者が次々と出てきては変わる。

来シーズン活躍する選手をファンは賭けシートを片手に次の予想を練るのも楽しい作業である。

閉館時間が近づくと大勢居たファンの数も減り始め、入り口横で待機していた警備員は変な忘れ物がないか順路に添つて歩き、

中央階段横の透明なアクリルボックスの前で一人身なりの良い青年に気がついた。

警備員は熱心にポスターを見ている青年に声をかけた。

「毎年恒例の行事だ。せっかくだから好きな選手の箱の中にそこ用紙に住所と名前を書いて入れておくといい。確率は低いが最終日まで夢は見れる」

元気を出しなさいと一言警備員は付け加えたが余計なお世話だと自分に言い聞かせた。

青年が暗く落ち込んでいるように見えたのは消え始めた照明のせいかもしけれない。

最後の締めくくりの催し、

ロックイーゼンファン投票で選ばれた二十人がチームカラーのペイントの顔で

笑っているポスターの前でルーサーは足を止めた。

壁一杯にロックイーゼンの選手がポスターの中で真剣な表情でこちらを見ている。

大画面ではカラフルなフルボディースーツが流れるように水の中に沈み崖を登る。

最初初めて競技を見た時その間中ルーサーの胸は早鐘のように打ち、一人の選手だけを見つめていた。

興味は憧れに変わり一年後には熱狂的なファンの一人になっている。

ルーサーはついさっきレイステンについたばかりだ。

トランクを部屋に放り込み窓下に見える競技場にふらふらやつてしまっている。

フラフラの理由は先月の議会で評議会が又延期された事。

これで次年の議会まで待たされ、

議会で選考会は必要無しと判断されれば又先延ばしされる可能性も出てきた。

「ゴールの見えない試験勉強がずっと続くと思つと憂鬱になつてくる。

ガイネス国で生れ落ちセデル国で教育を受けているルーサーは物心ついた時から知識を詰め込みに西に東にと高名な教授に指示を仰ぎ

このままどこかの大学院で研究に勤しみたいと思つたことも一度や三度ではない。

ガイネスに帰るという思いを断ち切ることはルーサーについてきた侍従の希望をも断ち切つてしまつ事になる。

侍従は家族を残してガイネスを出、二十数年一度たりともガイネスの土を踏まず、

彼らの役目であるルーサーを一人前にして立派な皇太子候補に仕立て上げることに邁進してきた。

できればルーサーとて皇太子になつて彼らの地位を上げ一族全てに恩恵与えたい。

侍従一族といつてもどうの昔に本流から外れて何の役職も与えられていないので、

ここで奮起すれば系譜にもぐりこめ将来自分達を

踏み台にして一族の名人間を他に知らしめる才能が現われる。

皇太子を選抜する評議会が後回しにされている理由は世界の国々とガイネス国のギャップ。

ガイネス国民は世界に目を向けだし様ざまなことを限られた映像の中で知つている。

知りたいという欲望は日に日に増して

書物から得た知識よりも実際に現物で見る知識の違いに驚愕している時期はとっくに通り過ぎている。

一部の者だけが特権として外遊している事実が国民にも知れ渡り

ガイナスの王族の信用度は年々低くなる一方である。

一時は世界に類を見ない試験制度で優秀な人物を選出し  
地位を与えていたのだという説明で理解を得たが長年続く七つの部  
族間だけの試験制度など

馴れ合いと暗黙の了解の中、試験の結果も公表されず

国民の知らないところで役職の授与式も終わることなどから不信感  
の芽は摘み取れない。

統制の取れていた七つの部族間の間にも貧富の差が歴然と出始め  
力の無い部族の代表は国の行事ですら決まった日にちを主張できず  
裕福な部族の言いなりになつてている。

そのとばっかりがルーサーがガイナスに帰れない理由だ。

侍従の心配顔が目の前のポスターに代わると不思議と心が落ち着き  
勇気が胸の底から湧き上がってくる。

落胆した気持ちを奮い立たせてくれてるのは実際には会つたこと  
も無いスター選手。

ペイントが大量に塗られた顔にありがとうといつて警備員に追い立  
てられている人混みと一緒に闘技場をルーサーは出でいった。

## フォークステット

ホテルの最上階ではテットがクリスを捕まえて怒りをぶつけている。

「又キヤンセルだ！これで何度目だ。好きな学問だけは寝ないでもやるくせに、やらなきゃいけないことはここ二年間、一切やってない！一体どうなつてやがる！歳をとればとるほど馬鹿になつてやがるぜ！」

積み上がつたトランクを前にして腕組をしたままテットは突つ立っている。

「反抗期なんだよ

小さなトランクをクローゼットに運びながら苦笑してクリスは答える。

「今頃か！今が思春期か！」

と吐き捨てるようにテット。

クリスは一番大きなトランクを前に中身を空けるかちよつと齒む。止めて置こう。中身はルーサーの嫌い服ばかりである。

「彼は良くやつてきたよ。僕等の言つことは全部こなしてきたじゃないか。そうだな、原因は評議会が延びたせいだろ？。テットだって評議会が延びていなければそんなに腹が立たないだろ？」  
期待が大きかつただけに評議会が開かれないとばかりした。クリスもこればかりはどうすることも出来ない。

国を出たときは二十歳になつたばかりのテットを筆頭に全員十代の

若者だった。

あのまま国に居れば船大工として登録し上級試験を経て処遇の良い地位を得ようとクリスは勉学に励んでいたと思われる。

思い詰めた表情のテットの父親から話を切り出されて、道場に通っていた皆の人生は大きく変わった。

プラティアード一族の外戚であると父親はテットに明かし嘘のような任務をテットに頼み込んだ。

師範代になつたばかりのテットは突然降つて湧いたような話しに胸躍らせ道場の若者を引きつれ見たことの無い他国へ旅立つたのである。

絶対無一の使命はサガモア王の子供の命を守ること。

テットの祖先のように一旦系譜から外れた人間が本家に戻るのは難しいが今世紀は才能と実力が物を言い、ルーサーと共にガイナスを後にした男達の願いは未来永劫にまで約束される地位にある。

ガイナス国に戻りたいという気持ちはあるがテット違いクリスはプラティアドの一族とは何の係わり合いも無い。

ガイナスの一般民は百年前の手芸の世界が続いているセデル国では少數になつた徒弟制度も当たり前である。

そもそも娯楽と呼べる施設は無い。

世界中衛星で会話し航空機で行き来し隣国が近く感じられる近代国家だというのに

ガイナスの通信網は百年前と同レベル。

近代通信機器や航空機は軍隊のみが使用し、

民間人の移動は最近になつて復旧した電気自転車だといつお粗末さ。石工が石を切り出し木の枠組みで建造物が出来上がる。

生活に電子機器が不可欠なセデルと電子機器をまったく信用していないガイナス国民には

百年の文明の開きは酷すぎる。

クリスも車の免許を取り車体の整備も免許を取得しセデル国に放られても食つていくだけの技術は身につけたがこれはガイネスでは役に立たない。ガイネスは車社会ではなく自転車社会なのである。故郷に帰りたくもあれば帰りたくない、故郷で育った年数よりも他国で過ごした年数が上回つて離れすぎた故郷を思い出す日々は確実に減つている。

小脇に抱えた手帳を指で弾き口を結んで怒りを示す。

「そうかもしけん。だがな最後の詰めはしつかりとしていなくてならん。最後で投げるとは言語道断やるべきことはまだあるのだぞ」母親のように接するクリスが悪いとばかりに顔を睨みつける。甘やかせやがつてと顔で言づ。

サガモア王は王に就任した日に二十二年後に評議会を開くと満場一致で決めている。

各部族それを目標に幼子の優劣を見極めこの子ならと教育をし育てていたのに裕福な部族の子供がその知識を身につけていないのか、身についていても年齢が達していないのかは定かではないが有無を言わせずに来年に持ち越されている。

ガイネス国を出てから暮らしが蘇つて来ては消える国の未来を荷うためといわれてきたが、その未来が本当にやつてくるのかガイネス以外の国々は国民が決起し国を変えようとしているそれを見ていると小さな個人の努力で知識を詰め込んだとて国を動かす力など到底出来ない。

テットの怒りなど慣れたものだ。いつもテットはルーサーの居ない所では愚痴ついている。

「教授の評価が悪かったのか？何処か身体の調子でも悪かったかな。俺達は男所帯だ少しばーるーサーに気を使わなきゃ彼は纖細なんだ」

優しいクリスは待ちぼうけを喰らつたルーサーが可哀相でならない。

不満顔のテットは、宥めようとするクリスに反抗的な視線を送る。

「この俺と手合わせして三回に一回お情けをかけて勝負を譲る奴など纖細な気持ちなど無いわい」

週に三回、運動もかねて道場に通うが師範のテットの腕前はさび付いたのか

成人したカルーサーに勝てなくなつた。

「ブツ、全敗か。テットも歳だな。わりいわりい本気じゃない！一度他流試合を申し込んでみないか俺達も鍛えないとまずいだろ。うそうだなレイステンには何箇所か良い道場がある今夜辺り行こうやあ、女はダメだぜこっちの女は鍛えるつて事を知らない腑抜けでふにゃふにゃだ早くガイナースの女に会いてH」  
女の話が出るとテットは怒りが半分に減る。

当に嫁を貰う年齢は過ぎてゐる。

「人通りが少ないと思つたら今日はやつてないんだな」

公園にはロックイーゼン関連のグッズを売る露天が少ない。

「何を？」

怖い顔のテットは下界の事には関心が無い。

「ほんとにテットよ、遊びの一つでも覚えて帰つたほうがいいぞ。そんな顔していると女にもてないぜ」

「ルーサーのように目の色を変えろってか？出来るか！」  
吐き捨てるように言つテットにクリスは笑いをこらえた。

テットが女性歌手やモデルに夢中になっている姿は想像できない。なのでいつか・・今夜にでもテットのファイル置き場に美しい女性が満載の雑誌を置いて観察してみるのも面白い。

「お前、ガキのようなことをしたらただじゃ置かないからな。あの  
闘技場に放り込んでやる」

テットはクリスが何を考えたの想像がついたらしい。

「え、なんで俺があの競技場のことを考えたのか解ったんだ? すごいよなこの国は何処へ行つてもロックイーゼンの話をすれば友達になれる。俺らの国にも競技場が一個欲しいよな」と誤魔化す。

テットは無駄に勘が鋭い。

実際にロックイーゼンと言う競技が国にあればと思う  
世間からは軍事大国との評があるガイナスは軍備に関してはまつた  
く諸国と引けはとらない。

というのも国民のから搾り取つた税金を全て軍備に当ててている現実  
がある。

ガイナス民は大虐殺の記憶を忘れずガイナスに生まれたからには自分  
の身は自分で守り小さな力でも一つ以上ならば兵士一人分の働き  
をする・・がスローガンで

歩き始めた赤ん坊から来るべき口を想定して身体を鍛えるのである。  
一年の半分は働き後の半分はスポーツにかこつけて軍事訓練を行な  
うのがガイナス流だ。

武道は必須、幼い子供達が集められた保育機関では敵の襲撃にたし  
ての行動規範が叩き込まれる。

幼い子供にまで隊列を組み移動する習慣を教え込むガイナスは異常  
だと思うが歴史から学び教訓とし実践して続いているのはよいこと  
だとクリスは思う。

レイステン市の通りを歩く若者見るたび

クリスが彼らを頼りないと感じるのはガイナス国の実情を知つてい

るからである。

それに絶対の自信を持つてガイナースの国民のほうが運動能力が勝つているしもつと面白い盛り上がりのレースが楽しめるのではないかと思つてしまつ。

## ミリーの企み

ダンジエルマイアはおつとりして勝気な性格だが、失敗したことは教訓としてしつかりと分析し同じ轍を踏まないよう回避する努力も惜しまない。

試合が終わればＴＶに放送されなかつた映像を呼び出し繰り返し気になる動きチェックする。

特に気に入っているのはアネルの映像。

マイナーの理想とする身体の使い方がそこにある。

状況に応じて走り飛び跳ねる。気負いもなく当然のように着地し優雅にしなやかに目標物に到着する。

障害物との間には見えない空気の層が一定の距離で保たれる。

ミーティングルームのフロアーには席を一つ開けてミルレンブランドが座っている。

ミリーも研究熱心だとチラリと見えた映像を見てマイナーは思う。

が、ミリーが熱心に見ているのは同じ映像でも個々の選手のくせ。ジルは踏み切りのときに腕が開くこれは使えそうだ。

ミリーマキは大柄な割には小回りが利くがその身体の大きさを使いつれていないように見える・他他の選手との接触を嫌っているのかも・・それって使える?

ラッシュは落丁の時に大げさに手を回しそぎる。たぶんこれはＴＶを意識してのこと。

ラッシュと同じに飛ぶとミリーへ注目度は低いかも、いや使える。考えを変えればいい。彼のそばで無駄に動かすに居れば勝手にカメラが激しい動きの選手を写す。OK。

映像を見ながらカメラの位置を調べるのが目的だったが今では仲間

を自分のために利用できないか研究中である。

食事が終わると皆選手はお気に入りのトレーナーの元へ行つたり好きな相手とラウンジでおしゃべりを楽しんだりと自由な時間を過ごす。

フティーフは日頃から優しい言葉をかけてくれるステイーブと他の選手も交えて他愛も無い話の中に居る。

話題は地方の選手の生活と都市部のギャップ。

「雲が下に見えるって? 信じられないよ四日もかかるのかい君の故郷には」

「違うわバッファローまでよ。またそこから歩くの。そんなに驚かなくてもいいわあなたをそこへ連れて行こうなんて思わないから。もう帰らないのよ誰も居ないの。皆居なくなつたのよ

みんなの驚きにフティーフはびびる、特にステイーブは驚いている。

「やうかやうだよね山暮らしは不便だものな  
と、暮らしたことは無いが言つてみる。

「そんな高地でトレーニングできたらいいだろ? な  
高地トレーニングは筋肉も含めて感覚の全てを研ぎ澄ましてくれや  
うだ。

「五千メートルクラスの山の上だぜ。やつこだらつ。酸素が五分の  
一か? 倒れるなこりや」  
行つた事も無い山を想像している。

雑誌を読んでいたマイリーが笑う。

「あのな酸素濃度は標高五千では半分かな。違つのは気圧。酸素の  
摂取量で高山病になるんだ」

ステイーブが聞く。

「アネルはならないんだろう?」

そんなところに住んでいたのなら高山病などなるわけが無い。

「解らないわそれって下りてもなるの?」

山を離れて数年経つ今は心も身体も街に慣れ親しんでいると感じている。

誰にでもワインクする」コーヌがアネルとステイーブにもワインクしてちょっかいをかける。

「高地で育つてるつて事は順応したことだからアネルはまったく問題ないね」

アネルも笑顔で答える。

コーヌのワインクにやきもちを焼いたヴィセンヌが大きな声で「コーヌのファッションセンスにいやもんをつけて騒ぎ始める」と、

かねてから考えていた言葉を小声でアネルはステイーブに囁いた。

「ね、今週末最後のプラネタリウムに行かない?」

プラネタリウムは友達同士で行くのも良いがカップルで行くともつと親密になれる。

「あ、いいよ」

一拍置いてよい返事が返ってきた。

その小さな間が気になる。

「誰かと行く予定があつた?」

振られるのは早いほうが多い。

「無いよ」

即答での返事にこいつと笑うアネル。

「それじゃ待ち合わせ場所は星の王子様で  
プラネタリウムの前の彫像である。

「楽しみだね」と、スティーブ。

「ええ」

嬉しくなつてアネルが答えるとアネルの笑顔に気がついたリーフが  
やっかんで口を挟んできた。

「楽しそうな相談だね。で、どんな計画？休みにどこかのチームと  
合流して特訓をするんだろう？僕もその話聞いたんだ乗ってくれ  
よ」

ずっと気になつていたからひそひそ話しあげの話題だと思つてい  
る。

「おい、そんな計画何処で立ち上がつたんだ？」

と「ヌース。

「この間話が出たんだ。スパでゆっくりしようかつて、そうしたら  
話しが進んじやつて候補がロックライマーの聖地バルローとか厳  
しい場所ばかり皆言づからまともならなくてさ。決まった訳じゃない  
のさ」

とマイリー。

「決まつたら連絡入れてくれ。あつと話が流れても連絡をくれ。頼  
むぜ」とリーフ。

話の関係者を見つけて一安心する。

ミーティングルームの前ではミリーが通りがかりのアレックスに声をかけられている。

アレックスは口数は少ないが芯のしっかりした女性である。

「ミリー、あなたに一言言つておきたい」とがあるの

「ハイ。どうしたの」

いつも笑顔が少ないわねと微笑んでみせる。

「マークにちよつかい出すのは止めてね。迷惑だから、彼が自分の口で言えないから私が変わりに言つわ」

アレックスはミリーが自分の魅力を振りまいてあつちこつちと選手の気持ちを乱しているのを知っている。

「アラ、あなた達公認なんですもの心配はいらないわ  
それにマークになんて興味ないの・・とまでは言わない本命はあなたよアレックス、あなたの心をかき乱したいの・・とにかくり笑う。  
一見冷静沈着に見えるアレックスを精神的に追いつめるにはからめ手が必要とばかりに  
みんなの前でマークに近寄つている。

マークとミリーの仲の良い光景が何度も見かけられると噂が立つ、そこがミリーの狙い目。

これで来シーズンフィールドに出たときアレックスの見ていく前で小声でマークに話しかければOK。

「外の彼氏が居るんでしょう。寂しいのは解るけど皆の迷惑も考えてね」

ミリーが原因で喧嘩別れしたカップルの噂を聞いている。

「別れたの」

としんみりしてミリーは言う。

ミリーと整形外科医の関係は続いているが表向きは別れた事になつていて。観察委員会からのイエローカードが彼に送られてきた。（赤いカードは家宅捜査が入る）それも想定内の計画。ミリーの意外な返事に表情を少し和らげ同情心を示してアレックスは去つた。

整形外科医の通帳残高がどれだけ増えたかミリーにはわからないが彼の計画通りに進んでいるから相当な大金を一人は手に入れている。

## ダンジェルマイア

「どうしたの元気がないわね」

マイアーがタンクトップ姿で話しかける。

どんなに暑くても首まで有る薄手のインナーを一枚必ず身につけているが

今日はちょっと事情が違う。

ロッククイーゼンの試合が終り選手達は暇になるどころかしっかりと個人強化日程が組まれて

好む好まざるを無視してトレーナーの指示を受けなければならぬ。ラティーフはマイアーと同じトレーナーになったのはよいがトレーナーは器具を使ったトレーニングをメニューのほとんどに入れて非凡なアネルにとつては辛い。

「そんなことないわとつても元気よ」無理して笑顔を作る。

バーベルを上げるの嫌いだけどバーベルはステイーブを盗つたりしない。

「聞いたわよ。プラネタリウムの約束すっぽかされたんですって」

マイアーは上腕三等筋を鍛えている

約束を反故にされる・・・とは当人とつては辛いことだが他人から見れば興味の対称になる。

台上に片手を置き視線を一定にして鍛えている筋肉を意識しダンベルを挙げて下げる繰り返す。

「それはいいの」

トレーナーのクルールが正しく動作を繰り返しているかチェックしながら運動器具の間を歩いている。

「良くないわよ先に約束したのは」  
「」  
「クルールの姿が器具のシルエットの中に隠れる。息を吐きながら話す。

「悪いって謝っていたわ、だからのそのことはもういいの」  
「」  
「アネルは手を止めて床の汙染みを見つめた。

「じゃなんでそんなに落ち込んでいるの？」  
「」  
「自然と言葉に力が入る。

「私って変？」  
「」  
「と、唐突に聞く。

「何がよ、何を言られたのよ言って」とダンベルを持つ手をかえる。

「うん・・・

トレーナーのみ回りを気にしていないアネルは曲げた腕をだらりと伸ばし答える。

「あのね、ステイーブがごめんって謝ったから、許してあげるから結婚してって言つたの。そしたら君は頭が変だつて。半分冗談だつたけど半分本気だったのステイーブだつたら優しくて素敵だからいいなつて。そのときの彼の目は・・まったくの他人を見る目つきだったわ。なぜあんなことを言つたのかしら」と夢でも見ていたような口調である。

「ステイーブがあなたとの距離を縮めたからよ」  
「」  
「プラネタリウムと聞いてテートの申し込みだと気がつかなかつたと

は言わせない。

アンエルに興味も無いくせに「データーの約束までしてすっぽかし笑い者にしたスティーブに無性にマイラーは腹が立つ。

「私に話して気持ちが少しほは收まるかしら。私でよければ食後にでもお部屋で聞きたいわ」

勝気なマイラーはこの施設の中では唯一の友人だと思つてゐるアンエルが傷つき落ち込んでいるの見ていられない。

「そんな・・そうね聞いてもらえると気持ちが楽になるかも」

マイラーの申し出は嬉しかつた。

選手は越えられない壁にぶち当たると心理療法士のドアを叩く。

トレーニングルームから出ると別メニューになっていたミリーにばつたり出会つた。

ミリーはこれから自主トレで運動器具を使ってトレーニングを始めつむりであるおまけに筋肉至上主義のクルールはミリーを気にいつて熱心にアドヴァイスをくれるのだ。

「あら残らないの。時間外のほうが特別な話が聞けるわよ」とアンエルマイラーのどちらにとも取れる形で話しかける。

「あたし達の身体には十分な練習だつたわ。又後でねミリー」

近寄りがたい美しい顔をでミリーを見下してマイラーが笑う。いつたい何組みのカツプルを別れさせれば気が済むの・・とマイラーの目が問いかかる。

ミリーはこの挑戦的なマイラーが大嫌いだ。

なんと言つても神々しいばかりに美しいなんてミリーには許せない。

今もマイラーに見据えられて軽口の一つも叩き返せなかつた。

この世で殺したいほど憎たらしい人間が居るとすれば後姿のダンジ

エルマイアー。

「アネルまだ落ち込んでいるのね。悪い事をしたわ」

今回は故意に仕掛けたつもりはなかつた。

「何をしたんだい？」

クルールが頭板状筋から頭長筋のはり具合を見ている。

「こういうのをなんて言うのかしら早く言えば横取りかな、そんな気はなかつたのに。悪いのは気持ちが変わつたステイーブなのに」「三角関係かい。良くあることさ」

「ぜりんせん、違うわ。だつて私スティーブが好きじゃないもの」マイナーの彼氏だつたら落としがいもあるが偶然そばにいたステイーブを最後だと言うプラネタリウムに誘つた、時間はラティーフとの約束よりも早い時間に。

待ち合わせ場所に少し早めに着ていたラティーフがミラーとスティーブが仲良くなってきた所を見てしまつた。

「横突間筋が弱いな。多裂筋もだな。持久力と平行してこれは鍛えるべきだな」

「それって必要事項に書いておくべきことかしら」

「いや特別弱いわけじやない、背骨は頸神経、胸神経、脊髄神経が集まつている場所だ鍛えて置いて損はない」

「そうね」

クルールは真っ直ぐに通つた背骨を守るように

背骨よりも四センチは高い美しい盛り上がりの腸肋筋を撫でている。

「今日来ていた人の中で誰が一番素晴らしい筋肉だつた？」

毎回思うがこんなに魅力的な女性がそばに居るのにまったく顔も見ないで会話を続ける男性も珍しい。

「ダメなのはいたけどね。そもそもここに来るのはイマイチの筋肉の奴が来るんだ。ン～一人だけ細胞レベルで調べたい人間が居た

けどね。合わないんだよね筋力と跳躍力やら・・僕の集めた数値の範囲に入らない筋肉があるんだね」

「じゃ、一番良くない筋肉な人って誰よ」

「わずかな数値の差だよ。突出していおるわけじゃないんだ・・」

そういうながらクルールは片手分の名前を上げて見せた。

## ラウンジ

「ラウンジでは一冊の雑誌を前に感極まつた声やため息が漏れている。ドアを蹴飛ばしてPC片手にノートンが飛び込んで来て雑誌の横に並べる。

雑誌の掲載は二十位までだがPC画面には選手全員の順位がある。

「明日の朝発売なんだろう? 本当の順位かよ」と嬉しそうな声でクロング。

「へつへつへつ。残念だなこのレイステンでは明日の朝だがトマホーク市ではもう発売されているんだ」

PC画面の順位の雑誌は手元には無い。トマホーク限定の雑誌らしい。

「わかった。日付変更線だな」

「そういうこと。トマホーク市の奴の書き込みを」ノートンがPCの前から押しのけられ次から次にその場に居た人間が画面を覗いては番号を確かめる。

「へー、以外だな・・トップテンまでは納得できるけど二十位までは何処で選択したのかわからないぞ」

中央テーブルに集まつた三十人が雑誌とPC画面を見終わると全体に騒がしい華やいだ雰囲気になる。

「誰を見ているんだ」

指先にある名前を見て、

「うーん、彼か」

名前はナルバントグル。

「噂じや、今度の美しい筋肉の一位に選ばれるとか言つていたな」  
雑誌であろうと自分の名前が載るのは気分がよい。

「クルール情報か？あいつあの雑誌の監修をしているらしいな」  
筋肉と聞いたらクルールと条件反射のように名前が出る。

「俺よクルールのあの田つきが嫌なんだよ人間としてみてない気が  
してさ」

皆が見終わつて放り出された雑誌をめぐりながらもう一度確かめる。  
ある・俺の名前だ。

「いつか筋肉を取り出して顕微鏡で見られるかもしねないぞ」  
しかめつ面をしながらこいつ。隣の女性がうなずく。ありえる話だと。

「マジ、似たような事言つてた」

真向かいの男性は何度もミリーとクルールの話をそばで聞いている。

「実際に研究施設じやアスリートに電極貼り付けて走らせたり飛ば  
せたりして調べているんだろ？」

半分笑いながら憶測で言う。雑誌の受け売りだ。

真ん中にいた男が立つて左肩を少し後ろにずらし目を右斜めにやつ  
てポーズをとる。

「君は半腱様筋が強いね。しかしそれを活かしきれていないようだ」

中央テーブルの周りだけでなく窓際の席に座っている人間にもその  
真似は伝わり  
ラウンジ全体がどつと笑う。

「おかっしい・似てるよ。悪いがクルールだけが筋肉狂だと思つなよ。何とその雑誌の購買数たるや  
スポーツ誌のトップをいつてるんだぜ。だからよ。この二十位までの選手層にはマッスルマニアの票が集まつてないと考えていい」  
涙眼になりながら言つ。

真似をした男に親指を立てて賞賛する。ナイス。

「え！ 一位と十一位が五十万票差つてことは・・ほつ！ ファンの五人に一人は筋肉フェチ？ だな」

各国の票だけどこのレイステン市に居るマッスル狂の数を想像して顔をしかめる。

「そつなるね」くつくつくつくつと真似がつぼにはまつて笑が止まらない。

「まともなファンが選ばれることを願つて乾杯！」

お調子者が水の入ったグラスを高々と上げる。

ノリのよい十人が中央テーブルを囲んで立ち上がり乾杯を叫ぶ。

「嫌だクルールと同じレベルのファンが来るの？」  
と女子代表のミリーの黄色い声。

「最悪」

なぜか隣に居たミコーマキも同調する。

「いないとは限らないな、以前にも変質狂といつたら怒られるが、何人か問題を起したファンはいるがね」  
変質狂に当たつたことは無いが過去事例で騒動が起きて禁止規約が増えたことは確かである。

「運だよ。よいファンかどうかはわからないが有名税だと思つて一日楽しく過ごしててくれたまえ」

二十一位だった男はしたり顔で眞面目に思案している顔の隣の男を見る。

「私その手のファンレターたくさん貰つてたから確率高いわね」とはミリー。

「さうとも言えないね。ここを読めよ。十位以下は皆素晴らしい肉体の持ち主ばかりである。ファンはこの素晴らしい身体を持った選手達の活躍を願つて票を入れたようだ、とある。」

「それじゃクルールレベルは十位以下に集まっているの」魅力的な笑顔を隣の男性に向ける。

「この解説だとそうなるね」

安心して十以下の選手の名前を見る、一人またたく関係無さそうな選手も居るがこの場合どうでもよい。

話の流れを長椅子の片隅で聞いていたラティーフは青ざめた。  
十八位に自分の名前がある。

「ねえ、そんなファンと一緒に過ごせないわ」

会話は顔を見てするもので腕や足、背中を向けてなど出来ない。

「大丈夫よ選ばれた二十人には指導員がついてレクチャーしてくれるのでよ。解らないことがあつたら聞いて一度感謝祭には出ているから

小声でトマイアードがうなづく。

テーブルを挟んで正面にはミリーがすねた口調で騒ぐと

取り巻きの男性陣はその笑顔に張り切つて我先にと答えていいる様は

滑稽である。

## ファンとの集い

昨夜の雨でレイステン市の空は洗い流されて  
乱立するビル群に囲まれた海も白波が立ち対岸の港の船が良く見える。

今田も巨大な娯楽施設は花火を打ち上げて開園を宣言する。

青空が広がる眺めの良いホテルの一室では気分の良い朝が訪れていた。

ルーサーは浮き浮きした気分で何度もタイを閉めなおし外してはスカーフに替えたり、  
ポケットチーフの色を上着と合わせて悩んだりと鏡の前で忙しい。  
腕時計を気にしてもう一度全身をチェックすると駆け出すようにして部屋を出て行つた。

バタンと締まつた扉を一人の男が見ている。

一人は手持ち無沙汰のクリス。

クリスが書棚からファイルを取り出してパラパラとめぐり始めると、

「何か？人員配置に問題でもあるのか？」と温つた声でテット。

ルーサーの去つたクローゼットの收まりきれない服を無理やり戸を押してクリスの隣にやってきた。

クリスの出したのは巨大娯楽施設の平面図、最後のページはたくさんのアトラクションの入り口にチェックが入つていて、

今日のガードは八人を配置してある。

「別に、車を使わないようだから俺も行ってみようかと思つているだけだ」

クリスは主に車の運転を担当している。

昨日レイステンまで走ってきて今日はホテルの室内勤務だ。

「珍しいな。あんな機械のおもちゃなんぞ乗りたくないって言つていたじゃないか。まあ国に帰つたら乗れないからな。乗つておくれも話しが種にはなる」

眼下の公園の向こう側にカラフルな色調の建物がメルヘンチックに並んでいる。

お前も行つてもいいぞちょっとの間田をつぶつてやるとテットがウインクをする。

テットのウインクを受けて肩をすくめる。  
「見たいのはルーサーの顔だ。あいつどんな顔をしてスターと会つんだろう?」

四十に届くところのに大型遊園地になどクリスは興味は無い。

「なんだそんなことか。いい年してあんなものに傾倒するとはな」  
毒されている・・とテットは顔をしかめてみせる。

「子供らしくて可愛いじゃないか。賢いだけじゃなくて感動する心も持つてんのだぜ」

テットが書き込んだメモを読みこれらのアトラクションに長時間立つて並ぶだろうかと首を傾げる。

「感動?あいつは脳みその使いすぎでおかしくなったんだ。それと

も馬鹿を演じてゐるだけかもしれない、賢い奴は何を考えているのか解らないからな」

テットの前には国から送られてきた書類、大臣クラスの要人のスケジュールをルーサーの予定表に書き込む。

「テットはルーサーに厳しすぎるぞ・・」

クリスがファイルを閉じてルーサーを待ち伏せできる場所を頭に叩き込むとテット的好奇に満ちた目を無視して目立たない服装に着替えた。

といつても娯楽施設の中でグレーのスーツやサングラスで動き回るわけではない。

大きな花柄の蛍光色のシャツと水色のハーフパンツで決めて、おどけながら部屋を出て行くとテットもつられて笑顔になる。

大感謝祭と銘打った割には観客は無し。ルーサーが常宿にしているホテルから離れて三軒目のホテル、オーケーシュストグループ出資の派手で豪華なつくりのスカイラウンジが指定された場所である。

当曰、ロックイーゼンの選手一人に一人の記者が付き添い待ち合わせの場所に係員に誘導されたロックイーゼンファンが当選したチケットを手に緊張しながらやつてくるとホテルのレストランの前で選手と握手して記念撮影。撮影が終わると記者は一二三質問をして次の選手のもとへ。

係員の説明を受けていたファンはレストランに入り憧れのスターと昼食。

その後は巨大な娯楽施設で半日、スターとデートが出来るという企画である。

ルーサーの順番は最後、緊張の面持ちでレストランの入り口を見つめて居る。

たまたま入れたあの一枚の紙切れが誰かの手の中に納まりルーサーが選ばれている。

感謝祭の企画は雑誌とのタイアップでロックイーゼンのピックアップされたスター特集号に掲載される。

もちろん選手達は競技中のように顔にペイントは無い。

普段の顔で現われるが掲載される顔にはしっかりとペイントの模様がいかにもペイントを付けたままファンとデートをしたかのように加工される。

選ばれたファンもこのデートの応募条件の中に守秘義務の誓約書にサインしてこの場所に来ている。

選手が遠征に行く道中着ているスーツに身を包んだアネルが係員に案内されて入つてくると

窓際の席から素早くルーサーは立ち上がり、ロックイーゼンのスター・アネルの元へ近づいていった。

ルーサーを探していた係員は極上の微笑を浮かべ会釈をして一步下がる。

ロックイーゼンランキンギング読者が選んだ上位二十人は特別室でファンとの接し方をレクチャーされ、アネルは教えられた言葉を百回練習し口から出す事が出来た。出だしは上々である。  
「あなたが抽選でめでたく当たられた方ですか。おめでとうござります。私がベルデのアネルです。競技用のお化粧をしていないのでがっかりされたかもしれませんが」

ここにこりと笑う。

「今日は一日一緒に過ごせることをうれしく思います」と握手のつもりで手を差し出す。

「僕はアルヴァー・ルーサー・フォルスストロム。ルーサーと呼んでください。ミズ・アンエル、食事はお済みですかよろしければ少しおしゃべりをしながら軽食でも如何ですか」

アンエルの後からすぐに来た記者が一人の前に回りこみスマイルといつて一枚写真を撮つて消えた。

たかれたフラッシュの光が目に入り何処を見てもアンエルははつきりしない。

確かに左側に立つていた・・左に頭を傾けて笑顔を作る。ファンをがつかりさせてはいけないとの配慮だ。

「喜んで。朝から緊張していく何も食べてませんの。去年はベスト選手に選ばれなかつたので、始めての経験で・・」

自然に、フレンドリーに、気さくな印象をもたれるよう」・・

記者を避けて右側にたつたルーサーではなくボーアに差し伸べたアンエルの手がボーアの服の裾を掴みさりげなく払われる。

右側から軽くアンエルの腕を取り自分の腕に絡ませる。アンエルの腕に羽根が生えて飛んでしまいそうできつく握り締めたい衝動をルーサーは押さえ込む。

「座つてから話の続きを聞きましょうか」

ルーサーに促されて改めて違う人間に愛想を振りまいっていたことに気がついた。

「そうですわね」顔から火が出そうである。

ルーサーはアンエルの腕を軽く握り窓際の席へ。

嫌だわ変に思われなかつたかしら・・とパンツスースと同じ藤色のパンプスをテーブルの脚に打ち付ける。

アンエルが椅子に座ると同時にルーサーが顔を近づけて、

「大丈夫ですか？」と尋ねる。

テーブルの足が折れそうな大きな音がしたのだ。

「ええ」何が大丈夫なのかわからないまま返事をする。

当たつたパンプスの先はへこんでいるが足先は衝撃だけで痛くもなんとも無い。

隣のテーブルの客が一人を見ているのでアンエルはこの一人のうちどちらかが大きな音を立てたと思っている。

まず両手を膝の上においてナップキンを広げる・・膝から挙げた手がテーブルの端に引っかかる。

マイナーの言つた様に振舞つてゐるのに、流れるように・・できない。

糸つきのマリオネットのように小首を傾げて窓の外の景色を楽しむ風を装う。

おもむろにファンの顔を見て微笑む。

と・・ルーサーはメニューを広げてアンエルを見ていなかつた。

アンエルは緊張しすぎて何を食べたいか聞かれて笑顔を作りすぎて答えられない。

ルーサーはメニューを見ながら何処を見ているか解らないアンエルの瞳を覗き込み暖かな色合いに満足している。

メニューを閉じると給仕係が丁寧にオーダーを聞き取つて去つた。

柔らかい日差しの中、ガラス越しに見える青い空のように曇りの無い笑顔がルーサーをうつとりさせる。

天氣に始まつて料理の好き嫌い、アネルの近況ととりとめの無い話が一人の間で交わされ  
小一時間をレストランで過ごしファン待望の娯楽施設でのデートである。

記者はとっくにトップのスター選手を追いかけてレストランにいなかつたし

レストランの一部の従業員以外はイベントとして使われたこの場所にはロックイーゼンの選手は一人残らず出払ってしまい、いつものレストランに戻り仕事を始めている。

窓際の二人が席を立つてもアネルに注意を払う客は居ない。  
暇な給仕係がルーサーの美貌をさりげなく見て楽しんでいる。

## ファンとの集いの後

ドアをノックする音が聞こえる。

ベッドに突つ伏して持ち上がらない頭でラティーフは考えた。  
マイラーが訪ねてきたと解つたが体が鉛のように重くて動けない。  
動きたくない。

「いいわよ」

とアネルの返事が聞こえたかは定かではないが  
いつもと変わらないマイラーがドアから顔を覗かせる。

「どうしたの？わかつたわ！ファンの近親者がいたのね当選を自慢  
するとな。親や兄弟従兄弟やうんと引き連れてくるのよ。ちゃんと  
書類で一人つて書いてあるのにアトラクションの前で待機させてる  
んだからガードの人があ大変みたい。人ごみの中を逃げ回るのって嫌  
ね。レースのほうがずっと楽だわ。ねえ疲れているところ申し訳な  
いんだけれど、一つ聞いてもいいかな」

初めてファンと接したのアネルに同情しながらも、思いついた動きがあつて是非ともアネルの意見が聞きたいマイラーである。

マイラーの元気な声に顔を上げられずに、

「一人」とだけ答える。

高い天井を見上げてうつすらと残る手形を見る。

「部屋じややつぱりダメよね。スポットがあると緊張感に欠けるよ  
ね。何？」

マイラーがベッドで跳ねてつけた跡である。

重たい瞼を開けて、

「ファンの方は一人しかいなかつたの」「何とか頭を持ち上げよう」と試みる。

目を閉じてやるだけのことはやつたと心の中で言ひ。皆のようにはうまく出来なかつたけど。

受け答えは丁寧にはつきりと、答えられないことは笑つて誤魔化し、

思想的なことや政治的なことは口にしなかつた。

他の選手の身体の調子のことも口にしなかつたと思う。

あと何を注意されていたつけ・・。

大事なファンは子供ではなく青年だった。ここにいるマイラーとならお似合いの一対になりそうな人・・  
とにかくやり終えた。

見知らぬ人と半日一緒に過ごすのがこんなにも疲れる事なのか、  
まだ身体中が熱を持つたように熱い。

「うつそー。それでその疲れよう? どうしたの? 私とミリーが教えたことが間違いだつたの。一人だけ信じられないわ。そんなに気を使わせる人だつたの。リラックスして行きなさいって最後に言ったでしよう。ほんともうミリーの脅かしは効き過ぎよね。ガードの人がいるからさらわれたりしないのに、あの遊技場の警備員が厳戒態勢を強いているのよ。どこもかしこもカメラのリレーで追いかけられているわ。それにあなたが居なくなつたら警備会社の面目丸つぶれよ。そんなに緊張すること無かつたのにー」

コロコロと笑い転げるマイラーにつられて強張つた顔に引きつった笑顔を作る。

「そりなんだけど。パンプスが・・合わなかつたのかも。歩くと何か変なのよね」

靴のせいにしてみたけれどラティーフには疲れの原因がルーサーの優雅なしぐさであつたと解つてゐる。

最初一人並んで歩く時に僅かだが後ろを歩くので

背筋フェチとか下腿三頭筋フェチがラティーフの頭に浮かび選んだ服がパンツスーツで顔以外は肌の露出が極めて少なくファンをがっかりさせたと申し訳なく思つてゐる。

少しげらいはファン心理を組んで腕や足の筋肉ぐらい見せて満足させなくちゃと。

暫らくするとミニーの言ひ選手の身体の筋肉に触りたいだけの変質狂ではないらしいとわかつた。

が・・椅子から立ち上がるにも手を添えられる。

ポップコーンを食べるにも、コーンのバケットに趣味の良いハンカチがお手拭に登場。

階段を上garるにもルーサーの手が腰にさりげなく回り補助をする。階段が終わると添えられた手はすっと外される。

そんなエスコートなどされたことの無いラティーフは

歩き出しの最初の一歩から調子がずれてギクシャクして一日を終えている。

「原因は靴ね。大量生産品だからそれで半日動き回るのは辛いわね。ねつ見てるだけでいいの。お願ひ」

広大な施設の中をファンの子供の手を引いて子供の親や親戚から逃げて楽しいアトラクションで子供のご機嫌伺い夕食まで入れて七時間も走り回つていたとは思えないくらい明るい笑顔のマイアードある。

「少し元気になつたわ。行きましょ」  
アネルはどこもかしこも顔までも要らぬ緊張で強張つて重い。

## 半日テート・・後

ロッククイーゼンファン感謝祭の特集記事が載つたのは一ヶ月後  
一番人気のスター選手が表紙を飾り美しく強い競技者達と見出しが  
続き

ページをめくればスター選手の競技中の美しいアングルでとらえた  
ドアップのピンナップポスター。

改めて知る必要もないのに選手名とロッククイーゼンに入る前の競技  
暦が傍らに表示してある。

ルーサーは窓際の席に立つたままアネルと半日一緒にだつた遊戯施設  
を背に雑誌を開いている。

「ラティーフ・セヴェール・・ラティーフ、いい名前だ」「  
とアネルの本名を口する。二人だけに共通する秘密の名前のように  
ルーサーには響く。

少し離れて暇なクリスがルーサーと同じ雑誌を読んでいる。  
珍しく本を買って来いといったルーサーがどの記事を読むのか興味  
津々で

同じものを一冊買ってカウンターの影で広げて見ている。

ルーサーの見ているページをクリスは隅から隅まで目を通したがル  
ーサーがつぶやいた名前は載っていない。

テットがルーサーの飲み物をつくりながらクリスの雑誌をちらちら  
一緒に見ている。

「なあ、ラティーフ・セヴェールって何処に載つている?」とクリ  
ス。

「ん？ 何でそんな名前をお前が気にする」

妙にテットの言い回しが気になりクリスがテットの田を覗き込む、

テットは小さく笑いながら、あごで雑誌を示した。

「反抗期少年に頼まれたんだ。今朝教えたばかりだ。で、お前の好みの女は？ 国に帰れば賭け事なんぞ出来ないからな今のうちに頭を堕落させておけ」

テットはロックライゼン警備会社からコネを使ってアネルの本名を調べ上げている。

クリスの開けたページにはミルレンブラントが微笑んでいる。

テットの調べた女の本名が「ケティッシュュな女だと知ると

「うーん・・・俺の好みじゃないな」と

ページをめぐり最後のページで地味な紹介で終わっているアネルを見て

「俺なら顔は良くわからんが雰囲氣でこの選手だな」とつぶやきすぐにもとのページに。

アネルを紹介したページには「りの悪いルーサーとアネルも小さく掲載されているのには気がつかない」。

テットがお茶を出して戻ってきた。

「個性的で可愛いな。このミリイって選手は地方で人気があるんだ。ちょっと顔の作りがアンバランスなのが魅力なんだそうな」

「そうなのか。じゃこの選手は」

と、開けたページには口サのレフティハルメスとアマリジヨのダン

ジエルマイアー。

「クーレビューティと・・女神様だ、この完璧な美しさ。この世に女神は光臨してきたようだな」

クリスに異論は無いがあまりにも一人は美しすぎて現実からかけ離れすぎている。

付箋代わりに左手を挟んでいたページをめくろうと機会を窺ついたが

テットがキッチンを離れる前にクリスは仕事に出かける時間になる。車のハンドルを握るとクリスは雑誌のことなどすぐに忘れてしまった。

クリスの雑誌は応接間のルーサーの雑誌と一緒にテットにダスターに投げ込まれた。

「同じものを買わなくともいいだろ?」。まったく何を考えているのやら

ため息をついたテットの心も、終わりの無い流浪の日々に閉塞感を感じ、

言わなくても良い批判的な言葉が口に出る。

広いホテルの部屋の窓から広がる空の向こうには懐かしい顔が待っている。ルーサーとのホテル暮らしぶりは何年たつても性に合わず、不便で退屈な国の生活に戻りたい気持ちは高まっている。

テットがプラテアドの故郷を思い出すと必ずセットで出してくれるのはサガモア王。

毎回王の使いがガイナスの要人の細かいスケジュールを送つてき、数学、統計学、天文学、社会学、哲学、心理学、の高名な教授との授業を減らし、要人らの下調べした情報も取り入れて会見の順位を

つけ、ルーサーのスケジュール調整を始める。

この下準備をしておけばルーサーが帰郷しなんらかの要職についた時スマーズに仕事がやりやすいとサガモア王は思つてゐるらしい。

テツトの見解だとサガモア王の権力は効力を失つてゐるようと思える。所有している土地は七千メートル級の岩だらけの山とプラテアド半島の一角だけである。

他の一族のように大きな産業施設を持つていないと言つことは金を産まない鶏を飼つてゐるようなものだ。

王のバツクには氣炎を吐くバラディール将軍がいると聞いてゐるが將軍は政治の表舞台には立たない。

ルーサーのバツクグラウンドを固めるためにはモラドのバラディール将軍が一番なのがこれはルーサーが嫌つていて話がまとまらないでいる。

他の半島の一族は古い産業を維持するのが精一杯で顔も見たことのないルーサーになど援助など出来ないのが現状である。

ルーサーが幼かつた頃ガイネスにはプラテアドの人間が二代続けて王座に座るのを喜ばない人間が大勢居たがここ数年事情は大きく変わつてゐる。

七つの半島の長老はガイネスという枠組みから外れて独自の権力をを持つことを望み始め

ガイネスが多くは七つ、少なくとも三つに分かれるという選択肢が囁かれる中にある。

ガイネスが分裂すればテツト等の帰る場所はなくなる。

昨今金銭を目的にした誘拐も毒殺者や暗殺者という刺客もルーサーが大人になると激減し、

今度は変質者、狂信者がルーサーの周りをうろつくようになり広範囲に警護が必要になつてもいるが現代社会のよさは何処にでもカメ

ラが設置してありその映像の死角を補えば少人数で警護が出来るようになつてゐる。

刺客に怯える日々は消えたが今度は国が分裂する不安に苛まれテットは沈み込む日が多くなつてゐる。

## フォークステット

格式あるホテルの深夜のエントランス。

昼間はソファーに座りくつろぐ客も多いが、客の間をきびきびと働く従業員の姿も無く、照明を落とし主な通路だけにスポットをあて明るくしている。

ドアボーイが礼儀正しく深夜の客を迎える、磨きぬかれた床をこつこつとヒールの音を鳴らして女性が一人入ってきた。

若い女性はフロントにも寄らずエレベーターの前に立つた。

フロントのホテルマンが目だけで追つて手元の来訪者欄にチェックを入れる、

指定時間より一時間遅れている。

エレベーターが最上階に止ると待ち構えていた男が女性の前に立つた。

女性が遅れた理由を言い出す前に男は背中を向けて女性の前を歩き出しドアを開けた。

挨拶ぐらいしたつていいのにとむくれながら部屋に入ると部屋の中には夜中なのにお茶の支度が整っている。

「悪いね、こっちへ着たら夜中だつたものでね。明日にはモーニングも食べずに出なきやならないんだ、書類は読ませてもらつたよ学歴は最高だ秘書としては申し分ないね」

部屋には男が一人大きなソファーにゆったりと座り片手で座るよう指示をする。

男の、申し分ないね・・の後は普通褒め言葉が続く。

褒め言葉が出ないということは何か気に入らないことがあるから。

私の何が気に入らないの?止まつた言葉の続きを聞きたい。

「何か問題でも、夜中の勤務が多いとか」と嫌味をちくちく。椅子に深く座りすぎて飲み物に手を出せない。

大体夜の十一時に面接を指定するなど常識では考えられないと不満が心の中で爆発する。

最初は昼間の面接だったのにずれ込んでこの時間帯。遅刻したコレットも悪いが高い給料に引かれて受けに来てしまっている。

コレット的に場所は泊り客の氏素性のしっかりした金持ちしか利用しない

古いホテルが面接会場ということもあって変なことはないと思つて いるが、

乗り気だつた友人は面接時間帯が変わり断念している。

確かに真夜中にお洒落してホテルに入る姿は怪しい夜の女。

しかも相手は精力の有り余つている中年男性が部屋に一人。

絶対に怪しいとドアが閉まつたと同時にバッグの中のスプレー缶を 手の中に隠している。

「夜中には出来るだけ仕事はしないようにしてるよ」と男は嘘をつく。仕事は人が寝静まつた夜が大半だ。

「今は別だけどね」

と笑顔を作る。女性が警戒しているのも承知している。

「身体を動かすことは好きかね」と足を組み替えて聞く。

「夜ですか？」

書類選考はよかつたが面接では黄色信号が灯つたようだとコレットは感じている。

なのでまた似たような言葉を言つ。これで面接はおじやんだ。気の強い女は嫌われる。

「勘違いしないで欲しい。運動だよ何か続けているスポーツとかあるかね僕は社員には率先して勧めているんだ年に四回は大会にも出てる。僕じゃなくて社員に出てもらつてはいる。健康になつて欲しいという思いもあるが運動から何かを学び取つて欲しい」

男は疲れた様子でこめかみを指でぐりぐりやる。

何かやらないと女と一緒にになつて軽口をたたいてしまひやつ。今は偽者社長を演じている。

「それって強制的にやらせるつて事?」

形のよい眉毛が上がる。

ワンマン社長の我が儘な方針に賛同すべきか、コレットは多少は目をつぶることにした。

入社してしまえば断る理由は何とでも作れる。

「僕が社長だからそういうことになる」

テーブルを挟んでコレットの首から肩の肉のつき具合は大した運動歴は無いとテットは見てくる。

「どんな運動をやるの? ジョギング? ウォーキング、山登りとか・・・

と自分にも出来そうな運動を言つてみる。

このくらいなら許容範囲だらう。ただし一年に一度くらいなら。

テットはにっこり笑う、若い女は慎重で疑り深い。

「挑戦しても、もうスポーツが好きでね。苦しみに立ち向かう姿勢つてのは仕事に応用できる」  
愛想笑は得意だ。

じゃ山登りなんかいいわね、

サンディッチと暖かい飲み物に綺麗な景色なんて最高だわと頭の中で描いて見る。

やれそうかも・・ヒコレットが想像しているのがヒコレットには手に取るようになります。

「君みたいな女性はトライアスロンとかカッコイイかもしれないね。僕なら武道をすすめる。武道に興味は無いかな」

思わず本音が出る。

「写真よりもずっと芯があつて勝気な感じがヒコレットは気にいつている。変な時間を指定したこっちも悪いが様子見に来たのだろうが予防線を張つて警戒している様は高感度がぐんぐん上がる。」

「トライアスロン？ 武道」

フンと鼻で笑う、

「『めんなさい運動は嫌いなの』

世の中には運動に向いている人間と不向きな人間の一一種類がいる。ヒコレットは後者で自分には運動など不要だと思つてゐる。

「そつか残念だね、う・・・ん今日の結果は紹介者を通して連絡しよう。それでいいだろ？ 遅くまで付き合わせてすまないね。秘書がいないと色々困ることが多いものでね」

無理強いはすまい。本人からの自發的な衝動で無いと長くは続かないものなのだ。

「ガイの声を聞きたくないの直接知らせてくれるかしら。聞いてもいいかしら私の前に何人面接を受けに来たのかしら」

従兄弟のガイは書類審査で落とされているコレットを面接にまでたどり着かせたらお礼を貰う約束が出来上がっている。仕事が決まれば別代金として請求される。

「君で五人だ九時に空港についてホテルについていたのが十時近かつた。遅くまでつき合わせてすまないね」

五人・・ね、五人のうちひとりが選ばれるか全員駄目かどうでもいいわ私の就職は無さそうだもの・・とさっぱりとコレットは興味を失つた。運動すがらいなら就職出来なくてもよいのである。

「私の携帯電話に直接かけてね」  
ガイには会わなかつたといつておこう、出費は抑えなきや。

「君の父上に知らせなくともいいのかね」  
コレットの父親は市議会員、顔の広さをちょっとだけみせる。  
子供の就職の合否を知りたくない親はない。

「失礼ね二十歳を超えているのよ」  
一人暮らししだつて始めたのよ・・とは見知らぬ人間には言つ必要など無い。

「今日は来てくれてありがとう。外にいる男にホテルのチケットを貰つて帰つてくれ夜遅く出向いてきてくれた迷惑料だ」

コレットがスプレー缶を握り締めながら出て行くとテットは本格的に両手でこめかみを押さえる。

「学問だけの朴念仁」とつぶやく、

「今の女か？そんな風には見えないが」

「レットをエレベータの前まで送り届けてクリスが部屋に入ってきた。

「よつ社長」

「馬鹿言つてんじゃねえ、これで最後だからな」

秘書募集なんぞテットとクリスの猿芝居である。

提案者はクリスだが女つ気の無いルーサーの警護に女性を入れようと容姿端麗文武両道を求めているが思うような人間が集まらず

募集を繰り返すうちホテルに入る女性を見て

毎夜毎夜高級女性をルーサーが買っていると噂になっている。

堅物と思われるよつはましさとクリスは言うが

テットには国に帰るまでの暇つぶしにしか思えない。

## ロックイーゼン

天井から床まである大鏡の前でいつも以上にきちんとテットはタイを結ぶ。

久しぶりに心は浮き立つている。

以前何度も鏡の前で服装をチェックしていたルーサーのことを冷めた目で見たことなど欠片もテットの頭には無い。

一週間前に直接で落とした彼女を駄目もとで食事に誘い、『デートの場所はテットの迷惑とは違っていても問題にならないくらいわくわくしている。』

二十数年ぶりの『デート』である。

新聞を広げながらテットの様子を盗み見しては新聞を立てて顔を突っ込み思い切りクリスは笑う。

じっくり見てている風を装い新聞をテーブルに広げた時には真面目な顔つきに戻す。

一年又一年とセデル国滞在期間を延ばされてテットは疲れ果てている。

四十人の部下を率いて落ち着いた風情を装つてはいても部下がいないところではぶつけられない怒りを汚い言葉を吐くことで解消しているのを何度もクリスは見ている。

テットは女性の話題でくつろぐ所を見たことが無い、誰かに義理立てしているのかと思うがそうでもない。

然らばとクリスは考えた。女性と面と向かって話す機会を作ればいいのだ。

一案を出した結果三十一番田の女をテットは眞にいった。

「やつてみるもんだ・・」と後ろで扉の閉まる音を聞きながらにんまり笑うクリス。

テットは少しでも若く見えるスーツを選んだつもりだが並ぶちょっとイケテない。

コレットとは十五も歳が離れていて少々気後れしているがあいたい気持ちのほうが上回っている。

デートの場所を変えればいいわとの返事は嬉しかったがしゃれたレストランでゆっくり会話を楽しみたいが彼女はロックリーゼン狂。

待ち合わせの場所で落ち合い闘技場へ向かつたはよいが今日はロックリーゼンクラスマッチクースレース。

闘技場に一步入った途端コレットの表情が一変してレースの予想を甲高い声で話し出すには参った。

観客が多くコレットがテットの腕にしがみついていなければ立ち去つてしまいたい。

コレットの指定した番号の席にテットは座るが周囲はコレットも含めて全員総立ち。

「最高！！ありがとう特等席だわ見て十一枚のモニターが全部見えるわ。右下のスタート口はレースが終わると表彰式もやるのー アネル～私がついているわーーあなたなら絶対勝てる～～

テットに抱きついでコレットは説明をしたが観客は[四大画像]に自分の好きなスター選手の顔が映るたび名前を連呼するのでコレットの声は搔き消える。

「う、うるさい！黙れ。彼女の声が聞こえないだろ？ やめろ！耳元で叫ぶな！」

しばしテツトはガイナス国のこともルーサーのことも心配事は頭の中から消えている。

基平サメの口に似た

横に平たいスタート口にスポットライトが当たられるとマイクを持った男が鈴なりの席を見回す。

「さあ今期最後のレースだ皆楽しんでくれ！…」

男の声は明瞭で通りがよい。

「そして――最終選考に選ばれたのは・・・ナランハ3、アスル・セレステ3、アスル・マリノ3、ベルテ3、アスル3、アマリジヨ3、ロサ3、ロホ3――最終日いすれも残つたのはチームの精鋭たちだ！聞いてくれ。この声援を」

男はマイクを高く掲げて会場の声援を待つ。意味の無い返事に男は満足する。

「そして！ゲームをもつと面白くするために各チームの一位も参戦する！彼らだって馬鹿じゃないあの金色に輝く優勝杯を手にする最後のチャンスもあるんだ。今期トップのチームのために動き回るかそれとも自分たち、セカンドの位置を持ち上げるために走るかは

「神のみぞ知る――――――と、一拍置いて長セリフ。

「躍動する鍛えられた身体。飛び散る汗！仕掛けられた罠を突破し水の中に空中に危険を顧みずチームのために飛び込むその勇気！誰

一人欠けること許さないゲーム！ロックイ——ゼン！！さあ号砲の後に選手が飛び出すぜ。期待して良いぜ今夜の月は満月！皆で多いに吼えよう！——まずは選手一人ひとりに俺達の熱い心を送つてやるうじやないか！——

扇動するアナウンサーの反対側から

蝶ネクタイの男が現われてマイク片手に選手を紹介し始めると観客席は総立ちになり自分の顛願の選手の名前を連呼する。

両手を挙げ、選手が顔を見せ声援に答えると闘技場全体が熱気に包まれる。

「上手いなこのセリフを考えたのは誰だ。ケルニ？良いじゃないか。最初のつかみは最高だ」

とオーケシユスト。

スタート口の真上にある部屋で窓を全開にして地鳴りのよくな観客の声を楽しんでいる。

ビルはこの最終戦のために変更したアトラクションの数々が上手く起動するか機器の点滅に気を配る。

製作担当者は予算が足りないと訴えていたがオーナーであるオーケシユストが自分の持っている子会社のスクラップから資材を調達させて出来上がっている。

それに加えて迫力有る映像を撮るために

スカイカメラの台数を増やしホールドや壁にも穴を開けてカメラを埋め込み、

より近くに選手の息使いを感じさせるために落下地点の床にまでもカメラがある。

このレースで何台かのカメラは選手に激突されて使い物にならないだろうとビルは思っているが口には出さない。

カメラとか器具類の損失はすべてＴＶ局持ちだからである。

だが選手の怪我は別だ。

見た目ばかり奇抜に作っても選手に大怪我でも負わせたらと思うと始まつてもいよいよ早く終わってくれと願っている。

嬉しそうに強烈なライトの中浮かび上がる装置を見回しているオーケシユストに比べ

口数が極端に減るビルである。

こつそりビルはドア側に近寄り電気技師を呼び出した。

「ロブ、電源の供給量はまだ余裕はあるか？OK。もうすぐ天井を半分開けるスタートの空砲が聴こえたら明かりを半減してくれ。うん夜間使用のカラーガラスを使おうあれなら光源はあまり要らないだろう。そうだ。うん仕方がないんだ。クレーンを使っての高画質のカメラが増えて。頼むぜ」

観客席を減らしてクレーンを取り付けカメラを乗せたお陰で必要以上に電力の消耗が激しい。

最終戦が日曜日の午後でしかも晴れてよかつたとビルは感謝した。

## レース 1

「いくぜっ！」

今ではチームベルデ3のキャプテンを務めるジリアスクの声に答えて、高さ十五メートルのスタート台から勢いをつけて七人は飛び出して行く。

ナランハ3、アスル・セレステ3、アスル・マリノ3、ベルデ3、アスル3、アマリジヨ3、ロサ3、ロホ3、これに加えてチーム成績一位の同色チームも一緒に出走する。

左右のライトが、スタート地点から飛び出した選手の姿を綺麗に浮かび上がらせると観客席の応援は淵みを増す。

「これをそのまで伝えられないなんて、もったいないよね」とオーケシユスト。

放映される画像を思い描いて酔っている。

選手がばらばらと水面に吸い込まれ、設置された八つのスクリーンに観客の目が注がれる。

ライトに当たつて水しぶきがきらきら輝く。

水中に白い気泡と黒い人影が交差しながら天井を岩に模した洞窟をぐぐり抜けると白い砂地が現われる

濡れ鼠になつた選手たちが息を整える暇もなく砂地を走り抜けて直立に切り立つた崖をよじ登る。

「早いぞ！早いぞ！これまでの記録を塗り替える勢いだ！」

実況アナウンサーは手元の時計を見ながら解説を続ける。

「先頭を行くのはロホ。槍投げから総合十種に変えて成績を残し、今このロックイーゼンでトップスターに躍り出ているビーレル。素

晴らしい跳躍！素晴らしい筋肉の運動を！」覧下さい。」

ムスカッドの壁は一番田に来る最も大きい高さの有る壁である。頂上だと思える一段田の壁の向こうに又聳え立つ壁を見ると、水の中から出て重たくなった身体で壁を登り詰め

その先に見えるムスカッド壁を選手達が見ると大幅に気持ちがダウンしてしまつ。

「カル。大丈夫？ ビックウェーブは私が下になるわ」とカスタイルルの隣で声をかける。

「悪いなアネル」

チラリとアネルを見て安堵の気持ちがよぎる。

「どうしたのよう？ カル？ 肩が外れたの？」

足の速いヴァンニアがアネルの後ろから移動して苦しそうに腕を握つているカスタイルルの横に陣取る。

「入れられると思うが・・よし入つた」

苦痛に歪んだカスタイルルの顔に何が起きたかをヴァンは理解した。

スタート位置でヴァンニアの前にはミリー。その前にカスタイルルが居た。

体の大きいカスタイルルはスタートの位置からの蹴り幅が少なく遠くに着水できずに後から落ちてくる選手の誰かに踏みつけられたのだ。水深はあっても百人以上の人間が十一メートル四方のプールに飛び込むのである。

手前に落ちるか対岸近くに目標を定めるかで少しは選手同士のぶつかる衝撃を軽減できるが少しでも目測を誤ると速力をつけた人間がかかとからぶつかつてくる。

ラティーフは一番危険な対岸壁近くに飛んでいる。そこなら落ちてすぐに洞窟に逃げ込めるからである。

それでも同じ場所に目標を定めている選手も多くいち早く水中を移動してもすぐにわずかの差で着水した選手の足がラティーフの足にもぶつかっている。

事故はスタートラインから落ちていく選手の隙間をぬってぶつからない場所に落下したが  
息を大きく吸い込み潜った瞬間にヴァンより後に落ちてきたミリーの足がカスタイルの肩を直撃した。  
ぶつかれたカスタイルは泳ぐことだけを考えて洞窟を脱出したが使えたのは左手だけで完全に右手は肩甲骨から外れて肩先は尖っている。

確かにミリーのかかとが直撃したが、偶発的な事故である文句が言えない早く潜らなかつたかスタイルが悪いのだと、ヴァンは唇を咬む。

ビックウェーブは足の速い三人が先に行き後から来たチームメイトの土台になり反り返った壁を乗り越える障害である。  
いつもなら土台カスタイルとアネルの一人で持ち上げるのだが、今  
の会話だと土台はアネルとヴァンでカスタイルはその上に乗つて  
ることになる。

二人で持ち上げるのだが体重の重いカスタイルを引き上げることが可能だろうかと一抹の不安がヴァンにある。

ドンガの壁をカスタイルはどうにかスピードを落とさず登りきる。  
アネルとヴァンの目がカスタイルの肩の辺りを見つめて空中に浮かぶきのこにジャンプした。

今はレースの真っ最中なのだ仲間のために良いポジションをとらな

ければと身の軽い二人は他のチームのえり抜きの選手と競いあって次の空中きのこの取り合いで参戦した。

ドンガの壁を登り、モメンセの河を空中きのこを利用して飛んで渡り終えハンマー海峡。

落ちてくるハンマーと狭い橋幅を行きつ戻りつ進み中央まで行けば闘技場の真上に開いた穴から外の風が無節操に吹いてくる。

「うわああああーー」と声を上げてぱらぱらと七呂の選手が落ちていった。

落ちた選手たちの体重が橋からになると橋のたわみが大きく上下に震える。

カスタイルは橋の上で歩みを止める。

「クツ」

バランスをとるために上げた腕が傷む。

「大丈夫よ、もう少し!」と後ろからアネルがカスタイルに声をかける。

ラッキーなことに橋の中央まで先に行っていた選手は風で落ちてしまい

谷底から必死で這い上がってきている。

もつと手前で落ちていれば最初の砂地まで戻らなければならなかつたからアネル達もかなりビビッていたがハンマーが風を遮り落下を免れている。

「先に行ってくれ」腕の痛みで足の進まないカスタイルが叫ぶ。

「OK。アネル、スピードを上げるわよ」渡り終えたヴァンが答える。この先を一人で乗り切らなければとの決意が顔には現われてい

る。

五本ある橋の上をゆっくりと選手たちが渡り終え始める。

## レース 2

次のアトラクションはビックウェーブ。  
高さが三メートルから五メートルの反り返った岩の波が横幅四十メートルある。

目指すは三メートルの低い波の先。

高低差が激しくあるため最初のポジション取りが大事な場所である。先を行く口ホの三人の内の一人はすでに波の屋根に上っている。

「アネル、勢いをつけていくわ。お願ひ」とヴァン。

立ち止まつたヴァンを置いてアネルはウェーブの下、口ホの選手の隣に両手の指をかさねてヴァンを待つ。

「いいわ！」一か八かだ。この役はいつもカスタイルの得意技。助走を軽くつけて、ヴァンは利き足をアネルの両手に乗せると、アネルも懇親の力をこめて波の上にヴァンを跳ね上げる。

反転してヴァンを放り投げた方角をアネルは見る。

「やつたわ！私たちでも越えられるわよ」

体の軽いヴァンは一回転して波の屋根に上っていた。

そこへ遅れてやってきたのがカスタイル。

青ざめた顔に安堵の笑顔が浮かぶ。

「やつたなアネル、ヴァン、頼むぜ俺の肩」

カスタイルの後からベルデのメンバーが走ってきている。

細いアネルの肩にその倍はあるカスタイルが立ち両手を組む。

「あれ今日は逆？」ミリーはそう言いながら走ってきてアネルの両手に右足を、左足をカスタイルの両手に置いて、踏み台にした。

「それー」とカスタイルとアネルの掛け声と同時にミリーは上へ放り上げられる。

飛び上がった波にミリーが手をかけるとそこにはヴァンが待つてミリーを波の先から引き上げる。

ヒーリー、ホイ、フックス、ジリアスクと踏み台の一人を使って波に駆け上ると

ヴァンが悲壮な顔つきで下に居るアネルを見る。

「さっさと来て！」二人を信用してはいるものの自分の疲れ具合からカスタイルの身体を心配している。

痛む腕を気遣いながら助走をつけてアネルの両手に足をかけカステイルが飛ぶと

ヴァンとジリアスクがカスタイルの着地した波の先っぽから倒れこみながら受け止める。

最後はアネルだ。

助走を長くするためビックウェーブから離れて駆けだす、波の内壁に垂直になるまで足で登りつめ身体を限界まで持つて行き波の先に手をかけてぶら下がりざらついた波岩の上を指でじりじり登り詰めて宙に浮いていた身体を完全に波の上に乗せると待っていたヴァンがにっこりと笑う。

「急ぐわよ

近くにはベルデのメンバーはヴァンしか残っていない。

次のアトラクションは全員でないとこなせない。

坂を下りると丸太がかかった橋がある。

くるくる回る丸太の上を苦も無く軽やかに駆け抜けて一人が通過していく。

隣では丸太がぐるりと回り通過中の選手三人が慌てて丸太にしがみつく場面が展開されている。

丸太橋を渡り終えると恐怖の峡谷越え。

鳥の巣状の大きな穴だらけの球体の中に入り込み緩やかだが起伏の有る床面を八人一丸となつて球体を抱えて八人全員で立ち木の間を走る。

ベルデ3全員そろつと重い球体を持ち上げてリーダーの合図で走り出す。

穴から出した足並みを揃える。

「右にヤシの木、クリア。十メートル先に左にヤシの木。いいか！ジグザグに走る！左！右方向一步左へ真っ直ぐ。右に五歩移動。次左に二歩移動。修正一步右。ギリギリ行くぞ真っ直ぐ！ヤシの木を通り越したらすぐに左五歩いや六歩。口ホに先に行かせるな！体当たりだ」

とジリアスク。

右方向からヤシの木の林を一番早く抜けるルートを別な林からやってきた口ホも球体と同じ幅に広がっている間に目をつけて向かっている。

口ホはベルデを確認し速度を上げる。

ベルデと口ホの速度が同じになりヤシの木の間に突っ込む。

刹那、拮抗していた力はぶつかり合い口ホは三メートル後退し、ベルデはというとゴムボールのように弾け何度もヤシの木にぶつかり転げて止まつた。

「立ち上がり！ 口ホに先を越されたぞ！ それ」とジリアスク。頭を上げた先に口ホの球体が見えた。

天と地が逆さまになつた選手達は一人が穴に両足を入れると練習と同様に決まつた位置に転がつて這つて戻り立ち上がる。

「前進！」

「何で負けたのよ！ 踏みどどまつてよ！」

怒り狂つたミリーの声。

「そんなことを言つてる場合ぢやない！ 足並みを揃えるぞ」とジリアスク。

涙眼になつたミリーがホイジンガー、フックスベル、カスタイルを睨み付ける。

ミリーの声にカスタイルが唇を震わせて抗議したが何も言わない。勝ちたいのはカスタイルも同じだ。

ここで勝てば来シーズンの契約時有利な立場で更新が出来るのである。

肩に不安を抱えていてもこの勝負に参加し勝利さえ勝ち取ればオフシーズンに肩の手術をし完治させて競技に望める。

何よりも一位であることにこだわつて来たカスタイルだけに肝心の右手に力が入らないのは悔しいのである。

「行くぞ！」

後方からアマリジョとナランハが追い上げてきているのが見える。

「フンッ！」とカスタイルは痛む腕に力を入れて球体を持ち上げる。「負けてたまるか！」ホイジンガーが両腕に力をこめて声を張り上げる。

軽いヴァンニアが持ち手ごと浮き上がりそうになる。

「GO! GO! GO!」

ベルテ3は真っ直ぐに走り、やんできたアマゾジニアのやばをかすりながら曲がり

ヤシの木の間に駆け込む。

緩やかな下り坂に勢いがついてぐんぐんスピードが上がる。

「右に三歩又右だ。五歩左に一歩。今度のヤシの木の数は半端じゃないぞ」

「口が引つくり返つていい。今のうちよー」

「軌道修正！ 右の大きなヤシの木を回るぞ」

「OK」

「くつそ。奥に小さい木を置いてやがる」

必死の形相で球体解除ラインまで走りこむと  
ゴム製の檻はばらばらになり汗びっしょりの選手の姿が飛び出でくる。

「最後だ泳ぎきれー走り抜けろ！」

ジリアスクの声をメンバーは走りながら聞き、

個人の加点ポイント地点、落差四十メートル、パールの滝っぽに向かつ。

高さに足がすくむが美しく飛べばボーナスが入る。

縁に立つて片足で蹴る者、両手を上げポーズをとつて両足で蹴る、  
助走をつけて上に遠くに飛ぶ者と様ざまだ。

崖縁から飛び出した後腕を身体に巻きつけるようにして飛び込み、  
力強く足先から入水し浮き上がる。

技の無い選手はそのまま万歳をして飛び込む。

落下中ひねりや回転と如何に自分の技が美しいか観客席に見えるよ

うに工夫して選手達は次から次に入水する。

もちろん滝つぼでは先に飛び込んだ選手は落下していく選手を避けて水中を必死で潜つて移動する。

泳いでたどり着くのはスタートライン近くの砂場である。スタートラインの壁を右に見て濡れた体で壁をよじ登る。

余力を残していた選手がぐいぐいと疲れきった選手を抜き捨ていぐ。

この壁からはもう色で分けたチーム行動ではなく個人の力にかかりている。

砂地を走る間に電光掲示板でチームの点数を見ていた選手らは最後の踏ん張りを見せ、

先頭集団にいる数人はチームのことを考えピラミッドの天辺の押しボタンを押して下りた。

壁を登りきり骨組みだけのピラミッドに選手は入り込む。タイムだけを考えればピラミッドの天辺にタッチしなくとも良いのだが持ち点の少ないチームは是非とも欲しい。

## レース 閉幕

副調整室ではオーケシユストが満面笑みで

TV局のディレクターを無視し大声で命令している。

「おい、早く下からのアングルに切り替えさせろ！よおーし。よおーし。いいぞ。これでなきや面白くない。そうだろ？ビル？」

ディレクターも慣れた態度でスイッチチャーにウインクして合図を送る。

「ええ、そうですね」と

生半可な返事をしてオーケシユストとは別の画面を食い入るようにビルは見つめる。

こぶしを振り回してレースを楽しんでいるオーケシユストとは大違いである。

ボルトできつちり止めたホールドが弛んで落ちたのをビルは見ている。

平時は足場を組んでホールドを設置するが急遽コースを変更したため緑の羊歯を描いた壁にロープでぶら下がりホールドやエッジを取り付けている。一人目の確認作業を省いたのだ。

選手がその後走る障害物にも問題がある。

高さ一メートルの岩は球体の素材と一緒にゴム板が多く使われている。

体重七十キロまでなら何とか持ち堪えられそうだがそれ以上は未知数である。

モニター画面では選手が墜落もせずに岩の上を豹のように四足歩行でしなやかに

岩から岩へと飛び移る様が床面からだらり選手の影が瞬時に飛んだのを綺麗に写している。

近距離での撮影からスカイカメラに切り替わる。

空からのカメラは「じつ」した会場の全体像を俯瞰でとらえ  
いわに埋め込まれた小さな窓からの映像ではトップの選手を脅かす  
後続の選手の動きが映し出されている。

大きな岩に片手を置いて飛び、小さい岩を飛び箱変わりに飛び。  
幸いなことに身体の大きな選手は

ジグザグに走ることを選び起用に岩と岩との間をぬって行った。

明るい夕空に花火が上がりロッキー・ゼンの最終ゴールを祝った。  
立見席を入れて六万の観衆が見守る中華々しくロッキー・ゼンのレ  
ースは終幕である。

興奮して席を立つたオーケシユストの隣で深く椅子に背もたれてビ  
ルはほっと一息つく。

ビルが見た限り四つ気になる点はあつたがどれも訴訟や公的機関に  
説明を必要とする事故はない。

そそくさと席を立つたオーケシユストを見送り放送された画像を呼  
び出して食い入るようにビル見つめる。

会場ではクレーン車がスタート地点にくつつき赤い敷物と表彰台を  
係員が設置し、

スタート口からぞろぞろと出できたのはラフさを装いながら一番上  
等なスーツに身を包んだ市長が  
有力者の中で機嫌よく愛想を振りまいている。

そこへオーケシユストがひし形になつた山高帽子をかぶり登場する。  
フロアーディレクターが観客に拍手を要求する。

スタジアム発表六万の観衆の千人がまばらに拍手をする。

汗だらけの選手はステージに一人もいない。

「さあ今日の最終レース素晴らしい熱線でした。そしてあらゆる所で観客のためにスポーツの美しさを追及した選手達の登場です！！」「ゴールを切った選手達は暗転の中スポットライトを浴びて出てくると拍手の波が響き渡る。

仰々しく司会者がその拍手を手を挙げて止める。

「そして加点されるポイントは！」

ドラムロードが鳴り響きスタートラインの真上の電光掲示板がポイントごとに点数を光らせると観客の視線が注がれ一瞬間がありため息とも歓声ともつかない声がスタジアム中につなり続く。

「良くやった！マイラー！」

「立派な戦いだったぞー！」

口々に顛願の選手にまた大金を稼がせてくれた選手に祝福の言葉が多く飛び交う。

司会者は両手を挙げて下げ又上げてスタジアムの真ん中に向かって叫ぶ。

「今年度優勝チームはアマリジヨ3！－！」

怒涛のように罵声やお祝いの言葉が観客の口から出でると司会者の声などまったく聞こえなくなる。

アマリジヨの八人が一位の台上に上がり手を振ると用意してあつた金色の紙ふぶきが天井から舞い落ちた。

「一位は大健闘ベルデ3－－！－三位はロホ3、四位はロサのセカ

ンド。この番狂わせは来シーズンにどう影響するのか？楽しみですねー」

鳴り止まない拍手の中したり顔の司会者は負けじと声を張り上げる。

「たつた一人にだけ送られる殊勲選手賞の発表！…皆さんの期待通り！美しい！あまりにも美しすぎるダンジョンマイナー…マイア一選手です！！」

「オウ。拍手の要求はいらないようですね。では市長よりメダルと賞金の授与です」

デフォルメされた女神像がマイナーに手渡されると、表彰台から笑顔と投げキッス。表彰台が肉眼で見えないファンは大喜びにされた画面のマイナーに感嘆の声を惜しみなく送り続ける。

スクリーンから魅力的な投げキッスが送られるとハートのついたため息が会場中に響こえる。

お役「メンとなつたオーケシユトや来賓はスポットライトの当たらぬ暗がりへ戻つていぐ。

中央に当たつたライトを浴びて何度もアンコールにこたえて手を振つていた選手達も消え。

会場にある画面に今日のハイライトシーンが映し出されると興奮冷めらぬファン達が高揚した面持ちで席を立つて見上げる、緩やかに人の波が出口へと移動し始める。

賭けに勝つたファンはチケットを持つてに払戻機に向かう。いつもはポスター やパネルで隠してある払戻機の前にはロックイーゼンの人気を計れる長蛇の列。

副調整室に戻ってきたオーケシユストは一斉に揺れる人波を笑いな

がら見ている。

「すごいねこれだけの人が換金してるよ。皆さん予想通りだったのかな」

国に納めるのが十一%ロックイーゼン協会が一二十%、配当金七十%、それ以外がオーケシユストに入る。

興奮と感動の決勝戦が行なわれた後  
丸一日だけ安全点検のため競技場は閉鎖される。  
それと同時に選手たちが住む建物の一階部分、  
エントランスの隣の応接室では契約内容を更新するために一人又一人と選手たちが呼び出されている。

呼び出し係はポール。一切契約の中身になど口出し出来ない身分であるが

選手の成績はレースを見ていて予想でき契約を終えた選手の顔色も判断の一つになる。

ポールの呼び出しに役員部屋に入つた選手が  
ドアが閉まつた途端抱きつき握手までもやるのは契約内容がよかつたからである。

厳めしい顔つきの選手がでてきた場合は最悪の契約内容だということ。

来シーズンに出走できない選手は後見人が呼び出されることもしばしばある。

選手呼び出しも田立たぬよう平常心を保つていてるがドアから出でくる選手が優しい笑顔で応じてくれたらと胸の内で願つている。

ポールが会議室のドアを開け中に声をかける。

「ラティーフ・セヴェールです」

「いいよ」中からの声。

「アネル、君の番だ。今日はとてもいい日になるよ」とポール。

「ありがとう」

部屋に入ると空いた椅子が一つ  
その前には大きなデスクを囲んで一番奥からオーケシユストが座る  
ように指先を動かす。

周囲には山済みの書類を前にオーケシユストの腰巾着の役員が五人  
顔を並べている。

会議室の主導権はいつもオーケシユストにある。

「ベルデはいつも活躍しているね。いいレースをすると市民からは喜ばれているよ。嬉しいだらうファンがたくさんつくと、走りがいもあるつてもんだ。そう思うだらうアネルも」

とここやかに正面のアネルを見る。オーケシユストの頭の中ではもう金額は決まっている。

「ええそうですね」

アネルの返事など期待していないオーケシユストは  
うつむきかげんのアネルから田を離してコンピューターが出した数  
字を見る。

「で、君の成績なんだが一年目、一年目と結構頑張っていたみたい  
だけれど今年はどうしたのちょっと元気がないみたいだが」  
地味な選手は嫌いなオーケシユストはコンピューターがはじき出した  
た数字が気に入らない。

「そうですね」

「何かあったのかい？僕等で解決できるような問題なら是非とも話  
してくれないか。まだまだ君は活躍できる選手だからね」

優しい声でオーケシユストはアネルの口が開くのを待つた。

「アネルは黙つたままオーケシユストの手元のファイルを見ている。

「疲れているのかね」

少々選手に気を使いすぎだと思つが役員達の見ている前では派手な言動は慎む。

「そうだと思います」「  
と口数少なくアネル。

この契約更新の場ではマイナーな言葉は禁句。オーケシユストには渡りに船。

「君ほどの選手を休ませたくないが。一年ほど休んでみるかね。な  
あに元気になつたら連絡をくれればいい。最初からテスト受けなけ  
ればならないが。君なら心配する必要などないぞ」  
イマイチの選手は数多く要らない。どの角度からもトマ映りが悪い  
と心の中でだけでいう。

沈んだ顔を上げてアネルが尋ねる。

「ほんとに辞めてもよろしいですか。ずっと考えていたんです。田  
舎に帰ろうかと。私にはこの競技は向いてないんじゃないかと  
と口からため息。

「君が居なくなるとカスタイルやジリアスクが寂しがるだろう。何、  
シーズンが始まればそんなことは言つてられないからな。残念だ」  
と他の役員の顔色を伺う。意義を申し出るほど発言権を持った役員  
はここにはいない。

「アネル、部屋を引き払つ時に必要な書類をポールに持たせる。急  
がせるようで悪いが更新手続きがとられない場合、君はここをすぐ

に出で行かなければならぬんだよ」

とんとんとテープールの資料を指で弾く。嬉しい時のオーケシユストのくせだ。

「ええ、最初の契約に書いてありました。覚えてます。夕方までは部屋を空けます。それでいいでしょうか、では失礼します。お元気で」

ほんのわずかだけれどラティーフの心は軽くなつた、

「ああ君も、アネル・・」

辞めていく選手になど興味など無い。

次の選手との更新にオーケシユストは頭を切り替えている

こんな所には居たくないとオーケシユストの返事も終わらないうちラティーフは部屋から出て行つた。

四階の部屋に戻りこの二年間で増えた荷物を簡単に分けて一いつのトランクに詰め込む。

一つは自分の服もう一つはファンから貰つた贈り物。

ポールがどうしてこうなつたんだ田で訴えながら書類のファイルを置いて

次の選手の呼び出しに去つた。

契約更新は一日にかけて行われる。

掲示した契約金に不服がある場合、又次の週に持ち越される。

その不服契約で残つていたマイラーが荷物を持つてエントランス下りてきたラティーフの腕を掴む。

「どうして一居てくれないの。これ！これ！私の住所、母が居るの

手紙をちょうだい。連絡をちょうだい！すぐには返事は出来ないけれど。お願い！」

辞めた選手と現役選手同士の連絡は取れない。様々な理由が規約では上げられているが根本は八百長を疑われる要因をすべて排除しているというのが理由だ。

「うん、ありがとう」

それ以上ラティーフは答えられなかつた。出来れば今すぐ話を聞いてもらいたい。

「アネル・・絶対よ私が引退したら。連絡を取つてね・・・」  
ビーレルが言葉に詰まつて立ち止まる。ラティーフはその手を握つて最後の別れにした。

宿舎のエントランスから五分ほど歩いて警備事務所で通公証を渡して高い門から表へ出た。

「ごろりると一つのスーツケースを転がしてタクシーを止める。

「ポートターミナルまで」

「ハツ？ 目は開いてるかい。何処を見て歩いてるんだよ。道を渡つて一分だよ。まったくもうー」

怒つて急発進して行つたタクシーの姿を目で追つて運転手に言われた場所を見る。

確かに駅の入り口を示した矢印が道向こうにはある。

ラティーフが出て行くのをポールはエレベーターの手前で見送つた。オーケシユストに最後のベルデチームの選手を引き渡しもつ用事はないかと尋ねて競技場修理の進み具合を見てくると宿舎を離れる。

競技場の売店やラウンジには工事用の資材やペンキを持った作業員がロツクイーゼンの話題で盛り上がつてゐる。

TV放送されていた実物のアトラクションが  
目の前に有ると言う事が作業員のテンションを上げさせている。

闘技場を観覧席から見て回りラウンジに戻ると  
作業員に交じつて立食テーブルでサンドイッチをかじりながらメー  
ルを作成した。  
メールの相手はビル。

アネルの解雇をどう伝えるか何度も書き直して結局短い文でため息  
をついて送信する。

## ビル 驚く

ビルがアネルの解雇を知ったのは夕方。

市の監査役に調査が必要と決定された人間の外部との接触、会話を収録したディスクと資料を持って役所まで来ている。

ロツクイーゼンに関する収支報告は大型コンピュータが計算して競技が終わると同時に市に送られているからビルは一切金銭面のことにはタッチしていない。

主催者でオーナーでもあるオーケシユストが市まで出向くのが筋だが市から細かい説明を求められる監査会を嫌つて代理でビルがロツクイーゼン発足から今日まで出でている。

タクシーを降りると時計を見ながらオーケシユストの行動パターンを思い出す。更新契約が済んだ選手の資料を見ながらPCの前で悦に入っているはずである。

金銭に関してはゼネラルプロデューサー、オーケシユストの担当だが選手の解雇となれば話が違う。

役職ではチーフディレクターのビルが個人的な見解で選手の契約金に異論は唱えられないが  
シーズンベストテンに入った選手を簡単に解雇するなどありあえないものである。

選手宿舎を突ききり左へ左へ木立の中を走るよつてビルは歩く。

「オーケシユスト、話がある。アネルの解雇は本当のことか?」  
応接間のお気に入りの椅子で嬉しい楽しい選手の組み合わせ表を作つては

湧き上がつてくるイメージに浸る。これぞ最高のショーザの見せ場・・

に水を差すようなビルの登場。

流石は役所、五時には追い出すのだなどビルを見る。

「アネル? アア、あの年増ね。人気はあっても年齢的に体力の限界に来て居たんだよ。本人も休みたいって言つてていたらしい機会じゃないか。最高に調子のよいときに辞められて。あの歳でこれから体力を維持するにもきつだらう? 性格も暗いしここが潮時だぜ。そう思うだろ?」

ビルなら文句を言つだらうと思っていたから外しておいて大正解だつたと薄ら笑いを浮かべ真剣な顔のビルに向ける。

生真面目なビルが怒つている。

「僕は残念ながらそつは思わないよ。僕等のシナリオ次第で彼女はもつと伸びたと思う。人間性を見たらどうだい? 個性とか運動能力もいいけどその先の人間性を観客は求めていると思う。解雇を撤回してくれないか」と思いのだけを言つ。

普段は決して本音は言わない。言つた所で何も変わらないからだ。

困つたものだ・・とオーケシユストは眉間に皺を寄せる。この皺はかなり効果がある。

「ビリー。君に彼女の解雇の相談をしなかつたのは悪いと思つよ」としおらしく言つて見る。

「でもあの程度の人間性なら探せばいくらでも居る。いや発掘するんだ。それと新しいライターを雇つてくれバイトの使いつぱしりの男を今度面接に回す。いいだらう? もう居ないやつのことば。選手の活性化だと思えば。おつと我々のチームも活性化しなきゃならん。よろしく頼むな」

腹を立てたと思わせてねこなで声に変えてみる。

オーケシユストを怒らせたくないビルは口を結んで黙つてしまつ。

次は少々威圧的にここでのボスはこのオーケシユストなのだということをわかるせる。

「それとアネルは故障者リストに入れておいてくれ。これでファンは納得するだろ?。そのうち忘れるさ。広報には俺が知らせておく。聞かれたら療養中だと答えてくれ。解雇したなんてばれたらファンがうるさい。暫らくはアネルが辞めた事は内緒だ」

屈託のない笑顔でウインクして話は終りだとオーケシユストは手元のパソコンに目を戻す。

悪気の無いオーケシユストにあきれて言葉を返せない。

権限を持たないビルはすごすごと応接間から出て行った。

十年前地方の競馬場を取り仕切りビルの采配で働く職員の動きにオーケシユストは感動しロックイーゼンのためにヘッドハンティングをした。

田舎でマッチレースを楽しんでいたビルは騎手兼馬主でもある。賭け事好きの父親がオーケシユストと仲が良く、信用して一緒に仕事を始めることにした。

ロックイーゼンの構想を練つたのはオーケシユストだが細かい取り決めや基礎固めはビルが案を作る。

オーケシユストの最初の構想では実力はありながら練習に打ち込む環境が整っていないアスリート、受け皿としての機能を發揮するのが目標であった。

故障している選手には休養と強化訓練と金銭的バックアップ。

これらは一年から三年の短期間の契約でアスリートは本来の自分のスポーツに戻るのが原則だつたが

実際には集まりすぎたアスリート達を選別し良い選手は何かと理由をつけてレースに出して人気取りに使い本来の競技に戻す事はしなかつた。

途中から受け皿をやめロックイーゼン専用の選手の公募も始め選手がロックイーゼンを辞める時だけ本来選手の所属していた競技に引き渡すが

後、引き渡された選手が活躍した記録は無い。

ビルが辞めた選手のことを気にかけることを嫌味に思うオーケシユストは面白く思つてはいない。

大事な会議もビルが留守にしているときを狙つている節がある。

後日会議内容を見せられて問題点を突くと慌ててオーケシユストはビルに修正をさせる

この繰り返しが多くなっている。

オーケシユストの行動を大人気ないと思いつつも発足時の仲間が辞めていく中

巨大化したシステムと選手たちの体のことを考えるとビルが口を出さないといけないことは山ほどある。

オーケシユストの子供じみたビル外しにも慣れた。

この一年、仕事中手が止まり

男のプライドをかけてむきになつてやつていたマッチレースを思い出し

ぼんやりすることが多くなった。

「俺も歳だな・・」

馬と一緒になつて喜んだり悔しい思いをした記憶が鮮明に蘇る。

ポールが送つたメールのもう一通はテットの携帯に届いている。正確にはルーサーがメールを読んで顔色を変えている。

「信じられない・・かごの鳥が・・出てきた」  
ルーサーは嬉しくてはじけ飛びたい気分である。

「テット・・今夜の夕食会は腹痛でキャンセル。サニー・ドクターの  
予約を入れてくれ」  
持っていた本を放り出し専用のトランクを見つけると動きやすい服  
装に着替える。

「  
それから・・テット。君の情報網にラティーフ・セヴェールを入れ  
て所在を追つて欲しい。急げ。まだ遠くには行つてない」  
携帯電話を握り締めルーサーの手は何度も短い文章を読み返してい  
る。今何処に居るのだろう?

常宿にしているホテルに荷物を搬入し所定の位置に積み上げようと  
右往左往している最中、

手を止めてクリスとテットはルーサーの言葉を聞いている。

ルーサーの命令に無表情になつたテットの革靴を蹴つてクリスは作  
業する手を動かしつつ、瞬時意固地になつたテットに言つ、  
「やつてやれよ」

重苦しいルーサーの雰囲気ががらりと変わったのをクリスは見てい  
る。

「冗談じゃない。遊びで使われてたまるか」と小声でテット。  
自分の仕事を軽く見られるのはごめんだ。

「初めてじゃないか。気晴らしだと思えばいい。たまには気晴らし

もしなきや浮かばれないぜ」

とこれまでを振り返るよう言ひつ。

クリスの説得をうりめしく聞き、作業の手を止めテットはPCを立ち上げる。

まずチェックリストにラティーフ・セヴェールの名前を打ち込み馴染みの警備会社に承認してもらつ。

犯罪歴にストーカーと記入。

警備会社の情報網にアクセス。

「何処にも通過記録がないですね。まだ周辺を歩いているのではありますせんか？」

又くだらない熱が出てきたと無表情の顔は言つてゐる。

テットの読みどおりに

ラティーフ・セヴェールはポートターミナル駅の階段で見知らぬ男に話しかけられていた。

大きな荷物を一段一段降ろしていいるラティーフを見て男は直感的に力モだと思つて近寄つてゐる。

「荷物を一つ持ちましよう」

男は持つていたショルダーバックを反対側に持ち替えて素早くラティーフの大きなトランクを持ち上げる。

軽くなつたトランクに驚いて即座に、

「いいえ結構です」と答える。

「あなたの手には余つてゐるよつだ。大丈夫です私も同じ場所に行きますから」

と階段を下りながら、トランクをひきつけ先に降りる男性。

「あ、いいのに」

といいつつもトランクを持て余していたのでそのまま男の後を追つて広い地下に下りる。

待合室を見つけて椅子に座ると親切な男も隣に腰掛けている。

男の額の汗を見てちょっとと可笑しい。

「ありがとうございました。助かりました」と礼を言つ。

男は息を整えると、

「良い旅行でしたか」と気をくに話しかける。

「」の駅をご利用だとロツクイーゼンの最終戦を見に来られたのでしょうか。嫌ですね楽しい事はあつという間に終わる。オールシーズンやれる競技なのにもつと試合数を増やしてくれてもいいのにね」この駅を利用する人間は誰もがロツクイーゼンを知っていると言つ大前提で話をしている。

「そうですね」

ロツクイーゼンと聞いて身体が強張る。

ロツクイーゼンの話題で乗つてこないと知ると男は会話の内容を変える。

「どちらまで帰られんですか」

と男に聞かれて正直に、

「バツファローまで」と答えたが、

男はバツファローをバウロー聞き間違え。

「バルニエ行きはさつき出たばかりだ。バウローね、あれはもつとも長い距離があるな。遠くから来られたんですね」

女性の荷物と人相、服装から地方出身者だと思つてゐる。

男に言われて刻々と変わる電光掲示板を見、バツファーロー行きの電車は出たばかりなのだとラティーフはがつかりした。

「そうですね」

他に何か別なルートは無いだろつかと掲示板を見ているがどの名前も知らない地名ばかり。

「何かをお探しですか」

「いえ、ちょっと」

「私でよければ何かお手伝いをしましょうか?」

田舎の女は親切な言葉使いで相手を信用すると笑顔を作る。

「いえ、その・・電車に乗るにはチケットが必要だと思つんですけど」

「販売機なら・・アアここからは見えませんね。よければ私が買ってきて差し上げましょうか、私もセージクまで必要ですから」と誠実にここやかに言う。

一瞬チケットの買い方が解らないラティーフはこの男性に頼るうと思つたが

ブラウスの内側に下げるあるカードを思い出し止めた。

カードには三年間ロックイーゼンで稼いだ契約金の全て入っている。軽々しく渡せない。

「そうですね・・でも結構です。自分で買いますわラティーフが断ると、

男はあっさりと引き下がり、

「それじゃ私が荷物を見張つていましょ。大事なものが一杯入っているのでしょ?」  
と優しい笑顔。

「そうなんです。この小さいのは大したものは入れてないんですけど大きいのには大事なものを一杯詰め込みすぎて重くなってしましました」と大きなトランクを触る。

「とても高価なもの?」笑い顔の目が真剣である。  
金田の物は大きなトランクに入っているらしい。

「ええ私が一生働いても買えないくらい」  
誰も買うことが出来ない宝物。ファン手作りの品物が一杯詰まっている。

「早くチケットを買ってらっしゃい。宝物はしつかり見張つておきましょ」

そ知らぬ顔で周りを見渡す。警備員は通り過ぎ誰も一人の会話を気にしている様子はない。

立ち上がったラティーフが小さなトランクを蹴飛ばすと  
軽いトランクはくるくる回って教えられた方向に滑っていく。

「あ・・

トランクを捕まえて恥ずかしそうにそのままチケット売り場にラティーフが姿を消すと  
待合室のトランクと男の姿も消えた。

列車に飲み込まれては消えて行く大勢の人波を見つめながら  
いつになつたらこの場所から

この駅から、レイステンという都市から

離れる事が出来るのだろうと哀しい目でラティーフは眺めている。

「ええ、 そうなんです大事な荷物なんです。 とても親切な人で荷物  
を持ってくれてチケット買つている間見張つてやるつて言って、  
そのまま持つて行つちゃつたんです」

小さな椅子に座り何度も同じことを駅員に訴える。

駅員はラティーフの書いた名前を見て胡散臭いと表情に出している。  
ラティーフだつて変な名前だと思つ。

「トレーダー・バクロン・・さん。 確かに待合室でその時間トラン  
クを持った男が去つていますけど。 これ以上探すとなるとあなたの  
身分証を提示していただきないと」

トレーダー・バクロンと名乗る田の前の女性は不安げな様子で駅員  
を見ているが嘘をついているように見えてかなり怪しい。

「そんな・・」

胸元の身分証には選手としての名前がある。

辞めて一年間は些細なことでも問題を起した元選手は違約金を払わ  
なければならぬ。

トレーダー・バクロンはロックイーゼン選手が問題に直面した時に  
使用する名前。

ファンや記者などに悟られないようロックイーゼン顧問の弁護士が

処理をすると契約書に書いてある。

「会社に連絡してください私の身分を証明してくれますわ。それで早く荷物を取り返してください」

事故を起した時の対応は最初に教えられた。

書きとくなかった住所と名称を書く。

駅員は保安部を呼び出しラティーフの書いた住所を照合する。競技会施設館内事務員として名前と顔写真がモニター画面には現わされた。合っている。

「その男が最寄の駅にいたら? まえますけどね。構内から出ていたら難しかと」

身分確認が取れたのか別な仕事で忙しくなったのか駅員はトレーダー・バクロン(ラティーフ)の存在を忘れたように仕事を始めた。

ラティーフは駅員室から出て暫らく駅員から見えるところに居たが諦めて

地図を求めて大量のパンフレットを旅行会社から仕入れ見よう見ま似でチケットを買い長い列車の旅に出た。

「それで! 彼女は何処へ行つたんだ! ポート駅からバルローまでのチケットを買つて。バルローからの足取りは? あの駅は四方八方何処にでもいける」

後部座席で腕組をしたルーサーを車内ミラーでクリスはチラリと見る。

いつもの冷静なルーサーと違いむき出しおの感情が伝わってくる。

バルローと彼女の接点は身上書に無い。

バルローはただの乗換駅だろつ。

「ええ彼女のカードの番号を追つていてますがまだ使用された形跡がありません。電話も使ってないようですし」

助手席でPC片手に状況を説明するテット。

特急列車を車で追いかけるとは無謀なと思いつつハイウェイを滑る様に走る車の速度を見てぞつとする。クリスは絶対にルーサーの願い叶えてやりたいのだろうと苦々しく隣を見る。

運転席ではハイになつたクリスがスポーツカーと抜きつ抜かれつのカーチェイス。

「テット。君の情報網も大したことないな  
イライラの極致に達し言つては行けないことまでルーサーは辛らつ  
に言つ。

テットはルーサーのために法を犯してラティーフのカード番号を追つていて。  
ラティーフの解雇の情報の仕入れ先はポール。彼とは二年前から金で情報を買つていて  
確認を取るため二人の警備員にも聞いている。

資格評議会開かれることになり身辺整理もかねてレイステンに来て  
いるが  
ルーサーは以前にも増して神経質で些細なことで突つかかつてくる。

ガイネス国の大太子を経て王になると思つてゐるから  
青二才のルーサーの悪口雑言皮肉も聞き入れてはいるがときに我を  
忘れて拳を上げたくなる。

腹に力を入れて肩の力を抜く、視線を景色から手元のPCを見る。

ラティーフのカードが使われた。バルロー駅からシャープイまで旅券

を買い乗車している。

「彼女の目的地はシャプイだな」  
シャプイは観光地で有名な場所である。

「ではクリス。ここでコーランしてもうおつか。このままシャプイに行つても夜中だ。我々は明日の朝人に会わなければならぬ」しつかりと後ろのルーサーに聞こえるよう声を大きくする。

「よろしいですねストローム様」

ボスツと助手席の背もたれをルーサーが蹴る。

予期していたテットは背中を浮かして蹴りを回避。

PCを畳みながら名前の知らないランプを車は降りて桁下をくぐり再びハイウェイに戻る。

「解つた。だつたら明日の午後の予定は全部キャンセルだ。いいな  
つ」

口惜しげにルーサー。

今度はテットがドアを叩く。了承の印・・らしい。

## シャブイ

レイステンから千キロ北東にカヤンデル山脈の麓、野山の向こう側に小波が打ち寄せる海岸線が美しい観光地シャブイ。

ホテルのモーニングコールで目覚めたラティーフは窓から見える遠い青い海を見る。

明るい日差しと明るい海の色はラティーフの暗く重い気持ちとは正好反対。

「綺麗な色・・」

生まれて始めての海。

レイステンにいる間一人物思いにふける時間は皆無。

今が物思いにふけるチャンスだと思うけれどよくよく考えて自分自身を否定しても何も進みはしないと気持ちを明るい方向へと切り替える。

「そうよ。誰も頼れる人はいないんだから」

明るい方向といつても望みの薄い明るい方向・・である。

十歳の時に生き別れたとラティーフは思っている・・母親を探す目的でこのシャブイを選んだ。

ラティーフの母親はある日突然帰つてこなくなつている。

周りにはおばや従姉妹たちが大勢住んでいたお陰で母親の失踪後孤独に過ごした記憶は無い。

村では失踪として扱わず山の亀裂に挟まり落ちて遺体が見つかならまま死んだと処理している。

子供同士の会話では大人たちが出稼ぎ行く場所シャープイの名前が

良く出でいる。

ラティーフの母親はシャープイで働いていて元気でいるけれど何か事情があつて村に帰つて来ないと子供らしい発想。

恋に破れて傷心を抱え選手生活にピリオドを打ち、駅で待たされている間に思いついたのが遠い記憶の母親を探すこと。ともかく街を出る理由が欲しかったのが真実。

シャープイがシャープイであろうと無かるうと田的になる。

写真もないのにどうやつて探すのだろうと自問自答し、女の子は母親に似るものと自分の顔に似た人を探せばいいのと心を奮い立せている。

ホテルを一歩出ると観光客が大勢闊歩している。

行き過ぎる顔は誰もラティーフをロックリーゼンの選手だと気がつかない。

顔に塗つた緑のペイントは強烈だがTV放映されるラティーフの露出度は低く一線を退いても誰も騒がないのはとてもありがたいことだと思つてゐる。

大きなホテルが立ち並ぶ温泉街を人波の流れるまま歩いていくと道幅が狭くなり岩肌が左右に迫る。

門のような木の下を潜り抜けるとパンプレットの表紙にもなつてゐる有名な白い峡谷が見える。

手前のわずかな傾斜地には土産物屋の軒が連なつてゐる。みやげ物など関心がないラティーフはゆつたりと動く人の流れに少々苛立つ。

二百メートルほど歩いたら前方の平らな岩の上で人の流れも止まつてしまい

立ち止まつた人達が揃つてみている方向をラティーフも見たが何も

ない。

段々になつた平たい岩のみ。  
たくさんの人々が何かを待つてゐる。

黄色の雨合羽を着た係員が大声で叫ぶ。  
「下がつて下がつて！！」

係員の声で一定程度観光客は下がる。  
がこれから始まる自然のショーケースを近くで見たい気持ちに逆らえず大  
きな動きにはならない。

「来た！」「ワアーーー」「キヤーーー」  
最前列の観光客が嬉しそうに悲鳴を上げる。

平らな岩のあちらこちらに穴がありそこからお湯が一二十メートル前  
後吹き上がる。

お湯柱は風に吹かれ曲がりぼとぼと係員の身体に落ちてきた。  
係員の近くに居た観光客は濡れた濡れたと喜びである。

間欠泉の向こう側には青い海を臨む白い石灰岩の段々畠が広がる。  
人の流れが動き始めるとラティーフは店の前にテーブルと椅子を出  
した店に足を向けた。

咽の渴きを覚えたのである。

飲み物を買い求め顔の向きを変えると後ろから声をかけられた。

「やあ、久しぶりだね」

その声に思わず振り返るラティーフ。

ロックイーゼンの誰かが迎えてくれた、と期待したが間違つて  
いた。

斜め後ろに見覚えの有る男の顔。感謝祭で半日一緒に居たファンの一人。

ベルデのペイントも薄いボディースーツも、ラティーフがロックライゼンの選手だったとわかるような外出着も着ていない。

髪の色も染めかえている。宿舎を出てシャブイまで誰もラティーフをアネルと呼んだ人間は居ないのである。

なので男の視線を外して無視する。

素早く観光団体の人混みに紛れ込みその場を離れる。

上手いことに間欠泉を見ていた観光客の中にもぐりこみあの男性ファンの前から逃げ出せた。

早足で歩きながらみやげ物屋のショーウィンドウに映る自分の姿を確かめる。

ジャケットは配給された薄いベージュ。パンツスタイルに大事な力ードはチーンをつけて首からポケットに入れてある。

他の観光客との違いは手荷物を持っていないとの会話しながら歩く同伴者がいないだけである。

しかもここはレイステンから千キロ以上離れて居る。

足早に白い峡谷に入りその奥の小さな土産物屋の中に駆け込む。店の主人はぶら下がったカードを見て首を横に振った。ここではカードで物が買えないんだと。

## ポール

ポートターミナル駅に降り立つたビルの足は重い。人の流れの中足を止めて改札口を見る。

電車から降りた人々がビルを避けて改札口を抜けて通り過ぎる。

「どうかしたんですか？気分でも悪いのですか」と今年最後の監査会に一緒に出かけたポール。

今日のビルはちょっとおかしい。何がおかしいかと聞かれてもポールにはわからないが何か変なのは確かである。

「ポール言いにくい事なんだが」自分の事を言うのは照れくさい。まだロックイーゼンに未練があるビルは手助けしなければいけないことをあれこれ思い描く。魅力的な選手一人の顔が浮かぶと心は切り裂かれるように辛くなる。

「何ですか。こんな所で改まつて、ちょっと端に避けませんか」人の流れがぶつからない場所を選んで一息をついた。

ポールはビルの様子からとうとう自分の秘密を知られたと覚悟した。小遣い稼ぎに選手の情報を売っている。優しいビルは雑踏を選んでポールに注意をするつもりなのだ。

ポールにとっては訴訟沙汰になるような大事な情報は洩らしていいと思っているが

金銭のやり取りをしているので偉そうに弁解も出来ない。

ビルの口から言われる前に先に自分から謝るべきかしらを切つて通すか迷い

ブリーフケースの取つ手を握り締める。

「俺はもうロックイーゼンには関わらない」

唐突にビル。

行き過ぎる人の流れが一日收まり一人のそばには誰も居なくなつた。

「この書類を事務所に渡しておいてくれ。オーケシユストには事務所のイレーヌから連絡が行くだろ?」  
ビルは視線を床に移し冷めた目つきでつぶやくよつと言った。

ショルダーバックの口を開け分厚い封筒をポールに渡す。  
踏ん切りのつかない気持ちをかくして強気に笑つてみせる。

「ご冗談を、あなたはロックイーゼンの創始者だ。そんなことって出来ないじゃないですか」

ぽかんと開いた口でポールは尋ねる。自分の悪事はぶつ飛んだ。

オーケシユストはTVや雑誌に繁盛に顔を出してはいても、実際にロックイーゼンを動かしているのはビルである。

「ロックイーゼンの権利に関する書類にも全部サインがしてある。俺は手を引くよ田舎で馬の世話をしているのが性に合つていい」「やりたいことはまだまだあつたがここいらが引き際だと自分に言い聞かせる。

ビルの強い意志を感じて止める言葉を見つけられずポールは又焦る。

「メソドハに帰られるのですか」  
メソドハは有名な古い競馬場がある。

「そうだ。今期のロックイーゼン競技は大盛況だった。俺も思い残すことは無い。荷物は業者を手配するから俺はこのままメソドハに帰る」

改札口がビルにおいておいでと呼んでいるようだいたたまれない。帰りたいのはメソドハではない。闘技場にあの選手達の下に帰りたい。

「こりで戻れば又するするとオーケシユートの尻拭いに走り回る自分に戻る」

「こんなことを言つてはいけませんけど。僕も馬の仕事できますか。牛もいいです」

オーケシユストの率いるロックイーゼンに自分の場所は無いとポールは思う。

「その場の感情で言つんじゃないよ。来たけりや來い。まずは俺が帰つて地盤固めをしどいてやるよ」

無理に気持ちを明るくしてみせる。別れは苦手だ。

「ここから直にメソドハに？」

真剣な目で聞く。

「うんまず親父に手土産を買つて帰らねえとまずいから、ロジヒで一日下りる」

ロジヒの市場で両手一杯のみやげ物を調達するつもりでいる。

ボールに全てを話したら氣が楽になる。

気が楽になると急に腹が減つてロジヒで食事にありつけりつて食い物

のことにだけをビルは考えている。

「解りました。預かつた物は事務所に出しておきます。イレーヌが寂しがると思いますよ」

「頼むな」

ポールに片手を振つて市内行きの電車にビルは乗つて消えた。

ビルに渡された封筒とブリーフケースを抱えてロジクイーゼンの事務所にポールは駆け込むと、

書類の確認作業を終えたイレーヌが明日からの休みを楽しく過ごすか他の事務員と話が盛り上がり事務所全体が華やいでいる。

「これ中身を確かめてチェックしておいてくれよ」と笑顔で頼む。

机の上に置かれた分厚い書類の束を見てイレーヌは缶切り声を上げる。

「打ち込み作業は終わっているのよ」

他の事務員も不満げな顔で書類を見ている。

「就業時間内には終わるつて。あ・ともう一人分。十分後に持つてくれるからそれも頼むね。僕の分は大丈夫、簡単さ。就労年数が少ないから」

とさつさとイレーヌのそばから離れる。

これ以上話しているとイレーヌの仕事が進まない。

ブリーフケースの中身を金庫にぶち込み、二三枚の書類を片手にポールは自室にかけ戻る。

先に退職願を書いて更新契約書破棄願いにサインをする。

部屋のパソコンにメソドハ行きの電車の時刻表を出し

旅行かばんに荷物を詰め込み事務所によると封筒の中身を見たイレーヌが呆然としている。

「このサインビルの名前がある。何よ全部の権利を譲歩するつて・・・

・嘘

そつとイレーヌの机の上にポールの書類も置いて事務所を出た。

## シャブイの夜 1

土産物屋で立ち話を繰り返しているうちに、感謝祭の男性と偶然であったことなど忘れてしまい日が暮れていった。

母親の消息など見つかるとは期待していないが、バッファローの地名すら知らない人も多く、シャブイが村人の出稼ぎ場所では無い事はわかつた。

白い峡谷から人混み紛れ駅に寄りこれまでの予定を立てるために新しい観光パンフレットを持ち帰っている。

人間の多さで疲れた頭を切り替えて

パンフレットとの地図を睨み要所要所を丸で囲みルートを考える。

どのパンフレットも観光地までおおよその時間しか書いていない。このシャブイもメインの白い峡谷まで

何箇所も小さな白い峡谷があつて商売をしたいみやげ物店と宿泊客の欲しいホテルの策略に乗つて小さな段々畠を歩きまわっている。

「人でいっぱい・・・」

広げたパンフレットを眺める。

ホテルの部屋は小さなテーブルと椅子

その向こう側にベッド、大きな窓はあるが隣は又ホテルの壁である。椅子に座り込みペンを持つが一向に明日の予定が立たない。

腕組をして考え込みぼんやりしているとドアをノックする音。

すっかり暗くなつた部屋の明かりをつけてドアチャーンを確かめる。

「はい、どなた？」

沈んでいた気持ちが伝わらないよつて声を出す。

「やあ、アルヴァー・ルーサーだ」

の声に思わず顔をしかめる。

華やかな観光地から離れて奥の住宅街に足を向け、そこでもたつぶり時間を使って歩き回つている。何処で見つかって後をつけられたのかがわから無い。

「? 何の御用かしら」とドアを開けずに返答する。

昼間土産物屋で声をかけてきたのはアネルだとわかつて挨拶をしていた。たまたまラティーフがこのホテルに入るところ見ていたのかもしない。

それともホテルの従業員がアネルと気がついて誰かにおしゃべりをして噂が広まつたとか・・  
とにかく色々考えたがここまでラティーフをロックイーゼンで走り回っていた選手だと判つた人は誰も居ない。

この場は顔を出さずに知らぬ顔で追い返してしまつのが一番・・。

ドアの前で追い返す方法をあれこれ考えていると、

「リリはラティーフ・セヴェールの部屋かな?あのロックイーゼン

のスター・アネル・・

追い返す口実がまとまらないうちにアネルの名前がルーサーの口から出る。

「やめて！」

チェーンをつけたままドアを開けて確かめる。間違いない昼間見た男である。

「入れてくれないか。話がしたいだけなんだ。困らせるつもりは無い」

廊下のライトを背後に受けて

自分の魅力は誰にでも通じると思つてゐるのかルーサーには一切悪びれた様子はない。

黙つてラティーフは男を睨みつける。

「アネル元気そうだね」

そんな人知らないと咽下まで出てきていたが押し通す氣力は無い。

半日素顔のラティーフと一緒にいた男である。

諦めてチェーンを外しドア前から退くと

ルーサーと一緒に優しい香水の香りが狭い一室に広がる。

ルーサーは床、テーブル、椅子までもパンフレットで一杯の部屋を見回し

優雅な物腰でパンフレットを二三枚拾つて眺める。

「次に行くのはヤンパーの泉かい。綺麗な場所だ」と腰掛ける場所を探して狭い部屋のベッドの上に座った。

「『みんなさい』場所が無くて。あ、まつて。椅子を一つ運んで貰え  
ばいいわ」

部屋に入ったルーサーがベッドに腰を落すと

慌ててラティーフは電話口に行いつと二歩歩いて立ち止まる。

最寄の駅ごとにパンフレットを集め路線図どおりに置いたところだ  
ったのに崩したくない。

「ここに座つたらどうだい」

ベッドの上にもパンフレットが散らばっているが  
ルーサーはそれらをまとめて隅に追いやつてラティーフ一人分の座る  
場所を作つた。

落ち着いた物腰のルーサーに氣負つていた気持ちが沈み本音がぽろ  
つとが出る。

「色々と考えていたらこんなになつちやつた

ベッドにラティーフが座ると身体の向きを変えてじつとルーサーが  
見つめている。

「ずいぶん疲れているね。ここは広い観光地だから一日では周りき  
れないよ」

表情のえしくなつたラティーフを氣遣つていてる。

「やうなの」

確かに何も考へがまともないのは疲れているから。

「横になつたらどうだい。座つているのも辛そつだ。横になれば動かすの口だけでいいよ。どうぞ」とルーサーが枕を整えラティーフを促すと疲れ切つていたラティーフはちよつとのつもりで横たわつた。

「寝ないでくれよ話をしに来たんだから」と陽気にルーサー。

心臓の鼓動がガンガン耳元でうなつてゐる。

感謝祭で会つた彼女の隣にいることが嬉しくて、狭いホテルの部屋も地味な壁紙も質素なベッドもルーサーには見えない。

「大丈夫よ、話ぐらい出来るわ」

騒がないでくれるのなら少しごらい話をしたつていい。どうせ今は華やかな選手では無いのだもの・・そう思つと気が楽になる。

「じゃ聞いてもいい? どうしてロックイーゼンを辞めたの」

「え? そうね・・重なつたの」

何が重なつたのかラティーフは目を閉じて考へる。

重なつた・・重なつた・・重なりすぎて身動きできなくくらいに・・

「ねえあなた、女性に振られたことある?」

澄ましてこひらを見ている男性は女性に振られる要素は何処にもない。

「その顔だとあまりないよね」  
チラリと端正な顔のルーサーを見る。

「どうかといつてラティーフのような平凡な女性は相手にしないだ  
ろ」と思われる。

付き合つた相手に不足が無いのはマイアーライのものね・・と  
思い出したマイアの最後の顔は哀しい表情だった。

きちんと別れをしなかつたことをラティーフは後悔した。

「私好きな人に振られたの。それで競技に集中できなかつた。一度  
や一度じゃないの三度よ。同じ男性に三度振られたわけじゃないわ。  
皆別々、年齢もタイプも違うわ」

まだ生きしくジリアスクの言つた言葉がよみがえつて哀しくなる。

「幸運だと思ったの。周りは皆素敵な人ばかりで、皆努力家で素晴らしい才能を持つてて、私が有頂天になつていたのね・・」

「焦る気持ちはわかるけど、近くに居る男なら誰にでもそつやつて  
声かけるのは、かなりみつともないぜ

君はいい人だけど付き合つた男に病氣みたいに結婚してくれつて言  
うの。有名だぜ。止めなよ。みつともないよ」

病氣なんかじゃない、本氣でこの人なら一生暮らしていけると思  
つたから言つたのに・・と心の中で反論する。  
ジリアスクにはもつと言つて訳したいことがいっぱいある。

「スティーブはね、他の女性に盗られたの。ローランドは結婚なん  
か考えられないって。ジリアスクは一番付き合いが長かつたし優し  
かつたから絶対大丈夫だって信じてた・・」

振られた男の名前とその理由をルーサーに説明していくうちに目頭

が熱くなり涙が溢れってきた。

頬を伝わって涙が耳に入る前にルーサーのハンカチが涙を拭う。

一年前のローランド、一年前のステイーブ、三ヶ月前のジリアスクとの会話を思いつくままルーサーに話す。

ラティーフの口が閉じるのを待つて落ち着いたのを見計らいルーサーは口を開いた。

「ラティーフ。ステイーブは十八だ結婚を考えるには早い年齢だよ。ローランドは君じゃなくて君の隣の人人が目的だったのだろう? ジリアスクは誰にでも良い顔ばかりする奴さ。君の話だと僕には煮え切らない奴に思えるよ」

目を閉じて黙つてルーサーの慰めの言葉を聞く。

「マイアーリと同じ事を言うのね」

ルーサーのハンカチを取り上げて自分で涙を拭つて握り締める。

「私つて男を見る目が無いのね」だからこの歳まで結婚が出来ないのだと思つと又涙が溢れる。

「自分を責めてはいけないよ誰も君を否定し居るわけじゃない。君はとても優秀な選手だよ」

ラティーフの目じりの涙をポケットチーフでなでる。

声を聞いているだけでルーサーの新しい未来が見えるようだ。

「あなたはどうなのよ。女性に振られたことはないにしろ。楽しい事はあるわよね。ね、素敵な人には会つたときに振り向いてもらえる方法つてあるかしら」

捨て鉢な気持ちで聞いてみると、この部屋に一緒にいるのがジリアスクだったら

どんなに楽しいだろうと閉じた瞳の中で想像している。

優しいジリアスクは星空を見ようと誘つかもしれない。

夜の海を散歩しようと肩を抱いて歩いてくれるに違いない。

でもそれは勝手なラティーフの想像で実際は優しく拒絶されている。

ジリアスクではない優しい声が答える。

「素敵な女性に出会つたら・・誠実に自分を見せるよ。隠し事は嫌いだからね」

「そうなの。意外だわ。あなただつたら魅力的だからすぐに素敵な彼女を捕まえることができるわよ」

半日一緒に行動したことを思い出している。ルーサーの行動が読めずラティーフは焦つてばかりいた。

「そうだね・・

素敵な女性はもう見つけている、

?まえることができるかはこれから会話次第。

「選手のとき何を食べてた。好きだつた食べ物つてある?筋肉増強剤が主食で後はビタミン剤がおやつになんて言われるの知ってる?」

と話題を変える。

彼女の嗜好品、日常品、どんな些細な事に愛情を注いでいたかをルーサーは知りたい。

辛い内容ばかりを彼女には口ことせている。  
下世話な話を入れてリラックスさせる。

「おやつ？それちょっと当たっているかも。でも一部の人だけよ。ほとんどの人が食堂で出された食事を食べているのよ。私はね野菜と果物が好き。夕食は皆と同じに食べるとおなかが重くて眠られない。だからトレーナーからいつも注意を受けていたわ」と思い出して話す。なぜか自分のことを聞かれると嬉しい。

食堂ではトレーニングの上の料理に足りないものが上乗せされる。動物の内臓は極力嫌いで細切れにして食べていた。涙目のラティーフの口元がうつすらと笑うと言葉を忘れてルーサーは見とれてしまつ。

「普段はどんなファッショングで過ごしている。スポーツウェアが多いの」

これからラティーフと一緒に歩くとなると持つていてる服を見直さなければならぬ。

「私はそりよ。皆は違うわ、色々な服で個性的よ」  
ミリーの自己主張が強いファッショングと、センスの良い着まわしでおしゃれを楽しむマイラーの一人は選手達の憧れの的だった。

ミリーのファッショングを見て驚いていたらマイラーからさりげなく注意を受けた。

競技中は身体のラインが丸見えでも集団の中では目立たず身体の線が見えても平気だが日常にそれを取り入れることはラティーフにはない。

肌を露出しない服装を好む無頓着なラティーフに  
マイラーはいつも気を使ってアドバイスをしては服装にアレンジを加えてかつこよくしてくれたものだ。

アアそうか・・私に足りないものは性格の地味さだけではなくて

地味さが服装にも現われていたのかと又落ちこんでしまう。

「私つてマイナーの引き立て役かもね・・・」

マイナーと離れて初めてマイナーの美しさを感じている。

「マイナーって?さつきも出てきたね。ダンジョンマイアの事。君の友人?」

「そうよ。一番仲良しだった。彼女がいなかつたら私の選手生活はもつと寂しいものになっていたかもしれないわ」

マイナーと過ごした時間は楽しかった。彼女の周りには彼女が動くと同時に人の流れが出来たのには驚いてるがそれら全部を含めて良い思い出である。

「ダンジョンマイアに恋人は。大丈夫、誓つてもいいよ。僕はこの話を雑誌社売りこまない」

と宣誓のまねをしてふざけてみせる。ラティーフが口にする個人名は要注意。

「居ないわ。誰にでも親切で優しいけれど特定の人とは付き合つてなかつたの。きっと選んでいたのよ慎重な女性だから」

私ももつと慎重に男性を見て居ればよかつたとまたまた落ち込む。

とりとめの無い話をラティーフにさせてしまつかりとその内容をルーサーは吟味している。

友人マイナーはルーサーの印象ではアネルを恋人のように思つているようだ。

極めつけ彼女を振ってくれた三人の男性達が居なければルーサーにチャンスは巡つてこなかつたと思うとに彼らに感謝したくなる。

## シャブイの朝

目覚めは突然やつてくる。

カーテン越しの朝の光がラティーフの顔に注ぎ隣に眠るルーサーの顔を直視した。

アラコの人自分の部屋に帰らなかつたんだと思つたが頭の中はなぜかすつきり

遅くまでグダグダと話していたと思つていたがいつの間にか一人とも寝込んだらしい。

昨日まとまらなかつた観光地巡りの計画案がはつきりと思い描ける。そつとルーサーを起さないようにベッドを離れるトランクの中に荷物を押入れ要らなくなつたパンフレットを「ミニ箱」に入れる。

「やあお早う。疲れは取れた?」

さわやかに起きたラティーフに「やわざわと嬉しい胸騒ぎを覚えるルーサー眠つているラティーフも可愛らしかつたが活き活きと動き回つているほうが更に魅力的である。

「え、あら」「めんなさい。起しちやつたわね。私は元気よ。あなたは部屋に帰らなくとも良かつたの。きっと心配しているわよ」とルーサーへの返事はかなり儀礼的。

優先順位は自分の支度とばかりに、

「私はえーっとね、これから駅に出るわ。お別れね」

にっこりとルーサーに笑いかけて洗面所で身だしなみを整える。

ジリアスクに振られて以来鏡を見た記憶が無い。

あーあ、やけで染めた髪の毛はちつとも似合つていないしまだ二十

五歳だとこうのに十は歳をとつて見られるわ田の下のくすみはむつ取れないのかしらとしみじみ自分の顔を見る。

「朝食はどりあるの」

「ラティーフの中ではむづ帰つたはずのルーサー。」

今日の計画は昨日決まつていて、

「朝食は電車の中どるわ。急がなつくなやヤンパーに御には着きたいの」

鼻歌が出来るくらいに予定が頭の中に入つてゐる。

「それじゃ夕食と一緒にどうだい」

部屋の鏡で身だしなみをチェックし洗面所から出でてきたラティーフをみて頬が緩む。

「あり素敵。でも約束しないわよそれじゃお先に」

軽いトランクを片手にさつさと部屋を出て行つた。

「予約しておくからね」

の声が背中に聞こえる。

「変な人、でもなんかすつきりして気持ちがいいわ。さあー行くわよ。いっぱいいろんな所に行つて見て回るわ」

フロントでカードで支払いを済ませて意氣揚々とラティーフはホテルを出て行つた。

ラティーフが出て行くと同時に黒いフロントガラスの車がエンタランスの前で止まる。

そこへ手ぶらのルーサーが現われ乗り込むとゆつくりと車は発車して行つた。

「今日の予定は」存知ですよね」とテット。

「知つている」

「テツト、飛行場へ向かつたらどうだ。そのほうが早く着くだろ？」「嬉しい気持ちが声に出ている。

「準備してござります」胡散臭げに後ろに手をやるとクリスも見ている。

「うん」

と上の空で軽い返事。

車は駅とは反対方向へ走り出した。

バックミラーで見る限りルーサーの様子は上機嫌だ。  
後部座席に座ると同時にいつもの分厚い本を広げたが  
ページをめぐりながら見慣れない動作が入っているのをクリスは見  
逃さない。

信号機の変わり田を利用して注意深く見ていると携帯電話の画面をちらちら見ている。

隣のテツト同じ行動である。

テツトもパソコンで部下の仕事の状況をチェックし命令を変更したりしているが

合間手が止まり携帯電話の画像を呼び出しても表情を和らげている。  
盗み見した画像はコレットとのーショット。

テツトはレイステン市では警備会社の社長、主にルーサーの警備をしているがガイネスから出てくる要人達の警護も受け持っている。  
田舎国ガイネスから出てくる要人たちはとつかえ引返して引き連れてくるお供は半分観光旅行気分の団体様を立ち回り先毎に警備を変えて守っている。

社長としてのテットの立場を利用してコレットを誘っているが、  
誘われるコレットもテットを金になる木と心得て付き合っているようである。

数日後には一人はセテル国を出てガイネスに戻る身分である。

テットは歳のあるコレットを本気で国につれて帰るつもりでいるし

ルーサーはといえばやつと一度田のデータが出来てクリスとしては人間らしいルーサーを見られて嬉しいがテットの手帳のリストを半分も消化できていない。

テットがメールの着信履歴を見てにやりと笑う。それを横で見ているクリスはコレットからの良い返事だと推測する。四十路の春である。

「良いニュースです。今夜ドラドのブライズ様が予定を変えてレイステン市にあいでになる」

「明日の予定だつたらう」それもイクラル市のホテルでラウンジでの約束が取り付けてある。

「セテル国の外相が南海の嵐に出立を遅らせたせいでしょう。予定を見直しましょう」

「変えなくて良い」

「それは出来ません。ブライズ様は評議会の委員の一人です。出来ればもっと繁盛にあつて印象づけるべき人間の一人です」

「変えなくても良いといつている。外相は天氣で予定を変えたのだ

る。南海の天候などすぐ変わる。ブーラーズは外相と会談するつもりだ言つてはいるが目的は別だジプトン社の会長も孫の誕生日にレイステンに居る。ジプトン社の系列会社の社長も集まっている。僕になど会う暇もないくらいに忙しいはずだ

ブーラーズの行動予測などすぐに計れるとテットをたしなめる。

予定を変えらてはたまらないそれでなくとも  
幾つかのキャンセルをテットには飲んでもらつたりでいる。

昨夜から今朝までのラティーフの顔を画面に出しては何度も見ている。  
雑誌と違つて初々し印象である。

どちらも大事なことを話しあつてはいるといつに  
少し浮ついた会話になつてはいるとクリスは一人聞きながら思つ。

この土壇場に来て恋に燃えている一人が切ない。

## ヤンブー

白い峡谷シャプイから五十キロ内地に入り込みヤンブーに着いた。標高二千メートルの台地には美しく澄んだ湖が広がっている。シャプイを早く出たのはヤンブーの探索時間は多く取るため。美しい湖を取り囲む森の間に村や町、ホテルが点在している。

パンフレットどおりに歩いていくと小さなコテージが道路の横に立ち並ぶ先に賢者の泉といわれている小さな泉まで歩いて登りラティーフは一息をついたここもまたたくさんの観光客で溢れかえっている。

流石にここまでシャプイの硫黄の匂いは漂つてこなかつたがおしゃれをした婦人の香水がどぎつく鼻にまとわり付いたのには困った。湖を半周し遠くの山並みに太陽が傾きはじめている。

土産物屋にバツファローから嫁いで着た夫人は居ないかと尋ねると答えはここもシャプイと同じでバツファローの地名を知つて居る人間に出会えなかつた。

「ここも素敵な場所だけど、人で一杯だわ」

水の上に吹く風に心地よさを感じながら夕暮れの湖がピンク色に染まるという時間を心待ちにしている観光客を後にしてホテルにドライバーは足を向ける。

疲れる前にホテルに戻り明日からの予定を組みたい。

穏やかで神秘的な風情の湖を離れて緩やかな坂道を登り詰めるとシャプイで泊まつたホテルと同じ名前のホテルが建つていて、神秘的な湖に合わせてたくさんの木々が建物を囲みエントランスを隠している。

ホテルの玄関の手前で一台の車が静かに止まつたまま動かない。坂道を登つて来たホテル客の車やタクシーが慌ててハンドルを切つて避けて中を覗くが運転手も車内も見えない。

止まつた車の助手席にはパソコンに拳を置いているテット。目は後ろのルーサーを睨んでいる。

「もう遊びはお終いですよこのまま帰りましょう。連絡が入りました。明日の朝トレジャーホテルで待つているそうです」握った拳が青い。本気で腹を立てている。

ヤンパーまで不承不承きているがついさつき連絡が入つた予定の要人のアポが取れたのだ。

大事な人間だとわかつていてるのにルーサーの答えはつれない。

「今日の予定は全部クリアした。どんなことをしたか教えようか。卿の娘は誰を連れてきたと思う大統領の娘だ、歳は聞かなくとも良いか？婦人は五十を超えている孫娘は十三だ。彼女等とお茶を飲んで花を見て回つた。これの何が楽しい！」

他にも世話になつた教授に挨拶をした。

「ブラーーズと会つたところで何も変らない。評議委員会は彼の意見を聞く所じやない。国の未来を決める場に個人的な意見を通そうものなら彼自身が失脚する。無駄な顔つなぎはやめる。僕はこの見てくれのせいで信用度はゼロだ。この意味が解るか？良い体をなさつてますね。スポーツは？では今度ご一緒にプレイしましょう。行けば女子供ばかりが集まつてゐる。昨日もそうだ今日も同じだ」

最後くらいしつかりと専門書を読んでいたいルーサーは子供や女性にキヤーキヤー騒がれるのに辟易している。

「フン、それに朝だと。ランチでもなければディナーでもない、出

発間際のホテルの朝。彼が僕に会おうと思ったのは、僕が現在王座にいる男の血を引いているという理由だけだ！僕個人に一片の興味も無い。奴とて同じ万が一・・万が一僕が皇太子になつたらあの時はこうでしたと言い逃れを作るためさ。もうすぐ試験だというのに何をあいつは隣の国でうろうろしている」

ルーサーの怒りが何処の誰に向けられているか推し量る。

「それはタラカテル国が民船を装つて領海侵犯をしたからでしょう。今朝のトップニュースでは嵐で沈没と書いてあつた奇跡的に船員は全員無事といつ。南海で嵐に遭い生き残れる確率は低い。

「将軍が追い払つた」

ルーサーもニュースを見ている。

「表向きは、実際は船員を皆殺しにすると脅かして船を沈没させ戦闘の様子をタラカテルに送りつけています」

ガイネスからの伝達事項でテットは前からこのニュースを知っている。

タラカテルとは国交が無い国交が無い国との会見は秘密裏に行なう。ドラドのブラーズは運輸関連の話し合いでセデル国に訪れているが裏では外交交渉の駆け引きに飛び回っている。

「バラディール将軍のやうなことだ。タラカテルはどう出ると思う？」

ガイネス国内の要人達の動きはすぐに政治情勢に関連する。  
これから帰国しようとするルーサーに要人の情報は不可欠である。

「表向きは激しく抗議するでしょうね。セデル国が介入して宥めているのが実情だと思いますが」

「わが国は損害無し」

「ええ、わが国は追い返すだけで海の向こう側まで砲弾を撃ち込み

ませんからね

「ではドラドのブレイズに伝言を。気疲れしているだろうからわざかな時間だがゆっくり休めと言つておけ明日は僕も休みだゆっくりヒースコートの街並みを散策するよ」

と言い捨てて嬉しい笑みを口元に浮かべて出て行った。目の前をラティーフが歩いていく。

「ストローム様！」テットの声が閉まつたドアに吸い込まれる。ルーサーは歩道を歩いているラティーフのそばに駆け寄りパーティにでも行くようにぴつたりと寄り添いホテルの縁深いエントランスに入つていった。

「まつたくもう！ いつたい何があつたんだ！」

要人の話でルーサーの怒りが冷えたと思つたら予定通りの行動。

「あれが普通の男だと思いますね。今までが異常で・・・俺今のストローム様のが好きですね親しみやすい」

運転手クリスは薦の絡まつたエントランスの明るい照明を羨ましく眺める。

「ばか者！ そんな事言つてられるか！ 試験は迫つているのに。このままで今までの苦労が水の泡だ」

クリスを叱り付けながらキーボードを打つ。最後の最後で追い込みの勉強もせずに女の後を追うルーサーが信じられない。

「ストローム様、試験を放棄するなんて無いですよね」

とちょっとだけ心配をする。確かにこの瀬戸際に休みをとつて女性とデートは考えられない。

「そんなことさせるか！ギリアンに詫び状を書かせろ」  
達筆な文章のギリアンは主にルーサーの身代わりに見知らぬ人達に  
熱意のこもった文章を書く。

「もうレイステンはお払い箱つすね」

ルーサーが視界から消えるとクリスの笑顔も無くなる。

「規模を縮小するにも王の命令が必要だ私の一存では動けない」  
せわしく指を動かしながら答える。

「サガモア王は本気でストロム様を望んでいるんでしょうかね」  
手持ち無沙汰の腕を組む。明日の俺達はいつどうなるのだろう  
と思いあぐねても帰国する以外に道は無い。

「わからん」

今日の予定は決まった。

「このホテルの見取り図は、よし従業員通路は把握しているな。通  
気孔と配管図。よし。出入り口には一人組んで一時間交替で明日の  
朝までヒースコートへの下調べを。レイステンの警備体制はそのま  
まで」

ルーサーの我が儘も後一日で終わると思つと張つていた気持ちが萎  
みそうである。

「了解」

「クリス最後だ。この場はお前に任せた俺はブラーーズ様に付く。俺  
の身の回りも片付けなければな」

「了解」

二人は少しの間前を真っ直ぐ見て黙っていたが

クリスが発車準備を始めるとテットは寂しげな顔を窓ガラスに向か

た。

## ヤンパーの夜

濃い緑色の薦のカーテンを搔き分けて歩いている歩道を登り詰めやつと見えたホテルのエントランスの磨き上げられたガラス越しに遅く到着した観光客が奥の受付で会話をしているのが見える。予約無しで来た観光客だとその夫妻に同情した。

きっと断られている。

ラティーフもそうだ、ホテルなんて飛び込みでもすぐに泊まれると思つたら大間違いで予約客でいっぱいですと受付で断られ荷物を抱えて駅まで戻り駅から予約をして泊まることができたのである。

あの夫婦とすれ違つたら声をかけて教えてあげようと歩幅を広げると後ろからルーサーの声。

「やあ」

いかにも顔見知りの一人が示し合わせて出会つたように声をかける。「なんで？」

振り向きざまに上ずつたラティーフの驚きの声。

頭の片隅にもルーサーはない。綺麗さっぱり忘れている。

「夕食の時間に遅れそだつたんだけど間に合つたみたいだ。行こう。おなかが空いてる」

子供達が作ったという焼き菓子を食べ過ぎて口の中が気持ち悪い。

「どうやつてこのホテルだとわかつたの？」

一言も泊まるホテルの名前は言わなかつた。

「受付のカウンターからここを予約しただらう？」

そうだったかしら？確かにチェックインしたカウンターで予約した。あのとき周囲に人がいたか思い出そうとしたが

にこやかな表情のボーイがルーサーに話しかけてボーイの案内でレストランの窓際の席に座る。本当に予約していたらしい。

ルーサーの人目を引く容姿が気になるがガラス越しの美しい景色と一緒に食事をする相手がいる嬉しさにラティーフは顔がほこりぶ。食事が終わるとラティーフは感謝の言葉を心から口に出した。

「ありがとう。とても美味しかったわ」

他の客の目はルーサーに注がれていてそばにいるラティーフはちょっと恥ずかしいけれど別れて部屋に入ってしまえば気にする必要は無くなる。

「どういたしまして。喜んでいただけて嬉しいよ」

直接部屋に昇るエレベーターの前でやんわりとラティーフの腕を取る。

「あ、君の部屋はこっちだよ。僕の部屋に荷物は運んでもらっていい。旅は道すれというだろ。まだ色々聞きたいことが残つていてパンフレットを広げる場所ならいくらでも有る。一人寝を希望するなら

最初に部屋を選んでくれ。西とか東とか朝田を浴びたい?夕日が見えるはんたいの部屋を選べば良いよ」と、ラティーフにしか聞こえない声音で意気揚々とルーサーは説明する。

「あの・・どうしてそんな勝手なこと」

狭いエレベーターの中で他の客の視線を気にして

大声で反論したいのに隣の女性と目が合い言葉が続かない。

「昨日のお詫びだ。僕は無作法だつたいつもそんなことばかりして

いると思われたくないからね。それと君の予約した部屋はキャンセルした。行こうか」エレベーターが開くと優しく腰を押されて前に歩くしか選ぶ道は無い。

ルーサーに説明された後、ふとあのご夫婦がキャンセルが出た部屋に泊まるのではないかと思つて悪い気はしない。

「ベッドが二つあるの？それともこれから部屋を決めるのかしら」ルーサーの説明を頭に描くと建物の端から端まで歩くことになります

うである。

エレベーターのドアが開いた先には大きなドアが一枚開かれている。

「私始めてよこんなに広いホテルの部屋つて見たことがないわ」中を覗きドア横に立つグレーのスーツの男性にこんなにちはと声をかけると

にこやかに会釈をして男性は立ち去った。

「どなた？」兄弟の方かしらそれとも一緒に旅行を楽しんでいる友達の一人かしらと色々詮索する。

「テット。執事兼護衛イコール教育係」と短く的確に説明する。広いリビングから分かれた五つの部屋を一つ一つ灯りをつけたラティーフに見せる。

「忙しい方なのね」

昨夜止まった部屋の三倍はある寝室にただ驚き選ぶことが出来ない。

中でも一番小さな部屋を見つけるとこがいいわとトランク一個置くと

ルーサーがにこやかにここはクローゼットだと教えてくれその隣の広い部屋にラティーフの寝室は決まった。

リビングに戻るとテーブルには温かなお茶が待っている。

「色々見て歩いて、お勧めの場所なんかある?」

地上の暗さとは相反して空には太陽の明るさが僅かに残り美しい星が灰色の空に瞬いている。

窓辺の小さなテーブルにお茶を移動させてラティーフを長椅子に座らせる。

高い位置から見る湖とその周囲の景色は広く大きいがどこか物悲しい。

「景色は何処を見ても綺麗だつたわ」

でもヤンブーもシャプイも一生その景色を見て過ごしたいとは思わない。

村を出て三年、

町に出れば仕事はあるとオババに言われ出でてきたがありついた仕事は狭い範囲内でしか動くことしか許されない生活である。

選手生活の中で友人もたくさん出来たといつのに規則の壁に隔てられ誰にも会えず相談も出来ない。

もし競技の関係者にラティーフから声をかければ

調査委員会から声をかけられた人間が呼び出しを受ける。

調査委員会の判断が悪ければ出場停止のペナルティが待っている。

本戦にでていな選手は失業する。

そんなハンティを分かつて連絡を取ることではラティーフには出来ない。

最後のお別れにマイラーが来ててくれたのでさえた心苦しかった。

マイラーの実家の住所までラティーフに渡している。

喜んでその実家にでも連絡を入れればマイラーの選手生命を短くる可能性もある。

点々と浮かび上がる湖の周囲の灯りが暖かな色合に変わり始める、  
気がつけば空には満天の星。

やつとロックイーゼンの選手ではなくなつたとの感覚がラティーフ  
に戻つてきている。

ルーサーの心はガラスに映るラティーフの顔に震えが来るほど感動  
している。

## 上弦の月

カーテンの無い窓ガラスの向こうには暗い湖と遠くに瞬く光。天空高く上っているのは「」なりになつた月。

広いベッドの中央に小さな灯りが一つ 昨日に引き続いたライツイーフとルーサーは顔を寄せ合つてベッドに横たわつてゐる。

遠い昔話をするように オーケシユストのキャラバン隊と一緒にレイステンに運ばれ 競技に参加したことを細々とルーサーに話して聞かせている。 聞き手はアネルの大ファンである。

ルーサーの穏やかな口調で尋ねられて何時とはなしに良い雰囲気になり 次から次へとお互い質問を投げかけては 返事とも説明とも取れない受け答えでベッドの中の会話は続いていく。

「君の美しい村の思い出は全部友達の結婚式に繋がるんだね」 少し茶化すように抑揚をつける。

楽しい雰囲気は演出しなくてもルーサーの身体中からあふれ出している。

「そうよ。女の子はねその儀式に憧れているのよ」

「君も憧れているの・・・」

ラティーフが照れて笑うと暖かいと息がルーサーの胸元にかかる。

村で同じ歳の女の子は皆結婚している。年下の女の子のほとんどが出て寂しい思いもいっぱいした。

「わ、女の子ですか」「ルーサーと濃密に言葉を交わしてこのカティーハウスにお酒に酔つた気分が続いている。

「そうだね、こんな所で言つ言葉じゃないけど結婚しないか・・と違つね。結婚式を挙げないか。綺麗な景色の場所で結婚式を挙げたら素敵だと思わないか。思つ出はいつも美しい景色と共に有る。いいだろ?」

淡々と今までと変わらない甘い聲音で尋ねる。

「結婚?」

わふとこと口に出しつづつみると、結婚とは何か?

「違つ結婚式だ。結婚式。女性なら理想の結婚式があるのだ。いろんな結婚式がいい?式服は君に合わせるよ素敵な思つ出にしてみる。いかにも結婚と結婚式が区別された違つものよ」と

「思つ出作り・・旅の思つ出に結婚式なんて考えたこと無つわ」とさりげらした田がルーサーを見上げる。  
ミニーが言つていたつけファンは一生に一度の思つ出を選手と作つたがると  
ファンの送つてきた結婚申請書を見せびらかしていた。

結婚に憧れて三度も振られ  
もう駄目とあきらめた時にまたもや結婚の話題が出るとジコアスクの顔が思い出される。

「それじゃ今から考えててくれ。君の望むままにやつてあげるよ

ルーサーの言葉でラティーフの口元がほころんどうつとつと  
回想している表情はルーサーを満ち足りた気分にさせる。

「結婚式・・・」

幼い頃の記憶が鮮明によみがえり

ラティーフの心は一気に村へ戻り友達の結婚式に出た感激に浸る。  
ヨリーンは満面の笑顔で、モクゾンは笑いながら泣いて・・皆素敵  
で可愛らしかった。

ルーサーの手がラティーフの腰から背中に上がり肩を優しくなれる。

「一度・・・やってみたい結婚式があるの。とても簡単なお式なの、  
あつといつまに終わるわ」

ちょつと興奮して早口になる。

ルーサーの手の位置が変つしたことなどまったく気にならない。

「いいよ。明日の朝準備をしよう」

なんの衒いもなくラティーフがルーサーにしがみつくとルーサーは  
至福の時間に浸る。

「ええ」

ルーサーの耳元でラティーフの返事が心地よい。

閉じた目の中にジリアスクが浮かび上がり  
しがみついたルーサーのぬくもりをジリアスクに置き換えてラティ  
ーフは幸せに浸つた。

翌日の朝は快晴を約束するよつに  
ひたひたと湖には白い靄が揺らめいている。

太陽が中空高く顔を出すと靄はたちどじろに消えて水辺の草の上に  
朝露だけを残している。

二人はホテルから椅子を二脚借り花屋で一人が持てるだけの花を購入した。

「車を使おう。合理的だつ」

「だめ、歩くの。式場には歩くつて決まつているのよ

椅子の足にも花を巻きつけている。美しく開いた花をつぶさないようを持つのは難しい。

早起きした観光客の好奇の視線を無視してラティーフはずんずんと湖と反対側に向かう。

一時間も歩くと湖などまったく見えなくなつておおよそ観光地とは無縁の集落に二人は入つた。

静かな家並みの間を歩いていけば軒先に出てきた婦人が立ち止まつて二人をみている。

「ここいらでもう一度聞いたほうが良いかもしれないわ

ホテルの従業員に一通り道順は聞いて歩いているが  
四方に伸びた家の間の道はどれも同じ幅である。

「何を聞くの」

「式場よ」

「？」

暫らく歩いて庭に出ていた婦人にラティーフは声をかけた。

「カヴァンナの丘はもつと奥かしら」

「ああ、その先で道が分かれている。右の小さな道を行きなさい」

「ありがとう」

にこやかにラティーフが答えると花だらけの椅子を持つた二人を村人は黙つて見送った。

道は婦人の言うとおり二手に分かれて右への道はちょっとルーサーが躊躇するくらいに鬱蒼とした草で覆われている。

ラティーフは気にならないのか汗を拭きながら歩いていく。

古い石垣や道とは思えない笹の原を越えて木々の茂った中を登り突然足元には丸石が敷き詰められた山道に入る。

「着いた！」

人が手を入れた後である。

「ここの？」

「うん、この先」

丸石の続く坂を登り詰めると山の頂上。

見晴らしの良い丘の天辺は樹木を切り払い視線の先には遠くに山並みだけが見える。

「ここがカヴァンナの丘。カヤンデル山脈に向かって式を行つ。世話人や介添え人が居なくても山が見守ってくれるのよ。手入れされてるからまだ使われているのね」

とラティーフは二つの椅子を短い草の上に並べ花束を抱えて頂上の周囲を回つて一本ずつ置いた。

「これでいいわ」と天辺の上にも又こんもりとした土山の上にルーサーを呼ぶ。

「来て、素敵な花婿さん」

椅子の前に一人で立ちはにかんだラティーフが目を閉じる。

「空に住むもの、地に住むもの。山々の精靈たち。ここに居ますは太陽の子ラティーフ・セヴェール」

「月の子アルヴァー・ルーサー・フォルスストロム」

「空蝉の花と誇り高いカヴァンナに誓つて二人の命をその懷で行ないます」

お互ひの胸に花を飾つてラティーフが唇に指を置く。誓いのキスをするのだなど察して軽くラティーフの唇に触れると電気が走つたように全身が痺れる。

「風の神よ受け取つて！！」

さわさわと吹いていた風がラティーフの声で強く吹き上げ  
投げた花を空中に運ぶように浮かした。

風が薄い雲を追い払い丘の上に強い太陽の光が降り注ぎ  
刈り取られた草が陽を受けて金色に輝き  
草や木がいっせいに葉をこすり合わせ拍手をするよひじきわざわ音  
を立てている。

風の神様の祝福を受けたラティーフは恥ずかしそうに大きな声をだ  
した。

「これで終りよ。立会人はカヤンデル山脈。参列者はお花たち。苦  
労して歩いてきた甲斐がないでしょう?」  
「いや。いい式だったよ」

「『めん。十代の子供じゃないのにね。一度ねカヴァンナの丘に立  
ちたかったの。まあ椅子を返さなきや』

昼も過ぎ空は高く澄み渡りカヤンデル山脈が遠くに見えている。  
来た時よりも身軽になつたとはいえ敷石が無くなつた荒れた道を椅  
子を持つて下りるのはきつい。

丘を降りて家並みが見えると、

「降りてきたよ——」  
と何処からか子供の声。

道幅が広くなり汗と草まみれの一人を夫人が家の前で手に何かを持  
つて待っている。

門の前の前まで一人が来ると——口二口顔の女性が、

「ハイご祝儀だよ。おつとお返しはこの花を貰おう幸せにね」

「ありがとう・・・」

婦人は干物を椅子の足にくくづつけ代わりに椅子の背中の花を抜き取る。

道筋の軒先には老人から子供まで待つていて手に手に鳥の羽やビーエ、紐、干物と

花をとつては代わりに乗せていく。

「わしの分がないじゃないか！」

汚い老人が足つきの箱を手に一人の椅子の周りをうろついて邪魔をする。

「ええい、これを貰おうかの」と干物を抜き取ると満足げな笑みを浮かべる。

「陽のあるうちに帰りつきなされや」

「ありがとうございます」

飛び出してきたばかりの老人は裸足のまま家屋の中に戻っていく。

「これはこういう風習なのか」

と怪訝そうなルーサー。

椅子の背柱から足の支柱にまでくくづつけられた祝いの品物。一見ゴミにも見える。

「そうみたいですね」

椅子を持つ手が貰つた物の重さで震えるがなぜか楽しい。

ラティーフも解らないがヤンパーではカヴァンナで式を挙げたカツ

ブルに

祝儀を渡すのが当たり前らしい。

椅子に積まれた祝儀の品物を落とさぬよう  
来た道を辿り帰路に一人はついている。

曲がりくねった道を抜けて  
コテージやホテルが樹木の間に見え始めると  
さわやかな風が湖から吹きつける。

行きと同じにびっしりと汗をかきホテルの前では  
一人のドアボーイがロビーを走っていくのが見えた。  
椅子を持って出た一人が今度はその椅子に訳の解らないものを乗せ  
て帰ってきたのである。

「途中で捨てればよかつたな」  
くだらない祝儀の数々をルーサーは持て余している。

「あらもつたといない。全部私が貰うわ。でも椅子は困ったわね。汚  
れたし変な匂いもついてるわ。私がこの椅子買い取るわ、あとで支  
配人に謝らなきゃ」

「支払いは気にするな。僕がやる。まずはシャワーを浴びなきゃ話  
にならない。この手でホテルの壁やなんかを触つたらその代金まで  
請求されそうだ」と笑う。

「本当」

残っていた一人のボーイが荷物を持ちましょつかと近づいてきたが  
二人は断つてエレベータに乗った。

まずは草の汁や泥汚れをシャワーで落としてご祝儀にと送られた品  
物を床一杯に広げてみる。

その作業はラティーフが全部担当した。

「何人から貰つたのかしら。たくさんあるわね」と嬉しそうである。

ファンからの贈り物を失くしてがっかりしていたからこの品物はラティーフの気持ちを明るくさせる。

そこへノックの音、テットがドアを開くとホテルの支配人が立っている。

「ごめんなさい、まだ椅子は綺麗にしていないわ」

慌ててラティーフが椅子についた葉っぱを落とした。それは葉っぱの形をした大きな染み。

「そのままで。そのままで結構でござります。いえ椅子のことは後で結構でござります。ちょっとその先ほどボーイが知らせてきたのですが、力タラの箱を見かけたと騒いでいたので。よろしかつたらじっくりと見せていただけませんか？出来ればその箱を写させて頂いてロビーに飾りたいのですが」と、

もみ手を繰り返し真剣な様子の支配人の後ろに三人のボーイがちよちよと中の様子を伺っている。

「カタラの箱とは何か説明してもらおつか」

と椅子に座つて足を組みルーサーは支配人を見る。

「は？ あのお客様はセデルの方ではありませんのか。フォーカス テット様はセデル国には多い名前ですつい・・・」

支配人は神妙に言葉を選んで居るがだらだらと要領を得ない。

「わかつた。そのカタラの箱はニアコブといつマイスターが作つた物だ言うのだな。本物か？」

支配人の説明を大まかにまとめてその後ろに声をかける。  
後ろからボーイが首を縦に大きく振る。

「本物かといわれましても私どもはカタログとかコピーでしかこの目で見たことがないのです。マイスターの創作活動はこの地域の誉れです。ここで作られた新作ならば是非ともこのホテルに飾つておきたいのです」これで一つ他のホテルより抜きん出る事が出来るとその顔は輝いている。

支配人の言葉を受けて老人が置いていった小箱を手にとつて見る。  
確かに細かい細工が要所要所に施され込み入っている。

「そうですか。そんなにすごい物なのですか。私にはその価値はわかりませんから大事にしてくださいなら差し上げ・・・」

ラティーフの言葉を手を握つてルーサーが止める。

「貸し出ししましよう。テット契約書を作つてくれ。貸し出し期間はこちらが必要になったときにでも返して下さればよい」

凛とした声音でラティーフの声を消し飛ばして主導権を握る。

「ルーサー私は構わないわ」

と小声で言つ。ルーサーは何か考へがあるらしい。

「やつてしまえばホテルが金銭的に困つた時や、つぶれたときに売  
り払われてしまつ。貸し出ししておけばむやみに粗末に扱われない  
だろう」

と手早く説明する。

「あ、そうね。あなたにお任せするわ」と納得する。

ラティーフの声は支配人の耳に届いた。

「ヒュイ———」

「へ——、あ、」

一瞬思考が止まつた支配人は何度も瞬きをしてテーブルの上にある縦二十センチ横幅三十センチ高さ十センチに満たない箱を見つめている。

「支配人、何か言つて……  
と、後ろからボーグ。

「本氣でいりますか?」と支配人。

「違う、違う、そうじやないつてば……  
と後ろのボーグ。

「期間は限定しない。貸出料金も無料にしよう。テツト、契約書を支配人に渡してくれ」

にこやかにラティーフを見て手を握り締める咄嗟に出して握つたけれど離したくない。

「は?では見栄えの良い額縁を・・は?いえロビーにガラスケースを置いて展示してもよろしくござりますか?」と気を落ち着けて尋ねる。

「そりそり・・  
と後ろのボーイ達。

「地元の有名人の作品なのだろう。展示の仕方はそちらに任せる。  
こちらに返してもうひとつ破損などせぬよう気をつけられよ」

テットが契約書を支配人に渡すと珍しいものでも見るよう内容を  
確かめる。

「ほう、この印は王家の紋章。は？へ？真にぶしつけなお願い事を  
しましたお忍びであるとも知らずに・・・」

ゆつたりと構えて座っているルーサーに対して支配人は一步後ろに  
下がり

こんな時どんな態度で接したらよいのかいまさらながらに必死で考え  
る。

「かしこまる必要など無い」

と片手を振られて会見は終わつたと知るとカタラの箱を抱えて支配  
人は後ずさりして出て行つた。

「支配人！大事に持つてください！！！」

とエレベーターの前でボーキの声。

「だめだ・・手が震えて力が入らない・・・」

「支配人！」

壁に寄りかかつた支配人を支えエレベーターに乗せ騒がしい男達は  
去つていった。

支配人が部屋を出て行くと、

「出立の時間が来てますが」  
とテット。

昨日の夜から今日の午前中まで全ての予定をキャンセルしている。

二十三年間待つていた日が来たのに感慨深くなるビリジルか不安ばかりが先行して落ち着かない。

「分かつていい、ロビーで待っていてくれ」  
反対にルーサーときたら試験を放棄したのか妙に清清しい顔つきである。

軽く頭を下げてテットが部屋から居なくなると  
ラティーフは慌ててヤンパーの人から頂いた干物以外の品物を綺麗に並べてトランクに詰め込む。

余裕のあつたトランクはパンパンに膨れ上がりそれでもラティーフは満足している。

三年間の競技生活よりも充実した一日、なんと言つても人の笑顔がラティーフの心に残っている。

## 出立 ヤンパー

テットとルーサーの話し声で楽しかった時間に終りが来たのをラティーフは知る。

又一人旅が始まるのである。

「私もここを出るわ。受付で次のホテルの空きを調べるわ。もうナイナーの予約はしないでね」

と明るい声。

選手宿舎を出た時と違い心も身体も軽くなつた。

選手生活は霧の様に消えたけれど

残つたファンは大事にしなきゃいけないとルーサーに感謝している。

「何を言つている。今日式を挙げて晴れて夫婦になったというのに。僕はこれから国に帰らなければならぬ。一ヶ月後良い連絡か悪い連絡が出来るかわからないが君の居場所はテットに解るようにしておいてくれ。すぐに迎えをやる」

ラティーフとの楽しい時間はとうに終つ出立時間も過ぎてこる。

着替えもそこそこにラティーフの手を取り命令するように話す。

「断るわ。遊びは終りよ。あなたは自分の仕事に。私は世間を見て歩くわ。気持ちよく笑つて分かれましょ」

と、ルーサーの冷たい光を讃えた緑色の瞳を見つめながらラティーフはきつぱりと言つた。

ルーサーは握つた手を自分の口元まで引き上げて軽くキスをすると

冷たく笑う。

「君は・・大地の精靈に嘘をつくことになる。祝いをくれた人々にもだ

ルーサーの口から意外な言葉が出てラティーフの胸は詰まる。精靈にだけは嘘をつかないといつのは村人の古い伝である。

「そんな・・だけど思い出作りって言つたじやない。私とても良い思い出になつたと思つてゐるのに。後悔させないで」街に出てきているから街の伝に従おうと開き直る。

「言つておくよ、一ヶ月後何があるうと君は僕の所へ来るんだ。わかつたね！」

冷ややかな目がラティーフをじっと見つめている。

有無を言わさないその目とは対照的に口元は軽い微笑が浮かんでいて一層美しさに凄みが増す。

言い終えると易しく笑つてきびすを返した。柔らかい匂いを残してルーサーはエレベータに乗つて去ってしまった。

ルーサーの迫力に負けて声を出せなかつたラティーフは誰も居ないフロアーに、

「嫌よ。私の人生は私が決めるのよ！」

と言い放つが、

大地の精靈への誓いを破る勇気はラティーフには無い。

無言の威圧が続ていたフロアーは静けさだけが残つてゐる。

一人残されたラティーフは突然優しくなくなつたルーサーに腹がたつ。

「何よ、あんたなんか嫌いなんだから」

「私つてどうして男運が悪いんだろ？遊びじゃなかつたの？通りすがりの男でしきるーラー。なんでおままでみたまう結婚式なんかにこだわるの。おかしいよ町の人もおかしいよ。なんですよ」  
ぼろぼろと悔し涙が流れる。

涙を流しても誰もラティーフに慰めて手を差し伸べてくれる人影はない、フロアには慌しく出て行つたルーサーたちの後を追いボーイの一人も居ないのである。

氣を持ち直してパンパンに張つたトランクを引きずりラティーフはエレベータに乗る。

最後に嫌なことは言われたがラティーフの行動を阻むものは居ない。誰一人残つていないと不思議な開放感がある。

ホテルを出てまだ明るい光と風を感じると気持ちは明るくなる。

「泣いたからかしら」

駅から電車に乗るとカヤンデルの山並みが遠くに見え、訳もなく華やいだ気分になる。

べつたりと人の温かみを感じたのは子供の頃の思い出の中。ルーサーの暖かさは母親の暖かさとは違うけれど

口から出る息の匂い。

何處に手を置いても柔らかい温もり。ルーサーの目を見ながらの会話は心地よかつた。

目覚めるどどつぶりと甘えていたことが恥ずかしくもある。行きすりの男にしては最後の別れ方以外は及第点である。

「私に寄つてくる男つて、ろくでもないのばっかりだわ」と自嘲して笑う。

オババはお前の選んだ男で充分さ、良い男を見つけな・・と励ましてくれたが世の中は奇妙に歪んでいて筋肉の好きな、しかも収集癖の有る顔の良い男と、道端に咲く小さな花よりも大輪の美しい花を望む男とに分かれていると自分の体験からラティーフは思う。

前述はルーサー後述はジリアスクを思い浮かべている。

レイステンを出てから一度も明るい気分にはなれなかつたがなぜか隣で騒いでいる観光客にも親しみを感じている。

「そんなことないわよ。あなたつて地味だけど魅力的よ。ねえねえそう思わない?」

合い席になつた隣の女性達がラティーフの独り言を聞きつけて話のネタにする。

「そ、う、よ、世、中、五、万、と、男、は、い、る、の、よ。あ、へ、ん、で、も、あ、な、た、化、粧、ツ、け、な、い、わ、ね。問、題、点、は、そ、こ、ね。」

「そ、こ、よ、一、化、粧、は、し、て、な、き、や。」

「風、田、上、り、も、こ、ま、め、に、し、な、き、や。」

「き、や、一、そ、れ、つ、て、男、と、一、緒、の、とき、よ、ね。」

「いい男だつたらやるけどね～～、どうせ見えないでしょ。ほつほつ」

吊られてラティーフも笑う。

婦人たちの話を聞いていてそういうものかと納得したが選手生活の中でべったりペインティングされた顔は嫌いである。

ロックイーゼンのファンはラティーフではなく

けばけばしい独楽鼠かゴム人形として見ていると感じていた。

こうして化粧を落としてしまうとアネルと解らないのが嬉しい。

断腸の思いで宿舎を出たときは人の目が気になつてうつむいて歩いていたが

駅の構内でラティーフが大声で歌おうともアネルと重ねて思い浮かべる人間は居ない。

## 暫しの別れ

不安な心境でグリスの空港に降り立つたテット等侍従と違  
い  
雨模様の暗い空の色でさえルーサーには悪い前兆だとは思えない。

なぜなら感謝祭で一目ぼれしたラティーフとトートにいじをつけたか  
らである。

彼女が失恋の痛手を深く負っていたというのもルーサーの追い風に  
なり、

悪く言えば弱みに付け込み優しい言葉で接して彼女の一番の望みを  
適えて結婚式を上げている。

近親者の誰も居ない結婚式だけれど彼女の提案した結婚式はルーサ  
ーを感動させた。

この世で生涯を共にしたいと思った女性と誓い合い、  
これほど喜びを齎すとはルーサー自身思いも寄らない。

評議会の長老達との面接。主要な学問のテスト。

必須の運動能力は古武道の有段者ということで免除されているが別  
段運動能力テストも受けても構わないと思うようになつていて  
たとえ試験に受からうとも落ちようとも

ラティーフが居ると思うだけで足は宙を舞い全ての人々にこの幸せ  
を分けてあげたくなる。

目指していた未来が明るいピンク色にルーサーには見える。

「テット。レイステンにつけるのだ」

薄手のコートの襟を正してついてもいなしチリを払う。

「私どもの試験が済み次第に」

空港から数百メートル濡れたような石畳の横に訪問者を見張るよう  
に石像が左右に並んでいる。

「彼女の居場所は掴めるか

その石像には緑色の苔や灰色の染みがいたるところにある。

「ええそれは・・あの方はカードで買い物をなさいます。レイステンの事務所に足跡を呼び出せばよろしいかと。それとサガモア様からプラテアドに館を借り受けています」

石像のポーズから何かを威嚇していると思うが

手に持つた武器は無く顔と思われる場所には灰色に覆われて仮面を被っているように見える。

「わかった。結果はどうあるとも全力で行こうじゃないか

石像の後ろに木々が多くなるとグリスの宮殿である。

「その通りですね」

いやに明るい前向きな言葉を言つのだろうとテットがルーサーを振り返るがルーサーの足は試験会場であるモラードの屋敷へ足を進めて後姿が小さくなる。

テット等はネグロの屋敷が試験会場。

大聖堂を中心にこれまでの王達が建てた屋敷の数の多さは事前に下調べをしていたテットでも重なり合つた巨大な建物群に尻込みし案内の兵士失くしては試験会場にたどり着けそうに無い。

「ストロム様の心配よつこつちのがやばいぜ」と隣でクリス。

案内係の兵士の足は大またで早い。

セデル国に残してきた二十人が急に羨ましくなる。

石積みの大きな建物は来訪者を脅すように作られていて  
窓枠に掘られた口を開けた形相の獣の顔はいただけない。

暗い空と石像の見下ろすアーチ型の通路を歩くと派手な色の扉が開いてルーサーを待っている。

薄暗い通路から調度品の影すら見つけられないほど明るい応接室に入り

中央階段を登り会議場として使用する大広間に集まつた皇太子候補者達は

正面のステージに立つ長衣纏つた評議委員に迎えられる。

大広間には不似合いな椅子に着地すると

四十代から十代の十一人受験者の間を

軍帽を目深に被つた兵士が分厚い問題集を評議委員の目前で机に積み上げる。

房飾りの多い帽子の評議委員が仰々しく壇上で腕を広げる。

「この場を借りて言いたいことは山ほどあるが。それはやめておこう旨によき結果が訪れんことを、始め」

宝石の国と呼ばれているだけに

広い大広間の壁や柱には色彩豊かな宝石で絵が描かれている。

天井画には四季折々のカヤンデルの山の絵それを支えているのが兜飾りの角。

広すぎて周囲にいる受験生など見る余裕も無く積み上げられた問題用紙を受験生達は書き上げていく。

「容姿はまあまあ・・・」

「得てして人は器量が良いほど中身は空と申しますが・・・」

「そのようですね・・・くつくつくつ」

評議委員が一人がステージの上からこそと下世話な話で盛り上がる。

話題の主はルーサー。

一人の評議員は一族をかけてサガモアの息子を亡き者にしようと私利私欲に走り金銭的に痛手を受けてここ五年は大人しくしていたのはネグロのワルテ。

もう一人も似たようなもので着々と皇太子候補の身上調査をさせて頃合いを見計らい評議委員会を開くことに賛成をした。

受験者の中でも一際評価が低いのがサガモア王の息子、見た目どおりの軽い男に見える。

## フォークステットとコレット

職について居ない女性の部屋とは思えない洒落たアパートの一室にテットは空き時間を利用してくつろいでいる。

コレットといえば考え深げな顔で趣味の良いソファーに深く座りバラの花をかたどったクッションを抱いてテットを見ている。

コレットの柔らかそうな肢体はちょっと運動をすれば引き締まりもつとテット好みになると踏み出す。コレットに運動を勧める口が来ていく。

「悪いわね、あたしガイナス国になんかいけないわ。あなたがガイナスの人間だつて知つてちょっと驚いたけれど。残念ね」

答えに窮して考え込みこにはきっぱりと断るべきだと判断した。

是非会つてくれと言わされて自宅のアパートに呼んで会つている。話の内容がコレットのへの求婚だったのでシチュエーションを考えない男の無粋さにも呆れ顔である。

「そんなに早く結論を出さなくともいいんじゃないのか。ガイナスに興味は無いのかい。いいところだ」

あっせりと断られて少々氣が抜ける。テットの予想では一二三日待つて断られると思っていた。

「無いわ、だつて賭け事禁止の国でしょ」と鼻で笑う。

コレットとの会話を終りにしたくないテットは

入った時から気になつてゐる壁に張り巡らされたポスターの話題に

切り替える。

「IJのポスターの選手が君のお気に入り?」

同じ雑誌を何冊買ったのか光の当たらない壁一面緑色の選手で埋め尽くされている。

「うん・・

とコレットの返事は元気が無い。

闘技場であれだけ声援していたのにコレットは不思議に思う。

明るい答えを期待していたテットはコレットと会話を楽しみたい。  
返答に困ってテットが黙り込んでしまうと  
深い吐息を吐いてコレットが理由を語りだした。

開き直つて何でもよいからテットはコレットと会話を楽しみたい。  
プロポーズは断られた。後は寂しく引越しの準備を始める。

「彼女故障中でね。所在不明なの。こんなことあなたに言つていい  
かわからないけど。今ロッククイーゼンはガタガタよ。責任者が相次  
いで辞めて、議会じや闘技場を閉鎖するつていう議員まで出たのよ。  
でもパパが責任者を新たに選出させる案を出したら承認されて、こ  
れから責任者選びが大変。規約や選手への待遇改善も緩和されるつ  
て。アネルは故障者として解雇されたから呼び戻すつて言つてるわ  
沈んだ口調にアネルへの想いが山ほど込められている。

「君のスターがどこかに行つてしまつたんだ。それでそんなに落ち  
込んでいるんだね」

といいながらこの符号を繋げて仕えないかと考える。  
ルーサーの好きな女とコレットの好きなスターは同一人物。

「もう、ロックイーゼンなんてどうでもいいわ  
ポスターを上目使いに恨めしげに見るがその目はまだきらきらしている。

「本当に？」

ときつちり貼られたポスターを見て聞く。

ポスターの前にはこれでもかと額に入つたたくさん アネルの腕や足。

「極秘情報なんだが知りたくない？」

手持ち無沙汰の指を絡めて視線を落とす、上手く彼女が話に乗つてきてくれる嬉しさ。

「アネルについてなら一パーセントでもいいわ、聞かせて」  
経済学専攻の彼女は全ての物事を確率でとらえる。

コレットはアネル情報に飢えている。

嘘でも良い些細な事でも・・寂しげにテットを見る、このおじさん  
がそんな情報を持つてるわけがないと思つてはいてもアネルのこと  
で会話が弾むのは楽しい。

「半分半分つて所かな。彼女はガイナスに来るかもしれない」  
小さな声になつたがちゃんと聴こえたかなとコレットの顔を見る。  
なんと言つても極秘情報である。大きな声では言えない。

窓からの光を燐燐と受けコレットの艶やかな頬が輝いて見える。  
聴こえたよつだが驚いた目がすぐに疑いの目に変わった。

「冗談でしょう！？後進国よ。車もなければ電気も通つてない。知つてゐる？衛星で見たらガイナスだけは真つ暗よ。そんな文明の無い

国にいくら山脈一つ隔てた国だつていつても、セテルとガイネスと同じ文明だけでも「百年の隔たりがあるのよ」

「百年は言はずぎである。

早口で異議を唱えるコレットを辛抱強く笑いながらテットは見ている。

他国の市民達も共有しているガイネス国的一般常識がコレットから語られるとなぜか可笑しくてならない。

苦笑するテットにちよつと言ひ過ぎたと顔に甘えた表情を作る。  
「「めんなさい。言ひ過ぎたわでもどうして彼女がそんな国にいかなきやならないのよ」  
完全に疑つてかかっている。

「さあ、ちよつと王室関係者に知り合いか居るとか」と笑いながら答える。

「それもヒフティー、ヒフティーなの？」と田は本気だが口元は笑つて聞いている。

アネルを餌にガイネスに入国させゼーデル国に帰さないのではと疑つている。

そんなことをしたら父親を動かして国際犯罪者にしてやると目が光る。

「いやこれは確実な情報だから九十%でいいだら」  
後の十パーセントは遊び分だ。コレットは百%といつ数字を信用していない。

「どういう意味なの、知り合いを頼つてアネルが行くの」

それなら話しお辻襷が合づ。コレットの父親がアネルに連絡をつけようと探しているがなかなか足取りが見つけられないで居る。

「私もあなたと行つてもアネルに会える確率は？」「九十%は聞き捨てられない。

「ヒフティー、ヒフティー。これは個人の努力にいや能力がものを言つ。ガイナスは他国からの人間を選別する。何か秀でた能力を示さないと試験には通らない。王室付きの職業に就くには何段階もの試験がある。後進国だけど受験大国なんですね」

試験、試験、なんでも試験がまかり通る。

帰国したテットですらルーサーの試験中には軍隊用の中級試験を受けたのである。

「それなら私は問題ないわ。学問だつたら少々自信はあつてよ」  
大学院を二つ卒業して、三つ目は卒業確定している。

「君が来てくれるならいろいろな面で優遇してもらえるよう努力しよう。通信も定期的に家族と話せるようにしてもいい。ホームシックになつたらレイステンに帰つてももらつても構わないよ」と、ガイナス国の代表のように微笑む。

テット自身ガイナスの通信システムを甘く見てているがそんなことはコレットに説明する必要性はない。

「ええ、私がアネルに会えないって解つた時には間違いなく帰ることになるわ」「こり笑う。

商談が成立したとテットが手を伸ばすとその手を掴んで胸元まで引き寄せて満面の笑みを浮かべコレットがテットに抱きついて来た。

「信じられないわ！どれくらい待つたらいいの？一ヶ月一ヶ月？一年かしら、アンエルが身体を治して私に会える日は一体何時？一年でもいいわ私はアンエルに会えるのだったら待つわ。待つわ」

コレットの香水がテットを包む。

今だけでもいい優しい言葉を俺にかけてくれと願わずに居られない。

「一年とか長い月日じゃない。すぐには・・無理だがな連れて帰つてもこの女はすぐにガイナスに飽きるだつとの想いがよぎるがコレットから離れられない自分が疎ましい。

コレットはスターに会うためにだけガイナスで暮らすつもりでいる。女房として入国させるのに、入国したらすぐに離婚とは複雑な気分である。

「俺は振られたままか」

自暴自棄で言つて見る。希望は少しでもあつたほうがよい。

「そんなことないわ。だって私が頼れるあなただけよ。そうでしょう？ガイナスって良く知らないけど男女同権よね。軍隊も女性の将軍だしねウフン」

頼りになる父親ですらアンエルの情報を掴めなかつた。テットは得体の知れない男ではあるがコレットに対しても嘘を言つてないと思つている。

## 試験会場 離宮

一千年前まで西の外れのプラテアド半島にガイネス国の人は多く住んでいた。

半島にあつた都市は外敵の襲撃から逃れるため何度も遷都して、西から数えて四番目東から数えて四番目の 그리스に国の要として城を作り国としての名乗りを上げる。

七つの半島のうちがが多く砂漠とも荒地ともどつつかずの東の半島は

山脈から流れる河にもそっぽを向かれ、東の果てから蛇行しいきなり海に流れ込み乾いた土地に注ぐ事はない。

最後まで人を拒んでいた土地は、近代になって水路を確保し池を作り水を溜め

鉄鋼産業が盛んになりモラド半島に住み着いた人々は豊かになった。

そのモラド族選出の王、十九代目の王様が立てた夏の離宮では筆記試験が終わつた志願者達が第一の試験に挑んでいる。

木立に囲まれた離宮裏の広いヘリポートには候補者の数より多いヘリコプターがずらりと並んで物々しさを語つてゐる。

十九代目の王様が離宮を建てたときは内外から戦火の手があがる過渡期で

当時の王様が知恵の限りをつくした防犯設備が施されている。

たとえば広い大広間の壁は六十センチの石壁で作られ表面には窓とわからぬよつ彩色が施してある。

部屋と部屋の仕切りは広く取つてあり警護の兵士が二十人は隠れていられるようにしたりと、

宮殿の外觀も森山の一部のように装つてもいる。

「ここは本当に最高の場所だな」

のつそりと入つてきた軍服姿のバラディールに思わず椅子から立ち上がり敬礼をする。

「将軍！」

へりで到着したのは知つていたが試験会場の広間に入つたとばかり思つていた。

「そのまま、そのまま。任務を続けたまえ」

「長官は地下におられます」

「そうか。三十年に一度あるかないかの集まりだからな」

バラディール將軍は鬼といわれた顔をほころばせてたくさんのモニターを見回した。

古い昔帯刀した兵士を忍ばせていた隠し部屋は

離宮全体に設置されたカメラの画像をあらゆる角度から盗み撮りし監視している。

評議会が招集されガイナースの知識人、要職に有る人間が一同にこの離宮に集まるのである。

離宮を管理するのは諜報機関の長官、バラディール將軍の夫ウルバーノが取り仕切つている。

「フッ。どの部屋の連中も緊張しているようだな」

各個室に入つている候補者達は教授五人に囲まれて彼等の意見から何を成すべきか判断を迫られている。

「そのようですね」

兵士の返事を聞き流し通路に人が歩いていないのをモニターで確かめてバラディール女将軍は隠れ部屋から出て行つた。

「おーー、緊張した

ブルブルと小刻みに身体を震わして息を吐く。

現実にバラディール将軍と言葉を交わすと冷や汗が流れる。

「俺も」

「噛み付ちはしないだろうが、そばに立たれるだけで迫力があるな」と真面目な顔で言う。

「そのうち呼び出しを喰らうのか」

何のために呼び出しを喰らうのかまでは考えていない。

「ん？ 兵士の教育には厳しい人だから」

「出奔する奴がいたって話しだが本当か？」

皆と軽口が叩けて嬉しい。

「国外逃亡だろ？」

緊張でここが何処だかわからなくなつたが、問答が続いているモニター画面をみて安心をする。

「デマ、デマ、居たら見せしめにみんなの前で殺されてるよ。へつへつへ」

肩の力が抜けて物騒なことが口から出る。

「ありうる・・」

男の返事にしんとモニタールームは鎮まり返る。

バラディール女将軍は就任した直後領海侵犯しそうな国々に、空も海も当然陸地も敵軍と判断したら完全な戦争とみなして徹底攻撃を仕掛けろ・・と宣誓文を送りつけている。

ガイネス王国に害をなす船籍、飛行物体、民間機、民間船とあらうと救難信号を挙げても有無を問わず木つ端微塵にするとも・・・そして一隻の例外も無しに攻撃し追い払つた実績がある。

ガイネス国と同じ海に面した国々は一齊にバラディールに反発したがガイネスの出す公開映像と資料の前ではどの国も宣戦布告を出すには到つていない。

一体なぜ将軍がこの部屋に入ってきたか解らない兵士達は切り替わる画面を見ながら途中経過を地下の上官に知らせた。

地下のコンピュータールームでは更に広範囲の映像が集積され分析にかけられている。

「奥方のお出ましだ」

モニターに映ったバラディールを見つけたヤーゴ参謀が笑いながらウルバーノを見る。

大広間の評議委員達に挨拶を済ませて階段を下りる姿が四分割された画面の左下にある。

「あれはもう女ではない」

威厳を出すために伸ばした髭の下の口元が歪む。

あの女の一言で配置転換され半島を一巡してやつと本隊に戻つてしまっている。

夫であるハーフチエスの駒のように動かす。

「そんなことを言つていいのか?この国の守護神だぞ」といいうがらもヤーゴの顔は笑つている。

「人間として良く出来る」出来すぎだとウルバーノは心の中で言う。

まつとうすぎて面白みは無いがそれは隠れ蓑として使えるとヤーゴ

と田で笑い合ひ。

「寛容で神の域に近いな」

ウルバーノの心の声が聞こえたようだ。

「モラードの屋敷には住んでいないのだろう?」

「そうだ妾が三人居るからな一緒に住んでいれば毒を盛つて殺されかねない」

肩をすくめ大げさに言ひ。

「ホウ! そุดだな奥方がここに来たということは、下手な工作は止めた方がいいということだな」

冗談のように聞く。

「そうだ」

ウルバーノの目が笑つていてない。

ヤーゴは次の会合に参加する人間を減らすことにした。

臭氣無いものまでかぎ分けるという将軍である。

懐に入る額が減ると思うと残念だが將軍の登場は危険極まりない。

「誰がてる?」

話題を試験に変える。

「俺の一一番下の弟キケ、そつちは」

「はとこのジンだ」

「はとこか・・薄いな。あまり文句を言われない間柄だな」

良かつたじやないかのうなずきのあと

二人の会話をしている地下のコンピュータールームにバラティール

女將軍の姿が現われ、二人の会話はそこで途切れ恭しく敬礼をし將軍を迎えた。

気の利いた兵士が椅子を持ってきたが將軍はつつ立つたまま二人と同じ画面の前に陣取つた。

大きな画面は左右、正面、壁面四分割されて誰も映つていない。將軍がじろりとヤーゴを見る、ヤーゴ参謀は通路の映像に切り替えると今まさに試験を終えて監視員と歩いている候補者達が映る。大扉が開かれて広間の中央の演壇の周囲に置かれた椅子に一人又一人候補者が着席した。

一段後ろに置かれた椅子に監視委員が座り終えると大扉が閉められた。

皇太子候補の家族等が神妙な顔で壇上を見ている。

若干十六歳から上は四十一歳まで幅広い年齢層の候補者の中で異彩を放っているのはルーサー。

始めて帰国し受けた試験会場では見知った顔一つなく白い顔が緊張して青くなり一層美しさを際立たせている。

「皆、頼りになりそうにないな。本当にこの中から選ぶのか」モニターを見ながらバラディール将軍が感想を漏らす。

隣には案内係の中尉がかしこまつてている。

「帰国組みも居ます、皆勉学に勤しんでいる。優秀な人材ばかりですよ。これによるとアルヴァー・ルーサー・フォルスストロムという男はわが国の古武道の達人です」手元の資料を見る。

「珍しい奴だ。どいつだ？」

古武道と聞いてバラディール将軍の目が輝く。

ヤー「参謀と中尉一人、端から端までモニターを見るが特定できない。

「おいおい、試験が終わり次第勧誘でもするのか。彼らはまだひよつこだ。これから各機関で仕事に就いてもらわねばならん」とウルバーノ。

「研究機関も狙っているから一ヶ月後が楽しみだとヤー」。

「学者ばかりたくさんはいらないぞ」と将軍。

「わかっている。だから三ヶ月は軍隊で鍛えるよう末尾に入れただろ」「快活にウルバーノ。将軍の機嫌取りに軍隊での訓練も盛り込んでいる。

「ン、楽しみだ。国を荷つ若者だ」

将軍の答えに思わずヤーゴ参謀とウルバーノは顔を見合させる。

試験で手一杯の彼らがバラディール将軍の訓練に耐えられるだろかと無駄な心配をする。

「将軍、まさか今日ここおいでになつてゐるとは後継者の件も踏まえていらっしゃるのか」とヤーゴ、

「ふつふつ。その通りだ良い人材はどこも欲しいからな。どの機関も結果を楽しみにしている。ウルバーノお前の愛人の子供は論外だからな。無理強いして入れるなよ

しりつと釘を刺す。

「分かっていますよ。その約束で家を離れたのですからな」話題が家庭内の深い部分に入ってきたのでヤーゴ参謀は口をつぐみ  
一步離れた。

## 試験結果

革張りで鉢を打った椅子はすわり心地が悪い。外観と内装の違う建物には何度もお田にかかつたことがあるがここはその中でもダントツである。

複雑な通路、窓の無い部屋。かと思えば丘を一個くりぬいた大広間。変色して色が変わったようなタペストリーは誰が見てもおかしな色合いである。

豪華な陳列品が壁をくりぬいて飾られているのも違和感がある。この違和感が何に似ているかを考えていると一つだけ当てはまる場所が浮かび苦笑してしまう。

もうすぐ発表だというのに周りを観察する余裕がルーサーにあるのは皇太子の地位に執着していないから。

さつきまで教授連とガイナスにおける社会動態と社会文化としての人間行動、人間社会形成、それを総合政策に組みこみ、歴史社会的視野もいれ、ガイナス世界情勢を楽しく論じていた。

個室を離れ冷えた頭の中に彼女の顔が浮かぶと冷たくなった手に血液が通い温かくなる。

視線を壇上の後ろの窓に向けるルーサーの意識の中に鮮明にラティーフが浮かび上がる。

笑った顔も怒った顔も下から見た顔も、後ろからは・・・。  
せつかくのラティーフの顔が見えなければ何の意味もない。  
彼女が居れば生きていける、と開き直っている。

テット等には試験後会えるかどうか解らないが  
どんな結果になろうとも最善は尽くしたと清清しい気持ちである。  
隣の候補者と視線が合わないようテーブルから窓へ、

木々の枝が風でたわむのを見て心を開放する。

窓の外は少し色づいた枝葉が闇から現われたように息づいている。

評議委員長が奥のドアから登場し壇上に上ると大広間に居る全員の目が一点に注がれる。

「お待たせしましたな。今日の予定ではこの試技のあと宮殿にお歸りいただくのだが。明日まで引き伸ばしても結果は同じという意見が何人もの口から出ての、幸いにも関係者は一同揃っているという幸運にも恵まれてるので協議の結果を発表したいと思う」

水辺の鳥を見ているように眺める。

「近親者の方々、良かろうかの。誰か異議のある者がいたならば言つてもらひと有り難い。無ければ話を進めるが」とまた心構えが出来たか見回す。

「居ない様じやな」

大広間は静まり返っている。

「では厳正な試験の結果をお知らせする。十一人の評議員と三十人の学者の見解を述べさせてもらおう。

次の皇太子は」

「アルヴァー・ルーサー・フォルスストロムに決定する」

意外な名前にルーサーは緊張した。

「性格、意欲、社会性、価値観、などの適性検査をした結果ですじや」

持つたファイルに目を落とし疲れた顔で候補者一人ひとりを見るよう会場を見下ろす。

「彼は奇しくも王の第一子であるが事情があつて嫡子にはなれなかつたが素晴らしい知識と教養、健康な身体を持つた青年である。特に秀でていたのが軍事問題と外交に優れた見識を持っている。これ

からは王の下で実務を経験し知識を無駄にせず活かして頂きたい。  
それではそれぞれの評議員から総評を頂こう

ため息をつく候補者に付き添い家族が慰めを囁いている。

演壇の評議員の話など聞かずにこの場を立ち去りたいのはルーサーも同じである。

が演壇ではそれぞれのこの国の機関の長が個人名を出して勧誘を始めた。

この場所に居るだけで高い給料は約束されよいポストも保証されている。

その役職に不満な者はその勧誘を断つても構わないと声高々に言わると

囁き声が消えて新たな仕事の場を設けられてほっとした顔の候補者達が

長い緊張から解き放たれて笑顔がこぼれ始める。

ただ一人緊張が解けないルーサーは目を見開いて壇上の評議委員長を見つめた。

壇上の評議委員長はルーサーがドタキャンをしたドラドのブライズである。

候補者全員がガイネスの主要機関の就職が決まると大広間は和やか雰囲気になった。

そこへ王も現われて壇上からルーサーを呼び横に立たせ  
あらためて広間に居る全員にルーサーを紹介した。

広間に居る全員付き添いも含めて六十人の拍手がルーサーに送られた。

「絵本から抜け出たような顔立ちね」

「王様の顔にも似てらつしやるけど綺麗過ぎない？」

「絵画のモデルをやれそうだ」

「彼がガイナスの顔になるのか。いいんじやないか血なまぐさいイメージを払拭できて」

「そうか。そういうた戦略か。これからは無骨な顔の政治家は出すべきじゃないな。クリーンで美しいトップで行けば、変わる外交も多いぞ。そうは思わないか？」

壇上から候補者のひそひそ話が全部聞こえ勝手な憶測で話している彼らに嫌悪感をルーサーは覚える。

顔の綺麗さで外交問題が解決したことなど無い。

この国が成功しているのはバラディール将軍を悪者としそれを宥めて運営しているというポーズをとっているから諸国は納得しているのだ。

力を見せ付けるバラディール将軍と外交で駆け引きをする他の機関の長官達。

王様は道を示し國の顔になるそれが勤めである。

晴れて皇太子に選ばれて命を狙われれる危険度は大幅に減つたけれど一つだけ心配事があつた。

捨て鉢になつて後ろ盾を頼むつもりだつたドラドのブラーズとの会見。

ただ一人会つてくれるという人物だつただけに皇太子に選ばれてもテットや他の従者達に顔向けが出来ないと壇上で悔やんでいる。ドラドのブラーズと王の間で握手を交わす際

ルーサーの気持ちを知つてかよそよそしい態度のドラドのブラーズ。

父親の王も何処となぐぎこちない態度でルーサーに接しているのがわかる。

王の態度の冷たいのは許容範囲、仕方がないとルーサーは思つ。

これまでルーサーのために多額の金が王の懐から出ている。皇太子としての資質を育てるためにカリキュラムを考え逐一指示を出し続けているが

本物の顔を見るのはこの日が始めてである。

メリハリの有るいい声だ・・ガルーサーの印象。

大広間の雰囲気は一変した、ルーサーを軽蔑したような視線は少々残っているが皇太子に選ばれなくとも重要な機関で働く候補者達の握手は十二人の評議員より白々しくは無い。

「始めてまして、よろしくお見知りおきを」

「始まつたばかりですが目を通していただくものがたくさんあります。後ほど使いを私のところへ・・末永くよろしくお願ひします」

一通りルーサーと全員の顔合わせが済むと会はお開きとなつた。席を立つ候補者達の後を追つてルーサーも壇上から降り

ヘリポートに向かった。

早速グリスの宮殿で皇太子としての仕事が始まるのである。

地下の監視システムを駆使して候補者の顔色や評議委員の表情を見ていたバラディールは、

「なんともはや、先行きのわからない人選だな。人材が居なければ評議会を開かねばよいものを。王の健康とて明日明後日にはどうかなるといった病もないのにの」

と正直な感想を洩らす。

案内係の中尉が一拍置いて言葉を挟むヤーゴ参謀は閉会と共に部屋を出ているし夫ウルバーノは聽こえないフリをしているのか違う画面を見つめたままだ。

「ネグロのイシアル氏の長男ロレスがせつづいたようですよ。ネグ

口は四人候補を挙げているから、上手くいけばと思われたのでしょうか

「う

「ロレス・・ああもつと外交政策の幅を広げるといふるさい奴だな。奴の子供だとまだ年は若いだろ?」

「本人が候補として出して難関を突破したのもロレスでして」「自分で国を操ろうと思ったか。ふん!なかなか骨があるじゃないか。ネグロも隅には置けぬな」

「そのようですね」

ありきたりの返答しか中尉にはできない。

バラディールが顔の向きを変えウルバーノに視線を移すと、

「よし!評議会は滞りなく終わった。撤収だ。ウルバーノ新しい皇太子の警備チームは出来ているか。メンバーのリストをよこせ。それから一年間は皇太子の行動を私にも知らせるように。手ぬるい報告書を回すと怒鳴り込みに行くぞ」

気分良く腸から声を絞り出す。

「バラディール・・ここは私の持ち場だその威圧的な態度は止めてくれないか」

バラディールの声に部屋に居る兵士達がびびっている。

氣にも留めず、

「ウルバーノ。悪いな私はお前を命令する立場に有る。返事は」  
なお口元に微笑を浮かべてウルバーノの答えを待っている。

「わかりました。すぐに仰せの通りに」

「ん、それでは王に挨拶に行つて来る。お前はついてくるな。さつさと兵士を連れて撤収しろ。そしてもう一度一ヶ月前からの試験内

容をチェックしろ。急いでやれ。期限を切られたいか？  
部下を使うときは何時何時までとかつちり言い渡す。

傲慢な上官に逆らいつもつなど無い。

「いやいい、メンバーを総動員してやる。一週間以内には報告書が君の机に乗っているだろう」

一応持ち場の責任者はウルバーノであるが横槍を入れられるのには慣れている。

將軍が去つていいくと恨めしげに將軍のいた場所を見てしまつ。

「鉄女め。評議委員長と評議委員を二名呼び戻せ！すぐにだ。あいつ等を半島に帰したら連絡を取るのに時間がかかる。ヘリのパイロットに離陸許可を与えるな。急げ！」

「長官！すでに三機飛び立つております！」

「誰だ、呼び戻せ！」

ウルバーノの出した大声が地下通路に空しく響き渡る。

大都市レイステンから離れ、

南東のヤンブーまで旅行しヤンブーから  
カヤンデル山脈を右に見て西へ西へと千二百キロの移動をした。

高級ホテルはやめて格安の宿泊所を探し出しても寝泊りし旅を続け  
ている。

ラティーフはほとほと困り果てていた。

シャプイ、ヤンブーまではカヤンデル山脈が常に見えていたのに  
西に行くにつれ山裾野は荒地になりカヤンデル山脈から距離を置い  
て人々は暮らしきを嘗み故郷の山並みは見えない。

出発地バッファローに戻り旅を始めればよかつたと小さな駅で  
くたびれたトランクを椅子代わりにして観光客の流れをぼんやり見  
ている。

オババは人の多いところには何かある、お前の知り合いだつて居る  
よ、山を下りてよい男を見つけて暮らすのさ。と、言つていた。  
その知り合いはたぶんラティーフが幼少時に居なくなつた母親のこ  
とだと勝手に思つてゐるが母イトウイはもちらんのこと村の名前を  
知る人にも今だに会つて無い。

季節労働者は大都市の周辺に集まるらしく景勝地を売り物にしてい  
る観光地には近辺の働き手でまかなつてゐる。

これ以上西に向かつても無駄ではないかとラティーフは思い始めて  
いる。

百キロ戻つてオーケシユストのように車で荒地を渡りカヤンデル山

脈の麓の町バッファローに戻りたい。

山から下りてきたラティーフを親切にしてくれたバッファローの市場の人に会いたいと痛切に思っている。

相談する相手もなく駅舎に入る人の流れを見つめていると観光客とは少し雰囲気の違うスース姿の男がラティーフに近寄ってきた。

「ラティーフ・セヴェールさんですね。お迎えに上がりました。車まで来てください」

一瞬何のことやら解らず目の前の男が誰だったか思い出そうとまじまじと男を見た。

まったく見覚えが無い。

「迎え・・ルーサー？」筋肉フェチの美男子の名前が浮かぶ。

男は黙つてラティーフが立ち上がるのを待つている。

「私。その。ラティーフなんとかじゃないわ、人違いよ。他をあたつて。ほらあそこ一人旅の女性が居るわきつとあなたの探ししているよ。行つて訪ねてみるといいわ。ほら動き出した。急がないとある人電車に乗つてどこかに行つてしまつわよ」

咄嗟に立ち上がって嘘をつく。

にこやかに愛想笑まで浮かべて教えてやつているというのに

男はラティーフの言つた女性の方へは一度も顔を向けない。

男が何も言わないのでラティーフも男を無視し電車の時間を手帳で確認する残念ながらラティーフの乗りたい電車はずつと後で発車する。

男はさつとトランクを握つて歩き出した。

その速さにラティーフは慌てた。

「待つて。返してそのトランクには大事なものが入っているの。待つて！」

といつている間にすんすんと男は駅舎から離れて角を曲がる。

「泥棒！」と言つたときには男の姿は駅前には無い。

早めに泥棒と叫べばよかつたと思いながら男の去つたほうへラティーフは走つた。

角を曲がつた所にまだ男が居れば泥棒と大きな声で叫ぶつもりだ。

バンと何かが締まる音が聞こえ行き交う観光客を避けて角を曲がれば車が一台、

後部座席のドアを開けて待つている。男はない。

「車のトランク開けてよ。私の荷物を返して！」

と後部座席に顔を突っ込んで運転席に叫んだ途端ラティーフはお尻を押されて後部座席に転がりドアは閉まり車は発車した。

反対側のドアに手を置いて振り返るが誰も居ない。急発進に両手を背もたれを掴んで踏ん張る。

「誘拐よ！何でこんなことするのよ。降ろしてよ。私はあんたなんか知らないのよ。人違いよ。人違いだつてば」

後部座席から運転席を隔てた強化プラスチックをガンガン叩いた。もちろんドアも何度も引いているが内側からドアは開かない。

「お静かに」

運転手が振り向きもせずにラティーフをたしなめる。

確かに騒ぎ過ぎだと思うが白昼堂々と婦女子がさらわれたのである。

大袈裟に動いていれば例え車内とはいえ歩道を歩いている通行人が不審に思つて

通報してくれるかも知れないと暴れているのである。

「人違ひだつていつてゐるでしぇう聞こえないの！耳が無いの？」  
と大声でわめく。」の声も外を歩く観光客に聞こえてほしい。

「聞こえていますよ。ラティーフ様。選手時代は私もストロム様と一緒に見ていましたから」

選手だつた頃のことを言われてびたりとラティーフの動きが止まる。

「違うわよ・・」とラティーフの反論する声も小さくなる。  
一瞬、腹立たしい思いが沈静化したがこのままでどこか解らない所に連れて行かれてしまう。

新たな案が頭に浮かぶ。ラティーフにしてはかなり絶好調の案である。

「ね、この車は何処に行くの？良かつたらバッファローまで行ってくれない？あそこで、荒地を越えるのが難しくって」  
少し声のトーンを落とす。頼みごとである。

「この車はガイネスに行きます」

目的地は空港だがそれを言えば後ろの客はもつと暴れる恐れがある。

「ガイネス？だめよ私いけないわ。パスポート持つてないの。残念ね。だから荒地を越えてちょうどお礼はするわ。私これでもお金は持つているのよ。お願い！」

ガイネスはバッファローのはるか向こう側、行き過ぎである。  
でも途中で降ろしてもらえるならとそれもありかなと思つ。

ドアを開けてもう一つ実はバッファローまでに考えればいいのだ。

運転手はラティーフを無視し運転を続いている。

車は家並みを通り抜けて山間に入り細長く開けた土地に来ていた。

「少し揺れますか・・」 ちょっととの間クリスは考えたがラティーフの筋力ならシートベルトはいらないと判断した。

滑走路は車道から直接入つてもなんら問題の無い個人の所有地である。

丁度その滑走路の真ん中に貨物機が一機、荷物の積み降ろし用のカーゴドアを開けて待って居る。

「ここは何処なのよ！」

両サイドと後ろの窓ガラスに顔をつけて人の姿を探すが綺麗に刈り込まれた丘が見えるだけである。

「つるやい女だ。

可愛いルーサーの頼みでなければこんな誘拐じみたことなどしたくもない。

「航空機の後部でござります。車は固定しますから」心配なくむかついた気分でも感情を押し殺した声はだせる。

「トーン、トーン」と車が斜めになり貨物機の中に入る。

エンジンを止めるとき機内から人が出てきてタイヤにチヨーンを巻きつける。

次に足元から別な振動がブルブルと伝わってくる。

カーボードアガ下りると車内は暗くなり逃げ場がなくなつたラティーフは

座席に座る以外やるべきことがなくなつた。

この中で叫んでも暴れても疲れるだけである。

こうなつたら腰を据えて

運転手の同情心を煽つて途中下車を頼み込む以外方法はない。

「あなたねこれがどうこうとかわかつてやつているの？拉致よ拉致はね犯罪よ。これであなたの人生に最大の汚点が付くのよ。でもまだ今なら止められるわパイロットに言つてバッファロー近くで降ろしてよ拉致は罪だけどさらわれた私が届けなければ発覚しないし。あなたの汚点も無くなるわ。ねつ」

運転席と後部座席の間仕切りは

下ろされないまま運転手の声だけがラティーフの耳に届く。

「これはストロム様の奥方様を迎えて来た車でございます。あなた様がストロム様と結婚式を挙げた花嫁であると承知しています。お待たせした数週間の間に家族、友人、知人にその旨を連絡なさいましたか？出来れば到着後で結構でござりますからきちんと連絡を取ることをお勧めいたします。ああ、今でも構いませんよ。座席の肘掛けを出していただければその中にお電話がございます。しかし正確な情報を伝えなければ到着後がよろしいかと。ご家族の方もガイネスがどんな土地で、住まう部屋のことなどお聞きしたいでしょうから見てからでも遅くはないと思いますよ。奥様」

拳を握つてハンドルの端をたたく、

流浪していた時に身につけた抑えた声音で後ろの座席の女をたしなめる。

まったくルーサーはこの平凡な女の何処が良くて慌てて式など挙げたのか理解に苦しむ。

同じロックイーゼンの選手ならもつと可愛いのやら美人を選ぶとクリスは思う。

しかもルーサーに惚れている様子はない。

将来ルーサーが王になりそのときに何人の妻が居てそのうちの一人が妃に選ばれる。

その一人に後ろの女がならないとは限らない。

運転手の言葉にその場の成り行きで式を上げたことをラティーフは悔やんでいる。

ふられ続けて生きる気力も無くなり落ち込んでいたときにかけられた優しい言葉に小躍りして式を上げている。

後のことなど何も考えなかつた。ただあの時はおままでいつに式だけを上げたいだけ。

山の祝福を受けて沿道の人々のお祝いも貰い  
ラティーフにとってあの口は本当に幸せな一日だつたのである。  
夫となるルーサーとの生活など微塵も考えない自分が幼子に見えて恥ずかしい。

後ろの女が静かになるとクリスはこの機体を選んだことを呪つた。  
手近に合つた古い輸送機で西側を回り、プラテアド半島に上陸するには気流の具合も考慮しなければいけないと身を持つて知つた。  
偏西風で知られている山と海の狭間は気まぐれな子供が空き箱にガラス玉を入れて乱暴に振り回している。

もちろんガラス玉はクリスで内臓と脳が入れ替わった氣分である。

八時間貨物機の中で揺られプラテアド半島の真ん中に位置するオコドナ基地空港に着陸しそこから四時間車で移動し大きな古びたホテルの前でラティーフは降ろされた。

「こちらでござります」

クリスがトランクを持つて古い大きな玄関に入るのを見てラティーフは逃げ出したい衝動に駆られる。

「幽霊屋敷みたい」

奥からラティーフ様と呼ぶ声がして足早に広いロビーに入ると上品な紳士とクリスが話しこんでいる。

ラティーフの姿が見えるとクリスは軽く会釈をしてその場を出て行つた。

「ちょっと何か説明していいよ」

とラティーフの声だけが古びたドアに吸い込まれる。

「お品屋さん」から「やせこます」とこの紳士の後ひかり一階に上が  
る。

階段を登り右に曲がった突き当りの部屋に通された。

「エリはなんていう名前のホテルですか？私支払いはカードなんですが。現金で支払いだとちょっと待って貰わないといけないんで

これまでの経験では先にカード払いを言っておかないとまずい。

「この屋敷の名前は地名でイエフゲニーと皆は呼んでいます。失礼ながらホテルではありません。そのところお間違いのないよう」とラティーフに諭すように教える。

「え、た？ てあるの？」

「ルーサーは皇子になつたのですか？」

寝物語に二人はお互いの情報を交換している。

「はい。見事難関を突破されました。喜ばしい事でござります」

ダッドと名乗る紳士は丁寧やかにイエフグ一一周辺の名称由来を述べ丘を越えた向こう側・・海側とダッドは言つたが実際には近くに海はないが、海側は復元された古代の遺跡がたくさんあると教えてくれた。

そして海側には港がありたくさんの船も停泊していることも。

お茶の用意をしてダッシュが去つていいくとトランクを開けてガイナス王国の地図が載つてあるパンフレットを出してダッシュに聞いた地名

を探したが何処にもその地名は見つけられない。  
大きな首都名と地方の名前か半島の名前かも解らない。

そこでふとヤシで検索することを思いつき部屋を見回すが古い窓枠のそばには重たそうなカーテンと隣の続きの部屋には頑丈な机と椅子、滑いが磨きぬかれた燭台と家具類、奥には天蓋付きベッドが一台とが置いてあるだけで電気ポットや電話の類は見当たらない。

高い天井を見上げればシャンデリアが下がっている。

「電気ぐらに通ってるよね・・・」とスイッチをドアのところで探したら見つかってほっと一息。

翌朝、幽靈屋敷周辺の地図をダッドに書いて貰い、夜通し逃げ出す算段をしていたラティーフはあわよくばその足で逃げ出すつもりでいる。

服装は変わらず選手時代のパンツスース。

ラティーフの頼りとしているのは首に下げたこのカードのみ、肌身離さず持っている。

「遠出をなさいますなら、申し付け下さいませ。車をお出しします」「いいのいいの。私車の免許持つてないから」と断り真面目な顔のダッドを幽靈屋敷に残して足早に出かける。

ラティーフの姿が見えなくなると、ダッドはすぐさま階段下の小部屋に入り衛星から出ているシグナルをキャッチした。

発信機はラティーフのカードに貼り付けてある。装飾品を何一つ身につけてないラティーフのカードにつけさせもらつた。

ダッドの視線の先にはレーダに浮かぶ点滅。点滅はラティーフが消えた方向ではなくて海側の丘の中腹で止まっている。

「変わった経験のご婦人だな」

右手でレーダーの解説をして左手では首都 그리스のコンピューターにアクセスしラティーフの情報呼び出した。

ダッドは王、直々の頼みで屋敷の警護職に就いている。

クリスが連れて来たあの女性は一箇所に留まれない性格らしい。ダッドに見張られているとは知らずラティーフは地図を頼りに海を目指して歩いているが一時間歩いても一時間歩いても海の匂いは漂つてこない。

「遺跡ばつかじやない」

歩けど歩けど大きな石済みの壁や柱、植物の根に持ち上げられた巨  
大な顔。

植物が切られたのは最近の事らしく開けた空間にはその大石をバッ  
クに写真を撮つている観光客が居る。

そこから三十分ほど歩くと遺跡と同じ柱が取り巻いたホテルが点在  
してラティーフを驚かせた。

ホテルの中を覗けば中には売店があり観光客で賑わっている。

意を決して観光客を捕まえ海はどこかと訪ねると「日前に港につい  
て移動しているからわからないと答えが返ってきた。

ならば地元の人間もしくはホテルの従業員にも尋ねたが、七百キロ  
離れた所に港があると教えられ、  
気が遠くなり周囲の状況を知る必要が有ると幽霊屋敷へと戻ること  
にした。

夕方の六時を過ぎると辺りは暗くなり

たくさん遺跡群が黒々と押し迫つてくる。何処を見ても街灯の灯り  
が見えない。

時々遠くで観光客が懐中電灯で照らす灯りが動くのが見えるだけである。

ラティーフは大きな高い石垣の前で足を止めた。

昼間明るい時にはこの石垣からジャンプして飛び降りたのだ。

左右を見てもこんもりした真っ黒の茂みで

石積みの間に指を入れて登ることはできるが石の間からは水が染み出で

スージが汚れるので登るか登らないか迷つている。

ダッドは止まつた点に向かつて車を走らせた。

おおよそ考えられない位置にその点は走つていたので車を止めて声をかけてみた。

「もしラティーフ様がそこにおりいで困つておられるなら。この灯りの元によつてきてもらえませんか？」

石柱が暗闇の中白く浮かび上がり足元の草の上を風が通り過ぎていく。

そこへ石の上をぺたぺた歩く足音が近づいてきて  
車のライトの前に上着を片手に持つた勇ましい格好の女性が現われた。

「靴はどうされましたか？」

靴はウエストのパンツの間に挟んである。

太ももまで巻き上げたパンツの裾を下ろしながら

なんといつて言い訳をしたらよいかあれこれとラティーフは考えた。

「『めんなさい。迷つてしまつたの』

まずは謝ることのが先決である。

「やうでしょ、『じらこのよつこじらは街灯の一本もありませんからね。明るこつちに帰宅されたらこのよつこじらの場所を歩かれずに

済みますのに」

ダッドはラティーフが現われた方向を見た。

真黒い空間が壁のように見え途中から星空に変わっている。  
開けられたドアから座席に腰を沈めて  
もう少しダッドが迎えに来る時間が遅ければ  
一人で帰宅できていたのにと愚痴愚痴と口の中で言い分けした。

トランクを置いた幽霊屋敷の方向へちゃんと戻っていた自信はある。  
ところが焦ったラティーフが最短距離と選んだ道は突然切れてしまつていた。

少し足場の悪い場所を勘に頼つて飛んで迷い、陽も暮れて  
遠くが見えないのを理由に安全策で足場の良い場所を探していたら  
車の音。

車のヘッドライトが照らした箇所を見て幽霊屋敷への最短距離の道  
は諦めた。深い谷が口を開けていたのである。

気まずい雰囲気で幽霊屋敷に戻ると幽霊屋敷に相応しく  
たくさんのランプの光がラティーフを待つている。

うつむき加減で階段を上る。

館の扉の前で足を止める以前にも嗅いだ事のある優しい匂いが漂つていてる。

扉を押し開けるとオレンジ色の光の中にルーサーの姿が見えた。

「やあ。 来てくれたんだね」

聞き覚えのある声に苦笑する。

「皇太子になられたのでしょうか？おめでとうございます」  
祝いの言葉を言つては見たけれど少ない明かりでも  
ラティーフのスーツの汚れはしっかりとわかる。

ルーサーは古めかしい絵画の中から抜け出た白いシャツブラウスに  
織りの細かいベスト姿で  
美しい微笑を浮かべてラティーフをまじまじとみている。

あなたねえ・・と文句を言いたかつたけれど  
灯りの下ではジャケットの汚れや指先の草の汁がこの場にそぐわな  
い。

「シャワーを浴びたらどうだい」

笑いながらルーサー。

疲れきった顔に半分濡れたジャケット

横縞に汚れた皺のあるパンツ。靴だけが泥汚れから逃れているが裾  
で隠れて見えない。

「そうしますわ」

かきあげた髪の毛の中に小枝を摑む、引っ張り出すとせまいと壊れ足元に落ちる。

迎えに来てくれたお礼を言おうとしたダッドを探すが一階の広間にダッドの姿は見えない。  
まずは昨日の夜お世話をした部屋に駆け込むとバスルームに飛び込んだ。

「お湯出るわよね?」蛇口をひねれば色のついた水が出るのを期待して回す。

最初は冷たい水が出てすぐに温かいお湯がシャワーロからあふれ出てきた。

ばさばさと髪の毛についた枯れ草や土汚れを洗い流してバスルームを出ると

良いお茶の香りが部屋中に漂っている。

いつの間にかラティーフがバスルームに入っている間に  
広い部屋の窓辺には一脚の椅子とテーブルが置かれティーカップと  
サンドイッチが並べられている。

部屋中央のソファーには百年も前からそこに座っていたかのようルーサーがくつろいでいる。

「お茶は? ダッドが軽食を用意してくれた食べるかい?」

「頂くわ・・運動しておなかが空いてたの  
実は朝食後何も口にしてはいない。」

椅子に座るとすでにティーコゼは外してある、先にルーサーが飲んだようだ。

両手をサンドイッチに伸ばしたいのをじりえて

ルーサーに似合いのカップを手元に引き寄せ口にあら。

暖かいミルクティーが身体中に染み渡る。

「古い遺跡ばかりで面白くないだろ？」

うつとりとはにかんだラティーフを見る。この口が来るのを心待ちにしていた。

やつと食べ物が口に出来て思わず笑みが漏れる。

「この土地の説明を聞いてて驚いたわ。四千年前からの遺跡だつてね、ここもそんなんでしょう？」

二個目を食べ終り浅ましく見えないかしらと三個目はルーサーの目がテーブルから外れるまで待つてそっと手を出す。

「ここはまだ新しいよ六百年前の建物を改装した」

ラティーフの優しい茶色の目を見ていると心の中の氷柱が溶けてなくなる。

三個目はもう口の中には無い

四つめに手を伸ばしたいがルーサーが見つめているので

身体を動かすことが出来ない暫らく一人は違つ思いを抱いて見つめ合っていた。

ラティーフの頭の中ではこれまでのことがぐるぐる出てきてはきちんととした言葉にならずに気持ちの奥に押し込められている。

ラティーフは幽霊屋敷から遠く、できるだけ遠くに行くことだけを考え歩き回っていたのだ。すなわちルーサーの元から逃げ出すことだけを考えている。

港があるという北に向かい港を見つけられず、連れてこられた時の

飛行場も探し出そうと試みた。

大きな観光地だとラティーフは思うが観光客専用の大型バスはホテル横の駐車場でたくさん見かけたが他の交通手段が無い様で自家用車の類が一台も見当たらない。

これまで旅してきた明るい看板の土産物屋、軒を並べるホテル街・観光客を担当てに開いているカフェも、砂色の遺跡を復元したホテルの中に作られ見渡す景色の中には近代的な建物は皆無。レイステン市とは様式美の違つた建物群が連なる様は廃墟である。

サンドイッチを食べ終わると気分も落ち着いてルーサーを観察する余裕も出てきた。

「ねえ。カヴァンナの丘の事は忘れて欲しいの。あれはほら誰も皆子供の頃やりたがる遊びみたいなものよ。立会人も居ないし、契約書も交わさない結婚なんて有り得ないでしょう？」  
確かに年齢は私が上だつたわとちょっと上から田線の言葉使い。

「君の村でも同じ事が言える？」

又してもラティーフは言葉に詰まる。

村のしきたりやおきてをつまびらやかにルーサーに語つている。

ほんの一世代前まではカヤンデル山脈の麓では普通の結婚式。立会人はカヤンデルの精霊たち介添え人は野に咲く花々。祝うのは風と光あの日はその全てが揃つていた。

余裕の笑顔でルーサーは紅茶を飲み干す。

「それに、君は妻ではない。僕が皇太子に選ばれたから妃になった。  
これからはそのつもりでいてくれ」

婚姻の証明書はヤンパーの教会で貰っている。

セデル国教会もカヤンデル聖教会と同じ紋章を使う、これがガイネスに入国するには必要だつた。

空になつたラティーフのカップにティーポットのお茶を注ぐ、この幸せな時間を望んでいた。

「今日はダッドに言わせると、歩ける場所ではない危険な所へ行つたらしいね」

驚いてカップのお茶が波立つ。

逃げて失敗したことを言つべきか、一連の浅はかな行動が負い目になり怒りが湧いて来ない。

「そうちしら？ 変わつた石を見たくて中に入ったのが間違つてたのね・・・」

ルーサーの視線を外して嘘をつく。

花びらがこぼれるように微笑を浮かべているルーサーは美しき。

ラティーフは今日の経験で見張りの人数が増やされたり外出禁止になるのが怖い。

連れて来た運転手もダッドとか言つ男も接触しているガイネス人は皆丁寧に扱ってくれている。

暴力や暴言で迎えられてもいしないしひどい目にあつてもいらない事から逃げ出すのは暫らく様子を見て行動することに決めた。

外した視線を恐る恐るルーサーに戻して、

「大勢居るのよね妃の人つて。私もその一人？」

と小声で聞く。

# ルーサーの言つた。妻から妃？

妻とか妃とか呼ばれる女性がこの国ではどんな立場で語られるのかラティーフにはよくわからない。

妻と妃と言葉は違うがただの王のハーレムの一員ではないかとラテ  
ィーフは思う。

黙つて笑つているルーサーの顔は肯定も否定も読み取れないが  
何も言わないので答えたとラティーフは確信した。

ルーサーに幾人もの妃が居て彼をとり囲んで居る姿を想像をすると

きっとルーサーの周りはたくさん女性達の柔らかい肢体と綺麗な

知的な美女も居るはずだ。

サーの興味が移る。

レストランでも若くて綺麗な女性はもてはやされたせいかくあの場所から離れたのにまだそのループからラティーフは逃れられないのかと氣落ちする。

かと自分を卑下してみる。

ルーサーの嬉しそうな笑顔を見ていると、た・た・り・ねと思つ。

「疲れただろう顔が青い、横になつたらどうだ」  
ルーサーは優しくて素敵だ。

「そりするわ

横になつて作戦を練り直そ「」のまま「」に居ても私は幸せになん

かれない。

私の理想は優しい夫とたくさんの子供達。

ルーサーがラティーフの横に立ち手を差し出す  
草の染みの残つている指先をルーサーが支える。  
ラティーフの手を握りベッドルームへ。

ちらちら揺れ動くランプの光に浮かぶルーサーの顔は  
次元の違う住人を見ている不思議な気分にラティーフをさせるので  
ある。

広く大きなベッドの真ん中で  
ラティーフは身体を横たえている。

疲れているが妙に冴えた頭で隣のルーサーのことを考えていた。  
ルーサーはルーサーで赤ん坊でもあやすように  
ラティーフの手を握つたり胸を叩いたりして眠りを促してくれてい  
る。

「元気だつたかい」  
枕もとの灯りを小さくしラティーフを気遣う。

「ええすこぶる調子は良かつたわ」  
ルーサーに旅の行動を聞かれるときつぱり出でていた言葉も連な  
り滑らかに  
忘れていたことをえ思い出して話している。

「まだ探す気持ちはある?」  
「もう無いわ。母は村の皆が言うように山で死んだのよ  
母親の顔を見なくなつて寂しい思いをしたことなど無い。  
ラティーフのそばには必ず叔母や従姉妹達が居て楽しい思い出ばか  
り。

ジリアスクに振られて目標を失い旅をする口実が欲しかっただけだ  
と今は思つている。

結婚式じつにして有頂天になりすつかりジリアスクのことばラティ

ーフの中からは消えてしまい、

そのかわり田的も生きる意欲も無くなつて漠然とバッファローに帰

ろうと思案していた。

ルーサーにそんな心の中の動きを話しているとルーサーの優しさが伝わってきて甘えたくなる。

「楽しくないでしょ？ 私、話が上手じゃないの」

「そんなことは無いよ」

ルーサーがラティーフと離れてからいつ何処で誰と会つたかそしてどんな感情を抱いたか聞きたい事はまだたくさんある。最初の夜はジリアスクへの未練たらたらの言葉が多くたがラティーフがジリアスクのことを忘れたとまではいかなくても過去の出来事として捕らえていると解つてルーサーはほつとしている。

イエフゲニーの王の別邸の部屋数は五十五、使用している部屋はラティーフが使用している一部屋と

階段下の隠し部屋。

ダッドは仕事部屋で暗視力カメラのモニターに映る一つの塊りになつた影を眺めている。

ヘッドフォンを耳にあてボリュームを上げる。ベッドに隠された集音機は正常に働いている。

「暫らく離れていたんだろう？ お涙ちょうどいはやめて情熱的な会話は無いのか。面白くない奴らだな」

と独り言。

「寝てしまつたか、書くことないぞ、皆期待してゐてこいつの」

ヘッドフォンを外して放り投げる。

観光ホテルで働くイレーヌを思い浮かべる明日アーテーに誘つてみよう。

パソコンの画面には、  
「主に女性の身上話、政治情報漏えいの単語は見つからず」と  
書いて簡易ベッドに身体を伸ばした。

二人のうちどちらかがベッドから降りなければシグナルはならない  
明日の朝まで鳴るなどダッドはモニターを見て目を閉じる。

朝ルーサーに強く抱きしめられてラティーフは目覚めた。  
半身を起こすとルーサーはドアから出て行くところだ。  
ルーサーはラティーフの起きた顔を確かめてドアを閉めた。  
階段を下りるとダッドが支度を整えて玄関で待っている。

「お早うございます」

「アア、お早う。彼女・・言つても無駄だろ？が危険な場所に入ら  
ないよう気をつけてくれ」

「かしこまりました」

慇懃に会釈をしてダッドはルーサーを送り出した。

昨日の夕方自家用機で皇太子がイエフグニーに向かっていると  
連絡が入った時女性を示すレーダーの点滅は峡谷の川にあった。

何があつたのか？観光客とケンカして突き落とされたのか？  
それとももともと自殺癖があり手頃ながけを見つけて自ら飛び込  
だのか？

慌てて飛び出し車道でレーダーを見ていたら点滅が移動を始めた。

これは警備隊に出動を要請するべきかそれとも直接王様に知らせる  
べきかダッドは悩んだ。

峡谷に落ちて死んでいれば遺体を確認して終りだが

下手に掛けの途中で引っかかり生きていたらダッドの責任問題でもある。

着任早々始末書か更迭が浮かんだが暗視カメラの向こう側には動く人影がはっきり映っている。

そこで声をかけてみたら動いている人影はダッドの方向に向きを変えてライトの中に恥ずかしそうに汚れた顔で微笑んだ時は卒倒するぐらい驚いた。

皇太子の選んだ女性はかなり変わった経歴・・ロックイーゼンの選手という経験を積んでいる。

細かく調べれば故障者リストに入つてはいるものの優秀なスター選手でファンクラブの人数も半端な数では無い。  
それでの脆弱いがけつぶちを歩いても・・飛んだのかもしれないが何処にも怪我など無く汚れただけで済んだのだ。

外見上は超人的な女性に見えない。

特別美人でもなし何処がよくて皇太子がここで困っているのかがわからなかつたが

ダッドの勘では競技中の彼女に惚れたのだろうと思われた。

そう解るとこの仕事も長くは続かないと思われる。

憧れや崇拜は年齢とともに無くなるのが常識。

ルーサーが出て行つた後ラティーフは急いで着替えて中庭に出た。助走をつけて屋敷を取り巻く外壁を駆け登りルーサーが乗つたと思われる車の音を聞いている。

「下に行かないの？空港は下じゃない？上にはもっと古い遺跡群があるって聞いたけど・・

車が道を曲がり消えると朝食をとるために部屋に戻つた。

「今日はまだお出かけなさいますか？」

ラティーフはスープを口の中で味わいながら東を指差す。

警戒して先に先制攻撃をダッシュはかける。

危ない谷の方向には行かないよう釘を刺しておかなければ。

「昨夜は遺跡の中を探索されて迷ってしまったのですから、くれぐれも塗装された道筋から離れませんようお願いします」  
糊のきいた白シャツに黒のスース、分け目のついた頭がにこやかにラティーフを見下ろしている。

「道案内にイレーヌといつ女性を頼みました。門の青いホテルで名前を言つて下されば色々な場所の見学できます。ここは手工艺が盛んなのです。靴からバックまで幅広く・・見るべきものはたくさんあります」

女性はショッピングがだい好きと話す前提で話をしている。  
買い物さえさせて置けば五時間でも六時間でも飽きずに見ていられるどダッシュは思っている。

うんうんと何度もうなずきにっこりと笑顔を作りラティーフが朝食を済ませると  
ダッシュが会釈して下がる。  
ダッシュがいなくなるのを見計らつて  
残したパンをポケットに突っ込んでルーサーを乗せた車が走り去った方角へ歩き出した。

「馬鹿じや無むだ」「レーダーを見ながらダッシュは「コーヒーを飲む。

「俺の言葉なんか一言も聞いてないな」と点滅の画像を消して元の

仕事に戻る。

ラティーフの警護なんぞ重要な仕事ではない。

ダッドの仕事はプラテアードに上陸する観光客の素行調査である。港の職員、観光地の店員、ホテルの従業員、バスの運転手など全員がダッドの隊の兵士達である。

何度も危険な箇所には行くなと念を押されて屋敷を出たラティーフは車道をひたすら上に駆け登っていた。

地図上でイエフゲニーがある箇所は二つ、海に近い所と半島の中央部分。ラティーフが居る所は中央イエフゲ二一。

ルーサーは自家用機で来たと言っていたからこの車道を上がった所に空港があるはずである。

たつたつと軽快に走つて車道を登ると確かにダッドの言つとおり形を残した遺跡が左右にある。

「滑走路を見つけ・・・」

足を踏み入れたのは門が半分残つた平らに整地された遺跡路。

管制塔も無ければ格納庫もなく数百メートルのひょう長い空き地。

「本当に自家用機で來たの?」滑走路として使われている場所以外は雑草が生い茂つている。

がつかりしたラティーフは滑走路の奥に広がる雄大な景色を見に、滑走路の端っこから飛んで降りた。

遺跡の基礎の石組みの上に立ちさわやかな風に身を任せゐる。

「午後からはお勉強ね・・・」

バツファロー、レイステンに帰りたいかと自分に問うが帰りたい街

や村はない。

ガイナスの事をもつと知つて欲しいとルーサーに言われてその場ではいいわと答えたが

暗く重苦しい書庫になど籠りたくない。

峡谷の流れる河の音を真下に聞き絶壁に近い縁をつかず離れずラテイーフは上流へと歩いた。

二、三キロあつた峡谷の谷底は上流に行くほど幅が狭まっている。谷の縁を進むうち岩ばかりの中に不自然な青い色を見つけた。青い色に近づいてみれば足場が高く組まれそれを覆うブルーシート川に流れる白い水しぶきを眺めながら反り返った峡谷とその上にある立てかけの建物に向かつて歩き、何度も激しい流れの川を覗いては対岸に渡れる場所を探したが簡単には対岸に渡れそうにない。

大工の親方ロペスは荷台に積んだ設計図を自転車で数え切れないくらいこの道を往復している。

仕事が依頼されたのは三十年も前、

一番の課題は古い遺跡の土台が脆いこと。

カヤンデルから流れてくる急流は毎年何度も水量を多くして峡谷の幅を広げてきた。

岩には脆い岩と固い岩とがあって古代の人間は固い岩を選んできのこのように残された岩の上に城を作り上げている。

その技術力は大したものだと思うが二百年三百年と雨風にさらされていると流石に傷みも酷く

そこから千年も過ぎて新しく城を建てるとなると最初何処から手を付けてよいか悩んだが、

敷石を入れなおし整地し外壁を補修しいざ内装となると当時を知る人間などこの世に存在せず

現代に残っている建物から想像して図面を引いているがガイネスの建築史を研究している学者の意見も

新しい発掘のたびに意見がころじる分かれ、城の改築はまったく進んでいない。

遅々と進む現場を見に今日も親方は重いペダルを踏んでいる。

城への一本道を親方が登つて来た。

高台にいる職人はいち早く親方の姿を見ると大声でわめいた。

「親方——」

足場の添え木から顔を出して作業中のセザンが手を止めて木立のほうを指をさす。

ロペス親方の近くにいた男が手を止めてセザンの言葉を伝えると、親方が山側を向くと何処をどう上ったかは知らないがやけに高い岩の上に女はいる。

「あんたかい、あいつの仕事にケチをつけてるのは、何処から來た。こんな所まで徒歩かい？ 帰ったほうが身のためだぜ。ここいらにはおつかない幽霊がわんさと出る。明るいうちに帰えんな」はらわたから染み渡るいい声で女を脅かす。

「ケチなんかつけてないわよ。あの彫り物の戦士の持つている物が間違っているから教えてあげただけよ。葡萄なのよ、それも山葡萄。まだあるわよ、似ているようでぜんぜん違っているのよね。わざとなの？」

岩の縁に腰掛けて足をぶらぶらしつかりと男に聞こえるよううに話す。

親方は顔をしかめ振り返つて指をわした。

「門の横の壁画か？」

どしどしだでもなれど「一サインを出した場所である。入城するとき

最初に目に付く場所だから最後までたくさんの方の意見を参考にして先月取り掛かつたばかりである。

「そうよ。左右とも間違ってる。もし私の知っている壁画だつたらつてことだけね、ここからだ良く見えるのよ」  
馴染みのある壁画が変な供物を握つて踊つている。あまりおかしいので作業をしている人に話しかけて追い払われた。

「何処から来なすつた？」

緑色の運動着姿である。「この国の人間ではない最初から思つている。

「レイステンよ」

親方はラティーフの答えを聞いて暫らく黙つていた。

「何処に滞在しなすつてる」

降りて来いと手を振る。上ばかり向いて首が痛い。

「イエフゲニーのフォルヌストロム城」

とダッドに教えられた名前を言つ。それ以外は何も知らない。

十メートルの高さからぽんと降りて親方のそばに。

親方は上から見ても大きかつたが横に並ぶともつと大きいことがわかる。

親方はまじまじとラティーフの顔を見て尋ねる。

「そりやこの谷の向こう側だ。あんたは学者さんか?」の辺の遺跡を寝袋をもつて調べているのかい?」

化粧ツ氣の無い顔に推理を働かせて探りを入れる、イエフゲニーなら腐るほど遺跡はある。

あるいはあるが王様の個人の持ち物で発掘されていない地域のほうが多い。

「そんなどこりよ  
と裾の汚れをチョックする。ダッドのじりつとした田を意識している。

親方の值踏みする田がラティーフを見ている。

「あの城が気になるかい」

これは何いことの始まりかも知れない。

「そうね、見せてくれるの」

追い払われて少々腹も立っている感情を入れない返事が出る。

素つ氣無い返事をされても親方の思いはけがつてこないある。

「そうだな。いいよ。その代わりといつちやなんだが細かく壁画の  
違いを教えてくれないか。それお前さんの研究している壁画絵とよ  
イエフゲニー遺跡を研究しているならこの城の時代の壁画も  
何処かで見ているかもしれないと親方は思い始めている。

昨日もおどとも偉い学者さんたちが集まる学術会議とやらを傍聴  
してきたが  
学者が発表しているときはなるほどと納得もするがいざそれを生か  
そうとしても親方の仕事には当てはまらない。

「フォルスストロム様に雇われてこいるのかい？」  
と尋ねる。

プラテアドには手付かずの廃墟・・ではなく遺跡が山ほどある。最近では港近くを修復し観光客に見せていく。

「そりや」

頑丈そうな男がフォルスストロムを知つていて内心ラティーフは驚くが顔には出さない。

ロペス親方に案内されて正門から中に入ると外壁は出来ているものの玄関扉や窓と窓枠も無い城が組んだ足場の中にある。

「おい！」

親方が呼ぶと門壇で作業していた四人が下りてきた。

「こいつに変えるぜ」とチェックのついた絵を四人渡した。

「なんていその女の言つとおりかよ」

不服そうに男が去つていくと親方は広く開いた玄関空間にと入り込み分厚いファイルと見比べながらラティーフに意見を求めた。

「この扉の上には蓮の花、壁の色は草色よ。右手は小さな薦模様が柱と窓枠に這つているよ。左手の部屋は野いちごの壁模様、窓枠は直接壁に書いた大きい薦。奥の部屋も私の助言が必要かしら」

親方はあれこれと花や模様を描いたファイルを見せながらチェックを入れ続けた。

ラティーフが次から次へと説明すると親方の顔色が段々明るく変わる。

「そうだそうだ。この絵だ。よしこれで彫りに出せる。おおい、リマやこれ持つて下の作業場まで走つてくん。呼び戻ししないといけない奴らが出てきたな・・リマ戻つて来い。こいつ等に連絡を取るようにカミさんに言つてくれ」

リマが自分の仕事を置いてむくれながら携帯電話をいじった。何度も見てもアンテナは立っていない。

「行つてきやす」リマが電動自転車に格好をつけて走り去った。山奥にはもつたひない別嬪さんが来ている。

冷たい風が落ち葉をはらはらと鳴らし枝葉に残る色付いた葉に吹き付ける。

宮殿の中庭には老人が一人木立の中を人の姿を求めて歩いている。老人は木立の間を足早に歩く二人連れを見つけるとその道先に立つた。

二人の男は道を塞ぐ老人に気が付き会話をやめて近づいていった。

「ほう、これはこれは評議会以来ですね」

冷たい目が老人を見る。

三十年前ならいざ知らず、ウルバーノに意見を言えるような長老はもういない。

「おや珍しい引退なさると聞いていたのに何か不都合でもあられたか」  
ネグロのワルテは老人に敬意を表わして目をふせ挨拶をする。

老人はワルテの挨拶を交わしてウルバーノを見据えている。  
「最後のお勤めをきちんととして幕を引きたいと思いましてな」

老人のいわくありげな視線を笑ってウルバーノは無視する。

「良いご子息をお持ちで羨ましいですね。モラドには深い繋がりができるつつあるようでお家元も潤うでしょう」

評議会では三十年たつても若造だが力関係は逆転している。

「ハン、どうでしようかな。土地から人が居なくなれば困るのはわしらなのに。息子は一過性のものだと言い張っていましたがな」  
薄ら笑いが老人の口元にある。

「我等を待つていたように思つが。なにか御用かな」  
険悪な空氣を読んで相手の意向をつながす。

「そうですじや。寄る年波で物忘れが酷くなりました。モラドの大公様に伝えたきことがございましてな。わしは手を引きます。単純なこと。金ですじや。金が続きませんのじや。失礼ながらモラドは商売上手じや。わしらもその後に続きたいが元手はあります。マロン半島の民は出稼ぎでしか食えぬ。ここらでもそつと腰を据えて地場産業を盛り上げねばの。そういう時が来ております」

風が落とす落ち葉がかさごと音を立てる。静かにゆっくりと終りが来たことを老人は告げている。

「なるほど腰を据えて・・・ね。カヤンデルの地下から何か出来ましたか」

薄ら笑いを浮かべて木々の彩を愛で老人を見る。

「良ぐご存知ですか。良質のケイ酸塩鉱物がありました。鉱脈も大きくいろんなものに使える可能性もあるそうな」

やはり知っていたかと苦笑いをする。

「カオリンですか？」

ワルテも失笑しながら聞く。報告では対して埋蔵量がないと聞いているがマロンではもう手を挙げて喜んでいるらしい。

「せうせう。それですじやついでに申せばモラドの兵士達を引き上げてくだされ。物騒で適いませんわしらは平和主義者でして」  
ウルバーノに隠し事は出来ない。噂では何処にでも密偵を作っているといふ。

「大公殿。それと」

老人は真剣な目でウルバーノを一瞬だけ見て視線を外した。

「わしらはグエナエルから手を引きますじゃ。ブライアンにもしつかり言い含めました。それを申し上げたかった。後は良しなに頭を垂れて会釈をし老人は背筋をきりりと伸ばして去つていった。

老人の後姿を見送ると呆れ顔をワルテは作った。

「突然ですね。何処で心変わりをされたのか。まあマロンの一族が手を引いたところで何の影響もありませんが。その過程が知りたいですな」

ウルバーノは沈黙を守っている。

「職人を全部引きあげる気でしよう。マロンの職人は鋳型を作らせねばなかなか良い仕事をするんですが」

「なにすぐには引き上げられないさ。職人の受け皿が必要だからな」モラドの作業所のことなど考えていらない。ウルバーノは目を細めて老人の最後の言葉に思いを寄せている。

「この際モラドに忠誠を誓わせれば話は済むでしょう」

ワルテが気楽に言う。

強引にやらせる方法はいくらもある。なぜそうしないのかがワルテには不思議だった。

「過激な意見だな。まあマロンの職人が減つたくらいでモラドの工場が立ち行かなくなることなどないわ。老人め何かバラディールに詮索されたか?それでビビッて手を引くと言つて来たのではないか」老人の態度から良い後ろ盾を得ていると感じ取っている。

「将軍が何を詮索できるでしょうか」

バラディール将軍は派手な瘤瘍もちで細かいことに口出ししたことがない。

「あれの詮索好きは今始まつたことではないでないでな」とは家庭内のことだが確かにワルテの案にも一考するだけの理由はあるが放つて置いてもすぐにブライアンが泣きついてくるのは田に見えている。

ガイネスの金のなる木は全てモラドが持つていて。逆にこれまでが締め付けが緩かつたとウルバーノは思う。バラディールの顔色を伺つて手ぬるい政策ばかりあつた。だがこれからは違うビセンテのような腰抜けが一度と出でこないように必要な物だけを運ばせくだらない付属品は切り捨てるにしてやるとほくそ笑む。誰も今のウルバーノには逆らえない。

ビセンテは氣負つていた氣持ちを萎ませてグ里斯の富殿を出でている。カオリンはモラドから抜け出る口実。

六つの半島はモラドに支配され生き血を吸われる様に人や埋蔵物を提供してきている。影では不満を言う者も僅かではあるが居る。ビセンテはその一人ではなかつたがマロン半島の住人がこれ以上減ると主要な産業も無く独立も難しい。

独自の探査で埋蔵量の少ない鉱物層を見つけブライアンを説き伏せてモラドの傘下から逃げ出すと決めた。

マロン半島の住人には鉱物資源があると安心させ出稼ぎ人を呼び戻しマロン独自の産業を繁栄させる。

露天掘りしたカオリンだけでは産業は成り立たないのは百も承知している。

ケイ酸塩鉱物は以前からあつたもので、その近くに堆積頁岩があり沈殿した金が出てきた。

腹心の部下に緘口令を強いて採掘させているが埋蔵量は未知数で、堆積した金が尽きればマロン半島は終りである。

二基ある水力発電所の整備、機械工場、車両整備工場、化学工場、

発電所、変電所、ポンプ場、廃水処理場、と付随事業にも大勢の人間が必要である。マロン半島の一大プロジェクトが動き出すのだ。

## 議会の開幕

ガイネスの首都アークスは 그리스半島にある。

奇数が好きな国民性で石作りの三階建てと五階建てと  
緑色の屋根が段々に続く都市の奥まつた高台に

周囲の森に負けないくらいの緑色の苔で覆われた城がある。

古く厳めしい城の裏庭は広く良い馬場だつたものを小型機の発着所として滑走路に、

横の厩舎は飛行機の格納庫として作り変えられている。

前日から議会のために来ていた各半島の長と四口ぞりぎりに間に合つた代表者達が

城の大広間で円卓を囲んでいる。

カンヤデル最高峰グエナエルの絵を後ろにサガモア王、その隣にはルーサー。

右にマロンのブライアン。左に軍を代表してモラドのバラティール将軍とその夫のウルバーノ。隣にモラドのイシアル。ネグロのワルテ。グリストヨルゴ。ブランコのシメオン。プラテアドのティエリー。ドラドのブライズ等がそれぞれの嫡男または後継者として選ばれた人間を携えて半島の代表者の横に座らせている。

「まず欠席者マロンのビセンテ。ブライアンの話ではストレスから胃痛で脂汗を出して寝込んでいるそうだ。TV参加もあの様子では難しかろう。次にモラドからウルバーノ大佐。大佐は研究機関の代表として来て貰った。承認してもらえるかな?」

円卓の全員が片手を上げる。

「良かろう。全員の承諾があった」

と議事進行のサガモア王。

手元の書類に目を通しそれぞれの代表者のテーブルを見る。事前に書類は行き渡っている。どの顔も手の内は見せまいと平静を装っている。

「言い難いが。ウルバーノから山脈鉄道の補助金を来年度から半額にしてくれとの申し出があった。提案理由はウルバーノから言って貰おうか」

この場所では一番品の無い顔がウルバーノだとサガモアは思つ。

垂れ目で男なのに妙になまめかしい雰囲気を持つのがウルバーノである。

「昨年にも提案していたのだがケンプの研究費が膨れ上がり採算取れぬ。それに用意に手に入れた諸外国の設計図が手に入りにくく、高値になった。手元にその予算案がある、これは今年度の書類を元にして来年度の予算を算出している。これよりも多くかかるのは予想できるが、今回は切り詰めてやつてみようと思つ。すまぬが来年度は多方面の補助金の削減を願つと思われる」

簡潔に要点だけを言つ。特徴の有る色艶がウルバーノの声にはある。

その場の全員が首を横に小さく振り視線を書類から外して天井へ・・一同の慣れ親しんだ顔を見回す。

「毎度言つ」とだが打つ手立ては無いのかね。何時までも競争ばかりやついても終りがなかりつ」とマロンのプライアン。

精密な機器が要求される武器産業である。つき込む金額の多さは六つの半島の収入を足してもはるかに大きい。

武器の開発には長い歴史的背景がガイネスにある。

太古の昔には同族間の戦闘が主だったが船の出現で様変わりし  
外敵の侵入を防ぐため七部族が一丸となつて戦い追い払つた経験は  
敵よりも殺傷能力の大きい武器の開発に拍車をかけた。

渋面を作つてブランコのシメオン。

「そろそろどこかの国と友好条約を結んではどうだね。ガイネスだけ  
でやつしていくのは限界だと思うが」

シメオンは平和主義者でたくさんの武器の必要性を理解しながらも  
その武器が使われ人の命を奪うのが耐えられない。

シメオンの平和ボケを知つて釘を刺すようにウルバーノ。

「それは何度も話し合つた。我々が作つてている武器は国民に向けら  
れているのではない。その予防処置も完璧だ」

旧式の武器の扱い方も知らない奴にうだうだ言つて欲しくない。

ガイネスの飛ばした衛星は世界中を空の上から見張つてにらみを利  
かしているというのに、何度も説明しても同じ所に引き戻る。

周りの国々は外宇宙に関心を示し

ガイネスは宇宙よりも明日の朝日覚めた時に自分が売つた武器で包  
囲される状況だけを心配している。

置み掛けるようにモラドのイシアルが円卓を囲んだ面々を一人ひと  
り見回す。

「その話に決着は着いている。我々は五十年計画を始めたばかりだ」  
五十年後には元敵国と友好条約を結び条約内容でガイネスを有利に  
持つていいくつもりでいる。

一人、五十年には不服な男グリストのヨルゴ。

「ガイネスの国民性は質実剛健、質素儉約これらが崩壊すれば悪鬼

どもが蔓延る無法地帯と化す」

無秩序なニコースを見るに付け敵国と仲良くなどとは國民を貶める  
と言い続けている。

長々とため息をつく長が何人も居る。

モラドからの補助金を当てにしていたのは王以外の全員である。

五つの半島の鉱物をモラドに高値で買ってもらっていたが産出量が  
大幅に減り、

列をなしていた車両は純度の低い鉱石を乗せてしか走らせられない。  
それに引き換え、産出量の減ったほかの半島と違ひモラドの荒地、  
砂漠の地下には大きな鉱脈があり埋蔵量は無尽蔵で  
ガイナスだけでなく他国に輸出できる量まである。

「ウルバーノ。もう山脈鉄道で運ぶものは無いのかね」  
とモラドのブライズ。モラドは古くは王室付きの医者の家系。  
ブライズの一族は医療研究室を多数持ちモラドからの援助の額も大  
きい。

そのうちの幾つかの研究室を閉鎖しなくてはならないと考えるとブ  
ライズの立場は苦しい。

六つの半島の住民は糧を求めてモラドへと人口流出が続き、  
自然人口の流れと共に物資の流れも変わりモラド以外の半島では收  
入は減り支出だけが膨れ上がる。

「仕方がないな。了承する」

とブランコのシメオン。シメオンの言葉で全員の手が上がる。

「さて次。プラテアドの観光事業としてのこ入れの一貫として陶

磁器の開発に力をいれようと思つておる。この事業はどの半島とも参入しやすい所が利点だ。わしが独自で行なつた地質調査を配ることを旨に

「アガモア王が目配せをすると侍従がファイルを代表者の前に置いた。

「見てのとおりプラテアド以外は色々なケイ酸塩鉱物が含まれている」

「モラドの調査結果がないようだが」

ファイルを見たままウルバーノが皮肉つたように言つ。

ウルバーノの嫌味な言葉をサガモア王は軽く受け止める。

「モラド半島はウルバーノがしつかり把握していると思つがの。それにモラドは整備する箇所はすでに着工済みである。ウム、モラド、プラテアド以外は大型船舶の発着所人工島の建造を推進しなければならない。我々は武器の技術においては世界でも引けはとらないが国民の生活水準となると下から数えたほうが早い。一方世界は広い。いろんな可能性を秘めた市場も多々あると思われる。我等は次のその又次の世代にまでは世界と肩を並べよいものを送り出していきたいそれについて予算を掲示していただきたい」

フンと鼻で笑つてウルバーノ。

「いい案ですね。草稿は出来上がっておいでなのでしょう。次回の議会の時までに修正案、並びに決議事項を煮詰めましょう」

半島の代表者を差し置いて王の次に言葉を挟む。

金という権力持つたウルバーノを黙らせる手段は無い。

かろうじて奥方のバラディール将軍がウルバーノをたしなめることが出来るが

議会では夫を立て意見をしたことなどない。

「では休憩をして少々頭を冷やそつかの」

議題は多いがモラドのウルバーノの機嫌をとりながら進行させるのは難しい。

直接ウルバーノに交渉している長もいる。

以前のように議会が求心力を持たなくなつた今

半島の長が集まって話し合ひこの必要性が問われだしている。

## ガイネスの二人

ラティーフのガイネスでの生活は充実している。

皇太子妃の勉強はそつちのけでダッドの目を誤魔化しては書庫で村の記憶を呼び起こしてはスケッチブックを広げてそれを書く。ついでに書庫で寝起きするのも一度や三度ではない。

散歩と称して古い石垣の上を渡り対岸に渡る。

対岸では大勢の職人が気軽に声をかけてくれる仲である。

人一倍親切なのはロペス親方で復元しているバルカ・シシク城の内装の発注にまでラティーフの意見を取り入れてくれ、染物の色具合が見たいというラティーフを纖維工場にまで連れて行き工場長を紹介して貰つてもいる。

纖維工場では温度や湿度を的確に言い当て、染める工程で色が変わること何度も工場長や染色係に見せて学者として認めさせて、

バルカ・シシク城で使われる織物全てに関わることを許された。

科学染料を使わないガイネスの染色は大いにラティーフを喜ばせている。

村での仕事は糸をつむぎ草木や泥で染めて機織で反物を作り上げていた。

古くから村に伝わる模様を城の内装に使うという仕事は天から降つて沸いた幸運にラティーフには思える。

ルーサーはと言えば大勢居るハーレムの中を順番どおり泊まり歩いているのか

一月に多いときに二度、それも夜中に現われて明け方には消えるといつ忙しさである。

そのためラティーフの生活の中にルーサーは存在せず一瞬目を閉じて見た夢の中の人物になりつつある。

今日も朝早くから夜中に書き上げたスケッチブックを持って城を出て行く足取りは軽い。

暗い空には降るよつ星。

丸いガラスの向こう側は暗い山並みが幾重にもある。

パイロットが暗い闇の中に小さな明かりの列を見つけ旋廻して着陸態勢に入る。

機体はぐっと高度を下げる。

議事録を置みルーサーはカーテンを引いた機内の窓を見つめ軽いため息を洩らす。

緊張から開放される瞬間である。

城で待つラティーフを思つとううすりと笑みすら浮かぶ。

皇太子は直接政務には関われないが、外交、内政、財政の調節をする王様の補助的役割を担う。

五百七十年前戦いに明け暮れていた七つの部族は外敵の急襲で人口の半分を亡くした。

生き残った人々は団結して敵を撃退する方法として盟主を一代限りで終わらせる方法を考え出した。

止まぬ内紛を押さえるために考え出されたのが技能や知識の豊富な賢い人間の選出である。

何度も選出方法を吟味し誰もが渋々でも納得す方法を決め

七つの民族の上に立ち公平な立場で陣頭指揮を取れる人間を選ぶ。優秀な王に所有させるのは西から東まで一千五百キロの長さで横たわる力ヤンデル山脈の全て。

山脈は七つに分かれた半島の全てに水の恵み山の恵みを公平に行き渡らす命の根源を・・持分とし七部族の頂点とした。

何度も戦場となつたプラテアド半島でまとまつた軍隊の本拠地はモラドに移しても軍隊の名称はプラテアド軍を名乗つて居るのはその名残りである。

山脈の麓から海まで突き出た半島が七つの部族の諸領地。

どの部族でも将来部族を率いるに当たつて私利私欲に走らず協調性を重んじ清貧なリーダーを選出するため嫡男以外の候補も名乗りを上げることもできる。

更に選出方法は時代を追つて加速して、文武両道はもちろん筆頭に上げられるが

適正テスト心理テストで将来に不安を残す材料が候補にあれば又次の年に繰り越され新しい人選で選びなおすこともしばしばあつた。

ルーサーの場合サガモア王の第一子でも

母親はルーサーを出産時に死亡しているので皇太后の地位は無い。サガモア王はその後妃を娶らず、七部族の優秀な青年達は王になれる可能性を信じて日夜努力を惜しまず勉学、スポーツにと徹底して励んできている。

生まれてすぐに侍従四十人に守られてルーサーはガイナスを離れ教育レベルの高いといわれている他の国で過ごし、

生まれた国ガイネスに皇太子として戻つてくるためだけに二十数年は費やされて、侍従の献身的な努力と王の継続的な庇護のもと評議会に望んだルーサーは見事皇太子に選ばれている。

王子の時点ではまいや衣服などプライベートに関するすべてをバッカアップしてくれる一族を探したが誰も皆、自分の一族の子供達を育てるのに金を注ぎライバルに塩を送る余力のある一族は無かつた。モラドだけは七部族の中では際立つて潤っているがルーサー側が避けていたのも未だに後ろ盾が無い理由である。

皇太子として使える金は限られ王の諸領地プラテアドにてラティーフを囲っていてもグリス宮で生活させる余裕はルーサーにはない。

それでもルーサーはラティーフを連れてきたのは大正解だと思つて強引に連れてきた彼女が侍従の居ないルーサーのただ一人の拠り所である。

幸いにも彼女がレイステンから消えても彼女の行方を心配して捜索願を出す人物が居ないのもルーサーに連れ去る口実を作らせた。

彼女が一日の大半を過ごすバルカ・シシク城の親方ロペスとの接触には多少の嫉妬は覚えるが城に閉じ込めてルーサーに憎しみだけを募らせるよりましだと思っている。

会えない日々はレイステンで使用していた使えない携帯電話の小さな画面に撮りためた彼女の顔を眺め一日を終える。

わずかな時間でも彼女に会えば生きている幸せをルーサーは実感出来るのである。

## ガイネス国のコレット

海の上を一隻の豪華客船浮かんでいるのが見える。

眼下には汐で洗われている岩の多い入り江に丸太の桟橋が頑丈そうに伸びている。

ガイネスの人間が港と呼ぶのはもつと北に行かなければお目にかかるない。

入り江に続く石畳の道を辿ればびっしりと隙間無く家が建っている。家並みには商品を宣伝する派手な看板、ポスターの類が何も無い。店の軒先には雨にさらされて判読不能な板切れ。

石作りの家並みにその板はマッチして商店の入り口だとコレットは思わない。

かと思えば出入り口に氣味の悪い人間の顔が口を開けて多数掲げられている。

それがパン屋だといわれても楽しく入る気分にはさせない。いたるところにある等身大の石像は何のために置いてあるのか想像もつかない。

この町に住み着いてから三ヶ月、街路樹に咲く花を眺めそれが美味しそうな実に色付いている。

「イエフゲーーの町は見飽きたわ」

潮風は心地よいがそれが二千年も前から吹いていると思うと腹立たしくなる。

ざくざくに切ったTシャツの胸元にラメを塗り窓を開け放つて全身に風を浴びる。

軍服姿がそぐわない道場の端で

恨めしげにコレットはテットを見ている。

「親父から昇級試験に落ちたって聞いたぞ。少しは腰を落ち着けて覚えたらどうだ」

可愛い顔でふくれて『コレット』に見つめられると腰の骨が一三本引き抜かれたようにテットは甘くなる。

「だつて何の意味があるのよ。私が古武道の型を覚えてあなたと組み手でもやれつて事? 私あなたとはベッドの中での組み手以外したくはないわ」

と誰が聞いても親密度の高い会話。

一応テットは妻という形で『コレット』を入国させたが『コレット』はしたたかでガイナスに来て以来ではテットと仲良くしていながらに装つが約束のアネルの顔を挙むまでは就寝の部屋はテットとは別々で過ごしている。

若い女性練習生も道場のあちひらひらと大勢いるがガイナスの女性練習生は休み時間でも腹筋や懸垂と自己鍛錬に余念がない。

テットは仕事中で無かつたら『コレット』を優しく抱き寄せたいと思つがそうもいかない。

ここは父親が師範の道場の中である。

「分かった。わかったから大きな声でいわないでくれ。恥ずかしいよ。説明するよ。皇太子妃の侍従には無理だから世話係という名目で申請しよう、それでも条件が幾つか有る。妃を守れるだけの力量があること。なぜかつて? 妃の命を狙う奴だって居ないとは限らないだろう。俺達だって二十数年間身を粉にして皇太子を守り通してきた。そのためには日夜身体を鍛えて、あわや皇太子に危害を及ぶ

と生つたら「」の身体を盾にして皇太子を・・・

同じ話を何度もするなとコレットの手がテットの口を塞ぐ。離れて見ていいる練習生にはにちやついているよつてしか見えない。

「私皇太子なんてどうでもいい。守るのは皇太子妃よ」

口では威勢の良いことを言つてはいるがアンセルに会いたい気持ちは田に田に募つてゐる。

筆記試験はパーfect、面接もOK。残るは運動能力。

古武道八級の腕前では初級兵士の資格も貰えないものである。

「私やるだけのことはやつたわよ。後はあなたが私に愛情を見せてくれる番よ」

と上田使いにテットを見る。

胴着を脱ぎ捨て下着姿のコレットは扇情的で恼ましい。

「俺の愛情はいつも見せてはいるだろう?」

もうつけない。コレットに甘えられたら鼻の下が長く伸びる。

「私知つているのよ」

と軍服の肩章に手を入れる。

「皇太子妃はグリスの宮殿には居ないのよね  
テットを弓き寄せて耳元で囁く。

「え、いや・・・そûだが。なんで?」

皇太子妃が近くに居ることはすつとコレットには内緒にしていふ。知れば試験も受けずにつづ飛んでいきかねない。

「私をイエフゲーー城の見張りの兵士にしてちょうだい。それくらいできるわよね。下つ端の兵士でいいのこのままじゃ私百年待つた

つてアンエルの影も見られないわ」

さつきクリスと言う男がテットに会いに来ていた。

「人は親しげに近況を伝え合い・・主な内容は皇太子になつたルーサーのことだが、

まだ皇太子妃をグリスに迎えられないのかと二人は暗い顔をして話し合つている。

細かい内容はコレットは知らないがガイネスでは珍しい車の運転席にクリスが乗つたのを見計らい道に飛び出して車を止めて皇太子妃の居る場所を聞いたのである。

「クリスのやつだな・・いらぬことを吹き込んで・・」

クリスと別れてテットは父親にコレットの運動能力はガイネスの赤子以下だと告げられている。

「いいじゃない。ここからだと内地勤務なのでしょう一ヶ月に一度は帰つてくるから。ね、ね」

コレットのきらきらした目で見つめられると嫌とは言えない。

「変な奴の配下に入るがやつていけるか?」

プラテアド半島警護所長の身分にはなつたが王室付きの警護班ではない。

クリスの話では諜報機関の少佐が最新機器を配備して皇太子妃を守つてゐるという話だつた。

「あなたの奥さんに無理な仕事をやらせる人なんて居ないわよ」

そこまで言われると、若くしてプラテアド警護所長に就いたテットの自尊心はくすぐられ父親に免状のサインを頼み込み、基地に戻る早々本部に掛け合い予備特殊隊員としてコレットを登録している。

広く晴れやかな空、

大都市レイステンとは比べ物にならない澄み切つた空氣の中、朝早く1泊したホテルから自転車でコレットは出発している。

緩やかな上り坂が長く伸びて行き交う人も無い、

大きなカーブを曲がるたび目的の城の登場を期待して胸が高鳴る。自転車なんてガイネスに来てから始めて乗っているが電気自転車は何の苦労もなく石畳みの坂道を登る。

頭には白いフリルの帽子、黒いドレスに白いエプロンが風を切つている。

二時間も上り下りを繰り返すとまつたく人通りは無くなると草の生えた道路の向こうに目的地を見つけた。

宿泊したホテルの五倍はある屋敷の前でコレットは流れる汗を拭いた。

「来たわよ、私のアネル。とうとう来たのよ」

五メートルは有る門のチャイムを押して門が開くのを待つている。

電源の接触が悪いのかはたまたコレットの人相を疑つてゐるのか五分以上待つて文句が咽までかかつたところで門が少しずつ開いた。

「ヤツホーー！」

自転車にまたがると広い庭の奥にある玄関を目指して力いっぱいにペダルを踏み込むと玄関前には黒いスーツの男性が一人待ち構えている。

「あんた誰？ アネル様はどこ？ 何処に居るの教えてよ」  
自転車を花壇に転がしてじつと見つめる男の視線で慌てて  
花壇から自転車を引き抜きスタンドを立てて階段横に置く。  
駆け足で階段を上がり玄関のノブをまわしたり押したり忙しいが  
扉は開かない。

締まつている玄関のドアから離れて館中の窓が見える庭の真ん中まで戻ると

一個一個窓の中を確認しては「アネル様ー」とコレットはわめく。

「早く。挨拶したいのどの部屋なの？」とたたずんでいる男に尋ねる  
黙つてみているダッドは胡散臭い目でコレットを睨みつけ「出かけ  
てこる・・・と告げられる」と。

「ほんとに朝早くからいつたい何処に行くつて言ひのよー」落胆し  
て吐き出すように言葉が出る。

「即使にしては思つた事をそのまま口にする女だな。まあここには  
来客が来ないからお前のような女が採用されたのだろう」  
ダッドはそういう捨てて追い返すべきか悩んでいた。  
書類ではプラテアド警護所長の妻と有る。

所長のフォーマルステットは四十を過ぎて、ガイナスに戻つて来て港の  
イエフゲニーに勤め始めたばかり、  
彼の力量はまだわからないが教育の行き届いていない女を妻に迎え  
て居ると云つことは男として力量が知れている。

そんな値踏みをされて居るのが分かつたのかコレットは諦め顔で息  
を整えると、

「はい。これ移動命令書。私コレット・バーーーはこの仕事に従事

できることを誇りに思います。ここでの会話、行動命令は決して口外しないことを誓います。敬礼！」  
と一等兵として敬礼をする。

「OK。確かに命令書は受け取った。だがな、お前の仕事はこの屋敷の掃除だ。それでその後ろの荷物はなんだ。私物はココにはもつてきてもならんと言われてなかつたか？さつさとホテルに置いて来い。宿泊する時はこちから支持があるまで待て」

少尉が直々に初等兵に命令することなど無いがあまりにも無節操なコレットの登場に驚いている。

「はい！又戻りますと任務が完了できませんので夕方もって帰ります。それでいいですか？」

ダッドを見つめる田がぎらぎらしている。その目力にダッドは圧倒される。

「ああ、門の外においておけ。観光客はここまで来ない大丈夫だろう。さつさと置いて来い！」

ブスツとしたコレットに腹を立てダッドは声を荒げる。

さつきまで人が変わったようにきびきびしていた態度が急にふてくされブチブチと口の中で文句を言っている。

自転車の荷台を引いて門の所へ置いてくるとむくれていた顔が愛くるしくニコニコ笑に変わっている。

「挨拶と引継ぎが終わりましたよね。質問していいですか？」

充分相手がコレットの可愛らしさを認識したのを見て大きな田を目使いにする。

「仕事の場所説明かね。玄関、それから中に入つての広間と応接間  
二階に上がる大階段一階の鍵のかかつてない全ての部屋。皇太子妃  
の部屋は妃が居る時に尋ねて承諾を得てから入室するようだ。勝手  
に入ることはまかりならんぞ。他に聞きたいことは?」  
新人にして良い心がけだと内心褒めている。

「アネル・・じゃなかつた皇太子妃はこの玄関を使用なされるので  
?帰宅されたときはどんな言葉をかけられるのですか。あんたじや  
なくて皇太子妃。階段は何歩で駆け上るのでしょうか。どの辺りの  
手すりを握られます?カメラ持ってきてるので一緒に写真お願いし  
てもいいですか。アア、あなたの手数はかけませんわ。私手作りで  
ツーショットが取れるグッズを作りました。ウフン質問の答えは後  
でいいですわ仕事を終えてしまわなきゃ。キャー玄関の取つてはあ  
なたが開くのそれとも皇太子妃?信じられない!~!~!  
コレットの矢継ぎ早の質問にダッドの顔色が変化する。

「いい加減に・・

「きやーーーきやーーー!」両手を口に当てて屋敷裏へとコレット  
は逃げ出す。

ダッドの耳には甲高いコレットの声。

コレットは奇声を発しながら脇の小部屋に入り込みがつひとつと吸引  
力の強い掃除機を取り出すとスイッチを入れる。

部屋の真ん中ばかり掃除するコレットに再三大声でダッドが注意す  
るが聞く耳はコレットには無い。

何でも手早く綺麗に出来る女を見せ付けて居るつもりである。

階段を登りドアを蹴飛ばして開かないと次に次にと走り回つて掃除  
をやり終える。

「ここにレインシステムと変わらないのね。掃除機はいっちゃんいい奴ジ

ヤン「コードレスでハイパワーの掃除機に満足なコレット。」

百回ほど掃除機をかけたら調度品を磨けといわれたことを思い出し長いスカートの裾をひるがえしウエットタオルを持って階段のてすり、花瓶や絵画、変なオブジェを撫で回した。汗だくになりながら次の仕事道具、脚立を抱え広間の豪華なシャンデリアを磨きにかかる。

このときはもうダッドは声をからしてどこかへ行ってしまった。

「ペッカピッカのピー・よ」

「どうよー！この美しさはと、美しい水晶に微笑みかける。水晶に映った小さなコレットが百の笑顔で笑い返す。

「終り～～～！ダッド隊長今日の任務終了であります！インターバルをとります十五分、門より外に出て汗を乾かしてきます～～」

ダッドの返事を待たずに掃除道具を片付けて自転車に飛び乗った。門を折れて左に出れば路が急に細くなる

「確かに、確かに・・・この上の朽ち果てた石橋の橋脚・・・付近・・・と。何処よ！」

ダッドがぶつぶつといっていた言葉思いでいる。

「えつ！あれ！」

敷石の上の樹木を掻き分けて、行つてはいけないと言われていた崖に来ていた。

昼食を食べて行けとの誘いを断り  
チェックを入れた資料を完璧に仕上げたくて纖維工場をラティーフ  
は飛び出している。

バックパックに荷物を詰め込み山へと進路をとつて駆け出すと誰も  
ラティーフを止められない。

途中で城の復元工事の職人と出会い会話を楽しみながら並走した。  
城から別れて岩山に分け入るとといつもの崖を飛び降りて  
川に崩れた遺跡の上を水面に足をつけないよう飛び跳ねて  
城壁のような橋脚をよじ登り柔らかい土砂を避けて  
足場を固めて作った岩場を鼻歌交じりでラティーフはよじ登る。

嬉しそうに見つめているのは横幅五センチ奥行き一センチの岩の出  
っ張り。

頭の中は染色に使う土や山野草の名前。

工場長から見比べたいから染色した糸を見せて欲しいといわれてい  
る。

「違った散歩コースを見つけなきゃいけないわねダッドが許してく  
れるかしら」

ダッドと顔を合わせる機会は少ないけれど朝と夜はきつちり  
その日の行動を報告するのが滞在者の義務らしい。  
最近は簡略して昨日と同じよ・・と語っている。

野草を採取に山奥に入るといつたら止められるかも知れない。  
「やっぱり無理よね一泊や二泊では済まないから」と独り言、

ダッドの手書きの地図ではなくきちんと測量した地図があればたくさんの情報が得られるけれど最初に逃げそこなつてからラティーフの信用度は低い。

掃除で流した汗の上に力強くこいだ自転車の汗が流れしていく。絶壁の端には今にも崩れ落ちそうな石組みと足場の無い岩肌。その下に半分壊れて落ちたアーチ型の橋脚部分の石積みがある。

遠目にもそれは人が通れるとは思えない。

口の悪い上官が洩らした言葉には谷の上流からいつも帰宅すると言つていた。

「あれかしら？すつごい絶壁だわ、レイステンとは大違いね」「コレットは使用不能の携帯電話を取り出すと橋脚に向かってシャッターを押し続けた。

と・・緑色のジャージがあつという間に崖から落ちてジグザグに走つて居なくなつた。

「え、ホント？帰宅時間なの？ラッキー！」

緑の色が動いた場所をじつと見据えて居るとまた緑色の人影が出てきてコレットを喜ばせる。

「ス、素敵。間違いないわ。アネルってペイント落としても素敵！崩れ落ちている石積みの上を憧れの人アネルが見え隠れしてコレットに近づいている。

ラティーフは隠れる場所の無い岩場を渡り終え人影に気がつきこんもり茂った樹木の中に飛び込んで見えなくなった。

「待つて待つて。行かないで！」

アネルに逢えた感動でコレットの声は上ずる。

見えなくなつたアネルに不安になる。

「えっと、ラティーフ様！ラティーフ様！私使用人のコレットです。今日から仕事につきました！！」

と大声で叫ん

うが、アネルに何一つの存在を知らないのである。

なんと素晴らしい！アネルと会話が出来るなどと思ひも思わない。

がけ下に揺れる草むらにも遺跡の上のこんもり茂った樹木に人影は見えない。

と不意に後ろから、

「ほんにちは。さつき見たことは黙つてくれる。あそこは通つちや行けない行つて言われていて。でも早道なのよ」

「ギヤー——アアアアアア——。キヤ———! キヤアアアアア———

11

コレットは携帯電話を握り締め大口を開けて力の限り叫んだ。

卷之三

驚いた顔のラティーフが一步下がる。

見知らぬ可愛い女性は顔を引きつらせて叫んでいる。

「逃げないで。ごめんなさい。ずっと楽しみにしてて故障者リストに入れられてて。事務所にも会場にも何度も電話して・・元気だつた? 元気だつた?」

大きな目が何一つ見逃さないと必死でラティーフを見つめている。

「あの・・私を」存知なの、

いきなり選手時代のことを言われて困惑。レイステンの三年間は遠い過去の出来事になつてゐる。

そこへコレットの悲鳴を聞きつけてダッシュがやつてきていた。

「コレット帰つてこないから探しに来て見れば、こんな所で何を騒いで居る

「あ、監督官殿」

となれない敬礼。

目礼をコレットに返してダッシュはラティーフに苦言を一言。

「皇太子妃、上流の橋は通らぬよう申し上げたはずですが」

今日こそは言い逃れはさせないとしっかりと注意をする。

「私があの上を歩いて所を見ていましたの? まさかね。今田はたまたま城を行き過ぎただけですわ」

と、にこやかにラティーフ。

下流の吊り橋までは二十キロも有るそんなところに行くのは一度で充分である。

ダッシュの登場でかしこまつた振りをしながら携帯のシャッターをラティーフに向けたまま押し続けているコレット。変な人ね、とラティーフ。これまで選手だったことがばれてカメラを向けられたことが無いからコレットの行動は良くわからない。

「そうですか。それならばよろしいのですが」  
実際はレーダーで何度も古橋を通りている証拠はあるのだが言わせて  
言わない。

「コレット。先に帰つて門を開けておきなさい」

「はい！」と元気良く返事をして自転車に飛び乗り荷台に積んできた荷物をどの順番で渡そうかと心を躍らせていく。  
荷台の荷物はアネルにプレゼントしようつと持つてきたジュエリーや  
可愛いぬいぐるみ、洋服類。

今日会えるとわかっていたのならホテルに残したプレゼントも全部  
持つて来るべきだったと  
のぼせた頭でコレットは考へている。

「イッヤツーホー！」

中庭からカヤンデル山脈の方角を見れば空に瞬く星と黒い地平線。春には山から冷たい風がグリスの宮殿にまで吹いている。

春が過ぎると海風が湿氣を運んできて蒸し暑い夏がやつてくる。裏手の滑走路からサガモア王も若い頃イエフゲニーの屋敷にと九百キロの道のりを何度も往復した。

今夜飛び立ったのは王の一人の息子アルヴァー・ルーサー。他国から連れてきた女性をイエフゲニーの屋敷に囲っている。

息子の女性への熱情を自分の時と比べて息子のほうが女性への愛情が薄いと感じるのは自分の息子への愛情が希薄なせいだということはわかっている。

愛する女性ファーレーネの命を奪った赤子がサガモアは憎いのである。

陣痛の痛みの合間に言葉を交わし、

ファーレーネは後四人は産むわよと笑っていたのに  
赤子の鳴き声はサガモア王の妻の命を奪ってしまった。

寝室にはファーレーネの着用していた衣服がハンガーにかけられ厳しい政務の王を慰めてくれる。

妻の分身を愛そうと何度も努めたがファーレーネの居ない空間を埋めることは赤子には出来ない。

愛しいファーレーネとは山ほど会話があり思い出はあるが、赤子は泣いて訴えるだけで訴える相手は誰でもいいのである。

サガモアは妻を失つたショックで赤子に対して愛情は抱けなかつた。

身分の低い従者に赤子を託して国外に追いやり、  
出来れば国外で病死することを若いサガモアは願つてゐる。

他の一族の妬みも激しかつた。

ファーレーネを愛しているのに次の妃を娶れと脅かされてもいる。  
細々と赤子に金を送つたのは大きくなつた我子がファーレーネの  
代わりにサガモアに微笑んでくれることを期待したからでもある。

ファーレーネの縁故関係で選んだルーサーの従者はしつかりとその任  
務を全うし

皇太子の候補としての資質を備えさせルーサーを試験会場まで連れ  
てきてくれた。

万が一にも彼が皇太子になつたらと寝室でファーレーネとサガモアとルーサー  
だけ。

このときだけはなぜか心が暖まりファーレーネとサガモアとルーサー  
と三人が家族の様な気分を味わつた。

試験結果は文句なしの出来でわが子が皇太子に選ばれ  
会場の演壇でルーサーが王の横に並び間近でわが子を見たときは  
まったく見知らぬ他人としか思えなかつた。

ファーレーネと出会つ前のサガモアは高飛車で高慢ちきの情に薄い冷  
たい男である。

優しいファーレーネにすっかりとげを抜かれ美男美女のカップルだと  
噂にもなつたほどだ。

ルーサーは母親の美しさを受け継ぎ美しさにも磨きがかかり試験会  
場では一際目立つて誇らしかつたが昔の自分のように感情の起伏が  
読めない冷たいだけの人間だと解つたのは王宮に戻つてからすぐだ。

こんな男が次の皇太子かとサガモアは落胆した。

息子と 그리스の宮殿に一緒に住むことも、息子が愛している女性にも王は会いたくない。

ファーレーネとの思い出の品々の一つにもルーサーには手を触れて欲しくないのである。

ガイナス国を残して他の国々は新しい未来を築きつつある。他国は力関係を吟味し同盟を結び強力な権力体勢を作りうと躍起になっている。

遠方から帰ってきた息子は赤の他人になりサガモアのサポートどころか嫌悪感の対象になっている。

各半島の事業内容の概要や顛末、人口の推移、恐喝まがいの軍の強行、押し迫った他国との協調交渉。

「井戸の中の蛙大海を知らず。いつまでこの状況が続くとも思えんが。何か打つ手を考えねばならんわい」

苦しい時も哀しい時も若くして逝ったファーレーネを心の中で呼び出しては相談相手にしている。

彼女はいつも明るい方向へと導いてくれていたが今度ばかりは口を開じて笑っているばかり。

どの半島の出身者の妻も持たなかつたからどの一族にも借りも遠慮も無い。

そのかわり親しくしなかつた分だけ深く隔たりが出来たのも事実、好き勝手に動き出した半島の長老達がこれからどんな手を打つくるのか、

「あやつらのこと、指をくわえてなど居ないだろ？・・

中庭の木に住み着いた鳥が暴れています。こんな時間に鼠かヘビにでも卵を盗まれて騒いでいる。

モラド半島の最北端

沖を航行する船に狙いを定めているのは古い砲台。

崖下百メートルの先には航空母艦を納めるドックがある。

岩と大地に似せてカモフラージュされたドックは

衛星に写されても大丈夫なように作られている。

ドックでは修理を終えた船が出て行き盤木の列が大型空母の船底の分だけ並んでいる。

岩をくりぬいた指令所でドックを見下ろしてふんぞり返っているのは軍服姿のウルバーノ。

隣には手足のように動いているヤーゴ参謀。

「それでサガモア王は何を企んでいると思つ?」

モラド半島に帰つてきても一箇所に腰を落ち着けられない。

「ドーラードのブランズ、プラテアドのティエリー殿が環境委員会、休戦委員会、安全保障委員会にと出席されています。もちろん呼び出しを受けてわが国の意見を述べただけのようです。議事録を見ても一方の報告書を見てもなんら問題は見られないと思いますが」

集めた資料をショレッダーにかける、  
どれも持ち出し禁止の書類ばかりだ。

「なぜ今頃になつて、ブランズが出てきたか・・だな?」

モラド半島からの眺めは最高だ。

特にこの岬は視界を隔てるものなど海鳥以外は見当たらない。

「ええ、王に言わせれば環境に関しては医者であるブラーーズ殿は適任かと。ティエリー殿は経済学のエキスパート多国間条約の他にセデル国との一国間条約も結んできた。問題は休戦委員会、この一人の「ひづり」が発言した意見だと思つ」

仕事を終えた作業員達が入り江を回った造船所に移動してしまってこのドックには整備点検の人間しか残っていない。

「確認して見ますか？モイセイ将軍にマラット国とマルセル国との戦況も知る必要がありますので」

「タラス国は休戦委員会に参加したのだな？」

ならば武器の売買には少なくなる

「ええジノバ国と一緒に」  
ヤーノの言つてゐる一力国は最近もたくさんの武器購入に意欲的だった国。

「モイセイ将軍はこのことで恩着せがましく何か言つて来るかの？」  
モイセイは大国に組して白旗を挙げた国の首長の名前

「次の取引でおまけをつけてやれば喜んで教えてくれると思いますが」

経済制裁を受けないために休戦委員会に参加を促した中心人物である「値引きをしないのが信条なのだがな」  
どの国もひとまず休戦と見せかけて自国の装備を整える

「値引きではあつませんよ。おまけです」

ヤー」「参謀の答えに満足してウルバーノは片方の口の端を上げてこんまり笑った。

ダッドは朝早くから苛苛しながら一階への階段を上っていた。

「まったく主人が主人のように振る舞わないから、召使もまともな仕事も出来ない。召使ぐら使いこなして欲しいものだ」  
うつすらと階段の隅には三角の誇りが溜まっている。

コレットの掃除の仕方が悪いと  
主であるラティーフに文句を言っているが実際の上司は文句を言つてこるダッドである。

朝の六時を過ぎてこいるこの時間。

ダッドは朝食の準備にとりかかるが昨夜から奇妙な声に悩まされ  
といつとう堪忍袋の緒が切れてラティーフの部屋に注意を促しに行く  
ところだ。

「ラティーフ様！ 奇妙な物音を出すのは止めて頂きたい」

一晩、二晩寝ないで盗聴したこともあるがその場合、  
生活の物音や話し声で昨夜から今朝にかけての奇妙な音とはまったく  
く違っている。

「一体何をしてこりつしゃる！」

イライラの頂点で言ひ募る文句ばかりが頭には浮かんでいる。

「ダッド？ 珍しい。どうかしたの？」

と寝室からラティーフが顔を覗かせる。その胸には小さな赤ちゃんを抱えている。

「一晩中、変な音がしていました。・・・それは何処から・・拾つてこられたのですか?」

シーツにマルマルくるまれていたのは一見人形のよつな物体。

「この子の泣き声が聞こえたのね、ずっとバスルームに居たから響いたのかしら」

バスタブにお湯を張つて狭い洗面所を暖めていた。

「もしかしてラティーフ様が・・」

拾つてきたのではないのなら盗んできた・・ビダッドは思つた。

「そうよ。昨夜生んだの。男の子よ可愛いわね。ずっと見てても飽きないの」

ラティーフも子供がお腹で成長しているなどとは気がつかないでいた、

昨日の夕方から断続的にやつてくる痛みにもしやと思つていたら夜中の一時過ぎに痛みは頂点に達してバスルームで出産している。間の抜けた質問である。ベビーは母親の胸で抱かれている。

「妊娠してらっしゃたのですか?」

間の抜けた質問である。ベビーは母親の胸で抱かれている。

「ううみたい

恥ずかしそうにラティーフは微笑む。ガイナスに来て一番驚いて嬉しい出来事である。

寝不足の怒りを何処にぶつけていいかわからずダッドは一步下がつ

た。

「はあー・・は・・はあ？失礼致します・・・」  
きびすを返すとダッドはドアも閉めずに飛び出していった。

「なんなんだあの女は？犬や猫じゃないんだぞ！」  
と廊下に出るなり違う怒りが吹き出る。

実際、犬や猫をダッドは想像していた。

夜中に回線を切り替えて聴こえる鳴き声は、拾つてきた犬、もしくは猫の鳴き声。

厳しく注意をするべきだと勇んで上がつてきていたのである。

脱兎の「」と通信室の小部屋に入り込むと本部を呼び出した。

「医者を頼む！産院の経験を積んだ医者だ。状況？そんなものは見てはいけない！――」

見て居ないから慌てている。

皇太子妃が住み始めて騒ぎを起すのはもっぱら召使のコレットである。

「子供が生まれたのだ。医者だ。必要なのは医者なんだぞ。せつと手配しろ！」

皇太子妃は谷越えをしては機織に出かける。変化の無い日々が続いている。

本部との連絡を切ると少し気持ちの余裕が出たダッドは廊下のイレーヌを呼び出した。

「悪いな朝から。頼みたい」とある。ベビー用品を一冊口レットに持たせてくれ。何?もつ出た?呼び戻せ大至急だ!」

ダッドの大声をホテルの事務室で聞いていたイレーヌは緊急ブザー

を一定の兵士に向けて押した。

連絡を受け取ったと赤から青にランプが変わる。

「何が起きたんだろう?」

トイレーヌは首を傾げるがベビー用品が必要になる女性があの城に居るとは思えない。

「はは〜〜ん、少佐つたら、谷越えして遊んでいたのね。ばつかな  
男!」

イレーヌに隠れて遊んでいた女性に子供が出来たと押し付けられ  
ダッドが慌てふためいて走り回る姿を想像している。

## 幸せな一人

月は新月、空には満天の星の海。

夜半、書き散らかした紙が散らばった部屋を足音もなく通り過ぎ、ラティーフのベッドの脇に腰をかけて

愛しい人を起さないように寝顔を覗き込む。

ルーサーが今宵行くと連絡していたのにラティーフは待ちきれずに熟睡している。

毎日一人の子供を抱えて谷渡りをしては機織に出かける。

繊維工場での子供の面倒はコレットが見てくれラティーフの機織に支障は無い。

バルカ・シシク城の復元チームの一員として城の床に敷く織物、タペストリーを一日僅かに10センチずつというスピードで織り上げている。

城に帰つては土砂崩れで流された村の記憶を思い出しスケッチブックや個人の記録として日記にしたためている。

「嫌がるだらうな・・・」ぽつりとつぶやく。

田々一箇所に留まつていらないルーサーと違い、ラティーフは腰をすえて子育てと機織を一生懸命にやっている。

宮殿での暮らしあは少しづつ話してはいるものの妃として知つておくべき事はラティーフは興味が無い

嫉妬深いルーサーはラティーフを誰にも見せたくないし会わせたくも無い。

早くグリスの迷路のような宮殿奥深くに住まわせて、毎日愛しい人の顔を見ていきたいのである。

「あら・・・やだ起こしきださればよかつたのに

ベッドの真ん中で丸まつて寝ていた。

今宵はルーサーが来るというので

一人の子供はコレットがホテルに連れて帰っている。

半分開いた目がルーサーを見つけて微笑む。

「今ついたばかりなんだ」

ネクタイを外し上着をスツールの上に置いてラティーフの隣に。  
ラティーフはベッドを半分開けてルーサーを待つた。

枕を裏返しにしてよだれのしみがないか素早く手を走らせる、あつ  
た・・。

裏返すのを間違えたともう一度元に戻したいがルーサーがひじを突  
いて見えなくなる。

(隠れちゃった・・いいか・・)

ルーサーから立ち寄ると連絡が来ると気分が浮き浮きしているトニ  
イーフがいる。

短い時間しか会えないのに会っている時間はとても楽しく感じる。  
ルーサーと別れて三日間は心に穴が開いて寂しいがすぐに織物に夢  
中になつて忘れる・・を何度も繰り返して一年半が過ぎている。

枕もとの灯りに端正な美しい横顔が浮かび上がる。

「棟梁に頼まれた仕事は進んでる?」 ラティーフの頭の下に手をく  
ぐらせて尋ねる。

ルーサーとの会話はいつも至近距離。

ラティーフもルーサーの背中に両手を回して綺麗な顔を見上げる。  
「ええ、一階部分は全部出来たわ。一階とか吹き抜けの部分はちょ  
つとややこしいみたい」

「君は建築家ではないから無理をして関わらないほうがいいよ、それに相手の迷惑にならないかい」

「私が押しかけて居るみたいね。違うのよ」

押しかけているのは繊維工場。

どうにかして職工として働きたいけれどレイステンから来たよそ者なので

協会に入れてももらえないのである。

「どうかしたの？」

いつもならぽんぽんと答えが返ってくるのに

ルーサーは黙つてラティーフの顔を見つめている。

「お願いがある」

「夏までに君の好きなドレスを作ってくれ僕が見立ててもいい。僕の好みで選ばせてくれるならデザイナーに何枚か描かせようその中から選んでもらえると嬉しい」

「ドレス？ そんなかしこまつた格好で何処に出ると言ひの、私にはつなぎで充分よ」

「建国三千年祭という国を挙げての大きな祭りがある

「祭り？」

「僕達も隅つゝで三千年を祝おうじゃないか」

「祭りなの・・・」

祭りは大人社会への第一歩。

村人が全員集まりしきたり通りに品物集め社を飾りつけ神様と一緒に食事を取る。

「そうだ、王宮内でガイナスの神が宿っているという宝石のお披露目と王の挙式、司教の説教を聞いて。最後は日の出と共に我々はバル

「二に出て国民と共に祝うその後軽い会食。TV放映もあってガ  
イネス中の国民に見られるだらうけど。大丈夫さ、僕達はバルコニ  
ーの端っこでTV画面には映らない。国民からも遠くて誰が誰やら  
解らない」

「そんな大事な祭りに私が参加しても変に思わない?」

祭りといつても隣の国の祭りだと自分に言い聞かせるが  
片隅でもよいから参加出来るという事は人間として  
大人として認められるとの思いがある。

「祭りだから皆縁故者を連れてきて、バルコニーは人で満杯さ」  
形だけでもラティーフを父親に合わせたいルーサーは  
王とギクシャクした関係なのはさておいて  
ラティーフと子供達を王に引き合わせる日を考えていた。

「色は何が好き?君はこに出たがらないから僕がデザイナーに伝  
えよう」

好奇の目からはラティーフは連れられないだろうとルーサーは思つ

「祭りの式典に私も入れてもらえるの?」

村と同じ規模ではない・・と頭で考えても

祭りに参加できると考えるだけで心の底がむずむずしてきた。

「そうだよ。そのお腹だと辛いかもしれないな。何かあつたときの

ために部屋は確保しておくれ」

「そうね。そうしてもらえると嬉しいわ

見る見るうちにルーサーの目の前でラティーフの両目から涙が溢れ  
て流れ落ちている。

「どうしたのなぜ泣いてるの」

驚いて尋ねる。会話の中身は三千年祭の式典で着用する服装。優しく背中をなでる手がラティーフの涙を拭つとラティーフは気持ちが落ち着く。

選手生活を辞めた時もルーサーと会話することで気持ちが軽くなつた。

「ドレスは私が考えたデザインでいいかしら。もちろんあなたの意見を取り入れるから。こんな時に変だと思うでしょ」ナビ婚禮衣装を見てみたいと思っている。村では祝い事には必ず着るの」

子供の頃から憧れていた。

村の女性なら誰もが一着は持つてている最高のおしゃれ着は深緑の山に映える美しいドレス。

「デザイン画を描いてくれよ。僕も君の描いたドレスに合わせて式服を選ぶから」

ラティーフのおでこに頬にキスして言葉に出来ない約束をルーサーは繰りかえした。

王の治世は後二十年は続きそつだと謁見者が帰り際に高らかに話していた。

二十年・・という年月の長さがラティーフにとってどんな時間になるのか考えただけでも恐ろしい。

「ルーサー。ありがとう・・・」

やつと一人前になつた気がする。

もう三十といつの年に祭りを経験していないラティーフの負い田もある。

幾度か村のしきたりや慣習をルーサーに話したけれど彼が覚えていたことに感謝した。

「式典が終われば、私はここに戻つて修復の仕事ができるのよね？」  
一番目に心配なことである。

土砂崩れで村はなくなつたけれどそれを思い起こす作業をさせてくれた仕事は続けたい。

「いつまでたつてもお妃としての振る舞いが身にがつかないな。ダシドに命令すれば全部揃えてくれる。いつてあるだろう私服もつなぎ以外に揃えないさい。作業服しか持つていらない妃なんて・・・」  
間近に有るルーサーの唇に指先を当てて言葉を遮断する。

嫌な顔もせず淡々と説教を言うルーサーは嫌いではないが何度も注意をされると聞きたくない。

ルーサーはこのラティーフの行動は好きだった。

優しく笑うルーサーに、

「なりたくなつたのではないわ。私は向いて無いと思うわ。ダッドも妃教育なんてつやりたくもないのよ。でもガイネス史は面白いわ変わつた国家の成り立ちだけね。勤勉実直、質実剛健。助け合いの精神が溢れている国なんて世界中探してもここだけよ。素晴らしいわ」

村の人々と一緒に住んでいるようだわ・・とちょっと感傷的になる。

「文化的には遅れているけどね」

「そんなの・・住んでいる人が幸せを感じているならどうでもいいことよ。私ここが好きよ。ここでは私を必要に思つてくれる人がいるから。ずっと居たいわ」

両手でルーサーを引き寄せて一緒に働いてくれる人を思つて抱きしめた。

「嬉しいよ・・」

ラテーライフの感謝の表現を自分だけに向けられたのだと感動している。

丸い天井まで高さハメートル、壁には趣味の古刀や甲冑、奥の壁には磨き抜かれた大小さまざまのこん棒、高い窓には武器の劣化を防ぐため幾重にも分厚い布で覆われている。サガモア王が私的な客と応対する応接室の一つにルーサーは居る。

「ここのたびは私のために時間をとつて下さりありがとうございます。説明を・・する必要もありませんがお手元の資料は私の妃の衣装です。問題点を指摘してくださいとまだ考慮の余地があります」

心地よい風が入るように四つの窓が開いてそこはかと風がカーテンを揺らしている。  
並んだ椅子を四つ間において王とルーサーは座っている。

短い挨拶が終わると壁際の侍従がルーサーが持参した封筒を王に差し出す。

王がうなずくと侍従が中身を出しテーブルの前に広げる。  
手元に書類を引き寄せないのは老眼が進んでいるせいである。  
王は書類を眺めてはこめかみに指を置く。そろそろメガネが必要な時期かもしねれない。

「これを描いたのはだいぶ前のことだ」

皇太子が王宮の書庫に入ったのはこの日づけよりも一ヶ月は後の事。忙しい合間にぬつてルーサーは前々から気になっていたことを書庫の中を見つけている。

期待はずれの皇太子、身内の一族の人間にすら期待も何もされてはいないのならばこれ位しても許されるとルーサーは思つ。  
そうでなければ妻はガイネス国に認められない。

ルーサーの顔にどこか嘘がないか長い睫毛の間からサガモアはじつと見つめた。

息子とはいえ何を企んでいるのか読めない面構えがそこにはある。

そのルーサーの顔がふつと弛む。

「ええ、彼女はその日以来ドレス作りに邁進しています」

ラティーフのことを父親の前で語ることは嬉しい。

日頃、王とルーサーの間では個人的なことは一切話題に上らない。長老達との意見調整に遁走し合間に世界の情勢を分析し国の指針と照らし合わせて他国の危険な人事異動や騒動をピックアップし細かに書類に書き残し王に渡して、

国に馴染もうと寸暇を惜しんで働きグ里斯の宮殿では一度もラティーフのことと思いを寄せることが出来ないくらいに緊張した毎日を送っている。

それが堂々と謁見の広間ではあるが語ることが嬉しく全身から喜びが出てその場にいる侍従にまで伝わっていても臆することなく王の言葉をルーサーは待っている。

思慮深い目がルーサーに向けられ片手が上がり払うように動く。侍従が書類を封筒にしまいこむと乗り出してみていた身体を椅子の背もたれに乗せ掛けて腕組みをする。

「バルコニーで立つ位置だがTV放送も考慮に入れて長老達より末席になるがいいかの?」

「私どもは若輩者です。一緒にバルコニーに立てるだけでも恐れ多いのに。控え室に近いことはよろしいですね。すぐに引き下がれま

すからね」

孫の話題でどんな反応をするルーサーは父親を観察した。

サガモアは何か違うことを考えているようで淡々としている。

「そうか。何か必要なものがあつたら云つてくれ。それと・・式典の日に行きなり会うのも・・どうかな。日時を任せてくれるなら会食の用意をしよつ」

侍従にスケジュールを尋ねる。

「父上に妻を紹介する機会を作つてくださるのは嬉しい事です。会食となると時間をとつて会話を楽しみたいと私は思いますが、妻はかしこまつた席に着いた経験は少なく乳飲み子を抱えていますし身重もあるので、出来れば時間は短くして欲しいのですが」  
父親の他人行儀な態度にルーサーも諦めて首長相手の態度に切り替える。

「そのほつほつとおりに短く時間を取り」「王は息子の壁の向こうの自分の寝室の肖像画を思い浮かべて遠い目をした。

謁見の間を退出し

最後に苦惱の表情を浮かべた王にルーサーは嫌悪感を抱いた。

皇太子に選ばれてから色々な所で王と顔を合わせるが一度として優しい笑顔を向けられたことはない。

いつも王はルーサーを見るたび何か心の中で込みあげて来る憎しみと戦っているように言葉も一拍置いて出てくる。

それほどルーサーが嫌いなら生まれた時点でどこかの家に養子に出してしまえば縁は切れたものを・・とルーサーは思う。

ただ養子縁組をした人間がきちんとルーサーを育てるとは限らない。

いわく付きの赤子だ。養い親の生活状況でルーサーの人生は変わる。

黒塗りの専用車の後部座席に乗り込むとさつきまでの緊張が身体から抜けていく。

「面と向かって会わないようにすればよいものを」思わず王に対する不満が口に出る。

皇太子付きの運転手になつたクリスが声をかける。ルーサーの独り言はクリスには聞こえなかつた。

「殿下。初めてですね二人だけの会見は如何でした。大広間の絵画じや颯爽としていい感じでしたが」

二十数年ぶりの親子の対話である。

「ン、大広間の絵は若かりし頃の絵だろう。今はもつと老けている」王の眉間に皺のよつた無表情の冷たい顔は二百年は生きている老人のようだ。

「そうでしたかね。あの絵は去年の掲げられたものではなかつたでしょうが」

大広間の絵画を待ち時間にこつそり入れてもらつて見学している。入れてくれた侍従の説明と違つてるのでどつちが正しいのかクリスには解らない。

バックミラーでルーサーの顔色を伺う涼やかな表情はいつもと変わらない。

「親子の感動的な再会を想像しても無駄だぞ。王は私の血縁ではあるが家族ではない」

ルーサーの言葉を聞いてもつと人間味の有る大人に育てるべきだつ

たとクリスは思つ。

ガイネスの皇太子には喜怒哀樂の少ないルーサーでよかつたのかと  
またぞろ後悔がよぎる。

フォーラクスティットはプラテアド港湾局長に納まり五十歳超えない若  
い局長が誕生した。

ルーサーの侍従の全員がフォーラクスティットの配下に組み入れられた。  
クリスも同様に入隊するつもりで居たが二十数年苦楽を共にしてき  
た仲間がいつせいにルーサーから離れるのを危惧してフォーラクスティ  
ットに五年だけルーサーのそばで仕事をさせて欲しいと頼み込ん  
でいる。

テットは王様に頼み込み異例の配置でルーサーのお抱え運転手の職  
に就いている。

運転手と言つてもガイネスでの車の普及率は低い。  
特殊な人間だけが電気自動車を使用し一般市民は自転車での移動手  
段がほとんどである。

セデル国では車道では車が走るが

ガイネスではたくさんの自家発電地を付けた自転車が車道を走つて  
いる。

たまにクリスが車道に車を乗り入れても文句が出ないのは自転車道  
は緊急時には大型輸送トラックが人と武器を積みこみ戦闘配置につ  
くために使用されるから道路幅は広く車が一台走つてもかなりの余  
裕がある。

「本当にここには進んでいるのか、遅れているのかわからない場所で  
すね」  
比べているのは隣の国のレイステン市を筆頭に看板や電飾のぎやか  
な街。

ゆっくり徐行しながら走つてゐると自転車に乗つた子供と婦人が右手を肩まで水平に上げて車を追い抜いた。

年寄りから子供まで自転車のルールをきちんと守つてきびきび動いているのが微笑ましい。

「遅れているんだ」

バックミラーとサイドミラーで過ぎ去つた景色を見て居たルーサーは、五階建ての建物の側壁に添つて人の列が長く続いているのに目を止めた。

「携帯電話が無いですもんね。一家に一台電話も無い。あ、電線がない。それで空にしまりがない？」

フロントガラスから左右とまつすぐ道向こうの空を見上げる。

緑の街路樹の続く街並みには広がる青空が似合つている。

「電力は限られた工場にしか使われないんだ。電話設備も装荷線輪と古いがな」

「装荷線輪・・ですか。アンテナ立ててくれないですかね。ＴＶも一局。娯楽と言つのは運動競技だけそれも名目でしょう。有事のための軍事訓練で全国民納得ずく邁進している、良いぢや良いし。やりすぎつて感じもあるよな。幼児の頃から走つたり飛んだりしてるものなあ」

変わつてゐると言ひながらクリスもそのカリキュラムで古武道を選び卓越した武道家の一人になつた。

ガイネスが何を目指して何処へ行き着くのかルーサーには解らない。今は五十年進歩で国民の生活水準を引き上げる計画が進行している途中だ。

他国並みの生活水準を目指しているのは、世界の情報をリアルタイムで全国民が知り始めたから。

そんなことが必要なのかはルーサーの知つたことではない。

그리스王宮には

朝早くから奉獻の儀式のために自家用機を飛ばした客と  
離宮で一夜を明かした客が集まり暗い道を王宮の奥の神殿にと歩いていた。

長い通路は飾り窓に等間隔に配置されたガス灯がぼんやりと光る。

ゆっくりと歩む人々は頭からすっぽりと覆つたマントの裾を蹴つて、  
口を開けた大扉の中に入る。

聖堂は無骨な外見とは違い美しいレリーフが壁に浮かび参列者と同じように祭壇に向かつて頭を垂れている。

正面の高い祭壇は花を模した宝石を隙間無く配置し主体となる御神体の姿は見え無い。

最後の一人が入ると内側にいた侍従が扉を閉め

持つた灯りを左右の蜀台に灯し壁の暗がりに下がり太いロープを引つ張り上げると、

祭壇の一部が稼働し左右に開く。

その奥には幾重もの布が垂れ下がり扉の締まつた空氣の振動でゆれている。

衣擦れの音を立てて、前に出てきたのはサガモア王である。

王は左手に持つた盃から部屋を取り囲む七つの彫像に聖水を振りまき  
祭壇の傍らに盃を置いて膝を折りじりじりと祭壇へ進み  
薄布やぼってりと厚い布を手で払い祭壇奥の小部屋に入る。

時刻は太陽がカヤンデル山脈の東北東から上り始めている。

奥の部屋に取り付けられた鏡は太陽の光を御神体に集め祭壇の真上から部屋全体に光りが溢れる。

充満した光は祭壇に漏れ飾っていた宝石の花々を美しく輝かせた。

光りが大聖堂を満たすと光と同じに王の声も静かに壁から天井から響き始める

カヤンデルの恩恵に報い恥を雪ぎ、  
萬乗の疆國を夷らげて、八百歳の蓄積を収め、  
群臣を棄つる日に至るに及び、  
余教未だ衰へず、政を執り事に任ずるの臣、  
法令を修め、庶蘖を慎み、施いて萌隸に及ぶが若きは、  
皆以て後世に教ふべし。

夫れ身を免れ功を立て以て先王の迹を明らかにするは、臣の上計なり。

毀辱の誹謗に離りて、先王の名を墮るは、  
臣の大いに恐るる所なり。

不測の罪に臨み、幸ひを以て利と爲すは、  
義の敢て出でざる所なり。

臣聞く、古の君子は、交はり絶ゆるも悪聲を出ださず。

忠臣は國を去るも、其の名を潔くせずと。

臣は不佞なりと雖も、數々教へを君子に奉ず。  
侍御者の左右の説を親しみ疎遠の行ひを察せざりんことを恐れ、  
故に敢て書を献じ以て聞す。

唯だ君王の意を留められんことを。

最後の言葉が王の口から漏れると天井を満たして金色の光りは消え  
淡い温かみある黄色のに変わり聖堂の中に差し込んできた。

王が祭壇裏から出て聖水の盃を持ち上げて指先につけてひれ伏した  
人々にかけると一人ずつ奥の部屋に膝をつけて入る。

最後のラティーフがルーサのまねをして出て横に戻ると神殿での儀  
式は終わった。

儀式での役目を終えた王は司祭から香炉の煙を頭、両肩と降りかけ  
られて神殿の大扉は静かに閉められた。

「大きな水晶だろう。僕は事前に見ていたから驚かないつもりだっ  
たけど。今日は一段と素晴らしい、水晶に一筋の光が入って  
部屋の鏡で増幅されるように計算されて居るんだね。感動したよ」  
そっと身体を寄せて話しかける。

一日の始まりをラティーフと迎えられルーサーは気分がいい。  
周囲に誰もいなれば手を繋いで歩きたい。

ガイネスに戻つてから初めてのデートがこの式典である。

「ええとても綺麗に磨かれて美しかったわ」

マントの中着込んだドレスが見えないよう打ち合わせを深く止  
める。

王の言葉の意味は解らなかつたけれど潔い気持ちがこめられている  
のは伝わった。

「水晶はガイネスでは珍しいものではないよ。地核変動や火山活動  
で出来た結晶だからね。どの国でも水晶は多く産出されている」「  
ラティーフの緊張を和まそうと氣を紛らわせるため会話を続ける。

「『』神体が納まつたときは三千年前からだという学者もいれば千年  
前だという学者もいてね。はつきりした年代はわかっていないよ。  
神話の時代にはあつたつて言うし、そうなると、ほらね。わからな

いだろ「

緊張し思い詰めた顔のラティーフを覗き込む  
些細な変化を見極めようと細部まで見つめる。

迎えの飛行機の中でも到着しても緊張と孤独感は増していく、やつ  
とルーサーの手のぬくもりと正面から見つめられることでこれが現  
実に進行している出来事だとわかる。

「莊厳な神殿で圧倒されちゃった」

神殿奥で見た水晶が今は無い村を思い出させて気が滅入っている。  
子供の頃大人の後つけて社の御神体を見た。

岩山に変わった場所にさつき見た水晶の少し小さなもの見たことが  
あるといつたらルーサーは信じるだろうか、

「気分は？少し顔色が悪いね」

と本気でルーサーはラティーフを心配している。

「大丈夫よ。緊張しちゃって眠れなかつたの」

小さな記憶はラティーフの心いっぱいに広げられている。

中庭に足を踏み入れれば木の葉に降り注ぐ朝露を感じ深げに見上げて参列者たちは歩いている。

祭りという氣楽さからやこいらの木陰や柱の影で会話に花を咲かせる人の集まりができる。

立ち止まつた人の目を気にしながらルーサーとラティーフはゆっくりした足取りでコレットと子供達の待つ控え室に歩いていった。

二人の姿が屋敷の中に消えると、

「跡継ぎが血を分けた子となつて安心したであら」

顔にかかるフードを外すと少くなつた銀色の髪の毛がはらはらと額にかかり、

髪の色に似合ひ田に焼けた顔が現われる。

「そう思うだろうと期待していたがな。残念だが同じ屋根の下で長く住まねば情は湧かぬものらしい。顔をつき合わせる機会は多いが息子だという感覚は無いわい」

眉間に寄せた皺が本音を語る。

「それも解らぬでは無い。わしとてあちらこちらと子供は大勢あるが、どれも皆一緒にみえての。優劣をつけてから名前を覚えるという嫌な図式になつてしまつた」

そう笑いながら子孫が増えたことに満足している。

「仕方あるまいて。優秀な人材はいくらでも欲しい」

長年の友人の自慢話を苦笑して聞くたびに妻が生きていたならばとの思いがサガモアの頭をよぎる。

「皇太子はなかなかの美男子だが親に似て硬派じゃな。一本氣とうか頑固というか。最初彼が選ばれた時七つの部族の何処に最初の産声が上がるかと期待しておったのに、レイステンから連れてきた恋女房との間にしか子はおらぬの」

内緒話をする風でもサガモアに氣を使うでもなく通りの良い声が談笑している人々にも聞こえている。

「言つな。そんないしょうもないところだけ似てもらつてものう」  
固執する性格だけ似ていると言われている。

「そのうちわしとこの娘と娶わさせてくれ。女子供がつるさくて適わぬ。あれほどの美形なら一人くらい孫の中に居ても田の保養になるだろうて」

サガモアに視線が集まってきたのをいいことに本氣とも冗談とも取れないことを言つ。

王は未だに引き受けたの無い後見人は現われないとルーサーが可哀相になる。  
長老達を臨機応変に手玉にとつてしまえばよいものをと自分のことは棚上げ手心配をしている。

「さすれば恋女房の後見人になってくれるかの」

頑固な皇太子はどの一族との間にも愛人を持つ様子はない。

サガモアの受け答えには困らないさうりと本音を突かれると笑つて

誤魔化す余裕はある。

「それはそれ。これはこれじゃな」

親であるサガモアもルーサーの母親を忘れられずに独身を通していくだけに、

ルーサーの女性関係には口出しはしない。

会見であつたラティーフの印象は悪くない

一瞬亡き妻を見た気がしたが良く見れば似通つた場所など何も無い。  
特別美人でもないが彼女が居るだけで  
緩やかな時間の流れを感じさせる素直で感じの良い女性である。

「悪い女ではないがのう」

侍従たちが動き始めた、衣服を調べバルコニーに立つ時間が迫つて  
いる。

急場しのぎに作った木組みの上には三人の男がTVカメラを設置して見下ろしている。

宮殿から正面に伸びた庭とバルコニーのみに固定した古いカメラは調整が難しい。

木組みの上には滑車が取り付けられ板をロープで吊つただけの昇降機に乗ったカメラマンはバルコニーを上からと地上から見上げたの角度を動きのある映像で撮ろうとしているがカメラの重さで板がゆらゆら動いて足元が固定できない。

「リポーター！画面から消えたぞ何処へいったんだあいつは。三カメその位置はダメだバルコニーが全部入らない今日の主役はな皇太子だ。王様もいい男だが後添えを貰つてないからな、性格に問題があるのかもしれません、長老達の後継者もぱつとしないし宮殿の中ではぴか一皇太子が美男子だと言われてる。奥方もいて今回が初お目見えだ。若い皇太子の家族は注目される。俺の一存でカメラの設置場所を変える。言い逃れはなんどでも有る。頼むぞ良いアングルを狙つてくれよ」

ヘッドセット片手にマイクに向かつて映つていなしリポーターに真剣な目をして話しかける。

「ねえねえ。いいかしら、通行人の話を一二三撮つてきたんだけど。みんなの注目は王様の振る舞い酒だけよ。広場の護衛の周りにはスツゴイ人だかりよ」

耳元の声に目を閉じて頭を振る。

「ロック、カメラが回つたらその女言葉やめろよ。周りにほりちゃん  
とインタビューに応じてくれる奴はいるか」

前もつて式進行の台本はあるがそれをそのまま映すのは面白くない。  
滅多にないリアルタイムでの放送である。

「うん居るわよ。ちょっとこの資料何よセイジ！細かく説明の載つ  
たのないの？皇太子の奥さんの衣装の説明がわかる資料を持つてこ  
わせてよ。ふざけてるわよ」

ロックの女じとばに肩を落とす。

「こいつはこいつか失敗するとセイジは思つ。

「ロック、ふざけてない。それは宮殿から出たものだ」

買つたばかりの副調整車の中で何度も各カメラのアングル調整に余  
念が無い。

「これを大写しになつた時に云つの~二千年祭だから？」  
と、不服そうな声。

「そう。言葉を選べよ。王から紹介の言葉が始まつたら二秒後に奥  
方の顔のどアップに切り替える。奥方が挨拶を終えたら足元から顔  
までゆっくりと回してカメラを引くから、そこから説明を始めてく  
れ。画面下に用意したビデオを流すから。ゆっくりと語れよ。そこ  
からもう一度全員の胸から上を王様から回して最後に奥方で閉める。  
OK？」

昨日の会議で説明したはずなのに外に出た途端ロックは細かいこと  
は忘れる。

「了解。良くこんなので王様許したわね。私一緒の場所に立ちたく

ないわ」

渡された資料を見て本音が出る。

「おいおい。思つても口には出すな。最高のショーンんだ」  
スイッチャーの切り替える画面をチョックして式典の流れを何度も  
細かく構成しなおす。見せ場は半島の有力者が全員並ぶ時の表情で  
ある。

半島」とに自治権を求めて居る。

何処が一番先に古い結束を破るか？その兆候を今日の式典で読み取  
ることが出来るか。

長老達の立つ位置でその力関係を読みとれるセイジは思つている。

「聞いて。ロック。ガイナスの歴史を紐解けば、七千年の昔から人  
の嘗みがカヤンデルの麓から広がり近代の私たちにまでその長い歴  
史の中の英雄と云え巴この人グエナエル、の名前が受け継がれてい  
ます。勇猛果敢なカヤンデル族の勇者グエナエル。大人から子供ま  
で皆が知つてゐる・・・。だめだわ頭回んじゃないわ。なんか言つてよセ  
イジ」

「分かつた。ロック。何とか納まるように俺が考える。お前はその  
女言葉何とかしろ、絶対に出すなよ。顔が映るんだからな」

「うん、もうちゃんとやれるわよ。気合い入つてんだから。ウフン」  
ロックの隣で町の広場を撮つているカメラマンが空を見上げて首を  
振る。ロックは台本無しではしゃべれない。

「よし。もう一度やつてみよ」  
セイジはマイクに向かつて叫ぶ。

王宮の前の広場から有事には滑走路にもなる横幅45メートルの道  
路が真つ直ぐに北の円形広場に延びている。

広場の周囲には五階建ての建物、屋上には画期的なデジタルサイネージが取り付けられＴＶ局から選びぬかれた映像が映し出される。

道路に溢れ出した人垣は左右の建物の壁面に設置されたて

五メートル横七メートルのデジタルサイネージに映る映像を見ようと場所取りが地上では行なわれている。

器用な人間は家の柱から長いロープを張つてハンモックを外に出して揺られながら見ようと工夫している。

王宮では裏庭から集まつた各部族の長老達が後継者を携え瀟洒なドアに消えていく、裏庭にもＴＶ局のカメラが設置されて逐一お客の登場に説明文を加えて紹介している。

「裏庭のリポートは充分だ」と、満足げな表情。

「屋外の画像状態はどうだ。OK」  
さあ始まるぞとセイジは両手を揉んだ。

サガモアは幅十センチ長セーメートルの宝石のついた帶を首からかけてもらつた。

支度が整うと視線は決まって妻の自画像にむかつ。

緑色の朝日が窓から壁の絵を浮かび上がらせ何度も味わつた寂しさに胸がうずく。

一緒に祝いたかつたと心の中で妻につぶやく。

広い応接間にはたくさん椅子とテーブルが並び  
きらびやかに着飾った男女がこの日のために王が設置したＴＶを物  
珍しげに見ている。

「なんだなんだ、この間のカメラマンはこれを撮つておつたのか。  
これはまた古い式の写真を使つておるな」  
自分の姿が画面に現われると嬉しそうな恥ずかしそうな不思  
議な気分である。

「さつと現在のあなたと後で見比べられるのよ」

痩せた女性は胸の詰まつたドレスの上に同じ色の宝石をちりばめて  
上半身を埋め尽くしている。

隣の夫は始めてみるそのドレスをいくらで買ったのかを尋ねるが妻  
は笑つてはいるだけである。

式典にはずっと同じ服で通じてはいる男は先に放送された画像を見て  
腐つた。

「バルコニー立つ必要が無いじゃないか」

若々しい頃の画像がＴＶに映り服装は同じだが老いぼれた顔で出て  
行きたくない。

「ＴＶの復旧率はすごいわね。主要な場所はＴＶと同時にパソコンも使えるようになったのでしょうか？」

「電力不足で一定の時間しか使用できないがね」

「あらそつなの。もうそろそろ水力発電だけじゃ駄目つてことね」

モラードを見習つて火力発電所も検討すればいいのにね」「若い妻は明るい声で答える顔もスタイルも若さではちきれんばかりで今を生きている実感は誰よりある。

「モラードは生活環境が我々とは違う。別次元だなつ隣の老人が同感だと笑う。

「それは着ているものを見れば解るわ」

若い女性の視線の先にウルバーノ

老人は奥のウルバーノの地味な色合いの服装と見比べて仕立て直した服が思いのほか良くな出来ていて新調した気分で背筋が伸びる。

「大公殿の服装の趣味は、奥方の意向を汲んでおられるのだろうね」と言つた中年の男の後ろのドアが音もなく開くと自然に目がドアから入ってきた人物に注目する。

「ほう

「え？ おうー」

「まあ素敵」

聖堂では皆深緑色のマントですっぽりと覆われていたため誰が誰か判別しにくい状況だった。

「離宮であつた時よりも又一段といい男になつておる」とバラディール。

直接顔を合わせたのは議会だが代表者以外は黒子のように顔にベルをかけてしげしげと見られず細部まで見たのは離宮の監視カメラなのだからしょうがない。

バラディールの言葉を聞いていたのが夫のウルバーノ。

さりげなく周囲の反応を見る。バラディールが離宮に居たという矛盾に気がついた人間はいないようである。

モーニング姿のルーサーが現われると感嘆の声が口々に漏れ、軽やかに通り過ぎるとその瞬間だけ大きな控えの間は華やかな空気に変化した。

「人間の出来が違うの・」

ルーサーが去つても花が咲きほこった様な良い香りと華やかさは漂つている。

足早に応接間を素通りして控え室にルーサーが飛び込むとうなだれたラティーフが長椅子で突っ伏している。

「用意は出来たかい？」

そつと持ってきたショールをラティーフの肩にかける。  
寝不足で赤くなつた目がしょぼしょぼとルーサーを見る。

「ええ、でも・・・」

「大丈夫ですわ。そのドレスはイケてます。ねつ」

四つんばいになつた幼児の腰に紐をくくりつけて腰とつなぎ、顔をおもちゃ代わりに引つ張る赤子を抱えてコレットはにこやかにラティーフを励まし続ける。

絶対にラティーフにはバルコニーに立つて欲しい。

夫に内緒で録画機器をスタンバイさせてきていた。

夫の情報だと末席の皇太子はアイドル並みに人気がありその余波で皇太子妃にも注目が集まっている。

紐をつけた子供がラティーフの手を離れて壁際の彫像へと興味を示し駆け出すとコレットも引つ張られて壁際まで下がる。

「やめとけばよかつたわ。ドレスのデザインなんてやつたことが無かったのに。私だけじちやじちやと恥ずかしい・・・」

応接間に集まつた人々を見てすっかり氣後れしている。

「ラティーフ。TVを見ても解るように僕等はほんの点にしか見えないよ。壁紙と同じさ。僕は灰色で君は赤だ、良く似合つているよ。その髪飾りは覚えているよ。セデル国でのお祝いの品物だ」

蘇芳で染めた赤いロングスカート、祝い貰つた大事な羽根飾りを頭に隙間なく飾り

胸にはラティーフが織つた帯が巻きつけられて居る。

帯模様は緑や茶色が主体で複雑な模様が織り込まれてラティーフの力作である。

美しい自然の中では生えて美しく見えていた衣装もおしゃれなドレスと並ぶとたちまちくすみ古びた民族衣装に見える。

「デザイン」画の時点で誰も注意してくれなつたのが恨めしく思つ。

「私にとつては大事なものなの。でも変よねこんなの」

青ざめたラティーフの顔の横で羽飾りがゆらゆらと揺れる。子供が紐をほどいて長椅子に逃げ、飛び乗つて一回転して着地してみせる。

それを見て歩き始めた第一子がコレットの手を振り切り椅子に突進する。

「母様かつこいいよ。僕もかつこいい?」

子供の手を取り握り締めて窓の外を怯えながらラティーフは見る。

「アネル様そつくり・・

コレットが壁際でこつそり以前のラティーフの思い出に浸り微笑む。

「とてもかつこいいわ」

音を消したTV画面には宮殿から伸びた道に人の流れが出来ている。ルーサーがそつと腰に手を回し引き寄せてラティーフを抱きしめる。と少しだけ気持ちが落ち着く。

「大丈夫だ。僕がついているそつだろ?」

ルーサーの声が空しく聞こえる。

「ええ、ええ・・

ラティーフの滑稽さを強調するように民衆の前でラティーフは完璧なルーサーの横に立つのである。

風船のように膨れ上がっていた高揚感は搔き消え、後悔と恥ずかしさにラティーフは包まれている。

屋上の大画面を見ようと見上げる顔が  
大画面に映し出されるときょとんとした自分の顔を見つめたまま動  
かせない男は

画面が変わると隣の友人と顔を見合わせる。

「お前丁々<sup>タテ</sup>取り悪いな」

「あれ、俺? やっぱそう、何処かで見た顔だと思ったんだ、ヘヘッ」

照れ笑いをしながら周囲を見回しても誰も男には注意を払わない広  
場に居る民衆はころころ変わる画面にくぎつけである。

王宮の門前横、中継車の中ではやぐらからの映像を逐一見逃さない  
ようセイジが指示を出す用意をして待っている。

バルコニーへの大扉が開き侍従が止め具を挟んで室内に戻っていく。  
「街並みから王宮のバルコニー——カメ。アップで寄ってくれ王様  
達が出てくるぞ」

スイッチャーが画面を切り替える。

「七カメ、広場の民衆の全体。それから広場中央に寄つて民衆のア  
ップ。可愛い子探してズームがぶれるなよ」

七カメは好み女の子を探してはカメラ調整を続けていた。

「OK出てきたぞ。一カメ、二カメ、三カメ。長老達をアップにし  
たまま固定。四カメ全員を入れた画像まで引いて! よし切り替え。

なんだありや？」

「四カメラ、バルコニーの並び全員はやめた、左端の赤ドレスは入るな。よし王様の祝賀スピーチだ、音を全部拾えよ」セイジが黙ると中継車内はしんと静まり返る。

道路の真ん中で待っていた民衆はバルコニーの動きにぎわめいた。  
「出てきたぞ、おおつ王様は変わらずカッコイイ人だな」

濃紺の長衣を肩にわずかにかけて、さりげなく宝石のついた帯を首から垂らして先頭を気つて出てきたのはサガモア王。

「年取つて貫禄が出てきたよな。知ってるか？世界の王族で一番かっこいい王様に選ばれたんだぞ」  
門の横の壁を見ては百メートル先の点のような王様を見る。

「そりやす」とい。皆じじいになつてしまつてよ  
後から続く長老達が映し出されると真横の画面と遠くの点の動きを目で追う。

「あの端の赤のドレスは誰だい？」  
遠くでも赤い色は目立つ。

「派手だな。隣の顔のいい男が皇太子の服を着ているから皇太子妃？だろ？」「  
皇太子が横の画面でアップになると無駄口がやむ。

画面に皇太子妃が映らず切り替わると、「は。あの皇太子妃の格好は見たことがあるぜ」

友人の広い額を見ながら考えている。

「あるな・・」

隣の友人も真面目な顔をして、「力ヤンデルの勇者グエナエルだ」とつなずく、

「へ？ 信じられねエ。 何で又・・」

素つ頓狂な顔が友人を見る。

「まさかな？」

首を傾げて二人は顔を見合せた。

「まさかな・・」

三千年祭を迎えた祝辞が列席者から述べられると半島ごとの住人が拍手で讃える。

「最後にわしの後を継ぐ皇太子夫妻じゃ皆には始めてである、特に皇太子妃は初めてこの 그리스に見えている」

王の紹介で広場鎮まり返る。

期待に満ちた顔がバルコニーの左端に一斉に向く。

「皆様始めてお目にかかります。男の子一人、ガイネス国がこれらも長く発展を続けていくように」両手を強く握り締めている。「ガイネス国は三千年祭を祝うことが出来てこんなに嬉しいことはありません。妻共々ガイネスの未来を作つていきましょう」と軽く腰を折り会釈をする。膝が突つ立て曲がらない。

離れた民衆には真横から一人の声は聞こえる。

「子供が一人もいるのか？」

子沢山は良い兆しである。

「らしいな、山の花嫁さんか？別嬪さんか？遠くて顔がわかり辛いの、もつと見せんてくれんか？」

人山に頭を出し伸び上がつて見る、棒のような赤いシリエットしかわからない。

「そいやの・・そいや」  
真剣な目をして拳を作る。

「グエナエルから花嫁が来たのか？」  
画面の端を見ては隣の人間に声をかける。

「そう云うことになるようだの」

見えない姿を画面で確かめられず視線を遠くのバルコニーに移す。

「ほんまか？」

赤いスカートはずつと見えている。

「信じられん、夢か・・グエナエル。俺が生きている内にお目にかかるとは」

「皇太子妃も粋なことをなさる。嬉しいのう」

「あの衣装は勇者の衣装じゃ。あの羽根飾り。なんといつてもあの赤・・」

「羽飾りまで・・」男には頭の羽根飾りまで見えていない。

「勇者の赤じや。グエナエル！」と誇らしげに言う。  
「グエナエルじや！」子供の頃の感動が蘇つて来た。  
「グエナエル！グエナエル！グエナエル！」  
「グエナエル！」「グエナエル！」「グエナエル！グエナエル！グエナエル！」

「グエナエル」「！グエナエル！」

グエナエルの連呼は後ろへ後ろへ繋がつて群集は揃つてグエナエルと叫びはじめる。

「なんだ？おい、四カメ。左端の赤いドレスのアップだ！寄れ寄るんだ！細部まで舐めるように撮ってくれ」

「皇太子妃の顔にズームして中央広場の画面に映せ！早く切り替えろ！」

「リポーター！グエナエルを説明しろ急げ」

たぶん幼児からひねたジジイまでグエナエルを知らない人間はこのガイネスには居ないが映像が見えている国民だけではないのである。

ロックが手元の資料を読み始めるとセイジは主調整室に居る局長を呼び出した。

「トマス！ガイネス史の教授は？あの妃の衣装を見せる、誰かやって何かコメントをとつて来てくれ。急げ！王様が仕掛けた罠かもしれない。いまどき皇太子を選ぶとかいろいろやっているが、王様の人気は地に落ちてるからな。自分の血を分けた子供を世継ぎにしたかつただけで無駄に時間取らせて、今度はグエナエルかよ。あまりにも見え透いてるぜ」

国民をちやちな仮装で喜ばしている王の意図が見えてセイジは面白くない。

狭い中継車の中をくぐるセイジは歩き回る。

「俺達は事実を報道する、それが役目なんだ。イカサマや虚構を押し付けられてたまるか」と自分自身に言い聞かせる。

バニーはなんと返事をしてよいか解らずセイジの指示通りにありのままの風景を歓喜に満ちた人の顔の詰まつた画面に切り替える。

「俺達国民を騙せやしないぜ。トマス、ガイネス観光局をネットで調べろトマス！ 聞こえてるだろ？ 皇太子妃の情報だよ！」

思い詰めた表情で宮殿の方角を睨むマイクに向かつてセイジは必要以上に声を荒げる。

耳には局の主調整ルームでキーボードを叩く音と街中に広がったグエナエルを呼ぶ民衆の声の大きさに驚いて感想を述べあつている局員達の話し声。

バニーが手を伸ばしてパソコンをいじると主調整室から送られてきたデーターがパソコン画面に現われる。

「はあ？ 妃の出身はセデル国？ デタ！ 何が出た！ ロックイーゼンの選手？ 馬鹿な・・カヤンデル山脈が住所？？ 冗談だろ？ ・・・・

ミックの横では同じ画面を呼び出してトマスがプリントアウトした主調整室ではミックコンとミックがスクロールした画面から田を離さず読み上げる。

ミックの横では同じ画面を呼び出してトマスがプリントアウトした

紙を真剣に見ている。

セイジを後ろにバー二一がパソコン画面に送られてきた文字の羅列を読めと指で突く。

「わかつて言つているのか？ガイナスではカヤンデルは神聖な場所だ、だがなセデル国は違つ。カヤンデル山脈と住所をつければあの山岳に住む一族のことを蔑視してつけてるんだぞ。たぶんそんな住所を自分から言う奴なんて居ない・・はずだ・・」  
自分の言つて居ることを、考え直すうち最初大きかった声が小さくなる。

「三年間その住所でやつてたつて・・・

眉間の皺が深くなる。

歩き回つていたことに気が付き元の椅子に座り込む。

「皇太子との結婚の記録はシャブイで・・その日付は？なんだ？シャブイの広告に載つてる？」

ガイナスの半島の景観を流していた回線を切り替えてシャブイのホテルのブログが映し出される。

トップで人間国宝クラスのマイスターの作品が見られるホテルと一緒に押しの文面。  
大文字の後に古代からの様式で結婚式を挙げた高貴なカップルと小さな紹介画像。

「その結婚は選手を辞めてからだな？ちょっとと考えさせてくれ。国民に妃の情報を出すか？いやそこまではいい。ああ、ありがとう教授のコメントを早くくれって」

セイジの独り言にミックがいちいち反応して情報収集に動き回る音

が耳障りである。

雑音を消して考へると頭の中では一つのことがまとまりはじめる。

「千年も待つて。今このときかよ。まさか。まさかだよな。本氣で山族が降ってきたなんて。俺達の一員になつた?何で今なんだよ」

ぼろぼろとセイジの目から涙がこぼれる。

「やつと、本当の天辺を迎えたんだね」

耳元でリポーターのロック。

歴史学者と電話連絡を取っていたミックが慌ててマイクに唇をぶつける。

「教授の談話です。赤の色は蘇芳から染めていれば正式なものです。羽飾りは絶滅種の鳥でセテル側で生息しているみたいなんですか。この時世羽根を取れるほどの生息数は確認されていないとか。帶模様は実際に見たことがないのでわからないといっていますが、映像からだと良く似ていると。エッと本物の資料は王宮の書庫にあるそうです」

涙と鼻水をすすつてセイジはバルコニーを見た

「王様が作ろうと思えば作れるって事か・・ダメだそんな都合のいい話は無い。だが運動能力は抜群だ。ネットの書き込みは褒めちぎつてる。どうすりやいいんだ?局長!」

一部始終を見ていた局長の長いため息はロックとセイジの耳に優しく響く。

「この時だけでいいから喜んで見たうじうだ。俺はこの日の歯と喜びを分かち合いたい」

「ちくしょう！！街中の画面に皇太子妃の全身と顔のアップを繰り返して写せ。三カメ横顔を狙え二カメ笑顔になつたら切り替える、ずっとくつついろ！それと皇太子と子供も入れて全員を一カメラに入れて。四カメ、王様や長老の笑顔を上半身を入れて。リポーター、祝いの言葉を。三千年祭ばんざい！」

セイジは十一歳の頃、 그리스最北端の絶壁を見に行つた。千年の昔、武器の無い市民が大虐殺された年、敵国の将軍や兵士の刃の中にこん棒を振り上げ奇襲をかけたグエナエルの彫像が岬にある。

その台座に登り崖下の北の海の恐ろしさをセイジは忘れない。

그리스が襲われ街民が山族にたすけを求めた際、彼らはあの崖を登り未熟な武器でかけつけた。

たぶんたくさんの山族が死んだと思われるが遺骸は一体たりとも残さず彼らは去つた。

残されたのは敵国の兵士の死体の山、又山。

グエナエルの謂れば三千年以上も前、プラテアドの姫君がカヤンデルの山に斎宮として入山したのが山族の始まり。

三千年、長い間遠く離れていた体の一部がやつと元に戻つた、そんな気分をセイジは味わっている。

バルコニーの着飾つた長老達が何度も民衆に手を振り答えて居なくなると

広場で振る舞い酒を警護していた兵士達は樽の栓を抜いて器を持った一人ひとりに激しい抱擁を繰り返しながら酒を注ぎ声高く歌う。

錦の海にはその人がいるグエナエル  
緑の山のその向こう白い頂にはグエナエル  
天と地を繋ぐ 雄雄しい姿グエナエル  
かの人は我のそばに我のそばにはいつもグエナエル

熱い想いが木々に建物にぶつかって広がる。

民衆は日頃鍛えた腹筋を震わせて思いのたけを歌にこめる。

朗々と鳴り響く群衆の声にサガモアは満足した。

ロックライーゼンという競技が始まったとき競技者の運動能力に驚いた。

テットを使い金で選手を呼び寄せようと命令したこと也有る。

ルーサーがセデル国に居る間には確実に一人または一人の女性を王宮に呼び寄せるつもりが選手のガードは固く、万全な警備体制をかいくぐり選手とのコントакトをとることはテットには出来なかつた。堅物のルーサーを競技場のそばに寝泊りさせているも興味を示さず王の計画はテットの胸の中に暖められていた。ところが何を間違つたかルーサーはロックライーゼンのスター選手に憧れを抱き、ルーサーの帰国寸前にはラティーフというルーサー憧れの選手が競技を辞めてレイステン市を離れた。

一本気な息子は女性を半分騙して国に連れかえつたと思い込んでいるが逐一報告を受けていたサガモアは。

息子は帰国して長老達の中を上手く立ち回り後宮いっぱいとまでは行かずとも後宮に女性を集めてくれれば少なくとも自分が生きている間はガイナスは分裂する危機から逃れられると安堵したが息子は長老達の申し出を断り続けた。

後ろ盾の無い他国の女をグエナエルの血筋として迎える事は民衆にどう受け取られるか、笑い者になるか尊厳を取り戻すか賭けに近かい。

「祭りにはぴたりの歌だのう」

サガモアが深々と椅子に沈み込むと、他の長老達も思い思いの椅子に座る。

「サガモア王、もう一度紹介してくれまいか。その皇太子一家を、早朝、礼拝の時はまだ寒く分厚いフードとマントにくるまれたままであつた。

それに嫌いな皇太子の妃である、妃から挨拶の口上を半分無視したこと少しばかり後悔している。

「ブライズ、何を語らせたいのかな。聞きたいことがあらばわしを通さずとも自分で尋ねるが良い」

老人は恨めしくサガモアを見て

疑り深い目はそのまま変えずに窓際に座る皇太子一家に声をかける。

「そうか・・それではアルヴァー皇太子尋ねたい。その妃の衣装は何処でこしらえたかのう? 良く出来てある、お子達の衣装もなかなか可愛い」

コレットの長いスカートで遊んでいる一人が窓に揺れるカーテンに目をつける。

「コレット、子供達をあちらの控え室に。眠そうだ」とルーサー。

子供等が窓辺のカーテンで木登りを始める前に引つ込めなければならない。

我が子ながら野生のサル並みの動きにはついていけない。

「レットに手を引かれて去つていいく子供と一緒に席を立ちたいのはラティーフ。

バルコニーから一歩室内に入ると矢継ぎ早に質問攻めに会っている。

心配の種が消えるといつもより丁寧な言葉使いで長老達と接することができる。

「ブラーーズ様、褒めてくださいありがとうございます。」ラティーフ、衣装の苦労話をする機会を得られましたよ」

にこやかにルーサーが妻を見つめる。

ルーサーの思惑通りにラティーフの着た衣装に注目が集まっている。これで妻への認知度が上がる。

説明して…ヒルーサーから促され、

「ルーサー。説明なんて」

あなたから言つてよ…と田代つたえてもルーサーは微笑んでいるだけである。

四人くらいに同じ事を言つた覚えがある。

「これは…・・村の結婚式の時に着る衣装です。羽飾りも山の神と一緒に印、この帯びは家に伝わる出来事が織られてて。このお祭りがとても大事な式典だと聞いていたので、おしゃれをしたつもりですが、けれど皆様とはかけ離れすぎて」

質問者はにこやかに聞いてくるそぶりだけである。

「その色には意味とかがあるのかな」とブラーーズ。

地味な帯びの色と違ひスカートの色は赤い。

「この場にそぐわないとお思いでしょう」他の女性達は宝石類は派手でもシックな色合ことが多い。

ブラーーズの強い目の中の光をチラリと見る。

「古い言い伝えでは、戦いで自分の血が赤い生地に染み込んでも解らないようにと。良い意味もあるんですよ。赤い木の実は豊穣の印。この羽根は・・」

ブラーーズは腕組をして椅子に深く座り込む。

その様子はラティーフの説明など聞きたくないと言つてはいる様に見える。

「結婚式の祝いの品物なんだ。そうだよね」

詰まるラティーフに助け舟を出すように言葉を挟む。

「ええ、ルーサーとカヴァンナの丘で式を挙げたときに頂いた物。私の村では美しい羽は個人の財産みたいなものだつたから頂いた時は嬉しくて・・」

今度はルーサーに微笑む、ラティーフの話を聞いてくれるのはルーサーだけである。

ブラーーズの顔は他の女性の陰に隠れて見えない。

「カヴァンナの丘・・か。私にもその羽根を一枚くれぬか」と今まで黙つて聞いていたウルバーノが一人の会話に加わってきた。

目じりの下がったウルバーノの顔はちょっと唇の端を上げるだけで笑つてているように見える。

「ええ喜んで」

恥ずかしげに頭から一本羽根を抜き取る。

「いいだろう。わたしはこれでグエナエルと縁戚関係になつたぞ」

羽根をなでながら嬉しそうにウルバーノ。  
隣でバラディールが床に視線を落とし薄く笑つた。

食事の用意が整うまでは会話を楽しむ人に解らぬようにラティーフはルーサーに目配せをする。

「グエナエルって、人々が日々に言つてましたが。似ているの？」と小声。

「子供たちに本を読んでやつただのうとにかくにこやかにルーサー。

「ぜんぜん違うわよ色も違うじし・・・」

とラティーフ、

読んでやつた絵本はレンジジャー隊のヒーローもじき。

完璧な仕上がりではないが忠実に記憶を呼び起こして再現できたと思つている。

私は花嫁衣裳なのにと不服顔。

三つ隣のウルバーノは胸ポケットに羽を差込みばんやりとラティーフを盗み見る。

となりの妻バラディールは夫の羽飾りを鼻で笑う。

「確認しておきたいのだが皇太子妃の住んでいた村だが、本当に消えたのかね。村人は一人もいないというのは信じられないのだが」と眠たげなバラディール。

カヤンデルの山脈は雨季には必ずと言つていいくほど

地形が変わるくらいの土砂崩れが起きている。

ただ村が全壊するほどの大きな災害はバラディールの記憶には無い。

「あ、悪いね。いやなことを思い出せたかな。いや気になつてね、何百人もね消えるなんて。そのとき君は何処にいたのかね。さつきヒドラと言つていたが、向こうのヒドラとこいつのヒドラと意味が違つてご存知かな？」

室内に引っ込んだ途端ラティーフは老人達から質問攻めにあつている。

その受け答えを全てバラディールは聞いていた。

「『めんなさい。本当に解らないのです。ヒドラは・・今ではどう言つたら。姥捨て山と言つたらわかりますか？私の祖母は年老いたから山奥に入つて行つたのです。私どうして会いたくて相談したいことがあって、山を彷徨つて。たぶん半月は山をうろうろしていて死ぬかもって思つたことも。ですけど祖母は私を見つけて村に帰るようになつて。村に戻ると、村は・・何も無くて。村は岩屋の中なんです。岩屋はご存知ですか？自然に出来た洞穴なんです。水は洞窟の奥に泉があつてその水で暮らしてたんです』

何度も思い出しても息が荒くなる。幼い頃からの記憶をもぎ取られた氣分である。

「ふーん、ヒドラからの路を間違えて帰つたんじゃないのかね」  
淡々と疑問に思ったことをくちにする。

「いいえ周りの景色は見慣れた場所です。村があつた場所には土砂の滑つた後が行く筋も出来ていて。木切れ一本見つかりませんでした」

記憶は曖昧になりつつあるが生まれ育った場所は岩の形、木の伸び方、歩いた道は忘れていない。

「そのヒドリに行つた理由を教えてくれるかな。いや差し支えがなければだが」

穏やかな顔の皇太子妃の暗くなつた顔を無視して聞く。

「理由ですか。その・・縁談が・・婚期が遅れていたんです。街ではそんなこと気にしないでしきうが私にとつては重大事だったんで、村では結婚しない女性は一人前に扱われない雰囲気があつて。今はこうして子供達にも恵まれていますがそのときの私は思い詰めていたのです」

自分の気持ちを他人に素直に言つるのは辛いが今では笑顔をつくつて話せるようになつた。

女とはそういう生き物なのよとバラディールは軽く合槌を打つ。  
「ヒドリのおばあ様はもう死んでいると思う？」

「ええ、他のオババも皆瘦せて骨と皮ばかりになつていて。皆さん死んでいるのか生きているのか解らないくらいでした。何体かは奥のほうで動かない方がいましたから死んでいたのでしょうかね」  
オババが生きていたらこんなにうれしいことは無い  
生きていればここに私は居なかつたわと隣のルーサーを見る。

「女にとつて結婚は大事だ、三年間競技に出でていたんだろ？。これはつて思う男はいなかつたのか？」

皇太子妃が美男子の夫と目を合わせるのみで無粋な質問をして見る。

「居ました。でも振られたんです」  
またもや素直にラティーフは答える。

「振られた！..どうして…」

つい普通に聞いてしまつ。

「私が年上だから、考え方ないつて」

マイラーとの会話のよつこほんぽんとリズムが良い。

バラディールに悪気は無いと感じている。

「もつたいないー！」

ラティーフは華やかさにほのかけるがずっと見ていて飽きの来ない顔立ちである。

「ありがとう、今は子供に困まれて幸せですわ

思わず満面の笑みで答える。

ついでに夫は居ないけれど、と付け加えたい。

「そりゃ良かつた」

食堂への扉が開かれるとぽつぽつと列席者は椅子を離れ  
おいしそうな匂いに誘われるよう立上る。

朝早くから何も食べていないのである。

皇太子夫妻の後姿をウルバーノは見送りポケットの羽根飾りを無意  
識に撫でる。

「生き残りだと…まったく外に出た奴の考えはその場しのぎばかりで面白くないわい」

モラドの代表者の息子が一緒にしまじょとウルバーノの機嫌を伺  
いながら近づいてきた。

妻を忘れて食堂に入る夫を見送りながら長椅子にもたれかかる。

皇太子妃の話を聞いたウルバーノの様子が少しばかり変わったのをバラディールは見逃さない。

夫は嘘つくときは必ず瞼が動く。

ガイネス国は中央の半島グリスを堺に東は水も緑も豊かな土地なのにネグロ、マロン、モラドと東へ行くほど荒涼とした景色が広がるのは上空を流れる氣流せいである

長く荒地を見ながら育つとモラドに住む人間の性格が捻じ曲がっているのはあなたがち気候のせいだと思われる。

海に流れ落ちる水を荒地に引いてモラド半島の中心にオアシスのように湖を作りその水を使って膨大な工業製品が作られている。

モラドの中心街は一棟数百メートルも有る長い工場が連なり、上空から見ただけではどの建物が何を生産しているのか解らないよう皆同じ灰色に塗られている。  
その灰色の屋根が延々と続く様は異様である。

空から見たら真四角のこれまた灰色の建物の五階。

時には民間人がグリス宮に負けない豪華な椅子に座るがいつもは民間人に成りました軍人が武器の説明を聞きに訪れている。

将校室の開いた窓の空に流れ行く雲を見ながら終わったばかりの三千年祭をバラディールは思い返している。

皇太子妃は経歴の割には好んで人前に出るような嫌な女ではなかつ

た。

本気で母親として自分に満足しているように見えた。あの絵のように美しい皇太子のお妃にしてはかなり見劣りがしたが会話を交わすほどに皇太子が魅かれた理由が解る気がした。

見飽きた景色に見切りをつけてバラディールは席を立つた。目的は地下の中央制御室。モラドの地下には国の軍事的中枢の全てがある。

西の端には列を成した巨大なパラボラアンテナ、世界の情勢を逐一地下のスーパーコンピュータに送り解析している。国別部署ごとに分かれた分析官がコンピュータから齎された情報のランクづけを行い書類にまとめている。

分析官が仕事をしている部屋を通り過ぎ  
ガイネスが打ち上げた衛星の画像が送られてきている  
オペレーションルームにバラディールは入った。

近くに居た兵士がバラディールを敬礼をして迎える。兵士は将軍がどの画像に興味を持つか視線を追うが彼女の視線は一つに定まらない。

その後ろから入ってきたのはウルバーノ。  
兵士はチラリとウルバーノの顔色を見て衛星から送られてくるモニターに目をやる。  
関わらないほうが得策と判断した。

「やあ」とバラディール。

顔を合わせるのは三千年祭以来である。

「おう来ていたのか」

にやけた顔に笑みを浮かべる。

「私が何処へ行つて来たのか気にならないようだな」  
ウルバーノの落ち着いた態度に嫌味を言つ。

「聞いても教えないだろう。ベック中尉を知らないか。ここだと教えられたんだが見当たらぬんだ」

「さあ私も今来た所だ。そうだ確かめたいことが有る。ユウジ、ファイルを。隣の部屋に行こうか」

ユウジ中尉は分厚いファイルを小脇に抱えた。

「なんだそれは衛星写真じゃないか」

しかもファイルに収まっているということは相当古い。

部屋を見回してベック中尉が居ないとわかると、不安なのがぎつしりと壁にはまり込んだ映像見ていたが諦めたように先に出て行つたバラディールの後を追うように部屋を出る。

出ればすぐそこにバラディールがたつてウルバーノを待つてゐる。ウルバーノが乗ってきたエレベーターの前にはユウジ中尉がファイルを持つてかしこまつてゐる。

「さつさと入れ」変わらない傍若無人なバラディールの声。

指令室のドアが閉まるとき透明ガラスの向こうに衛星の軌道修正に目を光らせてゐる兵士が十人働いてゐるのが見える。  
角のテーブルにファイルを置いてユウジ中尉は一步下がつて、ドアの前に立つた。

## ウルバーノ 2

何處に居ても押しの効く態度と物言いで通してきたバラディールがウルバーノのにやけ顔に合わせて薄ら笑いを浮かべている。

「通信諜報活動は上手く行つてゐるか。長老達は各国の大臣達と腹の探りあいに長けてゐるから今は表面上押さえ込んでいるがこれからは難しい。もっと効果的にガツンと黙らせる方法があれば良かつたのだが最近各國の態度が横柄になつてきている。そつは思わないか？」

と事項の挨拶を語るように突っ込んだ意見。

「さあ、俺は特殊諜報活動部隊だからな。情報は集めても交渉相手に直接会つことはないからな。やはり長老達が年を食つて能力が落ちてきたのと違うか。ブラーズなどもつ隱居してもいい年だ」

この手の話は常時ベックとヤー、山と交わすが今日はそのベックが見当たらない。

ウルバーノはベックを求めてオペレータールームに目を泳がせる。

ウルバーノの視線を冷めた目で見つめ、口をゆがめて氣が付かれぬ様に笑う。

「そうだな。言つて置くべきだったな。ヒドラにベックは入つてい

る

垂れた目が驚いて大きくなる。

「何！ヒドラに

「そうだ。皇太子妃の言つヒドラではないぞ。皇太子妃のヒドラは

歳をとつたものだけが行く。私の言つヒドラは「腰に手を置きゆつたりと構える。

「知つてゐる。なぜベック中尉がヒドラに拘束されねばならんのだ」ヒドラとはカヤンデル山脈の西の火口のそばにある死ぬまで出られない刑務所。

したり顔のバラディールとは反対にウルバーノの田に怒りが走る。

「私が気がつかないと思っていたのか？三人も妾を認めてやり地位までくれてやつた。そうだ三人の妾たちはもうお前の屋敷には居ないぞ。モラドの港からセデル国に逃げ出しただらう。その後は何処に行くかわ知らないが。屋敷はもぬけの空だ」  
その手配をウルバーノに内緒で行なつていた。

「私の子供達に何をした！」

今まで何も口出ししなかつたバラディールが突然愛人をたたき出すとは信じられない。

「何も。貴様の地位を剥奪したと伝えただけだ」

淡々と表情もえないので、激昂するウルバーノの反応をバラディールは見ている。

「何処にそんな権限がある」

憎しみをこめてバラディールを睨む。

「ある。私はこの軍隊の総大将だ。もう十六年もお前のした事を立証しようとしていたがやつとその証人が現われた。ことの起こりはお前と私が婚姻をした後だ。特殊部隊を任せられたお前は足蹴く王宮の書庫に入りセヴェール村の位置を特定した。訓練と称して何度も

山に入ったのは認めるな。そのときに村娘を一人いや一人ではなかったのかもしれない、さらつてきている、それから何度も山に入っている。記録によると十八回。それからどういうわけかこの訓練をやらなくなつた。どうしてだ? ユウジ、それを見せ

ドアの前で踏ん張つていたユウジ中尉は持ち場を離れてファイルを持つてバラディールに渡し、すぐに小さなテーブルを一人の間に置いて下がる。

「これは爆薬庫の管理者の持つていたファイルだ。知つてるよなベックだ。セムテックス爆弾を何処で使つたのか言つて貰おうか最後の訓練中にこれ使つて何をしたのか」

「ベックに聞いて知つていいのだろう」

セヴェール村の名前がバラディールから出た途端ウルバーノの怒りは半減した。

ウルバーノがベックの身を案じていないので確かめる。

「あいつは爆弾を横流しだけで、大したことはしちゃいないさ  
私にとつてはな、國に多大な迷惑をかけているからヒドラには入れたが・・と心の中でつぶやく  
諸悪の根源はべつなのだから。

バラディールのふてぶてしい目が細くなる。

「最初からセヴェール村を消しに行つたのか何のために? 鳥の羽を金の代わりに持つてている奴等だぞまともなものなんぞあるわけが無い」

細かいことまでバラディールは知つているようだ訓練場所がセヴェ

ール村だと隊員の誰かに吐かせたに違いない。

「特殊訓練なんだ。作戦では隣の国の村の女をさらつつもりで。あの村は何度か女をさらうのに失敗してから警備が厳重になって、だがいい訓練になる。村の男衆が邪魔だつた。奥の寺院の裏に爆弾を取り付けて爆破した。最初の爆発で山に見回りに出ていた連中が戻ってきた。男達が奥に入つたのを見計らつて一番目のスイッチを入れた。その爆発で大きな山が一つあの岩屋集落に落ちてきた。ものすごい土砂が後には残つたあの女が言うように柱一本生活用品一個も無かつた。あれは計算ミスだつたんだ。煙と音でひきつける間に女をさらえるはずだつた」

「あなたの研究対象はグエナエル伝承。どうしてセヴェール村がグエナエルだと判断したの」

一言もグエナエルのことは隊員にはしゃべらなかつたのにあの女の出現で繋がつてしまつた。

「・・洞窟の奥の寺院だ」

研究の成果を話すのは辛い。

「判断の理由は」淡々とバラディール。

「夢だつた。絶対にカヤンデルの懐にあると解つていた。本物の王家の血筋だ。衛星からも探索したが見つからない、山に村は複数あるがどの山村も小さな祠は祭つても大きいものは無い。あそこの村は洞窟の奥に寺院を構えて村人は統率が取れているまるで軍隊のようだつた、あれはグエナエルそのものだ。俺が発見したんだ」軍人から研究者の目になり最後は身の危険を感じて保身だけをウルバーノは考えている。

「そして今度はヒドリを探そうとしている」

「え？」

焦つた目がバラディールを見る。

これまで研究者のよつに振舞えば最後には条件付で見逃してくれていたはずが、もう一步先を読まれていたらしい。

「特殊部隊の編成を変えただろう？ パラシュート部隊をメインにしている。違うのか？」

「そうだ・・」

落下地点はもう何箇所かに絞つてある。

古いファイルから目を上げて、

「残念だがお前の行く所はプラテアドのヒドリだ」  
バラディールは三行半を言い渡す。

「何を言つてゐる。報告書を見たのか私が壊したのは訓練のための野山で、そりや勝手に爆弾を使用したことは悪かつただが、これも特殊な状況下の訓練をするためと書いてあるだろう。私は地位を剥奪されるようなことはしていない。この話もただの世間話に過ぎない。わたしの研究を話しただけだからな」

バラディールと話している間に罪をかぶせられる人間を見つけ出した。

筆頭はもつすでにヒドリに入っているベック中尉、次は長老達との会見の多いヤー「参謀」。

こんなこともあらうかとウルバーノは矢面に立たないできている。

「最初に話したこと覚えてるか」

ヒドリに行けと言われても余裕のあるウルバーノが腹立たしい。

「通信情報活動がなんとか」

逃げあおせる道が見えてきている。

バラディールがファイルの下の書類を見るようにあご上げる。

「そここのファイルは貴様がコンタクトを取った要人ばかりだ。武器の売買だけに王様も怒り心頭だ。

どれだけ売ったんだ？ ガイナスの本業にまで食い込んでくるとはい度胸だ。自分が売った物には追跡装置がついていないと思つていただろう？ 工場長をあなどるなれ。お前の嘘を見抜いていたのさ国際基準に則つて仕事をしてた。したがつてお前の売ったものはガイナスの製造番号が打たれてる、そしてすぐに調べられる。分かつたが、この意味が」

黙り込んだウルバーノを冷ややかに見下ろしてユウジ中尉に合図を送る。

細かい確認作業は全て終わった。

「ユウジ、國賊をこの部屋から連れ出せ！ フン國賊という言葉ももつたひない。墓荒らし。墓泥棒だな貴様はその名前が一番相応しい」「知つてゐるのか？ ならどうしてずっと黙つていた？」

垂れた目の皺が大きく引き伸ばされる。長老達を使って古い王家の墓から遺体を集めている。

ユウジがドアの外に合図を送ると待ち構えていた兵士が一人ウルバーノの両脇にたち腕をとる。



暑く乾いた風が足元を這う。

冷房の効いた制御室から逃れてバラディール将軍は他の將兵のことなどおかまいなしに窓を大きく開け放っている。

手元の資料を誰の目にも触れないよう広げては閉じる、思慮深い目は灰色の屋根の奥に有る赤い荒地を見ている。

「グエナエル・・残つた村人・・・グエナエル・・・小さなテーブルの上で資料を又広げる。

古い資料に映つてゐるのは縁深い山、岩の凹凸が僅かにわかる程度である。

空から写したのその写真一枚でセヴェール村を特定して四千メートルクラスの山並みの中に重機を運ぶことは不可能に近い。人海戦術で兵士を動員して掘りあげてもセヴェール村の残骸が出てくる可能性は低い。

海に落ちた真珠を探すよりはたやすからうが生きている人間を掘り出すのではなく骨を拾う為だけに金と時間を取られるのは無駄に思える。

信じがたいことに皇太子妃になつたあの女の言つこととウルバーノの行動した日時がかつきり重なつてゐること。あの言葉を信じれば本物のグエナエルだということになる。染色と機織にしか興味を示さない女が正しい王の末裔だといつことになる。

七つの部族間で選出する王は、国民の人気がない。

パソコンが民間に設置され勤勉実直な国民は外の世界を感じている。

外敵はいまや平和を連呼し、様ぞまな形で国交を結ばない国は無い。

ガイネスが意図地に他国との交流を拒絶しようとも外敵だった国々は素晴らしい発展を遂げてガイネスを置き去りにしている。

評議員の選出も国民が決めたがっている。

王やその周辺の大臣の役割を担つ長老達も国民にはまったく信用されていない。

そんな中あの皇太子妃は現われ、滑稽な格好でのバルコニーにたつた。

変わる。あの瞬間からこの国は変わるとバラディールは思う。

グエナエルはガイネスのため山を守り国民に身を捧げ続けてきた。金貨一枚も手当ての薬草一枚も街から持つて行つた物は無い。

崇高な信念は語り継がれ続ける、命には命で償うそれがグエナエル。

「満足するだらうか・・

思わず独り言が出る。自分自身に問うた言葉もある。

国民は他国と自国の間に無い物ばかりを迫つてているが

グエナエルの登場でガイネスの閉塞感は打ち払われるだらう。

國のあり方はこれでよいのだと国民は確信し始めていとバラディールは思った。

古代から繁栄の象徴は女性である。

子供の生存率が低いガイネスは子供を多く産める女性を宝物のように扱つた。

その大事な宝を外敵から守るために食料の豊富な海沿いから山へ祭司の形で隠したのである。

敵が進軍してくるたびに奥地へ奥地へ神殿は遷された。

神殿に祭られていたのは王族の女性と子供達、彼等を守るために屈強な兵士が配備された、それがグエナエル。

最後にグエナエルが現われたのは百五十年前。

戦勝地にはたくさんの血糊の痕が残る。

その血糊の量から敵国の兵士達よりも多くのグエナエルが死んだと思われたがグエナエルの残したものは血糊と足跡だけである。

奥地に逃げこんだ敵の兵士は語っている。

真っ赤な衣服に胴巻きの帯と頭の羽飾りをつけた人間と戦つたと彼らは刃を恐れず優れた敏捷性で敵を翻弄しこん棒で殴り殺していく。

その事実を知らないガイネス国人間は居ない。

絵本で読み聞かせされ、戦の戦術としても必ずグエナエルの戦法は教えられる。

ウルバーノは彼らを利用してガイネスを手に入れられると思ったのだろうか。

「少なくとも私は満足している」と又誰にでもなく言葉が出る。あの日からバラディールの心は満ち足りている。

部屋の拡声器がキンと嫌な音を立てる。

「将軍、何処に居ますか？応答してくださいー」と緊迫した声。

「ここだ」

柔らかい光を讃えた目は一瞬で消える。

「ウルバーノ殿が逃げました！戦闘機に乗つて・・指示を」と緊迫した声、大失態である。

「ばか者！」

「スクランブルだ追え！打ち落とせーどうせ生きていっても悪いことしかせぬわ、すぐ行く」

広げたファイルをベルトできつく止めると大またで部屋を出て行った。

「お待ちしています・・」

隣の棟の最上階まで息一つ付かず駆け上がり

開ききった開口口から右往左往している兵士をよそに

眼下には戦闘機が点検を終え牽引車に引っ張られて滑走路に出て行くのが見える。

何処にも慌ただしい様子が無い。

「将軍すみません！申し訳ありませんでした」後ろからユウジ中尉が青い顔して駆け上がってきた。

額と耳の辺りから血が流れている。

「医療室に行け！脳みその皺まで見てもらえ」

ユウジ中尉はウルバーノに顔面に肘鉄と体当たりを受けて数分気を失っていた。

「コントロールルーム。衛星で戦闘機の位置を示せ。そうだこの場合どんな周波数を使っても構わない許す」低い腹の据わった声が部屋中に響き渡る。

「レーダーで？まえました。加速しています。カヤンテル山脈と平行して西に向かっています」

ステルス機能を備えた戦闘機はレーダーで捕まえるのは難しいが機影を見つけて通信兵は手柄を立てたように安堵する。

「全域の基地にスクランブルをかける逃がすなどいえ  
「はい」

「戦闘機の搭載武器は？」座つた日が状況を分析する。

「赤外線誘導ミサイル。M61バルカン」  
慎重にユウジ中尉が答える。

「戦闘機のスピードは？音速を超えたか

「ひえつつありますモラドを越えました」と通信兵。

「たぶんこの戦闘機は山側を突つ切つて逃げ切りとしているので  
は

とコウジ中尉。ウルバーノが捕まるまでは医療室に行く気は無い。

「山沿いには基地を置いてないからな。あやつ考えたな。モラド側から東に抜けばすぐに打ち落としてやつたものを西に行くとは猪口才な。街の上だと打ち落とされる心配がないと思っていやがる。こうなつたらプラテアドで打ち落とす！警備隊長は誰だ！すぐに知らせて迎え撃たせる。あの山沿いなら遺跡ばかりで人はおらぬこのガイネスから一歩も出すな！」

バラディールの厳しい声を背中で聞き腹をくくつて通信兵は事實をありのまま言つ。

「將軍、大尉が乗っているのが整備点検に送られたいたプラテアド配属の機体です」

恫喝されると伝えた兵士は緊張で身体が硬直してしまった。兵士の言葉の意味を理解してかつと將軍の眼が開く。

「何！・・・」それ以上言わずレーダーを睨む。

「ウルバーノの武器の使用状況がわかるか」

隣でユウジ中尉が飛行形をにらみオレンジのゲージが目標物を探していることを知らせている。

機体が見ている地図を出しミサイル発射ボタンが解除されていることを確認した。

「將軍。北海の空母から応援を要請しては如何でしょうか」  
一か八か空母から迎撃ミサイルを打ち込んでもらいたい。

「ここより離れている。音速で飛んでもプラテアドを抜けた場所で  
しか追いつけない」

空母と機体との距離をすぐに計算して頭を横に振る。

ユウジ中尉は唇を咬む。

「戦闘機、追撃目標を指定」

「誘導弾システムを解除しin。こんな所でミサイルをぶつ放す？目

標物が近いということか、許すな！」

バラディールのドスの聞いた声にビビつながら最悪な状況を口にする。

「う・・ミサイル弾、発射されました」

「標的は」

## 「プラテアド山側の遺跡」

「迎撃せよ」

「無理です・・飛んでいるものに命中させるのは十発中一発当たれば、確率は十分の一ありません!」

「ばか者!!!」

バラディールの大聲がコントロールルームに響く  
刻々と変わるレーダーを前に通信兵たちは心底凍り付いている。

「申し訳ありません!迎撃用のミサイルが市街地に落ちる確率は・・・」

「もういい!あんな奴のために市民を巻き添えに出来るか!・針路に空母からの戦闘機を待機させろ。一か八かだ。プラテアド艦隊空母指揮官バラテ大佐聞いているか?恥知らずなウルバーノを打ち落とせ、仕損じるな」

画面端に呼び出されたバラテ大佐の顔が苦渋の顔つきになる。

「了解しました。第一戦闘機部隊発進せよ。目標カヤンデルと平行して進む飛行物体。プラテアド半島より五百キロの洋上にて鶴翼の体勢で待機」

「違う!時間的に待機できる状況ではない。正面からいけると思うな。さつさと発進させろ」

「発射用意完了次第に隨時離陸。目標座標確認

「第一空母からレビ編隊発進しました」

画面が切り替わり赤い点が北の洋上から飛び立つた。

「中尉。他に打つ手はないか？ウルバーノはなぜ山脈沿いを選んだ？西には何がある？グリスの王宮か、今主要な人間はグリスには集まつてはおらぬ」

衛星から送られてきた画像は雲間に時々見える縁の山々。

「西のほうが逃げるには時間的に優位かと。東はこの基地からすぐに戦闘隊に包囲されます」

鎖骨が折れているのか中尉は左肩をだらりと下げている。

「カヤンデル山脈から南のルートを選ぶということはないか？」

南の山越えは陸続きのセデル国がある。

「セデル国に戦闘機に有無を言わせずに打ち落とされると思しますが。落とされる前に脱出できたとしてもあの荒地を越えるのは無謀かと」

広大な土地なのに夏は暑く冬は寒く強風が根こそぎ大地を剥ぎ取り定住するに人間を拒んでいる。

「あやつのことだ、どこかに逃げ道を作っているに違いない。カヤンデルを低空飛行していける場所は？」

「私は山越えよりも西のプラテアド半島を海岸沿いに沿って逃げたほうが確実だと思われますが」

プラテアド軍の追尾を逃れられるなら西に抜けて海岸沿いにセデル国に入ったほうが見つかりにくくと中尉は考えている。

「西海にはあやつを匿う国か組織があると考えるのだな」  
武器交渉を受け持つた人間の呼び出しを考えたがその暇は無いと判断した。

「北海には空母が常時四隻は浮かんでいる。東は我々がいる。隙を突くなら西か。衛星で出したミサイルの到着地点は。小さかしいのう。騒動に紛れて逃げ出す魂胆だ」

眉間の皺が深くなる。

「コンピューターが正確なミサイルの落下地点をはじき出した。  
「プラテアドの・・この位置です衛星画像を出しましょうか。この辺りです。観光地よりもかなり離れて居ます」  
バラディールの顔を見ないようにして言つ。

ウルバーノ大佐は実弾訓練は積んでいないとほつとした顔になる。

「そこは・・イエフゲニー？か」

ぎろりとバラディールの大きな目が見開かれる。

「そのようです。山側のイエフゲニーですな」

後ろからでも、肉食獣に睨まれた気分だが將軍の問いかけを繰り返す。

「グツ！諜報機関の責任者は？」

あごを引き奥歯をかみ締めた將軍の顔つきがもつと激しくなる。

「ウルバーノ大佐ですが」

豹変するその顔に理由も無く涙がこみ上げる。

「その次は！」

「えっと、引継ぎをしているならばノリマサ中尉が」「考えなくては、その位置に重要な施設が有つただろ？か？」

「プラテアドの警備隊は、ええい！誰か諜報機関の周波数を使える者は？」

通信士の指は名前が出たときからノリマサ中尉の呼び出しの数字を打っている。

「緊急呼び出しにてノリマサ中尉が出ました！」

将軍の必要とする先の情報を広げて見せるのが兵士等の役目である。その後の判断は将軍がする。

「ノリマサ中尉、イエフグーーの屋敷が爆破される。速やかに屋敷から五キロ圏外に避難されるよう指示を出せ」

「了解」

「将軍、イエフグーーに諜報機関の基地があるとは知りませんでした」

コウジ中尉は軍の施設を全て記憶しているそれが誇りでもある。

「プラテアドには皇太子妃が住まわれている」「ぼそりとバラディール。

子供達共々に・・どつと疲れがバラディールの肩にのしかかる。まとまるつとしているガイネス国を自分の思うとおりにならなかつた腹いせに葬り去るうとしているのではないか。

「まさかな・・」

ウルバーノの行動を並べれば国を牛耳ろうと画策している事実が浮かび上がってくる。ガイナスを手中に納めるには語り継がれている分身である英雄を引つ張り出すこと。

画面を見据えたバラディールの目が動かない。

長い時間変わらない同じ画面を通信士は見つめている。出来るなら画面がこのまま変化せず飛行体がガイナスを出してくれるのを望んでいた。

開いた目が戦闘機の動きを追う。

「自動装填装置が動きました。ロックオン。ミサイル発射」  
ウルバーノの乗った戦闘機は点検済みの機能を正しく使いこなしている。

歯がゆいことにバラディールは機体の画像からミサイルの点滅が消えるのを見ていることしか出来ない。

バラディールは機体の形をした点滅辛目を逸らした。

「映像」

衛星の遅れてくる映像を正面の画面に通信兵は呼び出した。

あまりに大雑把な景色に通信兵は慌てる。まだ衛星はガイナス上空を飛んでいない。

「はい」

冷や汗を流しながら解像度を上げるつまみに手を置く。

「ズーム。解像度を上げろ！」

バラディールが言つよりも早くコウジ中尉がうなるよつて言つ。

「わかりました」

もうもうと上がる煙の中に火花がきらきらと舞い上がる様が映し出

される。

バラディールの口の中はからからと乾き叫び声が小さく漏れる。

「・・・ンウ」

歯を食いしばり黒煙の柱をじっと見ている。

「軍の回線を使って警備隊から通信が来ていてます」

恐る恐る隣の兵士が声を出す。

「なんと言つていろ」

「ミサイル弾命中。屋敷は崩壊した模様。人的被害はこれから現地に行つて確かめるそうです」

「くつそつー・ウルバーノめ。全弾打ち込みやがつて」 摧り出すようにユウジ。

機型の点滅にミサイル弾の表示は無くなつた。

「確認したいのですが、イエフグリーの屋敷に皇太子妃が居るのは間違いないのでしょうか。まだグ里斯の宮殿に滞在なされているとか」

珍しく青ざめているバラディールを慰めるように自分の意見をユウジ中尉は尋ねる。

とつぐの昔にグ里斯宮に住まいを移られているのではと思つてゐる。

厳しい答えが將軍から返つて來た。

「ウルバーノが何の職務についていたか考えてみる。要人の警護も入つて居る。あいつが皇太子妃の居場所の確認もせずに、空の屋敷

「ミサイルを撃ち込むはずがない・・・」

バラディールは言い終えると口を真一文字に結び衛星から送られてくる画像を見ている。

屋敷は火の手が上がり周囲を巻き込み煙が充満している。

隣でコウジ中尉が口を開け何か言いたいのをじりじりては肩を上下させる。

「なぜ皇太子妃を道連れに・・・

と一言。

「道連れ・・あやつは生きておるわ。あいつは国を混乱させたいのだ。一つになどまとまって欲しくなどないのだ。それ何処にあやつは向かうか。見ろ！レビは間に合わなかつた」歯軋りをしながらレーダーの点滅を見ている。

「領海侵犯、ギリギリまで追つて行つたら戻るように言え、それから引継ぎが終わり次第ノリマサ中尉を私の元に来るように伝えろ。どんな手を使つても探し出して燻し出してやるー」

ギリギリとは領海侵犯して追いかけると言つ意味である。

本能的にバラディールの殺氣に一步下がつてコウジ中尉は返事をした。

「私もその作戦に一役買わせていただきたい」  
口元をかみ締めて高ぶつた感情に涙が溢れている。

「ああ、ミサイルで殺せないなら賞金首にして、世界中が追い回す

よつに手配してやるだけだ」

その場に置か全員の背中に冷たい汗が流れる。

男に「一言は無い・・」の言葉はバラティールのためにある。

グ里斯に五十年勤めて、こんなにも不安に襲われたことはない。

広い宮殿を王の後を付いて動き回り

王の不満や愚痴を耳にしても国将来を案じることなど無かったのに今は滑りやすいマーブルの上をパタパタと足音を立てて駆けている。

「皇太子殿下！ 殿下！ ルーサー様。お返事を。どちらにおいてでしようか？」

長い廊下をひた走り中庭を見れば東屋に人の影が見える。

からからになつた咽を振り絞り叫ぶ。

「殿下！ お返事を」

柔らかい土の上に足を踏み入れた途端後ろから聞きなれた女性の声。

「フルトン様どうなされました。何をお探しですか？」

磨き布の束を持って宮殿付きの侍女が声をかけてきた。フルトンの孫である。

「クライン！ クライン！ 殿下は殿下はどうぞ…」

青い顔をして肩で息をする老人にクラインは微笑んだ。

「殿下は書庫でござります」

「それで電波が届かなかつたのか。そう考へれば無駄に走り回ることなどしなくとも・・

ともじもじこと口の中で言つ。

フェルトンが書庫へと走り出すとクラインは目を丸くして見送った。老人の走る姿など始めてみる。意外と早いじゃない。

書庫の重たいドアを押し開き、開口一番。

「殿下、申し上げたき事がござります。ハアハア、携帯電話のスイッチを入れてください。ご報告がござります。ウルバーノ殿がご乱心なされた。戦闘機を使ってモラドから逃走中。ハア。イエフゲニーの館を爆破してしまいました。館は大破。ただいま警備隊が状況を確認しに現地に向かっております」

ルーサーは仕事の合間に宮殿に戻りガイネス創世記の古文書を紐解いている。

ラティーフをグエナエルに仕立て上げて

後ろめたい気持ちのルーサーは何とか正当化できるような  
謂れや記述が無いかと調べていたのである。

汗だらけのフェルトンが重たいドアのそばで突っ立っている。

「意味が解らぬ。ウルバーノ殿が戦闘機に乗るなどとは・・イエフ  
ゲニーの館？」

大佐が戦闘機の訓練を受けていたなどと言つことはまったく持つて初耳である。

「プラテアド半島のイエフゲニーの館でござります。戦闘機の誘導ミサイルは艦艇をも沈める破壊力です搭載されている一基・・共に発射されたとの事。恐らく館は跡形も無くなくなつてゐるとのコウジ中尉の言葉にござります」

と言ひながらフェルトンの身体は傾きドアに寄りかかり涙が目からこぼれる。

机の上に広げた山積みの革表紙が歪んで見え  
椅子から立ち上がった皇太子の姿は書庫の棚と一緒に見えない。  
フェルトンは泣いていた。

「馬鹿な！なぜだ！」

フェルトンの言葉が理解できたのか鋭い言葉が返ってくる。

ルーサーの問いかけなどどうでも良かつた。

モラドのバラディール將軍が極秘にまわして来たウルバーノの  
グエナエル研究資料を読んでいたフェルトンは肩を落として堰を切  
つて泣いている。

はつきり言つてフェルトンはルーサーが大嫌いだ。

仕事はきちんとこなすが冷たく無感動無表情のこんな男をなぜ評議  
会が選んだのかと嫌々仕えている。

「移動の準備をすぐに！へりでもいい、用意しろ！今すぐにだ！」

炎のように燃える瞳がフェルトンを捉える。こんな皇太子は見たこ  
とがない。

「承知しました・・」

整備室を呼び出しハンガー（格納庫）に点検済みの一機があるのを  
確認した。

「あるわけがない！そんな馬鹿なことが・・」

書物の劣化を防ぐために温度設定を低くされた書庫内で、足元から

頭の先まで冷水を浴びたようなフェルトンの顔もドアも壁に並んだ  
本の背表紙もルーサーの視界から見えなくなる。

「パイロットを呼び出しています。ここからですと一度滑走路に到着した頃には離陸準備が整っていると思います。行かれるがよい・・

」

搾り出した声でフェルトンは告げる。泣いている場合ではない。

ルーサーの衝撃がフェルトンに伝わり

垣間見たルーサーの人間味の有る行動にフェルトンは違う人物を見ている気分だ。

いぶかつていてるフェルトンの言葉はうなり声にしか聽こえず  
渦巻いた怒りがルーサーの中で荒れ狂っている。

ラティーフに固執して地位に固執して

どちらも捨てきれずに無理やりつれてきたそのつけがこんな結果を招くとは

何かを画策すれば次の策を用いなければならず身動きの出来ない深みにはまり込む。

一般人の彼女を認めてもらいたくて少なくとも宮殿以外では尊敬のまなざしで迎え入れられたくてラティーフの書いた衣装を渡りに船とばかりに使つていい。

同じカヤンデルの麓に暮らす民ならば似たよつた民族衣装になると密かに喜んだのに。

その喜びも一ヶ月も続かず妙な空気が宮殿に漂いその苦しさに後付できる謂れを求めている。

馬鹿なことをした・・馬鹿なことをした・・くだらない事に振り回

されて一人の未来を無くすとは。

ウルバーノ大佐はラティーフに好意的では無かつたのか？  
彼だけがいろいろと彼女の身に起きた災難に同情していたと言つのに・・この結果はあんまりだ。

誰か嘘だと言つてくれ！彼女無しの日々など考えられない。  
子供まで居るのに彼女と過ごした時間は少なすぎる。  
誰か彼女を返してくれ。そして全てを嘘だと言つてくれ・・  
「そんな・・そんな馬鹿な」

渡り廊下に掲げられた肖像画に敬意を示さず、

侍女の視線も無視し

宮殿の裏手にある滑走路を田指して無意識に足は早足になり上着を握り締めて駆け出した。

パイロットの注意を促す言葉も聞こえず  
うなりを上げるHンジンの音も眼下に広がる景色もルーサーの耳は見てはいない。

あの日ラティーフと幸せな式を上げたままテットを捨てどこか見知らぬ土地に

一人で逃避行の旅に出ればよかつたと後悔の言葉がぐるぐると無限に湧き出ている。

自転車の後ろに通信機を積み込みヘルメットをつけたマイクにテッドはがなりたてている。

「Bブロックの安全を確認したか?DとFは?Y地点までお前はどうやってくるんだ?レーダーだと他にミサイルが落ちた形跡がない。包囲網を縮めていくぞ」

警備隊員の応答に苛立ちながら観光バスの横を自転車ですり抜ける一見荷物を運んでいる警備サービス会社の社員。

テッドの後には途中から加わった普段着の隊員が十名。緊急時で呼び出されている。

「何があつたんですか」

「バスが離れて近くに人の気配がなくなると一人の隊員が尋ねる。

「わからん。何かの間違いか。ミサイル弾が打ち込まれた」

「敵が上陸してきたんですか!我が軍は何処で迎え撃つのですか?我々は敵の様子を探りに向かうのですか?」と必死で左右の空を見上げる。

「敵ではない」

敵が襲撃したのに丸腰で目立つ道路など使つかと緊張した男の顔を睨む。

「内紛だ、誰かが気が狂つて山のイエフゲニーを撃つた」

爆撃機の陰はレーダーで確認したが爆発音は遠くて何も聴こえてはいない。

頼りはモラドの軍隊の司令室からの情報だけ。

「なんですか。それで俺達が生存者を助けに行くんですね。?」

山のイエフゲニーには住人は居ないんじゃなかつたですか

思い出すように男が囁つ。

イエフゲニーには町もなければ村も無い、遺跡が原生林に飲み込まれて居る場所である。

「そうあつて欲しいわい」

汗が顔から指先から流れ落ちても山のイエフゲニーの館は見えない。テッドの心配はレイステンから連れてきたラティーフにはない。その侍女についているコレット。トルーサーの思惑通りあの選手はグーナールに祭り上げられているがそんなことよりも自分の妻の安否のほうが大事である。

「人つ子一人居ない廃墟じやないか」ひなびた石畳の道には雑草が活き活きと陽を受けている。

制服を着た警備兵士と出先から駆けつけた一般服の男達が列を作つすぐいスピードでひたすらペダルを踏んで坂道を駆け上がる。

「廃墟？ 石と岩だけの荒地だ。こんな所にミサイル弾が落ちたって。なんかの誤作動じやないですか？」

切り出された石と樹木の間を細く整備された道が切れ目なく続いている。

「おおい・・こいつこいつ、あれじゃないか。あの穴」

自転車を止めて双眼鏡を使つていた一人が指を刺す。斜め左下に風になびく黒鉛が見えている。

「行き過ぎたのか？」とテッド。

「さううううう、やけに石がいるいろ誇りっぽいと思つたら。臭いな、

なんか焼けた匂いがする

風向きが変わり隊員全員の鼻にも焦げ臭い匂いが漂い  
ただならぬことが起きていると感じている。

「あれだ」

後戻りし草深い空き地を抜けていくと黒い煙の中へと道が見えた。  
黒い雲が黙々と道を塞ぎ前方から熱い風とこげた匂いが吹き付けて  
くる。

「おい後ろから車が来たぜ。物好きな野郎だ」

車に乗るのはガイナスでは珍しく手足がない重傷者を運ぶ際にしか  
使用されて無い。

一台の黒塗りの車がテット等プラテアド警備隊の後ろに止まり  
程なく制服を着たテッドを見つけて車の中から人が降りてきた。

「その無線機を借りたい。私はダッド少佐。君はプラテアド<sup>警備所長</sup>かあの召使の夫だな。君への説明は後でさせてもらおう」

噴煙で真っ白になつた黒いスーツの男はテッドから無線機を取り上げると車の近くまで持つて行つた。

「通信室。ダッド少佐だ。いやグ里斯ではないモラドの本部へ繋いでくれ。よし。モラドの司令部に聞きたい?なんの目的でここを攻撃した?ミサイルなんか打ち込みやがつて!ここはサガモア王の別宅だ!誰か責任者を出しやがれ!ソン所そちらの言い分けしやがつたらただじや置かないぞ!」

テットは敬礼して口をへのジにしてダッド少佐の行動を見ている。

テット以上にダッドは憤慨している。

ダッドの耳元で切り替わったモラードから声が届く。

「ダッド少佐。ミサイルの件で文句があるやつだな。言つて見る、聞こへじやないか」

「あんたは誰だ？」この場合誰でもいい。いいか俺の勤めていた屋敷を粉々にしやがって！それもだ！知らせも無しだ！たまたま俺がレーダーを見ていたからいいものを。俺が狙いか？俺を殺したかったのか？残念だな生きてるよ。お前等は誰も殺しちゃいねえ残念だつたな」

警備隊のテットらが近くに居るのも忘れて怒りに狂つたダッドの声はしつかり聞こえてくる。

沈んだ声が耳元で囁くように聞く。  
「皇太子妃は」

「なんでも知つてゐのかよ。ちゃんと出かけて生きてるよ」  
やけくそで答える。大事な職場とわずかだけれど私物もぶつとんじました。

「王子達は」

「同じだ。皇太子妃を殺してみろお前等一生後悔するぞ！だれだ逆賊は！名前を言え！」

恐ろしい顔をしたダッドがわめく。

「こつだけは絶対に許せない、直に俺がこの手で溶岩の中に突き落としてやると誓っている。

ダッドの言葉をモラードの基地では全員に聴こえた。バーティールの命令で切り替えて通話している。

ダッドの耳元で落ち着いた声が問う。

「バラディールだ。本当に皇太子妃は生きているのだな」

しこたま悪態をつく用意をしていたダッドは一瞬冷や水をかけられた気分になつたが、

「エッ・・将軍? 何で将軍が皇太子妃の命を狙うのですか? なんで?」

声のトーンは落としても怒りは心の奥底からふつふつと沸きあがつている。

通話者がかわる。

「大声を出すな。私はユウジ中尉だから我々はそっちへ行く本当に皇太子妃は生きているのだな? 間違いないな。将軍、軍用ヘリを用意します。へりだから少々時間がかかる。ダッド少佐。皇太子妃の安全確認と保護を頼む」

声の主・・上官にたしなめられて又怒りの熱が下がる。将軍がここに来る?なぜ?

耳から聞こえる慌ただしい声に  
弾むような喜びの感情が伝わってきてダッドは腹立たしい気持ちから何かに騙されているのではないかと疑つた。

とにかく最高責任者が説明をしてくれるだらうと、通信機器をテッドに渡すとテッドも何かの情報をダッドがくれるものだと待ち構えている。

皇太子妃の名前が將軍の口から出てダッドは不安になる。  
妃は橋げたを伝い谷を越えている。

召使は二十キロも下の吊り橋から回り道をして律儀に自転車で妃のお供をしているが  
屋敷の惨状を見て谷に向ひつの染物工房にもミサイルが落とされたいたなら

皇太子妃はここに戻つては来ない。

もう一度爆撃される前に見たレーダーの位置をダッドは思い出して  
見る、  
ミサイルの点滅は屋敷にしか向かつてなかつたようだ。  
車の座席に座り車に取り付けたレーダーを起動させるが屋敷が全壊してアンテナと增幅器がなくなつて使い物にならない。

嫌な汗が運転席に居ると流れてきた。  
外に出ればテッドが隊員と炎が静まつた屋敷の残骸を取り囲み話している。

## テット 安全確認

少なくなった煙の向い側から自転車に乗ったコレットが現われうるつりしている。

近くに居た隊員が追い返そうとするが慌ててテットが静止し

コレットと会話しながらやりダッシュの方向を指している。

コレットはテットのそばを離れて坂道を下って驚いた顔でダッシュを見ている。

燃えた屋敷の灰をかぶりあちこち黒いジャケットにもこげた痕が、穴になつて残っている。

これまで見たダッシュの中でも一番汚い格好である。

「ダッシュ佐これは何の演劇でありますか？」  
ぶすくれて敬礼しテットに聞けと言われた事を口にする。

レーダーの映像からやつきの本部との会話までを悶々とダッシュは思  
い出しては

冷や汗と脂汗とを交互に流している。

「皇太子妃は帰りが遅いようだが」「  
なれない敬礼なんだしゃがつてどダッシュが睨む。

パツチリと開いた目がくるくる回り嬉しそうに笑う。  
さすがわアネルの子供達どんな高い所でも平気なよと心の中で言  
つて見る。

とてもじゃないがダッシュには本当のことなど言えない。

「ティサ様があちこち飛んで・・・いえ遊んでいらっしゃるのだと想

います」

どんな状況であろうとアネルのことを考へるだけで笑顔になる。

「エディス様もか」

眉毛を伝わって汗が滴り落ちる。

「はい・・

変な人気持ち悪い汗なんかかいて・・とした唇を出す。

汚い物は見たくないと上官から視線を外せば見通しの良い景色の中にちらちら動く影。

「ほら噂をすれば・・アネル様！今日は私のほうが早いですよ」

と古い橋脚に向かつて手を振る。

「フォルスストロム様といえ」

皇太子妃が帰つてこなかつたらこれまでの勤務がチャラになり良くて降格、悪ければヒドラ行きかと心配していたのが消えていく。

「あらごめんなさい」

夕日を頬に受けてラティーフが現われると心底ダッドは安心した。

グリスの祭り以来グエナエルとラティーフの合致する点をダッドなりに探している。

伝承や謂れなど鶉呑みにするほど子供じみても居ないが、彼女のことを扱いは史実の人のように仕えると指示文が変わった。早い話王様待遇に昇格したのである。

テットがラティーフの現われた方角を見て驚いている。

「本当に・・古代橋から帰ってきた」

小さな動く点が近づくにつれテットは言葉を失う。

夫人のそばには一人の子供が岩や雑木の影から出ては隠れ走り回っている。

一人は広範囲に動き回りもつと小さな子供の周囲を茶化しながら遊び近づいてくる。

夫人は枝から枝、岩から岩に道のない遺跡を潜り抜けてダッドの前に立っている。

離れて見ていたテットは直接会話が出来るチャンスだと自転車にまたがり一旦車道に戻り急な坂道を駆け上がる。

乾いていた汗が又噴出し頬を伝わりサドルに落ちる。

「確認します。ラティーフ・セヴェールさんですか？」

車の横では珍しそうに子供がテットを見上げる。

「はい、住まいに隕石か何か落ちたようですね。でも大事なものは谷向こうの工房に置いていましたので私の被害は大きくはありません」

と胸のポケットからもカードを取り出す。

ラティーフが三年間働いて蓄えたものである。ガイナスでは使用したこと一度も無い。

カードを見てテットは笑った。レイステンではそのカード情報でラティーフを追っていた。

「元気そうで何よりです。色々な所から生存情報をくれと言われています」

轍のついた荷車に通信機材を積み込みダッドの顔色を伺いながら各種機関の長老達に報告を入れる。

コレットとラティーフは行つてはいけないと激しく注意されていた  
現場をダッドに押さえられて一人揃つてお小言を喰らつている

「そもそも皇太子妃の警護担当が一時間以上も警護を放り出して離  
れているなど勤務放棄もはなはだしい。妃も自分の立場を考えて行  
動なさいまし。まして幼子を連れて危険な場所を歩くなどもっての  
ほかです」

早口で注意するダッドの足元でティサが焦げて出来た穴に積んでき  
た草を差込み飾つてている。

「これ・・やめなさい」

ついでに手に付いた草の汁をズボンの生地に擦り付ける。

「ダア・・?」 可愛い顔がダッドを見上げる。

兄エディスにされるいたずらをダッドにしている。  
草の匂いが強烈に足元から漂つてダッドを包むと息をするのも辛く  
なる。

口を閉じたダッドから少しずつラティーフとコレットは離れて笑い  
たいのをこじりえている。

## 安堵するルーサー

機内無線でパイロットがラティーフの無事を知らせて ルーサーには聞こえていなかのようこ反應が無い。

夜の帳の落ちたイエフゲニーは暗く

黒い森と空には降るような星が出でてゐるだけである。

迎えに来た車のヘッドライトがジグザグにルーサーを乗せて下る。爆破されたイエフゲニーの館から北に二十キロ下った場所にあるホテルの前まで

ルーサーは口を開かなかつた。

ホテルは急遽、ダッドの命令で観光客を立ち退かせている。

夕方、周辺ではテットが警備を強いてモラド本隊の将軍を待ち構えていた。

慌ただしくやつてきて去つていった將軍の迫力に押されてダッドもテットも褒められたのか脅迫されたのかわからないまま将軍を見送つてゐる。

ダッドは屋敷を拠点に密船から上陸する観光客や乗組員を見張るのが本来の仕事である。

ホテルの従業員、土産物屋の店員等など、全てダッドの部下で構成されテットの基地から無理やり持つて来させている装置を下のホテルの一室に搬入させ忙しく働いている。

ラティーフがグリストに行くまでの警護は行きがかりじょしなしているけれど上段にある項目を遂行するのが彼の任務である。

軍人でいっぱいだったラウンジにはホテルの従業員の姿も消えて  
イエフゲーの館同様にラティーフ一人が残されている。

コレットは子供達をつれて自室に引っ込みラウンジに残ったラティーフは  
めまぐるしく代わる軍人との挨拶に疲れてルーサーを待ち長椅子で  
眠り込んでいる。

落とされた照明の中、自動ドアが開く気配に起き上がるれば大またの  
ルーサーが一階への階段を駆け上がる途中である。

「ルーサー、一階には誰も居ないわ。ダッドも軍人さんも皆帰られ  
たわ」

「ラティ・・」

黒い影は足音も立てずに手すりを乗り越えラウンジの中央に居るラ  
ティーフを抱きしめている。

「私達、内紛に巻き込まれたの？それとも誤射だったのかしら。ル  
ーサー」

誰もきちんとした説明をしてくれなかつた。

コレットの情報だと王位継承権を狙つての騒動らしい。

「怪我もしていないし、元気そのものよ」

祭り以来、初めて会う。いつもながら情熱的・・だけば今日は圧迫  
感がある。

がつちり組まれた腕を外そともがく、が閉めどころが良いのか微  
動だにしない。

「生きている君にあえてよかつた・・・

服の上からラティーフの体温を伝わるまでルーサーは放さなかつた。ラティーフの声、肌の香りがルーサーに染み込むまでは放したく無い。

「あえてよかつた」

と繰り返してルーサーは腕の力を抜きラティーフの手を握りしめる。

「僕が悪かつた」

そう・何かも僕が悪いとただ謝る以外に言葉が見つからない。

「座つて。落ち着いてね」

取り乱したルーサーはなぜかとても可愛く見える。

ラティーフに促されて座つてもまだルーサーの心は半分冷え切つたままこの状況に陥つた元凶を探し出そうとしている。  
疑問は多くある、なぜモラドの次期統治者がラティーフの命を狙つたのか。

テットはユウジ中尉の言つ過去の悪事をバラディールに暴かれて自暴自棄になつた・・・というが

どんな悪事がラティーフとつながるのか見等もつかない。

崇拜しているグエナエルにラティーフを仕立て上げようとしたのが彼の癪に障つたのか。

となれば彼だけが腹を立てたのではなく他にも快く思わない人間が居ることになる、

七つの半島の国民は幼児にいたるまでグエナエルを国を守つた英雄と尊敬している。

どんな根拠があつて・・と腹を立てたのか事情を聞こうにもウルバーノは自軍の戦闘機から逃げ切つてしまつてゐる。

他の長老達とウルバーノの諍いを思い出しても彼らとの間には大きな火種は見つからず、

そもそも他の半島の人間はモラドの産業を後押しして稼いでいるのだから追いつめられることはないはずである。

フェルトンの言つ乱心と言つ言葉が当たつてゐるのならたまたまミサイル弾がイエフゲニーに当たるだらうかと又疑問が浮かぶ。

「ルーサー。大きな屋敷が粉々になってしまったのは驚いたけれど。私は大丈夫よそんな青い顔していつもあなたしくないわ、元気を出して」

と、逆に優しい顔で慰められる。

泣き笑いの笑顔でもう一度ラティーフを抱きしめると、

「谷を渡つていたのかい？」と聞く、  
ミサイルを回避できたのはそれ以外に考えられない、  
田々の行動を尋ねれば染物工場の名前は頻繁に出でてゐる。

「ダッドにね、古橋を渡つてゐる」とばれちやつた。又叱られちやつたわ

そんなことはもうとつべこぼれでいるのこと笑顔になる。

いつもの百倍は優しいルーサーに驚きながらも翌朝になるとじばらくは一緒にいると言つてゐたルーサーは青い顔で支度をしてホテルを出で行つた。

いつものように工場長の挨拶を聞き広い敷地を抜けて一服しに屋敷に戻った所に家人に背筋が凍る知らせを聞いた。

お茶を前に鎮まり返った居間で皇太子妃安全確認連絡を受けたヨルゴは

血の氣の戻った両腕を握り締め所構わず振り回した。

「あのくされ男女！…わしの言つた通りであろう。禍根を残すと。わしの心理テストは来るべき未来を見据えているのじゃそれを一笑に付してモラドの後継者に口出し無用とか言い放ちおつて。このざまじやー！皇太子妃は無事で何よりじゃがウルバーノが持つて出た情報量次第でガイナスが窮地に陥れらる。王に緊急の評議会を開くよう進言する！なんと言つことじや。誰かウルバーノの側近の情報をくれ。？またならすぐに自白剤を飲ませるのじや」

顔を前に突き出し干からびた首筋を震わせて大声でわめき散らしている。

バラディールの夫選出のさい心理テストの結果ウルバーノを外すようヨルゴは進言している。

若いバラディールは頭脳明晰、姿かたちもまあまあのウルバーノを制御できると宣言しウルバーノを夫にした。

バラディールの制御方法はモラドの族長としての権限を取り上げ族長全体の平静を保つため根回しとしての人材に当てた。

技術部門先任者のタッソーが打ち上げた衛星は各国を空から監視し瞬く間に僅か百年で世界の情勢を秘密裏に握ることに成功している。タッソーの築いた地盤の上に人的基礎を固めたのがウルバーノで各部族間から人数を裂いて諜報員に仕立て上げた。

特殊諜報機関の頂点に立ったウルバーノは飛ぶ鳥を打ち落とす勢いでのし上がつてきている。

七つの部族間で行なわれていた取引はウルバーノの顔色一つで明暗が分かれ、

それをどうにか押さえていたのがカヤンデル山脈の持ち主サガモア王である。

王の許可なくしてはモラドのダム湖も出来なかつたが国庫からの歳出制限を設けて王にお金が回らないよう裏で手を回しサガモア王の財政を圧迫し続けていたのがウルバーノである。

「口惜しい！あいつの口車に乗せられてしまつた。ブライズはこのことを予測していたのか。そんなことはないあいつは正義感の強い男。契約の更新が出来なかつただけじゃアア、、口惜しいこんな時にグエナエルが・・グエナエルが」最初だけ大声でわめいていたが後はもう「もじ」と口の中で自分自身を罵倒した。

大声でいえないのはウルバーノに誘われていろんな手引きをし金を得てているからである。

「こんなことで落ち込んでなどいられぬわ。ブライズは何処に居るわしと会話が出来るように整えてくれ」

毅然と顔を挙げ空を見上げる。いつの間にか庭に出てくる。

呼ばれた侍従が廊下を駆け出して行く。

ヨルゴはその足音で館の一一番端まで考え方をしながら歩いてきたことに気がついた。

肩をすぼめ口をへの字にし目には涙が溜まつた顔を誰にも見られないよう無意識に人気の無い場所を選んで歩いたらしく。

顔を上げてカヤンデルの山の方角を探して見上げた。

「爺めの誇りは僅かですが残つておりますぞ」

「ヨル」の口に声に出さない宣誓文が唱えられる。

力のある者、権力を握ったならば人を守ることにその権力を使え國を守るためにその知恵を使え、力の限りをつくすこと。この宣誓文はグエナエルに捧げられる。

「キイイイイイイイイイーー！」

プラテアドのティエリーは奇声を発し卒倒して倒れた。  
倒れた場所は一百年前の洋式で作られた応接間。

分厚いファイルの山の奥に主は隠れた。

「館様！誰かきつけ薬を！」

長椅子を回り込みティエリーの様子を伺うと  
主ティエリーは引っくり返つたまま天井を睨みつけている。

よだれの垂れた口をパクパク動かして、

「起こしてたも！大丈夫じゃ。起こしてたもーアア、ありがとう。

水をたも」

水差しからグラスに注がれスツールに寄りかかりティエリーはグラスの水を飲み干した。

口から垂れた水を袖口で拭い目をせらせらさせている。

「それでウルバーノはどうした！将軍は逃がしたのではあるまいな！別居しているとはいえ一人の間には子供が三人も居る。あの女の失態じや！罰当たりが罰当たりが。オオーなんという強運であろうか。生きていてくれて嬉しい・・」

スツールと椅子の間に座り込み両手で顔を多い肩を震わせて怒りと悲しみとない交ぜになり泣き崩れる。

日頃感情を激しく出す人間を嫌うティエリーの姿に侍従達はどう扱

つていいかわからない。

衣服が汚れることも床の冷たさも感じないのか嗚咽がしゃっくりのように戯り返されて落ち着いたのか侍従の顔を見上げた顔は憑き物が取れたのか爽やかである。

「評議会の招集がかかるはず。いえ私からかけるわ」  
侍従のイスは立ち上がったティエリーが三千年祭から少しづつ変わつているのを感じ取つていた。

いつもなら評議会の前日には長老の悪口を並べ立て  
集まることの無意味さを嘆いていたのに。

女々しいと本人も認めている優しい立ち居振る舞いがなぜか堂々とした歩きっぷりに変わり近寄りがたい雰囲気も醸し出し始めてゐる。

涙の流れた痕を気にかける様子もなくきらきらと目は輝き  
息を一つ一つと繰り返し落ち着いて行くと、肩からずれたストール  
を腰に巻きなおして誰にともなく微笑んでいる。

「忠義を尽くしたい」ぽつりとつぶやいたのはマロンのビセンテ。  
長老達の経済的な事情や家庭内のことを探らせていたウルバーノは  
ガイネスを飛び立つてしまつた。

バラディール将軍の「打ち落とせ！」の声も聞いた。

ダッドの知らせがなければ服毒死を考えて毒の入つてゐるキャビネットを開く鍵を握り締めてお手洗いにと部屋を出たところピータから呼び戻された。

ピータの受信した音声に不覚に涙を流し侍従の二人  
ピータとジュンも拳を握り締め固まつたまま身体を震わせて泣いた。

ピータとジュンがビセンテの言葉の意味を汲み取り力強くうなづく。

「私はモラドに行つてもよろしいでしょうか」ヒピータ。

「誰か送らねばと思っていた。行つてくれるか

「ノリマサ殿の傘下で活躍したいと思います」

「そうだな。ノリマサが方向修正しなかつたらすぐ知らせるように。いいか個人の力は微々足るものだそれが集まれば大きなうねりになる。他国のようにたつた一体の偶像を守るのではない。ガイナスの土を守るのだ。誰にもこの国を荒させはしない。我々がこの地位に要るのはその理由から。ゆっくりでいい間違いは正せる。やり抜こう。まずは評議会。国外も国内も難題は山積している」

ジュンがビセンテの書斎から命令書を持つてテーブルに置く。ビセンテはペンを握る、ペンを持つ指先に違和感を感じ指を見ればビセンテの指先は鍵の形が解るほど変形している。

ネグロのワルテはイエフゲニーの館が爆破されたと聞いた瞬間に本当に目の前が真っ暗になりそのまま倒れイシアルの腕の中でこと切れている。

幸いだったのは後継者を選抜して仕事の半分は受け渡しが終わっていたこと。

後に仕事全容がわかつたときあんなにもワルテが興奮したのかを後継者イシアルは知った。

訃報と吉報を居間で同時に聞いたブランコのシメオンは壁紙の向こう側にあるカヤンデル山を見ている。

シメオンの覚えているカヤンデルは夏の真っ盛りであるひとつ最高峰は真っ白な雪を頂いていた。

イエフゲニーにある王の別館にミサイル弾を撃ち込まれたと聞いて

言葉を失い書斎の椅子から腰が浮きからだから力が抜けた。

シメオンの目は浮き出した壁紙の幻想的な山並みと  
幾重もの布で形作られたタペストリーとの間を行き来していたが  
壁とタペストリーは近くにありすぎてシメオンが何を見ているのか  
はその書斎に居る誰もがわからぬでいた。

次の知らせが入つてもシメオンの表情は強張つたまま変わらなかつ  
た。

シメオンは表面上は感情を表す表情筋は下に下がり二十も老けた様  
に周りの者には感じられた。

「時が来た・時が。三千年の・いや七千年の贖罪はこれから始  
まるのだ」

下がつた口元から声を絞り出す。

人を殺した者はその代償は自分の命。

グエナエルが敵軍からガイネスを守り追い返したその後  
姿を山に戻したのは人殺しを讃えられることを嫌つていたからだ。  
幾度となく半島に残ることを切望されながらも首を縊に振らず満身  
創痍の仲間と誰にも見送られずにひつそりと帰つていった。もし伝  
説が本当なら彼らは溶岩の吹き出る火口に自ら身を投げているはず  
である。

ガイネス正教は彼らの教えを説いてきたがその本質は人間としての  
誇り。

どれだけ自分の都合だけで教えを捻じ曲げて來ただろう。  
時代の流れだとモラドの武器の売買に目をつぶり・モラドの武器・  
・ガイネスで作られた武器は世界中に行き渡つた・充分ではない

か。

ガイネスの武器は人を殺していないというのがウルバーノの言い分だつたが  
ガイネスからウルバーノが逃げ出したことであいつの言い分はすべて嘘だつたことがわかる

しかも最後の一人かもしれないグエナエルの生存者を攻撃することなどあつてはならぬこと。  
国は潤つても最低の人殺しにはなりたくない。

繁殖し続けるなら何処であろうと構わない。我々は増殖し増え続ける粘菌と同じ位置にいる捕食されるものと分かれるのは間違いで、広がる・・この一言に尽きる。  
誇りを持つて人間という命をまつとうするために広がり続ける。

「司祭様・・・」

脱力して立つたままのシメオンに違和感を感じて侍従が声をかける。  
「参らうかの」

「は?」

「グリスの王宮まで。早駆けの自転車にしてくれるとありがたい。  
地下鉄はこの身には辛い。いや。地下鉄で行こう緊急時だ。わしとて足腰を鍛えねばならぬ」

ガイネスの地下鉄とは主に物資輸送に使用される。

長期にわたつて掘り続けられた作業でカヤンデルから七つの半島全てに伸びている。

緊急事態発生のおり半島の全ての住民に武器が行き渡るよう隠密裏に掘削された。

昨今商業目的で輸送に使われるようになつたが地下鉄の横穴には武器庫とシェルターがあるのはガイネス国民の暗黙の秘密である。  
多少の修正工事は施されたがまだトンネル内はカーブが多く固い岩

盤を削った古いノミ痕が生々しく残り速度を増すと座席の無むこむき出しおの貨車は壁に向かって走っているかのように激しく揺れる。

乗車するのよみび足腰に自信のある若者が緊急を要する「」ことが無ければ

誰も乗りたがらない代物である。

老境に差し掛かったシメオンが地下鉄に乗ると聞いて若い僧侶達は並々ならぬシメオンの意志の強さを感じている。

翌日思い詰めたルーサーはサガモア王との会見を求めた。

「王はまだお休みでござります」と侍従フェルトン。

昨日の騒動から王を含め宮殿に働く人間は就寝が遅くなっている。

今朝もルーサー以外に本日中に出向くとの連絡が二件あった。

「十分で構いません。用件さえ伝えればそれでいいのです」  
それで私はこの宮殿の外へそして一度とこのグ里斯には入らないと  
咽元までかかる。

昨日の出来事でどれだけルーサーが妻を心配していたか知つてている  
だけに

無情に追い返すことはフェルトンは出来ない。

侍従フェルトンは黙つて会釈をし控え室を離れた。

それから数分後、王の居間への大扉が開き会見の間へとルーサーは  
通された。

応接間のテーブルの前に立つと王の寝室へのドアが開き沈んだ顔の  
サガモアが現われる。

「何かと昨日は忙しかった。色々考えをまとめねばならぬことが多い  
くての・・無事で何よりじゃ。で、急ぎの用件とは?」

ガウン姿の身体を椅子に沈めると腕組をして視線で座るよつルーサ  
ーにうなずく。

静かに椅子に浅く腰掛けて父親の顔を正面に見据える。

「すぐにすみます。話が終わり次第、もう一度寝室に戻られる時間はあります」  
もつ王との話は終わったかのような言い草である。

言葉を切り王が聞き耳を立てていてるのをルーサーは確かめる。

「私は皇太子を辞退します。申し上げたいのはこのことです。理由は多々ありますが一番大きな理由は妻と離れて暮らしていることです」

誘拐したも当然の妻を幸せにするどころか命を失ぐす危険にさらすことになった。

本当に彼女が死んでいたなら手近な崖から飛び降りて死んでいる。

暗い顔を一層暗くして二人を隔てる広いテーブルの上を見つめる。

「妻をガイネスの人々に認めてもらいたくて画策したことが裏目に出ています。一族に認めてもらえなければ民にと考え、浅はかな知恵を働かせました。これ以上私と妻がここで暮らす事は出来ません。私と妻が居なくともこの国は成り立っている。お暇を申し上げに來ました」

王を見るルーサーの顔は氷のように冷たい無表情。

王は眉根をひそめて結んでいた口を開く。

「そなたがこの三年間、孤立していたことは知っている。一族の人間にわしが口添えする事もしなかった。悪かつたと思つ。だがの。この一ヶ月、世界が変わった。正確には半月前かな。そなたがあの衣装で彼女をバルコニー立たせたことは皆で黙認したことじや。今となつては・・なんと言つていいものやら。私もどう態度改めてい

いものか悩んでいるのだ・・今はそうじやの。そなたに謝ることしかできない。すまなかつた。一本氣で固執する性格はわしに似ているわい「

口元に無理に笑顔を作り悲壯な決意の息子を見る。

追いつめたのはサガモア自身である。

離れていた時は常に息子を心配して口出しをしていたが帰国してからはあまりにも人間味の無い冷たい息子を疎ましく思っている。

笑顔のほしい人間には笑顔を振りまき優しい言葉のほしい人間には上っ面だけの慰めの言葉をかけるルーサーが異様に映る。思春期の子供やうら若い女達はルーサーの身のこなしと美しさに惑わされるが

大人である王や長老達は演出されすぎた振る舞いを嫌うのである。

何事にも動じないルーサーが妻のことになると色々思案している。妻のため何もかも捨てるという息子はサガモアと同じに一晩寝ていない。

近付き難い雰囲気を漂わせたルーサーはサガモアの謝罪の言葉を聞いても表情を変えずにいる。

頑なな息子に何とかして自分の気持ちを伝えたいが出てくる言葉は命令を下す王の言いまわし。

「国を出て行くのは許さぬ。これからこの国は変わる。そなたはその中核人物になるのだ」  
と熱情をこめていつても、  
ルーサーの口調は変わらない。

「私はあなたの命令など聞きません。もうたくさんだ。二兎を追う

もの一兎も得ず。馬鹿な選択をしたのです。生まれた国はここでも、育つたのはここではない。私はガイナスの人間になどなれない、私は浅はかで大馬鹿です。今度のことでも良くなかりました。お元氣でもう一度会うことはないと思います」

あなたも不出来な息子を毎日見すにすむでしょう・・と冷たい眼差しを王に向ける。

上着の小さなブローチに手をかけて外した、このダイヤの石はプラテアドの印し。

王の眉根は一層深く皺を刻み怪訝そうな顔がルーサーを見つめ、もう少し待てと手があがる。

「そなたは読んでおらぬのか。將軍の書類を持つてこい。バラディールからのファイルを」

考え深い顔でサガモアはフェルトンが持つてきたファイルと書類の束をテーブルに並べた。

「これがウルバーノの研究資料。これがあやつの勤務記録。これが一昨日、医療機関の検査結果、これに時間がかかった」

そう言って分厚いファイルの付箋のあるページを広げて置いた。

「読むが良い」

グエナエル・・と表紙に書いてあるファイルなどルーサーは見たくもない。

チラリと文字や絵の書いてあるページを見てテーブルから離れるて背もたれにルーサーは身体を沈める。

「良い。わしが言つ。これは二十数年をかけてウルバーノが書いた。  
あれは休みを利用してはグエナエルを探しておつた」  
ルーサーが聞いているか顔色を見る。

席を立つ頃合いをルーサーは計つてゐる。

「あればバラディールと結婚すると軍隊に特殊部隊が必要だと進言して將軍が認めるど、休みを利用してはカヤンデルの村々を歩き回り一つの村に日星をつけた。名前をセヴェールと言つ。細かいことはこれを読めば解るが、あやつはその村から一人の女性を連れ去つた。口車に乗せて騙して連れ出したか・・このとき特殊部隊の訓練が山であつたからたぶん拉致したのではと思う。小さくメモには死亡と書いてある。この女性は想像だがそなたの妻の母親だと思われる」

最後の部分はしつかり顔を見ながら言つた。ルーサーに変化は無い。話が終われば一度と戻らないとの決意が態度に表れている。

王は一息肺に空氣を送り込む。

「ごちやごちやと良いことも悪いこともない交ぜになりどれから手をつけて良いかわからない。」

「不穏な空氣を感じてか將軍はその年ウルバーノを半島の勤務に変えた。七つの半島を一巡させて海の警護にも就かせモラドの本隊に戻らせたのが七年前。本人たつての希望でまたもや特殊部隊を編成した」

二十年前という時間の流れは変化に富んでいた。

世界情勢はどの国も緊急を要する事故やハプニングに対処できるように戦闘のエキスパートの育成をさせている。バラディールは特殊部隊の必要性を主張した夫に管轄を任せた。

その後昇進したルバーノは大佐になり皆が認める良い軍人になったと誰もに思わせている。

ウルバーノの勤務記録の書類の山から一枚抜粋して広げる。場所と日時が書き込まれ所持品が細かく書いてある。

「記録には、特殊なプラスティック爆弾を使用した演習が繰り返し行なわれている。勤務記録の一一番上には將軍が調べ上げた。たぶん直接聞いたのだろう。特殊部隊の隊員が行なった演習の細かい内容だ」

身内が起した罪を話すのは嫌な気分である。

「それからウルバーノが勝手に王家の古い墓を暴いて持っていた遺骸の一部とそなたの妻のDNAの結果がこれだ。シメオンは奇跡だ

と言つてゐる

最後の薄いファイルをどんどんと叩く。

「何を・・

ぎりりとルーサーの目が王を見上げる。

遺伝子の偽装は何度も考えたがばれた時の騒動を考えて実行するの  
はやめている。

それを王の口から聞くとは滑稽である。

サガモアは自分に言い聞かせるように声を落とした。全部説明しな  
ければ息子はこの事態を把握できない。

「このファイルのあらましを聞かせてやひつ」

「特殊部隊は岩屋の奥の柱に黒煙だけが出る花火のような爆弾を仕  
掛けた。最初の一発で中央の岩屋に人を集めて・・岩屋には村には、  
警備の人間が広い範囲で居たようだ。それを呼び集めるためだと言  
つていた。退路を考えてそうしたのだそうだ。そして岩屋の端に  
ある家の人間を拉致するそれが作戦だったと。作戦は成功していた。  
男達が中央に集まつた時に次の爆弾を炸裂させたこれは催涙弾と強  
烈な音だけが鳴る爆弾だったという。だが実際は、隊員達の前で岩  
屋は落盤して消えてしまった。この話で何か思い出すことは無いか  
ね」

推測として将軍の書き込みがある。

爆撃音が亀裂を走り軟弱だった箇所を崩壊させその連鎖で岩屋を全  
壊させたと。

暗い顔色のルーサーがつぶやくように答える。

「ラティーフの村も消えている」

「そうだ。彼女は強運の持ち主だ。そう思わないかね」「温かい目と落ち着いた声がルーサーを見つめる。

「ウルバーノは最低な男だ。今回のことにつけてもだが我々は幸運にもこの世でただ一人のグエナエルを迎えることが出来た。いいかお前は最高の奇跡をこの国に持ち帰った。わしはそなたを誇りに思う。議会を開くように申請が来ておる。長老の葬式が終わればすぐに話し合いだ。良いかお前の後ろには誰も居ない。それが効を成すとわしは思つてゐる」

バックグラウンドに有力な一族が居ないのはこの国で生きていく上で困難なことだが  
彼女の後ろに誰も居ないという事実は彼女を中心据えるには好都合だった。

「誰もが同じラインについている。同じ位置だぞ。モラドの将軍はお前に屈服した。お前はモラドの要求を呑まずに今日まで来たことを誇りに思え。そなたとそなたの妻の二人がこの国を出て行くなど誰も承認はするまい。後ろ盾が欲しいか。この場でこのようなこと言つても言いかわからぬが後ろ盾はこの宮殿に住まつもの全員だ」

そして七つの部族全部が後ろ盾になる。  
このことは本人達の申し出を直接聞かせたほうがよいと王は判断し口にしない。

「さつと今日飛んでくる一人も同じ事を言いに来るはず。わしは昨日から驚愕することばかり続いて何をしていいものやら・・だがこれだけは真実だ。わしはわしの妻だった女を愛している。その子供もずっと愛し続けた。これからも。グリスに住むにはここは家庭的ではない。イエフゲニーで建てている城をやろう。見晴らしだけは

良い。子供を育てるにはイエフゲニーは良い場所らしい。休みは約束しよう」

熱のこもつたサガモア王の言葉をルーサーは半信半疑で聞いている。広げられた書類も確かに将軍から緊急と書いて送られた来ていたが表紙のグエナエルの記述で先にやるべきことあると読まずに放っている。

だとすれば・・ウルバーノが居なければラティーフとルーサーは会うこととはなかつた。

彼が村をつぶさなければ。ラティーフは天涯孤獨の身の上にならずカヤンデルの山から出てこなかつた。

彼女の故郷を生活の基盤の全てを奪つたウルバーノが憎かつたが彼が失敗しなければレイステンで彼女との出会いはなかつたと思うとぐらぐらと身体が揺れ気が遠くなる。

「わしはこれまで子供と暮らしたことが無い。だがのこれからは違う。わしは・・わしは・・」

言葉に詰まる。

ルーサーはこめかみに指をあてがい必死で考えようとしていた。

「卑怯だ。こんな時そんな話など作り上げるなど。卑怯だ・・」

「将軍が詫びていた。自害も考えたというだがのう、わしが止めた。出来るなら将軍と話をせぬか。バラディールは研究資料から村を探し出すのに躍起になつておる。償いのつもりじゃろう」

眉間の皺が伸びて哀れな息子を見る。生まれてすぐに抱き上げることも優しい言葉をかけたことも一度も無いとのとき初めてサガモ

アは思った。

息子ルーサーは親の態度で疑心暗鬼に陥っている。  
それが証拠に憎しみに満ちた目つきは変わらない。

「笑い者にして次は持ち上げる。その手には乗らぬ・嘘つきめ何が

グエナエルだ」

グエナエルグエナエルと聞きたくもない。

驚いてかつと開いた目がルーサーを見据えた。

「グエナエルを愚弄することは許さん！たとえお前であろうとグエナエルを愚弄するなどと絶対に許さんぞ！」

サガモアのつばがテーブルに飛ぶ。

「いいか、お前は他国で育ったゆえグエナエルを知らぬ！知らぬ者にどう説明してよいかわしにはわからぬが、ガイネスに生まれたるものグエナエルを誇りに思う者は居ても愚弄する者は何人もこのわしが許さぬ」

と壁にかけてある剣を引き抜いて切つ先をルーサーに向けた。  
なんと大袈裟な立ち居振る舞いとテーブルの向こう側で切つ先を向けた王にせせら笑いを送る。

「グエナエルはただの人殺しではないか。それを僕の妻と一緒にするなんて・・・」

「黙れ！知らぬなら教えよう」

サガモアから温和な顔が消える。

「グエナエル・・・彼らは戦で呼び出されて人殺しをする我が国の工キスパート、彼らは敵と戦い生き延びたものは生まれ育った村には帰らぬ。血塗られた手と身体を溶岩の中で燃え尽くさせて命で償う。

ヒドラとは戦いに行きそびれた高齢者が恥じていく所。この国を何度も救つたのはグエナエル。彼等の命が無ければ我々はこうして生きてなどいない。お前にとつては馬鹿げたことだろう。プラテアドにはグエナエルと交信する手立てが一百年前まではあつたが疫病が流行つた年、通信史を受け持つていた一族が死んでしまい誰もカヤンデルの神殿もグエナエルの村の所在も半島には残らなんだ千八百年わしらが知る村の人口の推移は戦があるたびに激減している。誰も人殺しなど望んでいない。人殺しになどなりたくない。言つておくぞグエナエルは神の使いとして山で神を守つて、国を守つて・・人殺しをした人間は普通の生活は出来ない。人を殺した人間はその感覚をなくすことができないのだ。たとえ國のため正義のためにといふ大義名分があろうと人を殺すということはその人間の生きてきた生活や愛を遮断することと同じ、他国では戦争といふ名を借りて未だに兵士に人殺しをさせているが、我ガイネスは古くは一千年まえにはもう人を殺した償いは自分の命で償うと神に誓つてゐる。これは理に適つてゐるのだ

そしてとうとう最後の一人になった・・と思つと胸が詰まりサガモアは言葉にならない。

震える切つ先がルーサーからそれると慌てた侍従フェルトンが王の手の剣をひつたぐり飛びのいた。

青ざめたルーサーの顔を見てサガモアは言い過ぎただろうかと思う。息子もまたサガモアと同じ境遇に陥る寸前だったと思い出した。

「今日は引き取るがよい。ゆつくりと資料を見て考えてほしい。すまなかつた」

守り神としてのグエナエルを尊敬していない人間に何を言つても無駄だと息を整えながら反省した。

それにしても資料を信じるなら探し求めていたグエナエルがすぐそ

ばに来ていたといつのに浅はかにも自分の態度で息子を頑なにさせ残念でならない。

侍従フェルトンは飛行機の用意が出来ているとサガモアに伝える。ルーサーが別れの挨拶もせず立ち去るとサガモアは青い顔がますます青くなりその場で小さくうずくまり目を閉じる。

「昨日からやるべき」と考えなければならないことがひとつとサガモアにのしかかる。

ルーサを見送ったフェルトンがサガモアを椅子に座らせて暖かい飲み物を勧める。

「時間が必要ですじゃ。良い青年に育つたとは思いませぬか。父親に良く似ておいです」

「悪いところばかり似ておる・・・」口から漏れる空氣も少ない。閉じた目の中に妻の笑顔が浮かび上がる。

イエフグニーの館への帰路、

疲れた体を座席に埋めて泣いているルーサーの姿がある。

思わぬ王の激昂にたじろいだ。

グリスの自室からバラディールからの極秘資料を機内に持ち込み目を通してはいるが怒った父親の顔が浮かび目頭が熱くなる。

生まれて初めて父親に叱られた。

父は怒りに身を震わせていてもルーサーを罵倒せず懇々と説得しようとしていた。

その思いが後になつて心に響いている。

「僕は馬鹿だ。策ばかり考えて大事なことを忘れていた」

フェルトンが別れ際に握らせてくれたものをそつと出してみる。サガモア王との会話中に外したダイヤのブローチが小さく手の平で光っている。

何もかもラティーフに語つて聞かせたらどんな意見が出てくるか悲観して泣くかそれとも一人の出会いを喜んでくれるだらうかと涙に濡れた目を押さえる。

その頃ルーサーの愛しい妻ラティーフは

爆破された屋敷のことは頭の片隅に追いやられかけの仕事をする為に谷を渡つて纖維工場に渡つている。

サガモアはフェルトンに耳打ちして

ダッドとテットに緊急要請をかけ皇太子夫妻の行動を見張るよう指示を出している。

特に国外に出る気配があれば即刻阻止するように言い含めている。

三千年祭以降ラティーフを取り巻く環境の大きな変化はルーサーとの間に又子供の数が増えたこと。

あの日以来ルーサーは憑き物が落ちたように明るくなつた。

ラティーフはとうと三千年祭を境にガイネスから出て行こうと思つていた矢先

住まいが爆破され心配してやつてきたルーサーにこれまでの経緯を聞き

揺れ動いていた気持ちを固めてガイネスに残ると決めている。

ウルバーノの研究資料は符合する幾つかの事柄を除けばこじつけの疑わしいものだとラティーフは思う。

けれど曲がりなりにも夫と子供と幸せな状況には満足している。

## 「ノーナシ」の出番

七年後。

絶景の峡谷を見下ろす台地にたくさんの人々が集まっている。

進入禁止の長いロープを前に敷き詰められたシートには  
観覧席に入りきれなかつた人たちが座り込み  
これから始まる競技のことで話に花を咲かせている。

台地から五百メートル降りた峡谷の縁には競技に参加する選手達が  
地図とパソコンとを見ながら最後のルート確認に余念がない。

人ひとみの中に緑色のジャージ姿でうわわわしているのがワティーフ。

「お願いだから今日はおとなしくして。ね・・本当に本当にお願  
いよ。ルーサーが、お父様がいらっしゃるのよ」  
ワティーフの懇願している相手は息子のエディス。

スタート地点の広い斜面には出場者で溢れかえっている。

半島の地域選抜で選ばれたチームが半島のカラーを身につけて登場  
すると応援席からパラパラと拍手が沸き起る。

「おとなしくって・・そんなこと出来る訳がない」と第一子エディ  
ス。

ふてくされた顔は父親そっくりである。

「僕等はレースに出るんだぜ。母様。観客の皆は僕等が元気に動き  
回るのを望んでこるんだろう」「

長男は出るのを渋っていたが、次男や三男を心配するラティーフが長男にも出場を頼んだのだ。ある。

「なのに大人しくしろだなんてなんて有り得ない。僕等はいつもより張り切って動く」

エディスは日頃大人しくしようと押さえ込まれている反動で少々ひねっている。

「待てよデイサ。会場のスタート地点にだけ父上は居るのだろう。そここの場所だけ走り回らなければ良いいのだ、そういうことなのだ」と次男に注意しながら説得をするところは父親の言い方そのままである。

「そうよその通りよ。お父様の顔の見えるところだけいいの。スタートしたら・・」どう飛び回るつともあなた達の好きに出来るからと小声で言つ。

四番目に生まれた女の子のきらきらした目が母親の言葉を聞いてうなずいてラティーフを安心させた途端三番目の兄のところへ、二人して機材を搬入してきたクレーン車を見つけて飛び降りていった。

「あつ」と小ちな声でラティーフ。

大きな声だと周囲に解ると控えめに口を押さえるが別なクレーン車の上ではカメラがこちらへ向けられて居るから今のおてんばな彼女の動きをとられたと思つと哀しくなる。

夫はスタート地点が丸見えの高台の観覧席で長老の方々の相手に忙しく動き回っている。

「早くスタート時間にならないかしら。あらコレットも参加をするの」

近づいてきたコレットはいつもメイド服から、トランシーバー片

手に緑のヘルメット、迷彩色のつなぎに同じ色のバックパックを肩にかけていつぱしの軍人に見える。

「ハイ。今日は皆様の成長具合をカメラに残そりと思って。アネル様、私のことは気になさらずお子様と競技に参加してくださいね。私は上の道から望遠レンズで追いかけます。今日はお天気もよろしくて最高です。上手く会えましたらゴールの岬で会いましょう」  
「どうやらした田ドラティーフの手を握り締めて両手を振つて自転車に乗つてしまつた。

トランシーバー片手にスイッチを入れ器用に両手を離して自転車を運転する。

すっかりガイナスの女性隊員と見劣りしない。

「A班ポジジョンについたかしら? B班は? O.K、いいわ。C班OK・D班? 何もたもたやつてのよーもつすぐスタートよ。解つてるわね? いいアングルで頼むわよ」

耳元の隊長殿了解しましたの声を心地よく聞く。

三度目の昇級試験を受かり押しも押されぬ隊長となり部下を持つ身分になつてゐる。

名称は后妃近衛隊。その身分を利用してアネルの競技中を撮影しようと下調べしたルートに人員を配置させている。

カメラや機材はテットに頼んでレイステンから購入した。

コレットを喜ばせたのはガイナスに一局しかないTV局がガイナスの主要都市に配信するためにスタッフを送り込んで来ていること。静止画像のカメラと動いている躍動感溢れるアネルを又見れる嬉しさでペダル踏む足も軽くなる。

バッテリーを積んだ自転車を草地に突っ込んで下見していた崖の縁を望遠レンズで眺める。

闘技場とは比較にならないくらいに厳しい環境である。

「誰よ！」

レンズの先には不恰好な男や女が七名崖の途中でぶら下がって騒いでいる。

「B班。周囲に不審者。氏名を確かめて・・・」

「はい、フォーカスステット隊長」

「何？TVクルーなの？えーっと。申請書には無いわね。わかったわその先の岩の出っ張りで待機させて。それでそいつ等のような奴が後何人いるか正確な人数を聞いて。そうよ・・・」

カメラから双眼鏡に変えてトランシーバに向かつて命令をする。最高の気分である。

「フン。わかった。他のクルーには川船を準備させて下からのアングルを狙わせて。そうよ、これは提案よ。危険な場所での撮影は許可しないと言つてちょうどだい」

スイッチを切るとにんまりとコレットは笑う。

「絶対あの場所からアネルなら飛ぶわ。それを下から撮らせるなんてナイスアイデア。上手くとつてよ期待してるんだから」とテットにもむけたことの笑みを浮かべる。

グエナエルの道・・とな名づけられたイベントは最初十五歳の少年達が無謀にもカヤンデルからの峡谷を渡り海まで行こうと計画したことから始まった。

峡谷の途中の洞窟で家出入として助けられた少年達の話に大人たちが乗つかつて

距離を短くしたイベントとして立ち上げた。

TVを通じて運営委員会が参加者を募集したところ応募者数が多く半島」と予選を行い選別させ、百名の上限いっぽいの出場者が集結している。

若年層隊、老古隊、精銳隊と選りすぐりの選手達が半島カラーの帽子やTシャツ、スカーフを身につけていきよつようと参加している。目を引く衣装はモラードの精銳部隊。

黒いスカートに帯で作った上着と我こそがグエナエルと鍛えた身体を見せている。

「よい眺めだらう」これでわしの面目が立つといつものだ

グリスの宮殿では大広間に置かれたTVを前に  
王とバラディール将軍がゆつたりとソファーにくつろいでいる。

「民は面白いことを考えるものだな」

軍服は着ていても表情は和らいでいる。ウルバーノの乗った戦闘機は自軍の戦闘機に待ち伏せされ打ち落とされている。寡婦となつて七年、相談相手だったサガモアと一緒に居る時間が多くなつた。

「モラードが一番厳しい条件を出したと聞くが。はてさて間違ひだつたかな」

にこやかに感情表現の下手な将軍の横顔を見る。

「誰がそんなことを言つたのか。ＴＶ局のやつ等だなあいつ等は口が軽い。王もここでなど見ないで会場で見たらよろしかろう」「腕組した指に一瞬力が入るがすぐにしらつと応じる。

「会場は皇太子に任せてわしはゆつくりと観賞したいと思つてな。なにしろ国の大イベントだ、ＴＶといつメディアをどう使うか考えねばならん」

独自のチャンネルを持ちたいと要望書が三件有る。ここいらが潮時で国民投票も視野に入れて民主化に移行した。

「ふつふつふつ。なんとでも言える。本音は移動時間をとりたくなかつたと私は見てゐるが」

スタート地点から陸地を車で移動するのは無駄に時間ばかりかかるバラディールも悩んだ末グリス宮で結果を見てヘリで岬に向かうつもりでいる。

「好きなように判断してくれ。どれ始まるぞ」  
体の向きを変えて画面を見つめる。

ＴＶ画面は観覧席に陣取つた人々を一人ずつ紹介しては皇太子の顔をさりげなくアップにする。

「皇太子の人気は絶大だな」

皇太子が観覧席に姿を見せたときから頻繁に出ている。

「ＴＶクルーは皇太子妃を狙つてゐると思うが、こう人が多くては撮れないと見えるな」

王は皇太子妃の姿をその周りに居るはずの子供達の姿が現われるのを心待ちにして見ている。

「エディスも出るのだろう?あの子はなかなか見所がある」とバラディールも身を乗り出して皇太子妃探しに加わる。

「あの子は引く手あまだ皇太子妃の律儀さと皇太子の容貌を備えているからな」

にこやかに孫の自慢をする。こんな日が来るのを待ち望んでいた。

「おおっ。大胆な」

高台に置かれている大きな銅鑼の音の合図で七百人もの人間が崖の縁を降り始める。

ＴＶ画面には勢い良く下の川面に向かって飛び降りる参加者を映している。

## グエナエルの道 1

ガイネスに一台しかない中継車の屋根の上で谷から吹き上げる風にさらされて実況中継が始まる。

仮設の机と椅子には大人が一人かしこまつて座っている。

実況中継担当のグランはスポーツ解説が主な仕事。

ほとんどが局の中でVTRを見ながら書かれた台本を読み上げるいわばナレーションを受け持つ。

今回は少ないリポーターが広範囲の地域に散らばった為大抜擢されている。

選手紹介はテロップで流し厳かな雰囲気で始まる・・といづ台本を無視して

練習用に観た隣の国のロックイーゼン中継がグランの頭の中でぐるぐる回っている。

「出た出た！――」出ました。一番乗りはグエナエルの衣装のモラドの代表者。いきなり五十メートルの崖から飛び降りました――

銅鑼の音と共に動き出した集団から一際目立つ黒い色にグランのテンションショーンが最高潮に達した。

生まれて始めて生で見るロックイーゼンぱりの競技である。

中継車のドアが開きディレクターから

長い棒でわき腹を突かれて今のセリフが自分自身の感想を言つたものだと

慌てて握り締めていた台本を開く。

「手元の資料によりますと・・モラードの代表者は並外れたこの世で  
もっともグエナエルに近いと抱負を語っていますね。稀にな身体能  
力ですね。紹介が遅れました。モラードのチームリーダーはコウジ中  
尉。出だしから素晴らしい跳躍ですね」  
と声をつくろつて隣の男性を見る

峡谷一番、見晴らしの良い場所を陣取つて車を置いている、その屋  
根に乗つての実況中継である。

観覧席の興奮と手前のスタートラインの選手達とが全部肉眼で見え  
ている。

打ち合わせじおつこグラントがコウジに振ると。

「ええありがとうございます。僕もあの中に参加したかつたですね  
五秒から十五秒の間で返事をする・・と台本には書いてある。

モラードのチームが筋肌を蹴つて落下していく。  
(やこはもつと早くに飛び降りる場所だらつ) と自軍のチームの動  
きに黙目出しをする。

モラードチームは衣装が邪魔で落下地点が見えない。

コウジ中尉は十人選ばれる中の十一番目になつてしまふ泣く泣く口  
一チの名目で参加できた。

針金で固定された縁のランプが点灯する。

グラントは俺にもインカムをよこせと文句を言いたいが無いもの仕方  
がない。

アナログの伝達方法でやるしかない。

再び声を作つて、

「晴天にも恵まれました。グエナエルの道。それではこれまでの熾烈なる地方予選をお送りしたいと思います」  
音声のスイッチを切るとランプが赤になる。

「なあ実況中継させてくれよー。頼むよ」

とグラントが車の屋根を足で叩く。

「だーめ。お前さアドリブ利かないだろ?、だからダメだ」  
運転席からセイジが顔を出してしつかり手を振つてダメだと伝える。

そのセイジも始めての移動中継に血が沸き立つてゐる。

人間一人を屋根に乗せたまま車が移動し始める。

先頭にはパラボラアンテナをつけたトラック、次のトラックは電子交換装置を乗せてゐる。

「ちんたら行つてないでスピード出せよ。重たいやつ等だな」

中継車の前を行く一台のトラックは未舗装の草地をがたごとゆつくつと進んでゐる。

「はい。モラドのVTR一分五十秒切りました。ネグロのVTR紹介まで一分です」

タイムキーパーが耳元でうるさくカウントしてゐる。

合図と同時に勇んでいた参加者は崖の縁まで駆け下りた。が、その足はぴたりと止まつてゐる。

薦が垂れ下がる縁から底を覗いて見ては後戻りをして話し合いを始める輪があちこちでき始めている。

尻込みする群衆を後にモラドの精鋭チームは号令と共にかけ下の

水辺に飛び込んでいった。

モラドの行動を見ていた六百名余りの参加者は、谷の深さに恐れて運営者がぶら下げる節の有るロープの順番をきちんと待つて降りる事を選択した。

その横でうろちょろしていたラティーフ等は、足場を見つけ飛び出したティサとコーヴァンを追つて薦を使い出つ張つた岩に降り崖に張り付いて暗い谷底まで降りている。谷底では砂地とじる石の上をコーヴァンとティサがトップ争いをしていて、中にステラが大きな岩を飛んで一人を抜く、その後ろからエディス、ラティーフと追い抜くとコーヴァンとティサはふざけていた笑顔が消える。

上から光が注ぐ場所には青い苔、落石したばかりの岩は脆くとんがつていると瞬時に判断して掴んだ石が壊れる前に、踏んだ足が柔らかい泥に埋もれる前に、五人の足は先へ先へと飛び跳ねていく。

スタート地点の崖を降りて一時間、狭い谷底から空が少し顔を覗かせている川底の草地に来ている。

「母様。母様。皆来ないよどうして？」

草花を積んでピクニック気分のステラは通つて来たばかりの滝の上を見上げる。

滝は水量がなく端っこにきらきらと青だけの上を水が流れている。

「皆つて」とエディス。

「えーーっとかっこいいお兄さんやお姉さんじゃない人たち」

奇抜な衣装を着た人はみな先に行ってしまっている、

残りの人たちはみなステラ同様に動きやすい運動服で参加している。

「彼等は僕等みたいに危ない箇所を急がないのさ」ステラに貰った花を胸ポケットに入れ整える。

「なんで? なんで? 危ない場所は急がなきや危ないでしょ?」

ディサとコーヴァンが踏み、折った花を積んではステラはにこにこしている。

「皆色々よ。壁や崖登りは小さい一人は得意でしょうけど、泳ぎやかけっこはまだまだでしょう。後ろの方達もすぐに追いついてくるわよ」とラティーフ。

そこへ進行方向とは違つ場所で走り回つていたディサとコーヴアンが駆け寄つてきた。

「母様。落し物。僕これ欲しい」

「一ヴァンの手にはモラードのチームが着ていた長い帯びの衣装がある。

「コーヴァンあなたには長いわね」

ラティーフはナーガンの身体に巻きつけてみて眺める、ナーガンが嬉しそうに動きだすと引きずつて思ひょうに動けない。

「持つててよ、僕が見つけたから僕が返すんだ」  
するすると帯を外してラティーフに渡した。

「わかつたわ」

「猿コーヴァン。無駄に拾つてくるな。あのモラドの人たちの選んだコースは危ないぞ。無理のしすぎだ。ねえ母様」

コーヴァンより一つ年上のデイサは思慮深くどんな些細なことも分析をする。

「そうね無駄に体力使つているかもしないわ。さあ行きましょう私達は船を用意してないからモラドの人よりもきつい場所を行かなくてはならないわよ」

グリスにもこんな良い場所があるのねと生い茂つた草地を眺める。

「僕平氣。大丈夫だもん」とデイサ。

「僕だつて平氣だもん」とコーヴァン兄のエディスには適わないが一つ違いのデイサには負けたくない。

草の中を走り出したデイサの後を追つてコーヴァンが後ろに付くとその後ろにエディス、ステラ、最後にラティー・フと続く。

谷の上では、

「セル――――！――聴こえないぞ！何処に居るんだ！返事をしろ」中継車のセイジがトランシーバー片手に大声を上げている。

運動能力に自信のあるセルがハンディカメラ片手にモラドの選手にくつづいているはずである。

他にも四人ハンディカメラを持って谷底に降りてているのに誰一人撮った映像を

待っている自転車隊に渡した奴は居ない。

「まだか！まだか！まだか―――！」

刻々と時間は過ぎていく。

もう半島の紹介ビデオは終りに近づき合間に流していく  
スタートからの勇壮なモラードの精銳たちの姿は十回は繰り返して流  
した。

「あれ・・すかね？」

緩やかな丘が連なる草地にほつんと黒い点が現われた。

「来たか？すぐに編集しろ」

参加者達の通過地点に移動してきたのに  
トップを走るモラードの姿はもう見えず、  
だけである。

後続の集団は離れすぎて画面の中には光が差し込む谷の静かな映像

上流にダムができる前は峡谷の底は水量が多く長い年月をかけて水が側面の岩肌を削った痕が軒先のように飛び出して、

雨季以外は両岸に届くような川の流れはなくなり、川幅の三分の一は砂地か苔の有る岩肌が露出している。その軒の上をラティーフ等は横ばいして進んでいる。

ラティーフは何処で子供達に中止を伝えるかを迷っている。

観覧席で偉い人達に挨拶をするのが嫌で、ディサの我が儘を聞いて参加を決めた時、

イベント開催者はラティーフの参加を手放しで喜んでくれた。

楽しく一般の参加者と競い合つ予定が半島代表の精鋭たちはものすごいスピードでラティーフ等の前から消えていないし腰につけたラジオの情報に寄れば一般から選ばれた600人はあまりの難路にリタイヤする人が続出してラティーフらの後に人影がないのはそのせいらしい。

今頃不服を言つつもりは無いがスタート地点で群集の最後尾に付いていれば子供達は待ちくたびれて帰ると言つていただひつ。

日常誰の田も気にせずに天井のような岩も長い傾斜地も走り回らせていたからこのイベントは苦にならないが三時間も谷底を走り回つていると

子供の体力を心配してそろそろ止め時を考えているがなかなか子供達は音を上げない。

「海の匂いがする！」

蛇行した川底を離れて運営委員会から渡された地図通り進むと岩又の山を登っている。

「本当だ。海の匂いだね。母様」

ステラがびつしりと汗をかきながら嬉しそうに笑う。

ラティーフはステラの足を手のひらに乗せて押し上げる。  
丁度ステラが伸ばした手の届く位置に岩の突起がある。  
「やつたあー、母様！」と突起を掴んで嬉しそうな声。

「母様、見て。僕等ここで終りかな」とエディス。

四人とも高い岩の上で身体を折り曲げて開けた景色を眺めている。

ラティーフも近くの岩によじ登り子供等と同じ景色を眺める。  
眼下の岩と岩の間に打ち寄せる波が白い。

「おじさん達が居る」

エディスの声で右を見れば光る断崖の奥に黒い人影がある。

「皆、遠い所に居るね」

ディサとコーヴァンは顔を見合わせて笑う、おじさんたちに追いついて嬉しいのである。

蛇行した川は左に逸れて海に注ぎラティーフたちは右手の岩場を越えて海を見下ろしているがその又右側の大絶壁は岩が薄い雲母のように剥がれ落ち表面がツルツルしている。

「ここ」と違つね」とステラ、

兄達は黙つて上下左右を見てはどのルートを選ぶか考えている。

「嘘だろ？ 皇太子妃と子供達が出てきた・・」

左の川沿いから足場の悪い岩の上にカメラを置いて岬とその下の断崖とをカメラマンが映しているとひょっこりと見慣れた顔が現われた。

「カメラ、川じゃない。回しそぎだ。モラードの精鋭部隊はもういいから岩の子供達を撮れ。あ、引っ込んだ、え。何処にいつたんだ？」と双眼鏡を構えて一步前に出る。

「本当に居たのか？ リタイヤ者続出だぜ、あー頭が痛い。なんでこんなにカメラが無いんだ」

クルーの耳にセイジの声。

「まだ他のカメラは到着しないのか。頼むよ一番の見せ場だぜ」

川そばの岩場からは岬は遠く、しかも見上げた構図しか取れないでくさつていて。

カメラの設置予定はリアルに断崖を登る参加者を映すとあるが重たいクレーン車はのたのたとしか動けず岬までの荒地を予定時間倍以上かけて岬に向かつて来ている。

しかも各半島の精鋭部隊と行動していたクルーは谷底に置いてけばりをくらい戻つて居ないし、

吹きつさらしの岬の仮設ステージのそばではセイジの独断で一台しかない中継車が中間地点をすつ飛ばしてスタート地点から直接岬で優勝チームを待っている。

「やつばいな。誰も時間通り戻つて来れないぞ。最後のこの壁は厳しいものがありますぜ。大丈夫ですか？」会話の相手は主調整室の局長。

「仕方がないだろう。時間延長して放送するしか。しかし参つたなあ。けが人は出なかつたが肝心の競技者が映らないとは。これじゃ風景映像ばかりを流さなきやならない」

せつかくの衛星中継なのに送る映像が無いと局長はぼやく。

中継車のモニターには何処までも広がる青い海が続いている。

腕組をし海を見ながら意を決してセイジは尋ねる。

「局長。お願ひがあります」

まともな映像はスタート地点から一キロで終わっている。

ハンディカメラの映像はライトやレフ版がなくて使える映像が極端に少ない。一番まともだったのは急場しのぎに作ったゴンドラに乗つたカメラが良い映像を撮つてくれたがゴンドラを引き上げるのに時間がかかりタイムリーには放送できなかつた。

このままではガイネスのＴＶ局始まつて以来の大失態である。

五人が登っているのは石英を多く含む切り立つた黒い壁。高さ三メートル弱のつるつるした岩肌が覆いかぶさるように海側にせり出し海岸線を作っている。

一段登つても又壁がせりでていて登つてみるとまでは先がどうなつているのか解らない。

「ねえねえ、なぜグエナエルのおじさん達はあんなに遠い所に居るの？」

ディサの見つめる先に点の様な存在になつた精銳部隊の参加者。岬に一番に到着した精銳部隊は見上げても岬も見えない、足場の確保も難しいとこの場所を避けている。

「余所見をするな！」  
とエディス。

吹きつける風が止んだ時を狙つてラティーフとエディスが肩車をしてディサを持ち上げている。

「の一ぼつたと次は誰ステラ？」とディサ、  
高さが増すと見晴らしが良くなり気分も良くなる。

「そうだ、一人で見て取つ掛かりが出来そうな箇所は有るかい？」と  
ディサと「一ヴァンに尋ねる。

「うへへん。あれどひへ？」とディサ。

石英の壁も終りに近づき膣になつた堆積岩があくなつた。

「ちよつと遠い? エディスなら飛べそう」と「一ヴァン。

「エディスでも・・無理そう・・」

ティサは兄の運動能力を並みだと思つてゐる。

「勝手なことを言つた」と下からエディス。

先に登つている一人に手伝わせてステラを登らせる。  
次にエディスが母親の肩に乗り飛び上がって弟達のそばにやつてきた。

少し離れてラティーフが一センチの出っ張りに登つて子供達の話し合ひを聞いている。

「母様、どうしたらいい? 僕たち飛べないよ」とティサと「一ヴァン。

「エディスは?」

「僕なら行けるよ」と、  
エディスがしりつと答える。

弟達の言つとおり部屋の出でている場所は遠いが一人なら行けるが弟達は無理である。

「そうね。皆が渡るには。こんなときは何か使わないといけないわ  
偉そうにいわないエディスを立ててやる。」

「えつとわかつた！その帯びの出番だね」とエディス。

「やつてみる？」ラティーフが聞くと、一メートル離れたエディスが嬉しそうに笑う。

弟達に兄としての格好いいところを見せたいのだ。

「ディサ、コーヴアン、ステラ。ツルツルした壁にくつづいて動くなよ」と注意すれば、

次のとつかかりに行けると素直に三人は岩肌にぴったり張り付く。

そこへラティーフが飛んで渡ってきて三人の隙間にはまる。

「邪魔じゃないなら腰に結んでみて」と帯を外してラティーフ。

「やれる」とエディス。

モラードの誰かが捨てていった帯びの端を腰に巻きつけてツルツルした岩肌を上に登るようにエディスは駆け上がる。

エディスは引力に逆らいながら手と足を使い、目測五メートル先の出っ張りにたどり着いた。

それを見て ディサとコーヴアンも、

「やつた！僕もやる！」

と言い放つ、兄がやれるものなら自分もやれるといつ氣分になる。

「今日は駄目よ、またこの次ね。エディス、足場は大丈夫？OKの返事が出ると垂れていた帯をピンと引っ張つた。

「一人ずつ渡つてね」とラティーフ。

「エディスちゃんと持つてよ」 デイサとコーヴァン。

母親はちゃんと帯を持つと信頼しているがエディスは時々一人を怖がらせて脅かすから信用が無い。

「来いよ」とエディス。

デイサが風で揺れる帯びの橋の上を岩肌に沿って歩いて渡り終えるとすぐにコーヴァンが帯びに乗る。

一番心配だったステラが兄達の真似をして慎重に渡り終えるとラティーフはエディスに帯を巻き取るようになってしまった。

帯を持ったエディスが嬉しそうに母親を待っている。母親がこの場面をどう攻略するか見たいのである。

岬の上では中継車を離れてセイジがカメラクルーを一人連れ、荒地で立っている。

陽射しは暖かいのに風が吹くと一気に体温を持つていかかる。

「遅いぞ。遅いぞ・・・」とセイジ。

「すぐ来るって言つたんでしょう。だったらすぐに来ますよ。あ、ほら噂をすれば何とやらつて・・・

気ばかりあせつていてセイジと違つてカメラマンは半分諦めている

「エリだここだ――、エリが平らだぞ――」

荒地の向こう側から雲から湧き出てきたような黒いヘリコプターが一機、ぽつんと二人が待つ場所目掛けて飛んできている。

セイジは苦肉の策で解説者としてきて居たユウジ中尉に頼み込んだ。

中尉からバラディール将軍へ、バラディールから近くに居た第四艦隊空母のヘリコプターが飛んできている。

小さな黒い点だったが田の前に止まると十メートル弱の大きな輸送用のヘリコプター。

前後のローターが巻き起こす風で一人は吹き飛ばされそうになりながら、キャビンに足を入れると兵士が一人待つている。

「二人か？」

セイジもカメラマンも軍事訓練は受けている。

「セイジ伍長であります。よろしくお願ひします」と敬礼をする。

「マーライ兵長です」

「タロウ曹長だ、コウジ中尉から承っているよ。他のクルーは居ないのか？」

TV局のクルーは五人から七人と聞いている。

「残念ながら我々二人だけです」

「そつかじや行くかじやセイジ伍長これで俺等に指示をくれ。言つておぐぞ。二十メートルは離れておくほうがいいぞ、掛けの風とか不測の事態が起きる可能性はある。それに選手に迷惑をかけることにもなる」

タロウ曹長はバラディールからぐれぐれも競技の邪魔をするな目立つなと指示をされている。

ヘルメットを受け取りシートベルトをフックに固定してヘリは海を目指けて飛んでいった。

「何処から撮るか?」と騒音の中綺麗にセイジの耳元でタロウ曹長の声。

「はいっ、コーターンして・・あ、それでいいです。それじゃ左の人間の集団から」

今まで見えていなかつた壁の集団が近寄ればあちこちうらと分散している。

「了解」

切れのいいタロウ曹長の返事にセイジは苦笑する。

開いたまま固定されたドアのそばで腰から下はふよふよと浮いていて、腹にも腕にも力が入らない。

隣のカメラマンも浮遊感を味わっているのか黙つたままカメラを覗いている。

「うつほ。居るごとく。ライバーーーーお前等一番早いじゃないか」と  
タロウ曹長。

知った顔を見つけて喜んでいる。

「いや・・あの、タロウ曹長。トからですね。人の列通りに動いてもらえます・・か?」

吹きつける風とローターの音、上下するヘリコプターの中はセイジの意識を拡販して考えをまとめるのに時間がかかる。

「おっそりだつた。旋回するぞ。しつかり捕まつておけ!」

大型ヘリは水面から五メートルの位置で止まりホバーリングを始める。

「撮ってるか？」

の声に上がってきた胃液を飲み込み、

「タロウ隊長殿へりの向きを変えるか、反対側のドアを開けてください！」

と訴える。へりの向きが逆で海しか撮れない。

カメラマンが何も文句を言えないのは胃からあがってきたものを口で止めているから。

「あ、わりい」

一旦へりは上昇して向きを変え、壁に張り付いて登っている人間のそばをゆっくり移動し始める。

「ロック。頼む繋いでくれ。移動する」とパソコンに向かってセイジ。

インターラムを通じてセイジの声は中継地点から戻つてきたリポーター・ロックの耳に届く。

「なんですよーそのままそこで撮ればいいじゃない！」

ステージ横の画面には風圧に耐えながら絶壁を登る人々。しかも絶壁の下は荒れた波が押し寄せる海である。

これ以上の演出された迫力のある画面は見たことがない。さすが空からだと良い映像が撮れているとロックは感動していた。

「岬の下に皇太子妃が居るんだよーそっちへ回る」

インカムの声が途切れるとロックは青ざめた。

気分はすっかりTVの前の一般人、素晴らしい映像を感嘆しながら見ている。

グリスの宮殿の中には優しい陽射しが木の葉に当たりちらりちらりと眩しい昼下がり。

朝早くから行なわれた大イベントも終盤。

そろそろ腰を上げて岬まで行くかどうかをソファーの一人は考えあぐねている。

行けばＴＶインタビューに答えねばならず大した讃辞の言葉も用意しても居ないし

かといってバラディールは軍のトップ、モラド半島の人間が優勝となると祝いの言葉のひとつもかけてやらねば配下の者に示しがつかないと迷う所である。

見回せば静かな室内に侍従の一人も居ないのは眞どこかで同じＴＶ放送を見ているからか。

「ふふん、さすが精銳たち、他を抑えて一番乗りを上げられるようだ。そもそも一般人と精銳を一緒にしてはならん」

とモラド半島の勝利を確信してにっこり笑う。

それ、この私に祝いの言葉を述べよとばかりにバラディールがサガモアを見つめる。

「なんの、我孫達は絶対リタイヤなどせずにこの岬に辿り着くわい」とモラドの勝利宣言など無視する腹づもりのサガモア王。

ＴＶ放映で一般選出の参加者の情報を一切流さないのは全員リタイヤしたと思っているが

目をかけている孫の逞しさを知っているサガモアは

遅くなるつともきっと孫はクリア出来ると信じている。

バラディールには言つていないが孫を信じる根拠は多いに有る。ガイナスで生まれた人間は大なり小なり生まれたときから動き回れる筋肉をつけるよう親が仕向ける。

基本は自分の身体は自分で守れる。

すなわち自分自身を助けられない人間に他人は助けられないということである。

赤子のうちから物を握らせ握力をつける棒にぶら下がることが出来るようになると次は腕力で身体を棒の上へと、段階経て鍛えるのである。

が、あの子供等の身体能力は、歩き始めた時からそのすばしつこはずば抜けている。

エディスは物分りが良く大人の前では物静かな風情を見せてているが小さい時は、デイサ、コーヴァン、ステラより手を焼いていたと、ダッドに聞いている。

付け加え、未だにこのグリス宮に皇太子一家が来ないのは出場していない子供等に手がかかるからと聞いている。

茶器を取ろうと伸ばしたバラディールの手が止まり引っ込んで膝を掴む。

「馬鹿な・・」

モラドの精銳隊の優勝を確信していたバラディールが半身を乗り出してTV画面を凝視している。

思わずサガモアもTV画面に目を向ける。

「おっ、なんと。デイサ、コーヴァン、・・なんとなんとステラまで居るわい・・」

砂のような画像の輪郭は孫達の姿。何が起きているのかを確かめよ

うと身体を乗り出す。

「帯びの橋？・・か」

と驚いた顔つきでバラディール。心臓の鼓動が早くなる。

「そうだ帯びの橋だぞ・・」

と返事はするがサガモアの頭の中は何も考えられなくなつた。

止めていた息を吐き出しながら、

「そうか・・グエナエル・・はあの帯びを使って居たのか・・」

バラディールの目は大きく開いたままである。

「それである衣装な訳だ。あれは実践用の服なのだな」「納得したわりにはサガモアはまだ良く理解できていない。

「そのようだ・・見よあれを」

画面ではエティス、ディサ、コーヴァンが握った帯びの下にステラがぶら下がっている。

その足は等間隔に開いた織り穴に足を入れて登つている姿。

「梯子のようだな」啞然とした顔でサガモア。

「信じられぬ・・」

小刻みに首を振るバラディール。

「わしとて信じられぬわい・・」

二百年前、大勢のグエナエルが断崖絶壁を登り敵の背後から奇襲をかけた様をありありと見せていくようだった。

グエナエルの出没は余りにも手際が良く学者によつて人間の力だけでは短い時間で大勢の人間が崖を登れないと実証し、船を使ったとか本当は大地に身を伏せて敵に近づき奇襲をかけたとか色々な説が浮上している。

「あれなら・・早く登れる」真剣な目でバラディール。

己の力と帶という道具を使つた先人達が毅然と自分達より勝る敵と対峙した勇気を目の前に見ている気がした。大きな道具を使わ、人間が切り立つた崖を移動している姿にバラディールは不思議な感動を覚える。

岬の縁に薦が生え生い茂り下に海にと伸びようと/or>有る程度の長さまで伸びると薦は四方からの風に負けて一定の長さでぶら下がつてゐる。

その中にラティーフ等五人が隠れるとTV画面は変わり遠くのがけから這い登つて悠然と岬へと歩いているモラドのチームを映し始めた。

樹木の一本も無い草地の上を黒いスカートをはためかせて最初の一人がゴールテープを切ると次々に疲れた顔の男女がゴールにたどり着いた。

海の上をヘリコプターは何度も往復しては競技の参加者の動きを追つてゐる。

そのたびリポーターはわずかなヘリの移動時間を岬の上から解説者を交えてつないでいるがそれも限界に来ている。

「ロック。お前だけが辛いんじゃない俺だつて・・・」

辛いんだ！

ヘリコプターのシートに繋がれたセイジはインカムに向かつて叫んだが

言葉は最後まで続かない。

岬とモラードのチームの選んだルートとは一キロ半の距離があり、ヘリがコーラーンして移動するとセイジとカメラマンは開いたドアから落ちないよう踏ん張れない足で恐怖と戦っている。

一定の時間（三十秒ほど）ヘリが空中に止まると、助けを求めて必死でセイジは叫ぶ。

「局長。もう我々は限界です。皇太子妃達はゴールしましたか？」

言葉もろれつが回りなくなり怪しきなってきた。

局長はセイジやカメラマンが吐いて、吐いた汚物を踏んでキャビンの中を滑っているとは思っていない。

確かにいつものセイジの様子ではないがこの放送が終わつた後で優しく苦労談を聞くつもりでいる。

局長の声は淡々とセイジの耳届いた。

「まだだね。もう少し粘ってくれないか。皇太子妃が岬を歩く絵が欲しい。クレーンが風で煽られて倒れたんだ。もう一台が救助に駆けつけているんだが・・たぶん間に合いそうにない。もうちょっとと辛抱してくれ」

局長はセイジの返事を待つたが、返事が出来る状態にセイジは無かつた。

「ア・・ウ」（もう一回コーラーンするぜ）と

カメラマンに向かつて言つと力なくカメラマンが  
肩に乗せたカメラを岬に向かつて持ち上げる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0997x/>

---

蘇芳

2011年12月21日16時50分発行